
ソラのごとく

ミナツキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ソラのごとく

【Nコード】

N6998W

【作者名】

ミナヅキ

【あらすじ】

主人公は綾崎ハヤテの弟のソラ

ソラはハヤテを探しながらあちこちを点々と回っていたが三千院帝より孫娘の執事をしていると聞き白皇学園に編入するそこから物語が始まります。

ほぼ初作で駄文・亀更新です。

注意事項・人物紹介(小説設定のネタバレあり) 更新あり(前書き)

2011/10/2 10:02 改稿

2011/10/22 3:58 改稿・更新

2011/10/27 12:50 改稿・更新

注意事項・人物紹介（小説設定のネタバレあり 更新あり）

前まで犬夜叉で作品を書いていたのですが諸々の事情により続けることができなくなり

新しくハヤテのごとくで書きたいと思い投稿しました。

駄作・亀更新でそれでもよければ読んでください。

正直な話前書きと内容は異なります。

キャラクター設定

名前：綾崎ソラ

性別：男

年齢：15歳

血液型：A型

家族構成：父（行方不明）

母（行方不明）

長男（行方不明）

次男 ハヤテ（行方不明）（三千院ナギの執事）

身長：168cm

体重：48kg

誕生日：6月19日

好き・得意：運動・勉強などたいていのことはプロ並みにできる

アーたん（天王州アテネ）

嫌い・苦手：両親・桂雪路・酒・タバコ

原作の主人公綾崎ハヤテよりもチートじみた人間

親に捨てられたショックで、一時期は人生に冷めてしまい何もやらない時期があったが、アテネと再び出会ってまた前向きな考えをするようになった。

心の底から願ったときは、百発百中の確率で正解を当てる少しという、かなり変わった事ができる。

アテネと同じで、神様の真似事ができるが、基本アテネと同様使わない。

三千院帝とはお茶友達、また、時々依頼が来るとこなすこともある。ハヤテとは10歳の時に別れている。

精神的に幼いが、これはショックから自分を守る自衛手段の一つだが本人は気づいていない。

14話ついに話し方が元に戻る。

名前：綾崎ハヤテ

年齢：16歳

血液型：A型

家族構成：ソラと同じ

身長：168cm

体重：57k

ソラの事を探しながら学校・バイトをしていたが親に1億5000万円で売られ原作通りの生活をしている。

違うのは誘拐しようとしたことをナギに話している、アテネとはあつていない。

ソラが行方不明のことを、12歳の時まで、知らなかった。

三千院紫子

ナギの母親。

原作と違いソラが治療したため生きているが、本邸から出ないためナギたちは生きていることを知らなかった。

過去あったことで、ソラに惚れている。

夫は原作通り？なくなっている。政略結婚をしているため元夫の事はなんとも思っていない。

原作では、紫子が死んでいたので、ナギが三千院家の次代当主候補だが、生きているため次代当主。

アテネ

ロイヤルガーデンの主で天王洲家の当代当主。

ソラに助けられ好きになる。

ソラとは、基本一緒に行動している。

白皇学園の理事長。

理事長室の隣りに私室があり今まで入ったことがあるのは、執事のマキナ、ヒナギク、ソラの三人だけである。

ミダス、マリアも一度も入ったことがないが、特に何かあるというわけではなく、重要な書類を保管しているため、認めたら人間意外を入れられないだけである。

力的には、鷺ノ宮家を遙か上回る力をもっている。
これは取り付いていたミダスとの繋がりが残っているため。
繋がりが無い状態だと少し上回るぐらいの力。

ミダス

アテネに取り付いていた神のうちの一人。
ソラに助けられ好きになる。
ソラのことになると見境がなくなる。
アテネとは根本的な部分で繋がりがあるため、鷺ノ宮を圧倒する力の持ち主。
基本、庭城から出ることができない。
門番的な役割もしているため、たまにしか外には出ないが、ソラのことになると話は別ではある。

三千院ナギ

ハヤテの主人。
助けてもらったことを理由に、1億5000万円の借金を肩替りしている。
ハヤテのことが好きだが恥ずかしいため言い出せないでいるが、周りの人たちは知っているため温かい目で見守っている。

桂ヒナギク

親に8000万の借金を押し付けられた女の子。
ソラに助けられ好きになる。
原作と違い、ソラのことを好きになる。
理事長とは友達でありソラを狙うライバルでもある。
ミダスには、あったときに認められている。

三千院帝

紫子の父親。

原作と違い、紫子が生きていて、ソラにもあっているため少し、柔らかな人間になっているが、紫子を助けたソラに何かあれば、鬼にでもなる。

ソラが、親にまた借金を押し付けられたことを知らなかった。そのことと紫子におじいちゃんと呼ばれるのを、未だに気にしている。

早島実

三千院帝付きの執事で、三千院家、全体の執事長でもある。

最初、ソラがくることを反対していた。今後、出番はあるのか？

25歳で執事長に就任。

雫に格闘を教えた人物。

メイド長とは恋人同士。

クラウドより偉い立場の人間、ハヤテよりかなり強い。

鬼姫雫

三千院帝付きのメイド長、20話で初めて登場、

ソラの事を認めている人間。紫子が助かった時、一番喜んでいたのは彼女であろう。

早島と同じく25歳の若さでメイド長に就任

早島に格闘を教えてもらい。マリアに教えたのが彼女である。執事長とは恋人。

こちらも、ハヤテよりかなり強い。

霞愛歌

ソラのが好き。

原作とは違い、婚約者はいない。

体の調子は悪いが、治りつつある。

頭の回転は、かなり早いですが、時々ボケをする。可愛い人、物を見ると、いじめたくなる性格。

春風千桜

ソラのが好き。

咲夜のメイドをしている。メイドの時はハルと名乗っている。

水蓮時ルカとは、親友。同人誌の一人目の購読者でファンでもある。

頭の回転は、最高の時は、ヒナギクさえも上回る。ツッコミ体質である。

水蓮時ルカ

有名な歌手。借金があったが、ソラとの出会いによって、アテネと知り合い、肩代わりをもらった。

アテネの養子ではあるが、苗字は水蓮時を名乗っている。

ソラのが好きなのか本人もまだ分かっていないため。アテネより王玉は貰っていない。

白皇学院の生徒になっている。今は、活動を最小限にし、学院生活を優先している。

1話（前書き）

言い忘れ？この場合は書き忘れましたがハヤテはアテネにあっていませんつまりロイヤルガーデンのことを知りません。
ではお楽しみください。

1話

雪路 以後 雪「えー今日からまた新しい編入性が来るわー」

と気だるそうに行っているのはなんと災厄なことに今日から担任になる 桂雪路さんだ

泉 「桂ちゃん、一か月前にハヤ太君がこのクラスに入ったばかりなのにそんなことがあるの？」

美希「そうだぞ、雪路ハヤ太君が来たばかりだ。」

朝風「でも楽しそうだな」

雪 「今回はなんかー本当の理事長が直々に推薦してきた人みたいだかんねー

あってみればわかると思うけどあの子すごいわ」

ハヤテ「あのお嬢様、本当の理事長というのはどういうことでしょう?」

ナギ 「ああ、ハヤテは知らなかったな、この学園は代理の理事長が今は運営しているんだ。ま、私は見たことがないし興味もないのだがな。」

そのときハヤテは代理の理事長にも一度もあつたことがないのに本当の理事長に推薦される人って誰だろう?

ヒナギクさんは知っているのかな? ホントの理事長のこと等考えていたが

雪 「まあ、入ってきてもらうね、綾崎ソラ君入ってきてー」

みんなは 綾崎？ という感じでハヤテを見ていたがハヤテは内心で
「なんでここにソラがいるの？いくら探しても見つからなかった
のに」「そういう思いで一杯だった。」

ソラ「どうもー、そこにいる綾崎ハヤテの弟で綾崎ソラって言いま
すー。」

趣味や特技は……

急に黙ったのでどうしたのか見ているとソラは

あれっなんだっけ？まあいいや何か質問がある人は質問し
てください。以上。」

ずどー……と言っ勢いでクラスの全員がこけたのを見て

ソラ「みなさん元気ですねー」

と原因が何かわからないという顔で立っていたがハヤテだけは

「なんでここにいるんだ！？ 今までどこにいた！？ずっと探して
いたんだぞ。」

ソラ「あー今までと言っても一週間前は帝のところに行ったぞ、それ
まではアーたんとかち旅行をしていた。」

ナギ「なんでお前がああジジイのところにいるのだ」

ソラ「禁則事項です」

翌学園に通わしてくれるようになったねって言われてそれなら呼んだほうが早いと思って」

アテネ「そうなの？で今は何をやっているの？」

ソラ「桂先生がクラスに馴染みやすくするために質問タイムを設けてくれたんだ！」

クラスのみんなはとんでもない人間がクラスメイトになったことをようやく理解していた。

ソラ「後ね、あそこの執事服を着ている人が僕の本当の兄のハヤテだよ」

ソラが行ったとたん急にクラスの中に殺気が覆った。

アテネ「そう、貴方がソラの兄今までソラがどんなに苦労してきたのかも知らずにのうのうと生きていた人間ね「ちよつと待て」なにかしら三千院さん「今の言葉を撤回してもらいたい」何故「ハヤテはソラを12歳のときから探していたと聞いたそれなのに苦労もせずとはどういうことなのだ!!」「お嬢様」ハヤテはお嬢様に使えることが出来たことに感謝したが何故？という考えも持っていた。

アテネ「そうね。後で学園長室にでも来なさいその子がどれだけ楽しかったかを思い知らせてあげるから」

ナギ「分かった。では放課後に向かわせてもらう。」

アテネ「それでは失礼させてもらいます。ソラ何かあったら私に言いなさい。それじゃあね」

アテネが出ていったあと教室は「綺麗な人が学園長だったんだね」という軽いことは誰も言わなかったが

雪路 「じゃ質問タイムを開始するわよー！私から質問なんだけどさ、ソラ君で、本当に男？女じゃないの？」

クラス 「何いきなり恐ろしい質問しとんじゃー！ー！ー！」

雪路 「わっ吃驚したでも思うじゃん本当に男なの？」

ソラ 「はい男ですよ。あっ趣味と特技は何でもできますね、庭の掃除から人の暗殺まで」

クラス 「お前も何恐ろしいことをさらっといっただー！ー！」

泉 「じゃあさっき言った帝って人との関係は？」

ソラ 「お茶友達です。主に飲むのは緑色の苦いお茶だけど？名前忘れた。」

ナギ 「それは抹茶ではないのか？」

ソラ 「確かそれのはず。」

この時ナギは話し方が少しおかしい兄弟の割には何も知らなすぎると考えているといつの間にか時間が来ていたようで

キーンコーン

チャイムの音で授業が終わったことに気づいた。

ソラ 「あれ授業終わりましたねそれじゃあ何も分からない身ですがこれからよろしく願います。」

ポーン「綾崎ソラ君理事長先生が呼びです。至急理事長室に来てください。」

ソラ 「桂先生、たぶん今日は教室に戻って来れないので帰っていますか？」

雪路 「まあ理事長が呼んでるならしかないわねー。いいは行ってらっしゃい。ほかの先生には説明しとくし編入試験を満点で通った君なら大丈夫でしょ。」

ソラ 「それではさーよーなーらー。」

といい教室を出ていったソラを見て

泉 「ねえねえ美希ちゃん放課後、私たちも行ってみようか。気になるし。」

美希 「それはいいな。どんな話が聞けるか面白そうだ。」

ヒナ 「生徒会長としても気になるしクラス代表として私が行ってくる。貴方達が行ってもどうしようもないし理事長室じたいそんなには入れないと思うし。」

クラスのみんなが話をしていると扉が開き

ソラ 「あのー理事長室って何処ー」

と泣きながらソラが入ってきたことに全員が

「分かるから出てったんじゃないのー」と心の中で思っていた。

ヒナ 「仕方ないわね。私が連れてってあげるから行きましょう。

ナギ少し次の授業遅れるから先生に行っておいて「何故私なのだ！」
サボらないようにするためよ。それじゃあお願いね。さ、行きましようか」

アテネSide

あれは、まずかったわねいるとは知っていたけどまさか急に私に振られるとは思っていなかったものですから殺気を出してしまいましたわ。

でも私のしたことは正しいですよ。

さあもう少して放課後になりますね。

どんなことになっても私はソラの味方なんですからと膝枕で寝ているソラの髪をさわりながら考えていた。

ソラは私をあの場所から救ってくれたのだから。

罗那ヤルガーデン
そうあの場所から

5年前私は一人だった。

親や親戚は私を残し死んでしまったそんなところに現れたのがソラだった。

ソラ 「わー広いでもこんな建物あったっけ？」

その声を聞いて私は驚きを隠せなかった。ただここは王玉を持っていないと絶対に入れないはずなのに今この男の子は入ってきたのだもの。

アテネ 「貴方どこから入ってきたの？この場所は立入禁止よ」

ソラ 「どこって普通に扉から入ってきたんだけどチャイムは鳴らしたよ？」

そんな馬鹿な！？この子はこの場所になんの制限もなく入ってくる。ことができたというの？三千院の娘確か紫子と聞いたかしらあの子でさえ王玉を持っていないと入れなかったのに。

でもこの場所に入れたからと言って簡単に出れる訳がないな。せあの門番がいるのだから。

へたをすればこの子もここから出れなくなってしまうそうなら。うち

アテネ 「ここはあなたのような子が来ていい場所ではないわ早く帰りな」わーすごーいねえねえこれって高そうだけどいくらぐらいするの？」それは確か200万ぐらいだったはずよ。」

ソラ 「ねえお姉さんはなんで泣いているの？どこか痛いのか？」

この子に言われるまで気付かなかった自分が泣いていることさえそうね、私は久しぶりに人と会話が出来たから喜んでいるのでしょうね、ダメねこの子を帰りたい気持ちよりもっと遊びたいと思う気持ちの方が勝っちゃっているわ。

アテネ 「久しぶりに人にあつたからよ、ここから私は出れないし」
言ってからしまったと思つたがもう遅く

ソラ 「ここから出たいの？なら一緒にどこかに遊びに行こうよ」
駄目よっ！」「むー何で駄目なの？」

アテネ 「ここには門番がいて普通なら貴方も通ることができないはずなのに貴方は通れたつまり何か特別な力が作用して貴方もここに閉じ込められる事になる。そうなる前に早く出ていきなさい！」

そう言つたとたん『どさっ』と言う音が聞こえてきたのでそちらの方を見ているとさっきの子供が頭を抑えて倒れているのが見えた私は咄嗟に自分のベットに運び様子を見てみると急に立ち上がり私の方を見たその時私はソラに叶わぬ恋をしたなぜかというところらを見ている目が青色から赤色に変わっていたからその瞳で見つめられた私は何故かこのロイヤルガーデンから出る方法を喋っていたのだ、今思つても何故あの場所で話したのかわからないのですが彼は

ソラ 「じゃあここから出よう、柱の位置はこれであっているから」
アテネ 「ちよつと待ちなさい、死ぬかもしれないのになんでこんなことが出来るの？」

ソラ 「そんなの簡単なことだ、一緒に遊びたいその気持ちがこの子から伝わってきただから絶対に失敗はない！」

アテネ 「あなた誰その子とは別人ね、それを教えないと「神だよ、少しばかり特別だがね」そう分かった。信じていいのよね。」

ソラ 「この子の体を借りているときに失敗などは絶対にならない。信じる。」

アテネ 「分かった。お願いする」

パキイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ

という音が聞こえたあと私は気を失った。

次目覚めたときにはあの子は居なかったが城は壊れていたので中にいることはないと言うことが分かり何処にいるか探しに行ったそういえば私あの子の名前知らないわね。次あったときはお礼と名前を伝えてそして教えてもらおう。

とこれが私とソラの出来事。

次彼を見つけたときあんなことになっているとは思っても居なかったがそれは彼女たちがもうすぐ来るはずだからその時に話そう。

アテネ Side out

1話（後書き）

シリアスというか話がコロコロ変わってしまってますみません。
一応これからいろいろ試して改良していく予定です

2話(前書き)

さて続きはどうなるのやら
いやまあナギとアテネの仲はかなり悪いです。

2話

コンコン

「失礼します」

放課後になり理事長室に入ってきたのは

綾崎ハヤテ、桂ヒナギク、三千院ナギ、マリア の4人だった。

「何故、ヒナギクさんとマリアさんがいらっしやるのですか？私はそちらの二人に言ったつもりだったんですが」

アテネが聞くと

「私は今ハヤテ君がどうしてそんなにきつい言葉で言われたのか気になりましてナギの一応の保護者でもありますから」

「私が聞いてはいけないことでもあるのですか？それにクラスの代表として聞きに来ました本当なら全員来る予定だったみたいですが」

「わかりました。聞いて後悔しないようにしてください。ではお話します。まず貴方は1億5000万の借金の返済を押し付けられてそこを三千院さんに借りると言った方がいいのでしょうか、その返済のために今執事をしているのでしょうか？」

「はい、そうです。」

ヒナギクはえっそんな事情があつてナギの執事をしていたのと思い

マリアの方を向くと肯定するように首を縦にふった。
私の親以外にもそんな人がいるのね。と少し暗い気持ちになっ
ていると

「ソラは10歳の時に20億の借金を押し付けられていたのですよ。
もちろん最初は働くことなんかできず食べ物も水だけで過ごしてい
ました。貴方が中学に行っているときも一人で苦しんでいたのです
よ。」

「……えっ」その場の誰もがそんな言葉しか出なかった。

「その後、聞いた話によるとバイトを1日22時間入れてあちこち
走り回ってかなり危ない仕事もしなんとか返すことができたそうで
す。が両親が貴方に押し付けた1億5000万が全てだと思えます
か？ソラに20億もの借金を押し付けた親がたったそれだけのはず
もなく、返済し終えたあと唐突に両親が現れ「すまなかった。自分
たちが悪かった。これからはちゃんと働くからまた一緒に住もう。」
と自分勝手なことを言いに来たんです。ソラは両親もついに気持ち
を入れ替えてくれたんだやっとまともな生活ができると思っていた
所に2億の返済書を置いてまた雲隠れしてしまったんですよ。私が
彼に助けられてから彼を見つけたのが2年後そのときはまだ1億残
っていましたが生きているという希望自体なくしていたんです。貴方は
高々1億5000万ソラは22億ですよこの意味が分かりますか！
？貴方がのうのうと生きている間ソラは死ぬ気で働いていたんです
よ！！これを聞いてまだ何か言えることがありますか貴方は！！
去年やつと笑顔が戻ってきたその時に、帝から話を聞いたときは驚
きました。何で年上の貴方が苦労せずにソラばかり酷い目に合うの
ですか！？」

「見つけたときの最初の言葉が「僕の名前はソラでもこの青空のよ

うに晴れていない雲がおおって曇り空何で、かな？こんな目に合っているのに雨の涙のひとつも出ない」と私に感情の無い目で行ってきたのですよ！！私のはあの時のお礼がしたくてやっと見つけたのにソラは変わっていた。そのあとはソラに聞いていると思うけどいろいろなところに旅をして感情が戻り始めたから私が経営する学園に編入させた。それなのに貴方がいることを私は知らずに同じ教室にしてしまった。それに……」

……

誰も声が出せなかった。

ヒナギクはこの話は自分は本当の部外者ということにいや自分も同じことはあったが自分の時とは違う二回も同じことをされているのに今彼を見ていると普通に笑っているように見える

「……ごめんなさい。ハヤテ君の事情も知らなかった。ましてやソラ君がそんな酷いことになっているなんて思ってもみなかった軽々しく私が聞いていい話じゃなかった。」

「ヒナちゃん何でそんなに暗い顔をしているのー？さっきから誰の話をしてるの？」

いきなりほっぺを抓られ「ヒナちゃんは女の子なんだから笑顔が一番、似合ってるよ？」と言うものだから笑いそうになってしまったが……

「えっ」

今誰のことと聞いた？何故？自分のことなのになんで？

「両親、長男のことを覚えていないのよ。それでも両親のことを聞くと酷く怯えるの、あとは貴方のことだけは覚えていたみたいねこんな状態になるまで何も知らなかったのに。」

「ハヤテ（君）」

ハヤテは自分が、血が出るほど力強く手を握っていることに気付いていなかった。

まさか自分より年下のソラにそんな借金を押し付けていたことに気付かないで過ごしていたことにショックを受け倒れてしまった。

「ハヤテ！」「ハヤテ君！！」

「ソラ、ちょっと外の空気がすいたいのだけどついてくる？」

「うんついて「ちょっと待て」「三千院さんまだ何か？」「このままハヤテを置いていくわけか？」

「ソラ、少し外でまっついていてくれる。」

「わかったよ。アーたん」

ソラが出ていったあと急に室内の気温が下がったことに気づいたヒナギク達は

「…あ「貴様らに何がわかる。好きになった人が心を壊しているたんですよ。本来ならミコノスの本邸で住む予定だったのにソラが私の経営している学園に通ってみたいというものだから日本に来たのに結果は最悪！貴様らに何がわかる！！答えなさい！！」

「それは両親が悪いだろそれをハヤテのせいにするな!!」

「今の話を聞いてもまだ庇う気ですか? どれほどの苦しみに耐えてきたのかもわからないのに口を出さないでくださる!？」

「ぐっ!」

「それでは私は少し外の空気を吸ってきます。」

アテネが部屋を出ていったあとは誰も話すことができなかった。

ヒナギクは

「私ちょっと追いかけてくる。少し理事長と話したいこともあるし。」

「ああ分かった。今日はもうハヤテを連れて家に戻っている。マリ
ア行くぞ。」

散歩に出たソラとアテネを追いかけたヒナギクは自分の教室の前で
やっと追いついた

「理事長、ソラ君待ってください。」

「まだ何かよろうですか？」

「聞いてください自分は姉と一緒に8000万で売られました。借金の方はお姉ちゃんがなんとかしてくれたのですが今の両親は本当の両親ではないです。」

「それがどうしたのですか？」

「いえ、ソラ君の過去を知ってしまったのですから自分の過去も離さないとフェアじゃないと思ったんです。でも…ソラ君！！」

ヒナギクの叫びで振り返ったアテナが見たものは目の赤いソラだった。

「そろそろ許してやれよ。こいつも限界がきているぞ。自分のせいでハヤテが虐められていると思っている。」

「そう、貴方が言うのなら確かでしょういくつか答えて欲しいんだけどいいかしら？」

「いいぞ。私の答えられることならば答えよう。」

「限界を突破したら記憶がもどるなんてことはない？もしくは記憶がもどる又は戻す方法はないの？」

「一つだけあることにはあるがかなり危険だ、ソラがではなくアテネ、君がだがどうする私の言う方法ならば必ず記憶を戻せるが、決めるのはアテネ君だ。」

「やって頂戴。私はどうなってもいい！！でもソラの記憶を戻させたいの！！お願い！！」

「ちょっと待ってください。」

「何！急に話に入ってこないでくださる。」

この会話を聞いてヒナギクはソラの記憶は戻るが理事長がどうなるかわからないということに気づき待ったをかけた。

「今の話聞いていると理事長にもしものことが起こった場合ソラ君は今よりひどい状態になるのではないのですか？」

今ソラ君を支えているのは理事長ですよ。もし理事長に何かあればソラ君はどうするのですか!？」

「ふふっ、正解だ。アテネ、君が怪我をすれば彼が悲しむ本来なら気付いていることも気付けない。が、それを気付いて指摘してくれる人が間近に居るんだ。少し頭を冷やせ記憶のことは私が解決できる。私がソラと一体になる。それで完璧だ。今からでも出来る。」

そう言った瞬間周りに光が走り眩しく目が見えなくなった。

光の橋らが消えるとそこには

「アーたん有難う今までそしてこれからも宜しく。」

と無邪気に笑う子供のようなソラが立っていた。

2話（後書き）

一応シリアス部分終わりです。
たぶん終わるといいなあ。

3話(前書き)

前回の終わりからです。
中途半端なんですよねー！。

2011/10/11 20:40 改稿
2011/10/11 20:40 改稿

3話

「ヒナギクさん、有難う私は、大切なことを忘れていたようね。」

「理事長「アテネ、私の名前はアテネでいいこれからもソラのことをクラスメイトとしてお願いね。」はい分かりました。アテネさん。それとナギ達のことなのですが責めないで下さい。」

「ええそうするわ。今のままじゃ私もソラを悲しませてしまうところだったのだから明日、理事長室に来てもらえるようにあの二人に伝えてもらえるかしら？あとハヤテ君よりもソラは規格外だから大変だろうけどよろしくね。」

「えっハヤテ君より規格外というのは？どういう…」「ソラは編入試験を十分に終わらせて後は私と遊んでいたのよ。」

え？…でも白皇の試験ってかなり難しいのですよね？お姉ちゃんは、編入試験を満点で合格したと言っていたんですけど「本当のことよ。ソラは人よりなんでも出来る。今まで自分でなんとかしないといけないことが有りすぎて運動神経なども並じゃないわ。具体的に言う」とこの学園で勝てる人は居ないのじゃないかしら。」「……」

ヒナギクは絶句するしかなかった。

「それじゃあ今日はもう帰りなさい。もう下校時刻は過ぎてますよ。私たちはここに住んでいるからいいのだけど。」

「私も今日は泊めてもらえませんか？」

「貴方家がいいの？」「ええ今日は家に帰っても誰もいませんしアテ

ネさんとは友達になれそうな気がするの。ソラ君には悪いけど今日は泊めてもらえませんか？」貴方がいいのなら今日は許可します。」

それでは行きましようか。とアテネはいい先程までいた理事長室の隣にある私室に戻っていった。

「ソラ、今日はヒナギクさんが泊まるみたいだからソラはどうする？」
「んーじゃあハヤテのところに行ってきていい？」
「分かったわー 応三千院さんの所には連絡するから少し待っていて頂戴。」

「いいんですか？今日あんな別れ方をしたのに連絡をしてもナギがいいと思うとは思わないのですが、ソラを泣かしたら絶対に許しません。まだ大丈夫でしょう。ハヤテ君の方は多分そろそろ目を覚ましている頃だと思いますし。兄弟で話すのもいいと思いますよ。」

「そうですか、ならいいです。」

その頃三千院家

「マリア、ハヤテは大丈夫か？」

「ええ少しショックが大きかったです。私も本来なら聞いてはいけないことですね。あ、そういえば先ほど理事長から連絡が入りまして、そのソラ君が家に泊まりに来るそう、なんだとー！」

「なのですがどうしますか？」

「何で彼奴が家に来るのだ！」「ハヤテ君と久しぶりに話したいみたいだそうです。」
「断る！！奴が来たら絶対に家に入れるなよ！！」

ハヤテが苦しむ必要はもうないのだからな。」

といい紅茶を飲んだとき

「これいつもより美味しいな。何か特別なことでもしたのか？」

「えっえーっと。いつもより美味しいですか？」「うむハヤテがいつも入れるより美味しいぞ！」それ入れたの、ソラ君なのですが「ブーっ…」何でも彼奴が家に来ているのだ「連絡を貰ったときにはもう外で待っていました。SPの方々を倒して玄関の所に理事長の話だとハヤテ君より規格外だそうですよ。」

「彼奴は本当になにもものなのだ？」

「さあでもない子であることは確かですよ。私は先ほど話してきたのですがハヤテ君のことかなり心配していましたから。先ほどハヤテ君も目を覚ましたので二人にしているので覗きに行ってはダメですよ。」

「うぐつ。分かった。でもあいつも執事機能が付いていたりするのか？これだけ美味しい紅茶を入れることができるのだから」「いえソラ君は紅茶を入れるのは二回目と言っていましたよ」「何時もはアータンが、入れてくれるけど一回入れたときかなり落ち込んでたけど何か理由があるのかな？」とは言っていましたよ。」

「ハヤテの家系は執事の血でも入っているのかこうなんというか前世は最強の執事だったとか」

「アニメとかではないのですからそういうのはないかと思えますけど不思議ですよね。」

そうこう話しているうちに夜は開けていった。

天の声「ハヤテとソラが何を話したかは番外編でもやるかもねい」

次の日

朝5時

「それじゃハヤテそろそろ帰るねーまだ一時間ぐらい余裕があるから寝といたほうがいいよー。」

「ソラはタフだな、よしそれじゃあ掃除をしてからお嬢様を起こすか。」

ソラは3分後にはアテネの私室に来ていた。

「アーたんただいまー。ってそういえばヒナちゃんも泊まってるんだよね二人とも遅くまで話してたのかな？まあいいや朝ご飯作っちゃえ。アーたんから作らなくたっていいって言われてるけど多分時間ぎりぎりまで起きてこなさそうだし。」

さて何を作ろうかな？じゃあフレンチトーストに野菜サラダぐらいかな

「さーてこの豆腐に自家製の唐辛子を入れてラー油をいれて出来たフレンチトースト！！」「そんなんでできるはずありませんわ（ないわよ）！！」「痛いよ、アーたんヒナちゃん頭を叩かなくてもい

いじゃん。というか時間大丈夫？アーたんは今日朝から会議でしょ。ヒナちゃんは時間、一応ヒナちゃんのは教室でも食べられるように包んでおいたけどアーたんはそうはいかないから皿にのせてあるよ？」

「えっ時間？って嘘もう8時なの！！」

「二人が起に行っても全然起きなかったから。ぐすっ二人とも遅刻したら僕のせいだ」

「ソラ（君）のせいじゃないわそれじゃあ私はここで食べるからヒナギクさんはソラを連れて教室に行つて。」

「ええ私は教室で食べさせてもらつね。それじゃあ行こうかソラ君」

「うんっ。いってきまーす。アーたん」

「ええ行つてらっしやい」

教室につくと泉たちが

「ソラ君ヒナちゃんと登校してたけど朝からラブラブ登校だねー」
「！」

「何言つてるのよ！！泉は／＼／」

「まんざらでもなさそうだな。しかし相手はあの無敵超人の理事長様だ。」

「うむそうだな、勝ち目があるのか？ちなみにソラ君もかなりの鈍

感具合だぞ。さつき理事長のこと聞いたらお世話になっている人と言っていたしな。」

「ちょっと何聴いているのよ。美希たちは」

「それはそうと昨日の話はどうだったんだ？どういう内容か聞いてきたんだろ」

「それは……駄目絶対に言えない内容だった私が踏み込んではいけない内容だったのよ。」

暗い顔をしたヒナギクを見て泉たちは話題を変えようと

「そついえばその包はなんなんだ？今日はいつもと違って偉く遅くに登校したようだけど。」

「ああ昨日は家に親もいないからアテネさんのところに泊まって話をしていたのよ。で、朝気づいたら8時だったの。これは「ちょっと待て、今、理事長のところ泊まったといっただけではソラ君はどうしたのだ？一緒に住んでいるのだろう。」昨日は、ナギの家、ハヤテ君の所に行ったそうよ。でこの包は朝ソラ君が作ってくれたものを時間が間に合わないと思ったのか「それはソラ君の手作りというわけか愛妻弁当とはこのことだな。」違うわよ！！アテネさんにも同じものを作っていたらしいから。っとそろそろ食べないと時間が間に合わないわね。ともかくそついうわけだから。」

ヒナギクが一口パンを入れたあと急に立ち上がりソラのところに行き

「なんであんなに美味しいのよ！普通の料理が食べれなくなるじゃない。まさかアテネさんに聞いていたけどここまで凄いやと思わな

かった。「ふむどれどれ一口もらっでいいか？」ええ後悔しないよ
うにね。」

といい残りのフレンチトーストを食べた。

もうひと切れはクラス全体を巻き込んだ騒動になっていた。

女子は「こんなに美味しいものを男の子が作れるなんて」と落ち込
み。

男子は「この料理が作れれば モテル ！！」などと言っていた。

でもこの料理は反則だと思うことは確かなのよね

「ソラ君」「何ヒナちゃん」

「この料理って誰に教えてもらったの？作り方とか。」

少し暗い顔をしたのでしまったとヒナギクは思ったが聞いてしまっ
たものは仕方がないと思い答えるまで待った。

「……バイトしていた喫茶店で教えてもらった。」

「……そうだったの。凄く美味しかった有難うね。」

とは言ったが少し表情は暗いままだ。そこに

「なーにやってんのーもうすぐHR始まるわよー。さっさと席に付
きなさい。」

お姉ちゃんが入ってきた。

「えー今日は理事長が急遽六時間全部体育にするようにと行ってきたので何かやりたいことがあればやるわよー。」

「何言ってるの？お姉ちゃん。」「えーだって理事長にヒナから提案したって聞いたけどま楽ができるにこしたことはないし理事長命令だし」しまった。そういえばソラ君の身体能力が高いって聞いてハヤテ君や私とどちらが強いのかなーと思って提案したんだ。まさかこんな次の日に持つてくるとは思っていなかったけど。」

「よし今日はもう帰るぞ。ハヤテ。」「えっでもお嬢様？」一日体育なんてやってられるかこんな日は「ハヤテ君が負けるのが怖いのに」なんだとヒナギク私のハヤテが負けるはずがない！いいだろうやってやれハヤテ！」という訳でソラ君はいい？」

提案したのは私だけどー応聞いておかないと。

「スー スー スー」寝ていた。

「そういえば昨日は5時くらいまで話していたからソラは眠いはずだよ。まあ1年だけど本来なら今中学3年のはずだしね。ソラ起きて。これから昨日行っていた僕と戦うこともできる「本当っ！」「よ？」

「早くやろうよ。何で戦う？一応なんでも出来るけど？」

「おきましたしヒナギクさんどうします？じゃあ三人で一つずつ出してそれをやりましょうか。」

「ええそれでいいわ。」

「じゃあ私は剣道でハヤテ君たちはどうする？」

「それでは僕は持久走ですかね。ソラは？」

「ホームラン競争？」

「ソラ（君）何でホームラン競争何かやりたいの？」

予想外なものが出てきたことにハヤテとヒナギクは困惑していた。

「テレビでやってたあとルール追加してランニングホームランも一つのホームランにするーこうすればクラスの間みなも楽しめるからー」

成程たしかにそうすれば確実に楽しめるな

「よしじゃあ種目は決まったから早速はじめようかー行くわよーあれつでもたしか今剣道場は東宮君が野々原君に鍛えられていて使用できないんじゃないかそれじゃあ行くわよー」

剣道場

「さてやるわ」「うぎゃー………！」「何！」

「野々原これ以上は無理だ。頼む「何を言ってらっしやるのですかお坊ちゃま強くして欲しい」というからこうして私も授業に出ずに手伝っているではありませんか。あら」

「東宮君に野々原さんこんなところで何をしているの?」

「これはヒナギクさんに他の皆さん。ん、そちらの方は初めましてですね。今は、お坊っちゃんが強くなりたくいと申しておりこうして私が、鍛えている最中なのでありますよ。」

「ヒナちゃんここって使えるの?先に他の種目をやったほうがいいんじゃないの?」

その時東宮はなんであの訳の分からない男は桂さんの名前を読んでいるんだ!羨ましい。と考えており

「おいお前「他の種目?これから何かなさるのですか?」

「ええ、今はソラ君が編入してきて実力を見たいから家のクラスの中で強いと思う二人とソラ君が戦って誰が一番すごいかを見ようとおもってねー!。」

「そこのソラとか言ったな!!俺と戦え!!!」

「あの、野々原さん東宮君が訳の分からないことを言い始めたのですが「おお叶わないと思っっているながらも立ち向かうそうなのです。そこが肝心なのです。ようやく分かって頂けましたか。という訳でこの剣道勝負私とお坊っちゃんも入ってもよろしいですか?」

「なんか面白くなってきたわねー。いいわよ、じゃあどうしましょう東宮君とソラ君ハヤテ君と野々原君ヒナは決勝つてところかしらねヒナはいい?」

「ええ分かったわ。」

じゃあまずハヤテ君と野々原君

「ハヤテ……勝つって信じてるぞー！」

では「始め!!」

「これは三千院の執事さんお初にお目にかかります。私はそこにいる東宮のお坊っちゃんのお執事をしている野々原楓と申します。噂は予々聞いております。それでは最初から本気で行かせていただきます。」

「は……超爆裂炎冥斬!!」

その時周りは目を疑った何と云っても炎の竜この場合は気だがハヤテを襲ったのだ。

ハヤテは避けることもできずに直撃をくらい壁にぶち当たり気を失ってしまった。

「ハヤテ……!!」

「勝者 野々原君!!」

「今のって何？」

ヒナギクはみんなが疑問におもっていることを口に出した。

「何と申しましても執事たるもの超必殺技の一つや二つ持っていないと一流の執事は名乗れませんよ。ハヤテ君でしたか彼はまだこれ

からまだまだ伸びます。一度ここで敗北を味わえば必ず強くなると私信じておりますがゆえ最初から本気で行かせていただきました。次戦う時を楽しみにしています。」

という踵を返し東宮君のほうに歩いていった。

「さあお坊っちゃんの番ですよ。今までしてきたことを信じて勝つことを信じていますよ。」

「分かった。野々原、自分の実力を出してくるよ。」

それでは東宮君とソラ君

「始め！」

「ねーヒナちゃん剣道ってどうやるの？」

「えっ？知らなかったの」

「うん。でもさっきみたいなことやれば勝ちつてのは分かった。」「そ、そう本来はルールがありそれに従うけどソラ君なら大丈夫だと思うから」「頑張ってみる。」

「で野々原さん、東宮君が勝つ確率ってどれくらいなんですか？」

「0%です」

「えっでもソラ君は初めて剣道を見たみたいですけど」「この試合を見ていればわかります。私は最初ソラさんのことを見て全力で戦って私がどこまでくらい付けるか知りたいこともあって私も参加した

「気付きませんでした。私の負けです。また勝負してくださいね。ところでソラ君はどうしてこの学園に？先程試合した三千院の執事さんは仕方ないとしてもっとどうかしましたかヒナギクさん？」

「野々原さん少しこちらに来てくださいますか？話したいことがあるので。」

「ええ分かりました。」

二人が道場を出たあとは

「ソラ君って凄いね！あの野々原さんって結構強い人だけど一回のやりとりで負けを認めさせるなんて事普通はできないよ。」

「そうだな、ハヤ太君よりかなり強いみたいだな。」

「うぎゃああああー！ー！ー！ー！ー！」

急に響いてきた叫び声に

「今のってさっきの執事さんの声だよね？」と泉

「そうだな。つまりヒナはハヤ太君より強いことになるな。」

それを聞いたクラスの皆は、えっ、つつこむところってそこなの？何で叫ぶ声が聞こえてきたのかじゃないの？

「まあ叫び声は置いておいてヒナを怒らせないようにしないと先程の執事の二の舞だな。」

たしかにそうだと全員思った。

「ただいま、それじゃあソラ君私と試合をしましょうか？」「あれ？でも、あの執事さんは？」「ええ少し話をしてきたの」「えっでも」「さあ始めましょう」「むー分かった。」

それでは決勝戦？ヒナとソラ君始め！

「えーと、ヒナちゃん本気って出したほうがいい？それとも同じくらしいの力でやったほうが「手加減何かしないで、本気でかかってきなさい。アテネさんの言った本気のソラ君も見たいし。」分かった。でも数秒で終わるよ」「舐めないで！私は、白皇学園生徒会長桂ヒナギクよ！そう簡単には負けないわ」「そうそれを聞いて安心しました。では行きます。」

シュッと音がしたかと思うともう避けきれないところに竹刀が来ていた。

誰もが当たると思っていたところ横からの竹刀にその攻撃を阻まれた。

ヒナギクは何故？自分は何もしていないのに。

「アーたん会議は終わったの？」

よく見ているとヒナギクは学園長こと天王州アテネに守られていた。

「ソラ、貴方どういっつもりで本気を出しているかわからないけど、今の攻撃は通常の人間には絶対に避けることのできないはずよ、ヒナギクさんは見えてはいたけど体が追いついていないみたいね。そ

れに、私が気付いて飛び出さなきゃ今頃、あなたは病院のベッドの上でしょうね。昨日あれほどソラに本気を出させないで言ったのがわからなかったのかしら。それに会議はまだ続いています。」

「うつ…ごめんなさい。聞いてはいたけどまさかここまでとは思ってもいな「貴方が怪我したらほかの人も悲しむのですよ！それに怪我をさせたソラは、自分を恨む昨日の借りはここで返してもらいます。」

ソラの方に歩いていったと思うとソラを抱きしめ

「ソラ、いつもの優しいソラに戻って、私からのお願い。」

「あれっアーたん何でこんなところにいるの？それに竹刀なんか持って。まさかまた僕スイッチ入ってたの？」

「ええ、「怪我人は！？誰も怪我してない！？」ええ私が、間に入って受け止めたので幸い怪我人は出ませんでしたよ。「良かった。」

くたつと言う感じで床にしゃがみこんでしまった。どうやら力が抜けてしまったようだ。」

「ヒナちゃん、ごめんなさい僕のせいで怪我をさせそうになって。」

「ええ大丈夫よ。ところでアテネさん普段の状態のソラ君はどこまで強いんですか？昨日聞き忘れていたので」

「確か普通にオリンピックピック選手を、負かしていましたね。というかたいていのことは何でも出来る天才、いえ、秀才ですね。子供の頃から色々あったのですから、当たり前と言えば当たり前なのですが」

「「「「「えーーーーー!!!!」「」「」」

「ということは私達が試合をして勝てる相手ではないということですか？アテネさん。」

「そういうことになりますね。」

ちなみに先程の本気を出した場合は敵と認めた人間には容赦しません。

大切な人を守る時と、その人を認めた場合にしか出しませんが、危ないことに変わりはないです。

それと後で話したいことがあるのでヒナギクさんは来てください。今日は休校にしてもらいます。

朝から疲れました。それでは気を付けて帰宅してください。
後、三千院さんも理事長室に来てくださいね。」

「ハヤテを保健室に連れて行ってからでいいなら行くか？」結構です。一時間後ぐらいに来てください。ソラあの子を保健室に連れていってくれるかしら？」分かった。」

理事長室

「ヒナギクさん話したいことというのはソラのことです。本人は気づいていないのですが、本気を出した相手は認められると言いましたが、それは一人の女の子としても認められているというこ「なっ、なんですかそれは!!」「ええ、そういう反応をしてくると思いまし

だが、ヒナギクさんは、ソラに恋愛感情はまだないのでしょう。「この感情が恋愛かどうかわかりませんが、たぶん違うと思います。」あの子の恐ろしいことは認めた相手は必ず相手を 好きにさせるといふ妙な特技を持っているので一応言っておいたほうがいいのかと思いました。」

その頃保健室に向かっているナギたちは

「お前確かソラといったな？今、ハヤテのことは嫌いなのか？」

「えー両親はかなり憎いけど、ハヤテのことは嫌いじゃないよ。僕と同じ目にあっているんだからかなー何か共感しちゃって「だが！お前は誰も助けては「アーたんが、助けてくれたよ。忘れていた心を取り戻してくれた。本当に感謝してる。だから僕は嫌いじゃないよー。まー好きかどうかは別だけどねー。」

「そうか…「そういう意味では三千院ちゃんにも感謝してるよー。ハヤテの借金を肩替りしてくれたそう じゃん。」「そういえばソラお前は帝のところに行ったということは、紫子母様の事知ってるのか？」

「知ってるよー。今、元気だ「なんだと！！」「しねー。「なんで元気なのだ？私が会いに行ったときはもうかなり危ない状態だったのに。」それは僕が治したからだよー。アーたんの言葉聞いていたでしよ？たいていのことは何でも出来るって。だから悪いところを見つけて治したんだよー。三千「ナギでいい。」「そう？ナギちゃんが中々来ないことを文句言ってたけどねー。「なっ！確かにまだ私に訃報が届いてないのはおかしいと思っていたが、そうか…こちらも感謝する。」「お願いがあるんだけどーいいかなー？」

「？私に出来ることならするが？なんなのだ？」

「昨日のアーたんのこと許してあげて。多分今日呼んだのはそのことだと思っけどねー。」

「紫子母様の命の恩人の言葉を聞かない理由はない。分かった。」

「じゃあそろそろ、アーたんの所に行こうか？」

「うむ！」

理事長室についたナギたちは

「アーたん来たよー。」「失礼します。話とは何なのだ？」

「ソラはお帰り。そして三千院さん、昨日は申し訳ありませんでした。」

「いや、それはいいそれより学院長、こちらこそお礼を言いたい、ソラがいなければ母様は死んでいた。」

「あら。聞いていたの。今日はその話もしようと思って読んだんだけど。ならもう話すことはないのだけど八ヤテ君は送っておくから帰ってもいいわよ。」

「そうか、では失礼する。」

「ヒナギクさんも今日は帰りなさい。」

「分かりました。それでは失礼します。」

3話（後書き）

ほんとに毎回中途半端なところで終わります。

ちなみに紫子は帝がソラの噂ことを聞き探し続け見つけ出し治したのなら20億払ってやると言われ結構早い段階で借金は返済しています。

ですが心を閉ざしていたのは親に捨てられたショックです。

4話(前書き)

ヒナギクメインの話です。

2011/9/29 13:46 改稿

4話

次の日、私は放課後アテネさんにあいに行き

「済みません、私もソラ君のこと好きになってしまったみたいです。」

「

昨日の自分が吃驚することを言ったのだがアテネさんは

「予想していたとおりですね。でも、大丈夫ですよ。私もソラも重婚が可能な国の国籍ですので、たぶんこれからも増えるのではないのかと思います国籍の変更をしましたので。私も負ける気はないのですが最後に選ぶのはソラです。それでも私を選んでくれたらいいのですけどね。」

あっさりと答えを返してきたことに自分が今日1日なんでこんなに悩んでいたのか解らなくなった。

「それでソラは何をしたんですか？」

「えっと今日の朝かなり不味い状況で私を助けてくれました。」

「朝ですか。そういえば朝私が起きたときにはもう部屋には、いませんでしたね。詳しく聞かせてもらってもいいですか？」

「はい。」

そう私、桂ヒナギクは今日の朝いつもより早く家をでて、学園に行こうとしたとき、ある少女が不良にいちやもんをつけられていた

「おい！姉ちゃん。今何て言った！俺の耳が確かなら服の弁償ができないって言ったよな！！どういうことだ！！」

絡まれている少女は今にも泣きそうに何度も誤っていたのに最終的に連れ去られそうになった。私は

「ちょっと待ちなさい。貴方は何をやってるの？」

「お前には関係ない！それともこの女の変わりに服を弁償するのわ！？こつちは大事な事があって兄貴に服を持っていく最中に駄目にされたんだぞ！どうしてくれるんだ！！」

「今直ぐに弁償しなければならぬ？それと、男が女に手を挙げていいと思うわけ？」

「黙れや！」

いきなり殴りかかってきた不良の攻撃を避けたとき私は、部活で使う竹刀で不良を気絶させようとしたとき、足元を猫が通り、バランスを崩してしまい

「しまっ！」

不良の拳が顎を掠る形であたってしまい、立つことができなかった。

「よく見たらいい女じゃないか。兄貴に渡して服のことを言っとくか」

ああ、私負けてどこかに連れてかれるんだと思って他の人に助けを

求めようとしたとき先程までいた女の人は怖くなったのか逃げた後で、誰も近くにいなかった。まさに最悪な状況。不良に担がれ車の中に入れられた。そして車が発進してしまいもうだめだと思ったとき、頭の中でソラ君の笑顔が何故か頭の中に写った。

「いやっ！離して！！。助けてソラくーん！！！」

私は手首と足を逃げられないようにロープで縛られていたのでもぞもぞ動くことしかできなかった。

その時、

ドコッ

派手な音がしたかと思うと車は停っており煙が出ていた。最初は何が起きたか分からなかったが

「ヒナちゃーん呼んだーん？ってかなんでそんなロープで縛られてるの？」

ソラ君の声が聞こえたので何が起こったのかやっ和理解した。

「ソラ君！どうしてっ！というか早くこのロープ解いて！！！」

「待てや！！車を壊してそのまま話してんじゃねえよ！！お前ぶっ殺され「ちよっと待ってね今解くから」。話聞けや！おい！！！」

不良がソラ君の胸倉を掴んだと思ったとき不良は吹き飛ばされ意識を失っていた。

急なことで言葉が出なかったが

「解けたよー。ヒナちゃん？大丈夫？たまたま朝の散歩してて、迷子になっちゃったから、色々さまよっていたときにヒナちゃんが車に乗せられるの見て。追いかけて車のボンネットを思いっきり殴ったから血がちゃったよ。」

「ソラ君助けてくれて有難う。」

思わず抱きついてしまったが、今は顔が真っ赤でソラ君の顔を見ることができない。

10分ぐらい時間がたちようやく落ち着いてきて私は恥ずかしさを隠すために

「さっきのこと誰にも言わないでね。ソラ君！！」

「うん？わかったー。でもアーたんには言わないといけないけど？
「お願い！誰にも言わないで！！」だってこれでも腕を怪我しちゃうたからどうしてか聞かれるよ？」

「アテネさんには、私から伝えるからそれ以外の人には話さないで。」

「んーわかったー。あと学園まで連れてってー。」

「その前にやることがあるでしょ。」

私の言葉に何をやるのかわからないというふうに首をかしげていたが、ふと思いついたように

「ヒナちゃん、おはよー。朝の挨拶を忘れてたねー。」違っわよ！

怪我の治療をしないといけないのよ！黴菌が入ったら大変なんだから」あーそういえばそうだね」。でも応急処置をやる場所ってないよね。」

ソラ君はまだこちらへんの地理を分かっているみたいだった。車で少し動いていたからなのか私の家のすぐ近くだったので、

「私の家がここから近いからそこで治療をするのよ。ちゃんとしてきてね。今ならお義母さんがいるから見てもらえるしね。」

「じゃあお願いしますー。」

私の家につくとお義母さんはちょうど出かける時だったのか

「ヒナちゃん、どうかしたの、後ろの子は、まさかヒナちゃんの彼氏かしら？こんな美少年ならいつでもOKよ。」

「違うわよ。ちょっとトラブルに巻き込まれたところをソラ君に助けてもらって、その時、怪我をしたから手当をしようと思ったのよ。私も服が少し破れちゃったし。着替えてくるからお願いしてもいい？」

「ええ、いいわよー。ヒナちゃんを助けてくれてありがとね。ソラ君。あとこれからもよろしくね。」

「約5分位、待ってってくれるかしら？そしたら学園まで連れてくわ。」

.....五分後.....

「やっぱソラ君にはネコミミが似合っわねー！ー！ー！ー！。一回両手を丸めて首のところにもって行ってニヤンって行ってみて」

「お義母さん何やってるの？」ニヤン「ブッ／＼何をやってるのソラ君！？」

「やってみてって言われたからやってみた。」

「何遊んでんのよお義母さんは／＼もう行くわよ！行ってきます。」

「行ってらっしゃい。」

「っていうことがあったんです。それで、今日1日初めて感じた気持ちがあったからソラ君の事を観察してたんだけど他の女の子と話しているのを見ると何か心が痛いような重いような感じだったの。だからこの感情が、何か最初はわからなかったのだけどやっと分かった。たぶん自分はソラ君が好きなんだと。だからアテネさんについて聞いてます？」

「ネコミミってのは何かしら？」えっ？「先ほどネコミミを付けたって言ってたけどネコミミって何？」

「えっと、あ、そういえばお義母さんが付けたの外し忘れたから今持ってますけどこれです。」

ネコミミをアテネさんに見せると

「これは確かにソラなら似合うでしょうし本人は何も思わずに付けるでしょうね／＼

今度付けさせてみようかしら写真とかもとってみたいし「アテネさん？」ごほん。でヒナギクさんこれからソラはまた増やして行きませんが我慢は出来ますか？今現在私を含め4人ほど好きな人がいます能耐えることができ「できます！そういう人を好きになったんですから」そうですか、分かりました。ところでソラは？」

「えっと生徒会室に行ってもらってます。ところでその、ほかの3人とは誰ですか？」

「言いずらのですが1人は三千院紫子さん「え？その人って」ええ三千院さんの母親です。「なんて人を落としてるんですかっ？」治療したときに何かあったみたいですが、紫子は教えてくれませんでした。二人目は私です。3人目はというか人ではないですねミコノスの本邸にいるキング・ミダスいわゆる「神」の中の1人です。「もう何も突っ込めません。」ソラは、1人で私たちを永遠の呪いから救ってくれたのですから惚れるのも当たり前なのですが1人の神もあそこまで可愛くなるのだとは思いましたけど。の3人です。」

「ミダスは今、人型になっています。ただソラのことを溺愛していますね。ソラは私の呪縛を壊すだけでなくミダスの呪縛まで破壊してしかも、また人として生きる自由をくれたのですから、当たり前前といえば当たり前ですけど。紫子は病気を治してもらったときに何かあったみたいですが、聞いても教えてくれませんでした。」

「呪縛？ですか？」

「ええ。どういう呪縛かは詳しいことは、絶対に伝えることができないので呪いの一種を解いてくれた人ですね。後、人間の中に神様が眠っています。と言ってもこの前の放課後の一件で一つになったみたいですけど、目の赤い状態が神様が出ているときです。他に聞きたいことは有りますか？」

何か私凄い人を好きになったのかな？

ヒナギクは、今更ながらどうしよう？でも好きになったものは仕方がないよね。自分の心に問いかけをしているときそういえば

「重婚が可能なら結婚をしまえばいいんじゃないんですか？」

当たり前のことを聞いてみたがアテネさんは少し恥ずかしいのかそっぽをむいて

「日本での年齢は18歳じゃないと結婚できないのよ。それに誰が一番好きかまだ言ってもらってなし／＼」

あとと続けると真剣な顔をして

「まだソラは精神的に幼いのよ。それはわかります。言葉のはしを伸ばして話すことが多いですかね。」とそういえばヒナギクさん？

「何ですか？」

「貴方を襲った塵屑の名前は分かるかしら？一応学園の理事長として生徒に手を出したことに落とし…ごほん少し話し合いをしなくては「今、アテネさん落とし前って」何か言ったかしら？ヒ・ナ・ギ・

クさん？「いえ、私の聞き間違いでした。「そう？」

あれは聞き間違えと言っておかなければ危ないわね。ヒナギクは絶対にアテネのことを怒らせないようにしなければと心の中で誓った。

「済みません。なにせ急なことだったので、何も覚えてないんです。」

「そうなの？なら仕方ないわね。でも、これからは気を付けなさい。いつもソラがいるとは限らないのだから、それと、これを持っていなさい。」

アテネは小さい宝石みたいなものをヒナギクに渡した。

「なんですかこれは？」

「王玉よ。本来、天王洲家の人間がが城に入るために、その王玉を持っていく必要があったあんだけど。ソラに助けられてからは王玉に意味はなくなったの。だからソラを好きになった人で、私が認めた相手にだけ渡すようにしているの。私は、勿論のこと紫子、ミダスも持っているわ。あなたで4人目ただこの王玉をなくした場合、その時点でソラに自分の気持ちを伝えることは、諦めてもらう。これは紫子もミダスも承知しているので、変更はありません。気を付けなさい。」

「では、この王玉はソラ君の分身体でも思っておけばいいんですか？」

「そういって。その王玉は、肌身離さず持っているなさい。」

「もう一ついいですか？」

ヒナギクは、疑問に思ったことを聞こうとアテネに声をかけた

「何ですか？」

「王玉をなくした場合で、ありえないと思いますが、ソラ君が、告白してきた場合はどうすればいいんですか？」

「そのことですか、その場合は、特別です。自分の方から好きということはできないだけで、ソラから告白してきた場合は、自分の素直な気持ちを言うてください。」

「分かりました。」

「それでは、話は終わりです。それにもうすぐ、下校時間ですよ。」

とここで今日のお話は終わりとても言うように、帰ることを促されてしまつては帰るしかないので私は話を切り上げ家に帰ろうとし手にもっているネコミミのことを思い出し、アテネに

「あっ！アテネさん。そういえばそのネコミミっていりま「くれるのっ!？」ええ、たぶんお義母さんがあげてを前提で付けたんだと思いますし。なかったら、また買ってくるんで貰ってくれてもいいですよ。」

「有難う、貰っておきます。」

その後、家に帰ったヒナギクは

「はあ、今日はほんとにいろいろあったわね。にしても助けてくれた時のソラ君かっこよかったなあ／＼／また明日もあえるとってか同じクラスなんだから会えるわよね。もう遅いし、今日は寝よう！」

翌日、休日だったことを思い出してがっかりすることになるのは別の話である。

.....

「ソラ、今日ヒナギクさんを助けたそうね。」

「うん、ヒナちゃんに呼ばれたような気がしたもん。」

「もし私が危なかったときもヒナギクさんのように助けてくれる？」
懇願するように、ソラに聞いていたがそのことをソラが気付くはずもなく

「うん！もちろんだよ。アーたん。」

アテネはそう聞き安堵したが、

「ゆーちゃんも、ミーちゃんもそうだよー。」

（ゆーちゃんとは紫子 ミーちゃんとはミダスのことである。）

「そう。」

やはりまだ精神的に幼いよね。ソラの事が好きなのにかわりはな

いだからいいのだけだ。

その頃三千院本邸では、

「ソラ君に会いたいよー！ー！！」

「またか、そろそろアテネに言ってソラを連れてこんと前のように何をしでかすかわかったものじゃないからの。」

実は、前にも同じことがありその時は、

「なに！紫子が部屋にもどこにもいないだと！！」

「はい！今現在「大変です！！」「何事だ！」帝様紫子様の部屋にこんな置き手紙が「ソラ君にあいに行つてきます。探さないでください。」

「なっ！紫子は何で出かけたのだ？へりもクルーザーのではおらんしの。」

「帝様！報告します！聞き込みした結果、どうやら昨日、メイドの一人に、手漕ぎボートの作り方を聞いていたそうです！！」「なんだと！！では、もしかして！！」「はい！今、帝様が考えていらつしやる通りだとございます。今、へりにて搜索を「応答せよ。」「どうした！？」

「今、紫子様と思われる人物がボートを漕いでいるのを発見し、直ちに保護しました。」

航行隊の人間の無線の後ろからは

「やーだー。ソラ君に会いに行くのー！ー！」

という言葉が無線越しに聞こえていたが

「帝様、紫子様は無事保護されました。」

「そうか。良かった。戻ってきたら儂のところに来させる！ー！」

「了解しました。」

ひとまず聞かなかったことにして指示をだした。

「ふう、アテネに連絡してソラを数日こちらに預けれるか聞いてみるかの。」

受話器を手に取り

「誰だ？」「おお、マキナか？今、アテネはおるか？」「いる、アテネー、爺から電話ー。」

「こらっ！ー！マキナあなた何言ってるのかわかってるの？はい、ただいま電話をかわりました。済みませんそれで要件は？」

「ああ、構わない。いやそのソラを数日間こっちに預かるってことは出来るか？」

「急にどうかしたんですか？」

「いや、紫子が、ソラのことを好きなのは知っておるだろう？」「え

え、知っていますか。「どうやら禁断症状みたいなものが出て手漕ぎのボートでそっちに向かおうとしたのじゃよ。で、数日間ソラを紫子に合わせてもらえんかと思ってな。」

「帝も大変ですわね。ソラに聞いてみないことには分かりませんが、今、聞いてみます。ソラ紫子とと久しぶりに会いたい?」

「帝のところ?」ええ。「アーたんはどうするの?」

「私はソラが行くのならついて行く」なら行くー。「という訳でいつからそちらに行けば」お爺ちゃん。ソラ君にあいに行きたいよー。「少し待っておれ。紫子、ソラがくるから我慢しなさいと言ったら我慢できるか?」んー日ぐらいうなら「そうか。では、なるべく早めで頼む。これ以上、紫子を抑えておくことができません。」

「分かったわ。では、すぐ行くわね。それじゃあ。」

ということがあったのだ。

4話（後書き）

次回紫子のところにソラが行きます。（たぶん）

5話

「ソラ、また紫子が会いたいそうよ。からこれ1年はいつてないから行きましよう。」

「でも学校わー？まだ2日しか行ってないよー？」

「今日は土曜日で休みよ。でないと、私も色々あつて行けないわよ。」

「分かったー。じゃあ準備してくるねー。」

そう言いソラは部屋を出ていったが準備する必要があるはずも無く

「着替えは向うにあるから準備の必要はなかった。」

気付いたのかソラは戻ってきた。

「それじゃあ行くわよ。」

「うん！ー！」

三千院本邸

「紫子、ソラたちが明日つくそう」「えっ来てくれるの！？」「ああ。予定では明日だが、早ければ今日の夜にもつくかもし」「あー早く会いたいな1年ぶりだもんねー。」「儂の話聞いておらんの。そういえ

ばアテネも来るそうぞ。」

「アテネちゃんばっかりソラ君と一緒にいてずるいよー。私ももっとソラ君と一緒にいたいのにー。」

紫子はソラと会うのは半年に1回から長い時は2年に1回なのでずっと一緒にいるアテネのことが羨ましいのだがアテネがいないとソラもこないことが分かっているので仕方ないとは思っていても納得は出来ていないのであった。

2日後

「いつ来ても大きいわね。ソラ、帝に挨拶に行くわよ。」

アテネは形式上挨拶に行こうとしたとき

「突貫だー!!」

ソラは走って建物の中に入って行ってしまった

「……って待ちなさいソラ!!全く、ソラらしいと言えばソラらしいけど、仕方なわね、私は帝に挨拶に行きましょう。」

帝の部屋

「待っておったぞ。ん？ソラはどうし」「突貫だーって行って先に屋敷の中に入って行きましたけど。」たぶん紫子のところにも行ったんだな。彼奴は縛られてないほうが生き生きしていいいな。」

「で、ソラを呼ぶ以外に私に何かようでもあったのでしょうか?」

相変わらず、感がいいな。帝はそう思ったが口に出さずに

「代理の理事長の事が1つ目だ。あ奴はやりすぎだ。いくら理事としてもな。そこで処分を決めたいのだがほかの理事は既にあ奴の傀儡みたいになっておつてな。儂かアテネお主が学園に理事として「少し待つて下さる。」なんじゃ?「キリカは、今、学園にいないわよ?」そんな馬鹿な!」

「でも、本当だものでないと私が、理事として会議に出ることもできないのではないかと。それに、学園自体に迷惑になっているのなら、生徒に、投票させてみてはどうかしら。いままで、その迷惑に振り回された生徒なら私が、学園長になることに反対する人は少ないと思うのだけど。それに、今の生徒会長とも私は仲がいいわ。」

「ふむ。それならキリカには内密でことを勧めるか。」

「っとそういえば、ヒナギク、今の生徒会長に、王玉を渡したわ。」

「そうか。紫子にはそのことを「今日伝える。それもあつたから私は、来たの。」ならいい。」

「他には?」

「ああ、実はこっちの方が本題でな。」

顔を険しくした帝は

「綾崎夫妻のことなのだが…」

そこまで言っ言葉を切った。否、切らざる得なかった。その理由は、静かに沸ふつと怒っているアテネの殺気が強すぎたからだ。

「あの連中、次は何をやったの？また、ソラを苦しめるようなことでも？」

「いや、違うのだ。どうも先月、キリカと接触しておったみたいなんだが。何を話しておったかがまだ分かっておらん。ソラと学園の生徒に何かするつもりかもしれない。一応手遅れになってからでは遅いからの。話しておこうと思ったのだ。」

「そう。キリカとね。絶対に何かするつもりだわ。戻ったら早速帰ってくる前に理事長としての復帰をしないと行けなさそうね。事前の情報有難う。」

「なに、気にするな。僕もナギの執事は気に入らんが、ソラのことには気に入っているのな。何かあればソラはこちらで匿う。いつでもソラを送れるようにすることは忘れるなよ。」

「ええ、分かったわ。じゃ少し、ヒナギクと話してくるわ。」

そついで部屋を出ていった。

それを見た帝は窓の方に歩き。

「絶対にソラには手を出させんぞ。綾崎夫妻！、そしてキリカよ。」
自分に誓つるように言葉に出して言った。

帝は気付いていなかったが、それをアテネは部屋の外、扉越しに聞いていた。

その頃、ソラたちは

「ゆーちゃん、いつの間にこんな巨人になっ「ちよつと待って！ソラ君それ私の肖像画だよー？」えっあ、本当だ。いやー久しぶりだったから、つい見間違えちゃった。「この前もやったよねー。」あれっそうだったっけ？でも、お久しぶりですー。ゆーちゃん。」

「お久しぶりねー。ソラ君（あー何かあっただけで癒されるー。）そういえば白皇学園に編入したそうだけどナギとはあったの？」

「ナギ？ハヤテの主？」

「そうそうハヤテ君のご主人。」

「少し話はしたよー。」

「どんな話？」

「ハヤテを恨んでないかとか。そういえばアーたんが過去を教えたから、ちびっ子も知ってるよー。それにゆーちゃんが生きていることも話しておいたから。」

「そうなの？驚かせたかったんだけどなー。（にしてもソラ君に、余分に過去のことを思い出させたのねナギ、言いたいことを言う正確は治ってないのね。）」

「ごめんねー。アーたんがかなり怒っていたし、2人が僕のせいで仲が悪くなることだけはやめて欲しかったから。」

「まー言っちゃったものは仕方がないし、これから何する？」

「んーいつものところの探検ー。」

ちなみに、いつものところとは地下にある迷宮のことである。

「じゃあ私は準備してくるねー。」

天の声「冒険の話はまたばんがいへんでね」

紫子に先に話しておこうと思ひ紫子の部屋に来たアテネは、

コンッコンッ

「だーれー？」

「紫子、私よ。って貴方何やってるの？そんなどこかのジャングルに冒険するような格好して。」

「アテネちゃん。お久しぶりー。ソラ君と地下の迷宮に冒険に「それって大丈夫なの？」いつもソラ君が来たら言ってる場所だから大丈夫だよー。」

「そう、紫子、王玉を一つ渡したわ。」

「えっ？それはソラ君が選んだの？」

「いえ。私が自分の判断で渡したから大丈夫よ。ほらこの子よ。」

と写真を見せると

「わー可愛いね。でもどうして渡したの？まさかソラ君に、本気を出させたとか？というかアテネちゃんが渡すくらいだから、本気を出させたんでしょ？たぶん予想としては、本気を出したときソラ君の攻撃をくらいそうになったときアテネちゃんが庇った。ぐらいしか思いつかないけど。」

「貴方は何処の予知能力者よ。あってるわ。一応、白皇学園の生徒会長をやってる子よ。ソラとは同じクラス。そしてソラの過去を知ってるわ。」

「私達もそうだけどソラ君って人を助ける度に助けた相手に好かれてない？」

「肯定はしたくはないけどそうね。っとそういえば、ソラは？もう30分ぐらい話しているけ「嘘！！ほんとだ。アテネちゃん、お願いがあるんだ」分かったわ。ソラのところまでついていけばいいのね。「おねがーい。ソラ君、泣き出すと私じゃどうしようもないから。」

「それじゃあ。行きましようか。」

「ぐすっぐすっ。ゆーちゃんが戻ってこないよー！。何処ーー？」

紫子の予想通りかなりひどい状態で泣いていた。

「あちゃー。やっちゃった。アテネちゃんお願いできる？」

「わかったけど。紫子貴方も謝りなさいよ。でもこのぶんだと今日、どこかに行くのは無理そうね。」

「うん。仕方ないよ。」

「じゃあ行くわよ。」

ソラが泣いているのを壁に隠れて見ていたがアテネが意を決したように言った。

「ええああなったソラ君は約1日寝ちゃうからねー。」

「ぐすっ、うわああああん。」

「ソラ、大丈夫よ、私が側にいるわ。」

「ぐすっ、でもゆーちゃん来ないよ。」

「少し用事ができてこれなくなったらしいのよ。だからソラが嫌われたっていうことはないわ。私が保証してあげる。眠いでしょ。今は寝なさい。起きたら紫子や私が側にいるわ。」

「うん…すーすー。」

「紫子、もう出てきていいわよ。ソラは寝てしまったから。一応、起きるまでソラの世話よろしくね。」

「分かった。アテネちゃん、ありがとー。じゃあ部屋まで連れてくねー。」

「私は少し連絡したい場所があるから連絡したら行くわ。いつもの部屋よね?」

「そっだよー。」

ヒナギク

ソラ君の電話番号って知らないな。今度学校に行ったときにでも聞いてみようかな。そう考えていると

P i P i P i P i

携帯が鳴り始めた番号を見ても誰かわからないので出た。

「はい。ヒナギクですが?」

「ヒナギクさん?」「アテネさん?」「そうアテネよ。少し聞きたいことがあって電話したんだけど今時間はいいかしら?」

「ええ、構いませんよ。どうしたんですか?」

「なら、単刀直入に聞いわ。今の理事長のことはどう思っているの?」

「災害スプリンクラーとしか思っていないかもしれませんがどうしたんですか？」

「帝と話し合った結果、あつと帝っていうのはナギさんのお祖父さんのことよ。実は、理事自体がキリカの傀儡になっている可能性があるという話があつて。今キリカはどこに行っているのか分からないうちに全校生徒に投票を行なつて私とキリカどちらがいいかを決めてもらおうと思うのだけど集会の準備を行なつてももらってもいいかしら？」

「分かりました。でもほぼ全会一致でアテネさんになると思いますが。あと最初に少し挨拶をしてもらつてもいいですか？」

「ええ、それくらいしないとわからないと思うから挨拶は、必ずするわ。じゃあお願いね。」

「はい分かりました。」

「ヒナギクさん良いことと悪いことが1つずつあるんだけどどちらが先に聞きたい？」

「それでは言いことを先に聞きます。」

「良いことは、紫子に話しておいたから。紫子は別に構わないと言つてたわ。」

「そ、そうなんですか。」

ホツと安堵したような声が聞こえたのでヒナギクさんはよほど緊張してたのね。と思うアテネだったが

「でもう1つの悪い報告が「何ですか？」帝からの情報でキリカと綾崎夫妻があつていたそうよ。ソラかハヤテ君もしくは生徒に何かするかもしれないわ。一応警戒だけはしておいて。たぶん私の予想が正しければソラに何かしてくる可能性が一番高いわ。私だけではどうしようもないことが出てくると思うからその時はよろしくね。」

「はいっ！！何かあれば直ぐに駆けつけるので連絡をお願いします。それに好きな人が危ないのに助けないのはその人のことを好きという資格はありませんし生徒会長として生徒を助けるのに理由は要りません。人としても当たり前のことだと私は思っています。」

「そうね。人は助け合って生きていくものだもの。1人で生きているなんて勘違いは小学生までの考えよ。じゃあ私は少し用事があるから切るわね。」

「はい。それでは月曜日の朝に集会を行いそこで決めてもらいます。それでは、失礼します。」

ヒナギクが電話を切ったことを確認してから

「絶対にソラは守ってみせる。」

帝と同じように自分に言い聞かせるように言ってから自分の泊まる部屋に歩いていった。

この時はまさかあのようなことが起こるとは誰も思ってもいなかった。

????????

「ソラ君は借金を完済してたのかー」

「ええ、天王洲家と三千院家が見返りとして支払ったそうですよ。それである計画は順調に進んでいるの？」

「はっはっはっ。勿論だよ。それにソラ君にはもっと押し付けてよさそうだなー。ハヤテ君の方が返済率がいいと思ったけどソラ君にまたこれを押し付けよう」

「それはいい考えねー。」

「そうだろー。」

「私もアテネさんには苦しんで貰わないと気が済まないから、一番傷つく方法で貶めたいし、今回は利害が一致しているから協力はするわよ。」

怪しい連中がホテルの一室で会話をしていた。

6話（前書き）

一度掲載してから書いたほうが楽なので改訂するまではおすすりめ？
できません。

読む人も少ないと思うので大丈夫だとは思いますが。

6話

それからソラたちは何事も無く昼過ぎにはへりに乗り学園に戻ってきた。

そして、休みも終わり。月曜日に緊急集会が行われた。

「生徒会長のヒナギクです。それでは緊急集会を行いたいと思いますが今回は、理事長が復帰をするかどうかを投票にて決めたいと思います。まず、始めに行っておくと今までは用事があり代理の理事長が学園を運営していましたが、この度、復職するそうなのですが、今、葛葉キリカがどこに行ったかわからない状態であり、引継ぎができません。なので生徒による投票にて今までの理事長がいいか、復職した理事長がいいかを決めてもらいますが、まず理事長の天王州アテネさんに一言いただきます。それでは天王州理事長よろしくお願いします。」

「先ほど紹介にあがった天王州アテネです。まずいきなりの緊急集会に集まってくださりありがとうございます。私は少し用事があり世界を渡り歩いていました。が、その用事も終わり学園に来たましたら、キリカが問題をお越していることを聞き深くお詫びします。これからは学園のことを優先させていただきます。よろしくお願いします。」

一礼してから講堂を出ていった。

「では投票を行いたいと思います。投票結果は昼ごろに発表しましちよつと待ちなさい！！理事にそんな報告は聞「今更何をしにきたんですか？代理の理事長。」私は認めないわ。」

「そうです。葛葉様以外に白皇学園の理事など務まりません。」

「っとこのようなことを言っていますがどうしますか？アテネさん。」

「えっ？なっなんで。」

キリカはアテネが出ていったことを確認してから登場したので、まさかまだ後ろにアテネがいることに気付いていなかったのである。

「ふふっ。ヒナギクさんの言った通りになりましたね。さてキリカ？この書類に不備はないはずですよ？この書類にはなんと書いてあるのか忘れたの？私が復職するときまでの契約で代理の理事長をするという旨のことが書いてあることを忘れたとは言わせないわよ。」

実は集会が始まる前にヒナギク達生徒会一同とアテネは

「アテネさん一度挨拶をしてもらいますが、その後、すみませんが一度講堂から出て気配を徐々に小さくしてくれませんか？」

「どうしたの？ヒナギクさん。そんなことして何かあるの？」

「ええ、生徒会の皆で話し合ったのですが、キリカはたぶん投票の邪魔をしに来て、アテネさんを理事長として認めない。という訳の分からないことを言い出すと思います。そこにアテネさんが出ていってどういふことか説明を求めます。」

「でも、ヒナギクさんこの書類があれば私は理事長として投票をおこなわなくても復帰できますよ？」

「それでは駄目なんです。今までしてきたことを反省してもらわないと私の気がすみません。」

「分かったわ。また何か言ってくるとは思っけど多分大丈夫ね。」
そういう話をしていた。

「くっ、ならば執事同士で戦って決めると言うの。キリカ、アテネさんが持っている書類がある時点でもう決定事項で、あら、面白そうね。」アテネさん……。」

「それじゃあ、キリカ、貴方はその軟弱そつな子でいいの？」

「私の紫音が負けるはずがない。」

「ええ。必ず葛葉様に勝利を献上いたします。」

片膝を付きキリカの手を取りそう言った紫音は

「さて、貴方の執事さんはどこで「執事は今、ミコノスにいるから代理を立ててもいいかしら？」ええ、いいでしょう。どなたでも私は負けません。」

「っとうわけで、今からグラウンドに移動しましょう。ヒナギクさん。一応、私が止めに入りますから審判よろしくお願いしていいかしら？」

「分かりました。キリカも勝負しない限り譲る気ありませんしね。では！ここにいる生徒は全員グラウンドに出てください。この場の全員が証人です。」

グラウンドに出てきた私たちは

「じゃあ勝負の方法は、キリカが決めなさい。」

「そうだな。じゃあ執事バトルで。」

(執事バトルはアニメ第一期でご覧ください。)

簡単にいえば相手のネクタイを取ったら勝ちというルールだ。

「そう、ソラ準備はできた？今回は最初から本気でこてんぱんにしていいからね。枷は外す？」

「あの変な人相手に枷なんか外したらミーちゃんに失礼だよー！でも、本気を出していいなら勝つのは確定だよ。あの変な羊さん「執事だ！！」に負ける気なんかないよ。あの時みたいに守ってあげる。」

「アテネさん、準備ができました。それと一つ聞いてもいいですか？」

「ソラの喋り方のこと？」

「はい。」

「ソラは本気になると言葉のはしを絶対に伸ばさないわよ。それは集中力が高いつてもあるけど。それじゃあ行きましようか。」

グラウンド

ざわざわ……

「おいあれって確か、この学園の編入試験を満点で合格で、しかもあの無茶苦茶美人の理事長のお気に入りで綾崎の弟のソラじゃないか？」

「あいつ勝てんのか？」

見ていた一部の人間以外が

(あいつって勝てんのか？無茶苦茶弱そうだけど……)

と思っていた。

「それでは審判は私ヒナギクが公平に行わせてもらいます。両者ともよろしいですか？」

「ちょっと待って。」

「どうしたの？ソラ君。」

「いや、形式上やっておいたほうがいいのかとと思って。」

「何を？」

ヒナギクは試合の前に何をやるんだろ？という全員の気持ちを代弁して聞いた。

「アテネさん、この勝負の間は貴方の執事として、必ず圧倒的な勝利をもたらします。」

と言ってからソラは片膝を付き手を取り手の甲にキスをした。

あまり急なことだったのでアテネは

ボンツと顔を赤らめ恥ずかしそうに

「ソラあなたなら絶対勝つわ。お願いね。」

それを見たヒナギクを始め女性陣は余りにもお似合いの二人に「絵になるな」や「羨ましいな」と思い男性陣は「理事長にあの言葉や顔をさせるとは勇者だ勇者がいるぞ」と騒ぎ出したがヒナギクが思い出したように

「そ、それでは仕切り直しますがよろしいでしょうか？」

「ええ、いいですよ。誰が相手でも勝たせてもらいますから。ソラ君といったかな悪いね。君の負けはもう「五月蠅いな。」君は誰に向かって「さっさと始めるぞ。ヒナギクさんお願いします。」

紫音はまだ何か言いたそうだったが勝ってからいえばいいなと思いつ勝負に集中することにした。

「それだは、始め！！」

先に攻撃を仕掛けたのは紫音だった。

「君はこれで終わりだ。これを抜け出した人は今までいな「ふーん、

ねえこれってやり返していいの？」「なんだと！！君ごときがこの呪縛から「あのさ、何時までそっち向いてるの？いま僕は君の後ろにいるんだけど？」なっ！！いつの間に！！何故動ける！！！」

「こんなの何もしなくても動けるよ。さあどうする？降参する「降参なんかするはずがないだろ！！」「そうか、なら……」

そこで言葉を切った。次の瞬間、紫音は壁に叩きつけられていた。

観客の一人が

「何が起こったんだ？」

ただソラが紫音を殴っただけでこの威力である。そして殴った拍子にネクタイもとっていた。なので、

「勝者、ソラ君！！！」

「そんな！！紫音が負けるなんて！！ありえない！！もう一度「見苦しいわよ！！いい加減にしなさい！！キリカ、貴方が決めたことでルールも貴方が決めたその時点で言い訳なんか出来ることはないことをわかりなさい！！そして今まで貴方が迷惑をかけた生徒にこの場を持って謝りなさい！！！」

アテネは自分に対しても本気で怒っていた。なぜ自分はこの人間を理事にってしまったのか？もっとまじな人間がいたはずなのになぜ？

「っと済みません。少し感情的になってしまいました。ヒナギクさん。投票結果は昼頃にはでますよね？」

「はい。昼までには出ます。」

「そうですか、私は頭を冷やしてきますがすみませんが、後お願いしてもいいですか？」

「分かりました。ってソラ君？どこ行くの？」

「ソラ？」

ソラはいつもならアテネの方に歩いていくのに対し今日はキリカの方に歩いていき。

「ヨーちゃん。今すぐ出てかないと大変な目に合わせるよ？」

「ソラ！何言ってるってあれは何？」

なんとキリカの体から黒いモヤモヤしたものが出ていった。その後

ドサツ！！

という音がする方を見るとキリカが倒れていた。

ソラはもう用がないというふうに背中を向けアテネの方に歩いていき

「大丈夫ー？今キリカの中にあつたヨルムンガンドを外に出したんだけどー。性格はそのままだけど少しは良くなったと思うよー。」

「そう。私は大丈夫よ。それじゃあ戻りましょうか。」

「うん。」

「ハヤテ、最後の攻撃？つて見えたか？」

「いえ、見えませんでした。お嬢様。」

「物理的に殴つたのですよ。三千院の執事さん。」

「野々原さん！見えたんですか？あれが」

野々原は近づいてきてそう話した。

「ええ、ほとんどギリギリですが一応見えることができました。まさか私と試合したときは、手を抜かれていたことに少しながらシヨツクが隠せないのですが、世界は広いですね。ここまで私をワクワクさせる方がいるとは思いませんでした。」

私も修行不足ですね・・・といい野々原は去っていった。

「お嬢様、僕は……」今は何も言うな。「はい……」

ハヤテは自分とソラの強さの格の違いを知って落ち込んでいた。

そして昼放課になった。

いつもならばガヤガヤと騒がしいが今日はやはりそうはいかなかった。なにせ自分の学校の理事長が自分たちの投票によって決まるのだから。

「生徒会長の桂ヒナギクです。今から朝行われた投票の結果を報告します。」

天王洲理事長 950

葛葉理事長 48

無効 2です。」

今までの事があったのに関わらず葛葉キリカに48票も入るとは思っていなかったヒナギクは、驚いていた。

「という結果でキリカ。貴方は理事の一人に戻りま「えっ！私辞めさせられるのじゃないの？」ええ、最初は、首も視野にいれていましたが、48票もの票が貴方に続けて欲しいという声が出ているのですよ。これから心を入れ替えるというのなら首にはしません。」

「ありがとうございます。ところで紫音の様子はどうですか？」

「まだ目は覚ましていませんね。今日中には覚ますと医者も言っていました。ので、大丈夫です。」

そついいアテネは部屋を出て放送室に行った。

「理事長に復帰した天王洲アテネです。皆さんの投票の結果を重く感じ精一杯学園のために行動したいと思えますのでよろしくお願ひします。そして最後に、ソラと私は恋人ではありませんが、旅をしていました、私は彼に幾度となく助けてもらっています。彼のことを怖がらないであげてください。」

ふう、アテネは一息付きソラに試合をさせたことを後悔していた。

「アーたん。大丈夫だよー。ヒナちゃんやゆうーちゃん、ミーちゃんが居るしクラスの皆は普通に接してくれたよー。僕のことを分かってくれる人がいるんだから大丈夫ー。」

「ソラっ。」

アテネは後ろにソラが来ていることに気付かなかったため、放送でソラの言葉が流れてしまった。

「そうね。ソラなら大丈夫ね。余計なことだったかしら？」

「アーたんが心配して言ったことなんだから嬉しくはあっても余計なことじゃないよー。」

「そうですよ。人を氣遣う。前の理事長にはなかったことです。生徒一人のためにここまでする理事長の学園に通えて私は幸せですよ。」

「『『『そうだそうだー。』』』」

いつの間にか野々原と生徒会役員そしてハヤテが来ており代表するように野々原がそう、マイクに向かって話した。それに続くように生徒会三人娘こと瀬川泉、朝風理沙、花菱美希は言った。

「ソラ、貴方は今幸せ？」

「この学園にこれて、クラスのみんな野々さんにあえて、今まで知らないことがしれて、友達も出来たー。これ以上に幸せなことってあるー？普通のことを普通にこなせない人もいる。不器用で周りに迷惑をかける人もいる。僕も迷惑をかけてる。でも、助け合うのが

人間ってしれて凄い幸せ！」

「そう。ならもつといろいろ学びなさい。学園は勉強するところでもあるけど、在学中はそれ以外のことも、大切な時間なのよ。」

そういえばマイクのスイッチを切つてなかったなと思い、

「全校生徒にもう一度言うわ。在学中は、勉強も大切だけど、それ以外のことも大切な時間なのだから、いっぱい学び、意見を交換しあい、対立もする。喧嘩もするかもしれない、でもそれは人間を成長させる。人生に無駄なことなどない、無駄と思うこともまた意味がある。そう私は思っているわ。だからこれからも大切な時間を作りなさい。私からはそれだけよ。」

そして放送が終わったあと、一秒、二秒と時間が流れていく十秒ぐらいたったときに、とあるクラスの一人が拍手をし始めた。それは伝染するように同じクラスに広がり、違うクラスにもそして最後には学園ないの全員が拍手をしていた。それは放送室の中でも一緒にしばらくの間鳴り止むことがなかった。

その夜

「私ったら何言つてたのかしら／＼今思っただけで恥ずかしいわ／＼」

でも、と続け

「この学園を立ち上げ、理事長になってよかったと思つたのは初めてね。今までは色々有りすぎて考えることができなかったから。」

6話（後書き）

ところでソラ君野々さんとは私のことですか？

うんっ！！そうだよ。駄目だった？

いえそういう呼ばれ方は初めてだったので
これからよろしくお願いしますね。ソラ君。

うんっ！

とうとうやりとりをやっていたりする。

7話(前書き)

改稿終わり。

ソラの一日の始まりですね。

2011/10/2 10:26 改稿

7話

この前の試合の次の日

「あらっ？ソラ君こんなところでどうしたの？」

マリアがソラを見つけたのは三千院家の敷地内であった。

「んー？ハヤテに会いに来たのに、この可笑しなおじさんが「クラウスさん！！」が何か言ってきたから申しちゃった。テヘッ。」

「えっと、クラウスさんのことは、後で聞きますがアテネさんには言ってきたんですか？」

「アーたんには、基本、帰ってからどこに行ってきたか言ってるよー。学校の授業にさえ出ていれば後はどこに行ってもいいんだー。」

朝には、戻らないとすごく怒るんだけどねー。と、付け加え

「ハヤテっているー？」

「ええ、今はまだ、寝ていると思いますよ。ところでクラウスさんに何を言われたんですか？」

「えっとね1時間前のことなんだけど」

そっぴい話し始めた。

1時間前、三千院家問前

「ハヤテにあいに来ただけ、どこから入ればいいのかわからないなー？まあいいかこのくらいの柵なら飛び越えられるし。」

ソラは柵を飛び越え敷地内に入った。がそこにちょうど、クラウドがいた。

「何奴！ここが三千院家の敷地内と分かってここに来たのか？」

「ハヤテの弟なんだけどハヤテに会いに来たら、門が締まってたから飛び越えて入ってきた。そんなこと不可能に決まっているだろ。それに、綾崎に弟がいるなど、聞いたこともない！！つまりお前は不審者だ！！三千院家の執事長として何処の誰かわからない人間を通すわけにはいかん！！」

それを聞き、そういえばアーたん知っている場所で知らない人にあつたときは必ず自己紹介しなさい。もしかして、勘違いで人を傷つけてしまつかもしれないから。
そういうようなことを聞いたような？と思い、

「んー？あつ！そうだ、初めまして、綾崎ハヤテの弟で綾崎ソラって言いまーす。よろしく？」

「あ、これは丁寧に、私は、この三千院家別宅の執事長をしているクラウドというものです。って違う！！綾崎に聞いてない意外にお嬢様に怪我をさせる危険や可能性がある人物を私が行かせるものか！！成敗してやる！！ここを通りたければ私を倒してからだ！！」

「うーんどうしても通してくれないの？」

「くどいー!」

クラウスは殴りかかってきた。

「えいつ！これでもまだ戦う？ってあれ適当に手をだしたのに、クラウスさん倒れてる？」

適当に手をだしたと思っっているが、実は、相手が殴りかかってきたスピードを利用して顎に一撃を入れていた。簡単にいえば鉄柱に自動車で自分からぶつかっていくものと思っってくればいい。ちなみにクラウスとソラは読んだが、完璧に間違えていることに気づいていない。

「って言うことがあったんだよー。僕この前も来たけど不審者扱いされるとはおっもわなかったー。」

「この前？ああ、そう言えば、クラウスさんは本宅に用事で出かけていました。知らなくて当然かもしれないね。今回は私達も悪いので何も言えませんね。次からは、チャイムを押してくれば、誰かが、迎えに行きますよ。」

「そうなの？で、クラウスさんは、どうするの？」

「まあ、何時ものことなのでそのままにしておいても大丈夫ですよ。それより怪我はしませんでしたか？お客様に怪我をさせたとあっては、問題になりますか「大丈夫ー。掠り傷1つしてないよー。」そうですね、でもその手の怪我は違うのですか？血が出て「これはヒナちゃんを守った？時についた傷ー。でもまた切れてるかもー？」いえそれは、傷口が開いたんですよ。っと話しているうちに着きま

したね。少し待っていてください。今、包帯や薬を持ってきますから。」

2分ぐらい時間がたち

「済みません。探すのに手間取ってしまった。それでは、失礼しますね。」

マリアはソラの手を取り包帯を外し新しい物に取り替えていた。

（そういえば、さっきヒナギクさんを守ったって言うてましたがどういうことなのでしょう？聞いてみるのもいいかもしれませぬね。）

「先ほど、ヒナギクさんを守った時の怪我と言っていました。何かあったんですか？」

「んー？ヒナちゃんが誘拐？連れ去り？にあったときに車を思いっきり殴った時に怪我したー。」

（この子は人を助けるためなら、自分が怪我しても構わないと思っているんでしょうか？にしてもヒナギクさんも女の子ということなんでしょうね。でも今、ヒナギクさんがハヤテ君の部屋で寝ているので連れていけないほうがいいですね。）

「自分の体は大切にしないといけませんよ。」

「うんっ！！マリアさん？も体には気を付けたほうがいいよ？まだ若いんだからー。」

「えっ？私の名前は、覚えてくれてたんですね。ところで、あの私

は何歳位に見えますか？」（この子は人の感情に敏感なんですね。ハヤテ君とは本当に血が繋がっているんでしょうか？）

「えっと。僕と同じくらい！！白皇学園なら飛び級制度があるから、僕より歳が若くても卒業できるしねー。」

そのことを聞いたマリアは手を握り

「ありがとうございます！！何時もいつも私が、皆さんより少ししか歳が変わらないのになりにかなり年上に見られ、私がショックを受けな
いとでも思って「本当は何歳なのー？」済みません。少しテンションが上がってしまって、私は十七歳ですよ。」

「そうなんだー。僕は十五歳。でもすごいなー。その歳でもう卒業してるなんて。」

「そうですか？もう1人似た人がいますよ？っとこれで大丈夫です。」

「ありがとー。そういえばハヤテって起きてる？」

「もうそろそろ起きてると思いますよ？でも、昨日、試験の勉強でヒナギクさんに教えてもらっていて2人で寝ているのでいかな方がいいですよ。」

「ヒナちゃんってハヤテと付き合ってるの？」

「違いますよ。私はナギのお世話をしないといけないので代わりにヒナギクさんに教えてくれないかという話をして試験までの間泊まりで教えるそうですよ。それがどうかしましたか？」

「いやー。部屋で一緒に勉強って恋人しか「おはようございます。マリアさん。ってソラ!!!どうかしたの?」ハヤテに会いにきたー。」

「ヒナギクさんは、まだ寝ているんですか?」

「いえ、もうすぐ来るとお「おはようござって、ソラ君!!えっ何で?こっ、これは違うの!ハヤテ君の勉強を見ていただけで「ヒナギクさん、朝ごはんは食べますか?ソラ君はハヤテ君に会いに来たそうですよ。」」

マリアはヒナギクがソラのことを好きなのだとは直感で思い助けを出した。

「そっなの?ソラ君。」

「そっだよー。ヒナちゃん、おはよー。昨日の勉強は捗ったー?」

「えっ、そっよ、そこそ私も教えながら見てたし。それに、ハヤテ君とは何もなかったわよ。」

「?????」

ソラはなんのことかわかっていないというふうに首をかしげた。

(なんでソラ君がこんな時にいるのよーノノマリアさんに頼まれてハヤテ君に教えに来たのにまさか、ソラ君が来るとは思っていなかったわよーノノノ)

「ハヤテ君、朝ごはんを作るのを手伝ってください。ヒナギクさん、ソラ君、用意ができるまで、話していたらどうですか?」（案外、ハヤテ君と同じで恋愛感情にはかなり鈍感みたいですね。）

「マ、マリアさん／＼／」

マリアはヒナギクに近づき小声で

「ヒナギクさんがソラ君の事を好きなことは、今の行動を見て分かりました。一応、勉強を見てもらうために私が呼んだということは話してありますから。この際、一気に距離を縮めてみてはどうですか?」

と言った。

「そうですね。ソラ君、少し運動の相手になってくれる?」

「いいよー。」

「それでは、20分ぐらいかかると思いますからゆっくりしていて下さい。ハヤテ君はナギをお越してきてくれませんか?」

「わかりました。それではソラ、ヒナギクさんまた朝ごはんのときに。」

ハヤテはマリアと一緒に部屋を出ていった。

「ヒナちゃん、今から何の運動するのー?ランニング?剣道?」

「そうね、じゃあ10分ランニングしてその後、少し話しましょう」

か。」

「わかったー。」

ランニング後

「ソラ君、息上がってないけどいつも運動してるの？」

「してないよー？」

「いや、そこで首をかしげられても、わからないのだけど。」

「一週間に一度アーたん五時間ぐらい休憩なしで、色々な運動はしてるけど？」

「休憩なしで五時間！？確かにそれだけやれば体力もつくわね。アテネさんがどうしてソラ君の一撃を止めれたかがよくわかったわ。」

「でも、アーたんの疲れのピークが五時間だからねー。」

あははははー。と笑うソラを見て

（アテネさんの方が先に疲れるの！？じゃああの時、竹刀を止められたのもしかしてギリギリだったってこと？でも人には集中の限界があるはず。）

「そーいえば、ヒナちゃんってハヤテのこと好きなのー？」

「違うわよ！！ハヤテ君のことなんか好きじゃないわ。」

「そっかー、ごめんね。変なこと聞いて。」

「ソラ君は…ソラ君は好きな人がいるの？」

(どうしよう…つい聞きちゃった…誰か他の人が好きだって言ったらどうしよう…でも、……)

ヒナギクは聞いてしまったから、後悔していた。

「んー？一番はアーたんか「それは好きってこと？」うん！…だってこんなに世界が綺麗ってことを教えてくれたからっ！！他には、ミーちゃんやゆうちゃんもそれにヒナちゃんもだよ。」

「えっ！？それはどうして？」

「だってこんなに自分のことを心配してくれる人は、いないよー。たいていの人は「彼奴ならそれくらい出来て当然。」とか「彼奴は心配する必要がないから楽。」とか言われ続けたんだよ。アーたんたちだって心配はしても心の底では多分大丈夫って思ってるのを知ってるし。この前、初めて怪我をして心の底から心配してくれたんだって思ってたから。」

だから大切な人の一人だよー。といい私は何も言えなくなった。

「あのさ「朝ごはんができました…失礼しました。」ってどこ行くのハヤテ君？」

「ヒナギクさん怒ってます？」

「いいえ怒ってないわよ！！」

あからさまに怒ってる。なんでだ？ハヤテはかなり鈍感なのである。

(何で大切な話をしようとしたときに入ってくるのよ！！)

本人は気付いていなかったがかなり怒っていた。

「ヒナちゃん、朝ごはん食べよー？」

「ええそうね。時間もつてもう7時！？気付かなかった。」(もう三十分もたっていたなんて、これはハヤテ君は悪くないわね。タイミングが悪いことは確かだけど。)

「では、こちらへ。食堂に準備がしてあります。」

ハヤテは食堂に案内したあとに

「先ほど、お嬢様が起きてこなかったので、もう一度、お越してきますので、お先に食事をしていてください。」

ナギを起こすために部屋を出ていった。中にはマリアさんがいて

「おはようございます。和食、洋食、中華、一通り作っております。バイキング形式になっているので好きなものをおたべください。」

「わーい。いつただきまーす。」

ソラは食べ物に向かって駆け出した。

「あらあら、ソラ君、おかわりはまだたくさんあるのですからそん

「なにそいで食べなくてもいいんですよ？」

「だってこんなにたくさん食べモノがあるんだからひとつ一個は食べないと作った人に失礼じゃん。だからたくさん食べるー。」

「ふふっ。ナギもこんなに元気ならい「誰が元気じゃないって？マリア。」あら、ナギ、どうしたの今日は、やけに早いじゃない「そこにいる奴がうるさくて起きてしまったのだ！」「そうなんですか？それとソラ君は、物じゃないんですから指を指すなんて失礼ですよ。」

「ふんっ！」

といいナギはご飯がある方に歩いていった。

「拗ねちゃいまし「拗ねてなどいない！」「そういえば……」

ヒナギクの方に近づいて「ソラ君とは話せましたか？」

「ええ。と言つても少し大事な話をしようとしたときに執事さんに邪魔されましたけど。」

（はあ…ハヤテ君は何をやっているんですか。一度話しておいたほうがいいですかね。）

「ところでヒナギクさんはご飯を食べないんですか？ソラ君は凄い勢いで食べてま「マリアさん。」「どうかしましたかソラ君？」

「これ、火が通ってないよー？味も水っぱいし。」

「えっ？少しいいですか？」

一口、口に入れて

「申し訳ありません！今直ぐ作りなおし「うーん作り直すのはもつたいないから、ちょっと厨房借りていいー？」いいですがどうするんですか？」

「こっから違う料理にするー。卵ってあるー？」

「はい。こちらにありますよ。」

「じゃあ二つ頂戴。」

全員、ソラが何を作るのか気になったため食堂から、厨房に来てい

る。
ナギとハヤテは（珍しいこともあるんだな。（ですね）マリア（さん）が失敗するなんて）と思っていた。

ちなみに料理はもも肉の醤油汁である。

「具だけとって、スープには卵をといたものを入れる。で、後は鶏がらを適量入れてと一つ目出来たよー。飲んでみてー？」

ソラに渡されたマリアは一口飲んで吃驚していた。（何でこんな短時間でここまで料理を変えることができるんですか？手際が良すぎます。ハヤテ君もそうですがこの兄弟はかなり凄い生活を送ってき
たみたいですね。）

「美味しいですね。私が作るよりはるかに。そちらの具だけとった

ものはどうするんですか？」

もも肉、椎茸、人参、ネギ、があるがもも肉だけ分け揚げ始め、その後、唐揚げを他の野菜と卵で同じ唐揚げ丼を作った。
ソラのあまりの手際の良さにマリアとヒナギクは

(いいお嫁さんになるなー。はっ私は何を／＼／)

二人して同じ事を思っていた。

「ソラ君、済みません。お客様に失敗した料理を出してしまつて。」

「んー？だつて僕が来たから慌てて作つたんでしょ？それに人間は一人じゃ生きていけないよー。失敗することもあるし、もう少しわがまま言つても罰は当たらないと思うけどねー。」

そして時間は過ぎソラは今、アテネの部屋の中において

「アーたん、時間だ「んんっもう時間？」そつだよー。はいこれ、いつもの紅茶。」

「有難う。目が覚めたわ、じゃあ今日も1日頑張りましょう。」

????????????????

「もう少して準備ができるわね？」

「ああ勿論だよ。ソラ君にはもう少しいい夢を見てもらわないと。この紙を見せたときどれだけ落ち込むか今からでもたのしみだよ。」

「そうねー。もう少しで地獄を見せることができるんだから。」

「この計画は誰にもバレてないでしょうね。誰かに話していたら貴方たち命はないと思いなさい。」

「こんな面白いこと誰かに話すわけないじゃないかー。」

「そうよー。話しておじゃんなんて私は嫌よ。」

「貴方たちはソラ、そして私は、天王州、憎しみは怒りに絶対に後悔させてやる!」

「それでは次の会合まで……」

ソラたちが知らないうちに着実と危険が迫っていた。

7話（後書き）

急展開にして終わらせるか、まだこの駄文を続けるかをもの凄く迷っています。

ちなみに出てきた料理は絶対に試さないでください。
料理で実験は極めて危険な行為です。

8話(前書き)

ハヤテがマリアとナギにソラのことを話します。

2011/9/25	18:44	改稿
2011/9/24	23:47	改稿

8話

「ナギ、そろそろ、帝お爺様のところに行きませんか？今年はまだ、行ってませんし。」

原作と違い、年末ではありません。

「今年はパーティー以外ではあっていませんし。」

「……………」

「いや、そこまで嫌な顔をしなくてもいいかと、それにハヤテ君のことをまだ、紹介していませんし。」

「あの、帝お爺様というのは？」

「そういえばハヤテ君は、知りませんでしたね。三千院の当主で、ナギのお爺様です。っとそういえば、まだ紫子様にもあっていますねしね。」

「何でマリアが、母様が生きていることを知っているのだ？」

「お爺様から聞いていました。」

マリアはしれっとした態度で言った。

「何故、私に知らせないのだ！！」

「驚かせたいから黙っていてくれと言われたので、それにこの前、

連絡があり、アテネさんから言ったそうなので聞いてきたら答えてもいい。とのことでした。」

「紫子様は、お嬢様のお母様ですよね？」

「ああ、そうだ。不知の病だったのだが、ハヤテ、お前の弟のソラが治したそうだ。」

「ところで、ソラ君ってハヤテ君と本当に血がつがつしているんですか？この前、改めて話してみたときは、似たようなところは少しありましたが全然違う感じがしたのですが……」

「そうだな、前から気になっていたのだがそこらへんはどうなんだ？」

ナギは帝に会いたくないのか話をそらしたがマリアとハヤテは

（話をそらしましたそらしましたね。）そう思っていたが

ハヤテは仕方ないと思ひ話し始めた。

「そうですね、昔から、ソラはちょっと変わっていましたね。」

「変わっていたというと？」

「保育園のとき性格は真逆でし「真逆？」ええ、物静かで、何もしやべらなかつたです。たぶん、大抵のことは何もしなくてもできていたんで、世界に冷めていたんだと思います。仲間はすれにされることも多かつたんですよ。小学校の時に一回事件を起こしてから変わりましたが。」

「事件？その事件というのはなんなんですか？」

「ええ、これは僕は学年が違ったため、知ったのは小学校を卒業してからだったので、自分の親が給食費を盗んだんです。」

「なんだって（ですって）！！！」

「ソラ君のクラスの物をですか？」

「そうです、ソラは、自分の親が盗んでいたことを知っていたそうです。そしてああいう親ですから必然的に犯人にされ、虐めの対象になってしまったんです。それを、その当時の先生は、黙認して手を出さなかったそうです。そして、虐めに耐えれなかったソラは、その教師をボコボコにしました。その先生は、確か、濱田先生というのですが、脊椎を完璧にやられて今だ杖をつかないと歩けないらしいです。そして、その事件後は、今の性格に急に変わったので周りも吃驚していました。でも、今までと違い、親しみやすくなったのかそれまでと違い友達も多くできていました。これがソラの僕が知っている過去です。それからは知ってのとおりです。」

「そんなことが彼奴にはあったのか。」

「そして10歳のとき、親に売られた。っということですか？」

「あ、あとソラが大事にしている人を傷つけたり、泣かしたりすると恐ろしいことになるんで気を付けてください。今のところ、アテナさんと紫子様、ミダスさん？ヒナギクさん位ですけど……」

「お、恐ろしいこととは何が起きるんだ？」

「えーっと人によってバラバラですが東宮君は一週間前、ヒナギクさんが大事な話をソラに話している途中で、割り込んで入って話を拗らせ、しかも運の悪いことに、僕たちの親のことを聞いたそうです。でも、ヒナギクさんは聞いて知っていますよね？ 答えられないことをいいことに「どんな親か見てみたい。」と口走ったそうです。その後、ヒナギクさんは何も言わない…違いますね。何も言えないソラのことを心配して泣きそうになっていたそれを見たソラはヒナギクさんを連れて走っていったそうなのですが、その後、何がどうなったのか東宮君は行方不明になっていて、野々原さんに何処にいるか知らないかを聞かれましたから。」

P i P i P i P i

「すみませんお嬢様少し失礼します。」

「誰だ？ こんな時に。」

「さあ、というかハヤテ君の携帯電話の番号を知っている人がナギ意外にいることに吃驚です。」

「お嬢様、東宮君、昨日カンボジアで見つかったそうです。」

「なんだその伊澄のような迷子は？」

「野々原さんに聞いたところ帰るときに、川に落ちて気を失い、気付いたら船に乗っていて着いた場所がロシアで、運の悪いことに熊に出会い逃げた先で日本行きの船に乗って日本に帰れると思っていたらそれがカンボジア行きの船で、昨日、カンボジアの日本大使館に行き保護されやっとなんて戻ってきたらしいです。会話の後ろで東宮君

の叫び声が聞こえたので聞いてみたところ」

「坊っちゃんから話を聞き、ヒナギクさんとソラ君には、悪いことをしました。謝らせたいたのですが、ヒナギクさんは見つかって、ソラ君が、何処にいるかわからないので知りませんか？」

「と云っていたので理事長の私室か理事長室にいるとは思いますが、私室は基本誰も入れなくなっているので理事長室に行ってみてはどうですか？つと云う話をしました。ちなみに他には……」

「いや！もういい聞いたら戻れなくなる可能性がある。」

「まあ、そうですねえ。」

「……………」

ハヤテが遠い目をしているのを見たナギと、マリアは何も言えなかったが、

（ソラ（君）の大切な人に泣かせるようなことといったけ（いいましたかね）？）ということを考えていたが

「そういえばソラ君は、ハヤテ君のことは何も思っていないんですか？先程のいいようだと何も思われてないんですか？」

「ソラは家族というものを嫌っていますからね。僕が入っていないのは仕方がないと思います。ですが僕のこととは嫌いというわけではなくどうせいつも不幸にあっているから本当に悲しんでいるかわからないから多分大丈夫だろう？とも思っていますよ。」

「そ、そうですね。」

（まあ、確かにいつも不幸な目にあっていますからね、ハヤテ君は。）

「でも、結婚すると家族になりますよね？そこらへんはどう考えているんですか？」

マリアは疑問を口に出した。

「マリアさん同じ高校一年でもまだ、15歳ですよ。考えていると思いますか？」

「そういえば、そうですね。でも、誰かさんたちと違って私の年齢をだいたい当てましたけどね？」

ハヤテは、

（しまった。マリアさんには年齢の話は禁句だった。）とおもいつつ

「でも、考えるときが来ると思うので、その時、相談にすればのってやるぐらいしか対策はたてようがありませんね。いくら親が嫌いでも他人が両親とすごしているのを見て何も感じないはずのソラではないでしょうし。もしお嬢様やマリアさんに相談してきた場合は、真剣に考えてあげてください。お願いします。」

ハヤテは頭を下げた、まさかナギとマリアは頭を下げるとは思っていなかったのか

「えっ、ええ、私は大丈夫ですよ」

「う、うむっ！真剣に考えてやる。」

「それにしても、ソラ君が唯一、苦手なものが”家族”ですか。確かにあの過去を知ってしまうと、どうかしたいとは思いますが、今の現状、どうしようもないのも事実ですね。それに、ソラ君はあの仮面の下にどんな顔を隠しているんでしょうね？」

「仮面？」

なんのことかわからないハヤテとナギはマリアの言葉に首をかしげた。

「そうですね、仮面です。いつも笑顔の人なんか普通いませんですよ。簡単に言えばあの笑顔も一つのポーカーフフェイスです。」

「成程、笑顔で本当の表情を隠していれば、何を思っているかわからなくなるな。そういうえば、ハヤテ、お前はどう思ってるんだ？」

急に自分にふられたハヤテは

「えっ僕ですか？」

「そうだ、ハヤテ自身は両親のことをどう思っているんだ？」

「そうですね。前までは、もう一度、僕の前に現れたら、真面目に生きる約束させて一緒に生活をしたいな。とは思っていましたが、そ「ソラのことか？」ええ、そうですね、ソラを絶望の淵に追いつた人のことは信用ができませんね。一度なら許せた。でも二度目はもうないですからね。」

ハヤテは自分が怒っていることに気づいていないみたいだったが

「マリア、ハヤテがいつもより怖い。」

「それは、仕方がないんじゃないんですか？にしても普段怒らない人が、怒ると怖いと聞きますが、ここまで怖いとは思いませんでしたね。」

二人が話していることにわれに帰り

「済みません。感情が高ぶってしまったみたいです。」

「ハヤテは、普段怒らないから余計に……ん？」

「どうしたんですかお嬢様？」

「いや、ハヤテ、ソラが怒っているところって見たことあるか？」

そう聞いたハヤテは

「そういえば、僕自身が怒ることは時々あってもソラが怒るところは見たことはありませんね。」

「この前のヒナギクとの試合は、あれはなんだったんだ？」

「ヒナギクさん？ああ！あれは本気を出しただけで怒っている状態ではありませんよ。本人曰く、「集中力を高めて、相手のみの行動を見て自分と相手だけの空間を自分の頭の中をつくるだけ。認めた人にしか出さないんだけどね。」らしいですよ。」

それを聞いたナギたちは

(あれ?じゃあ(では、)もしかして一番起こると恐いのはソラ君)なの?)

三人とも想像したとたん寒気なのがガタガタ震え出しその振るえを追い出すように

「ハヤテ!マリア!絶対にソラを怒らせるなよ!!!」

「ええ!!勿論です!!ナギ!!ハヤテ君も!!」

「そうですよ!お嬢様!マリアさん!」

「あれ…「どうしたんですか、ハヤテ君?」ソラの嫌いな家族をどうかしようとしている僕たちって一番ソラが怒りやすいことなのでは……」

「忘れましょう!!今直ぐ!!この頭の中から!!」

「永遠に封印決定だな!!にしてもよく気づいたなハヤテ!!」

なんとか三千院別宅が火の海になることを事前に防げた三人は

「ハヤテ、マリアもうこの話は終わりだ。これ以上、何か考えていたらもつとヤバイ何かに気づいてしまいそうで怖い。」

「そうですね。そのほうがいいですね。」

「それじゃあナギ、私は、晩ご飯の準備をしてきますね。」

全部、本当に忘れることにしたそうだ。

その頃、ソラ

「ズズー！。アーたん、辛いよ。」

「まあ、三十九度の熱を出していればきついでしょうね。」

熱を出して寝込んでいた。

「ご飯を作ったから食べて寝なさい。明日には収まってると思うから。」

「わかったー。」

「にしてもソラが、風邪を引くなんて珍しいこともあるわね。」

アテネはそう言い部屋を出ていこうと扉に手をかけたとき。

「アーたん。」

ソラに呼ばれたので

「どうしたの？何かして欲しいことでもある？」

「えっと、そばにいて欲しい。」

そういえば風邪をひいたときは1人は寂しいって聞くわね。

「寝るまでなら、ここにいてあげる。ソラ、貴方は一人じゃない私も、学園の皆もいるわ。」

「うん。ありがとう」

十分後ソラが寝たのを確認しアテネは今度こそ部屋を出て理事長室に入ってしまった。

そして今日は開けていく。

おまけ

「ソラ君が風邪ひいたんだったら私も看病するー！ー！だから行かせてお爺ちゃん！ー！」

紫子は暴走していた。

「お、落ち着け、紫子、たった今、寝たっという連絡が来たんだ、今言ったら起こしてしまう、今日はおとなしく、いーいーいーやーいーいーいー！ー！今すぐいくーいーいー！ー！」

帝は、

（紫子の教育方針は、一体どこで間違えたんだ？と思いきり仕方ない最

後の切り札を使うか。」

「今、行ってソラを起こしてしまったら、嫌われる可能性が高いことを分かっているのか？」

「え、何で？」

「はあ、今寝たばかりだぞ、そこを紫子、お前が行って起こしてみろ、普通煩くておきた場合は、機嫌がかなり悪くなる。つまり、嫌われる可能性が高いんだ。」

「じゃあどうしたらいいの？」

「アテネに言っただけでまた今度、テレビ電話で連絡だけでもしてもらおう。その時に大丈夫だったかを聞けば心配してくれたと思って好感度が上がる可能性が「じゃあそうする」そうか、分かってくれたか。」

ということがあつたりする。

9 話（前書き）

前回、熱を出したソラの一日です。

ミダスの過去も少し出てきます。

2011/10/1 14:11 改稿

9話

「アーたん、ちょっと出かけてくるねー。」

「今日はどこに行くの?」

ソラの声に、アテネは仕事をしていたので、振り向かずに聞いた。

「んー、適当に散歩してくるー。」

「私は、仕事が少しあるから一緒にいけないけど「大丈夫ー。今日の朝ごはんまでには帰ってくるからー」そう、それならいいわ。気を付けていきなさい。」

ソラが、部屋を出ていったことを、音と気配で確認しパソコンのメールを見た。そのメールは帝からで題名は「ソラ誘拐計画」と書かれていた。実は、実行犯までは、絞ることができていないようではあったが、誰かがソラを誘拐しようと計画しているのは、帝とアテネには筒抜け状態であった。

「誰がソラを誘拐しようとも絶対に助けてみせる。これ以上、ソラは絶対に傷つかなくていい。ってあら?さつき、ソラ朝までには戻るっていったけど今、もうすぐ、昼なんだけど…」

そう、ソラは朝ごはんまでに戻るといった。まず無理な話である。

「もしかして、熱か風邪でも引いて普通の判断が出来てない?」

アテネは予想を立てたが気付くのが遅すぎた。

「ヒナギクさんに連絡して、ソラを探さないと!!」

携帯を取り出しヒナギクに電話をした。

P i P i P i P i

「はい。ヒナギクですが、どうかしました？アテネさん。」

「実は、ソラが熱を出しているのに外に出ていった可能性があるのだけど一緒に探してくれないかしら？」

「分かりました。では、私は、街の方を探すので、アテネさんは学園の方を探してください。一時間後ぐらいに一度、落ち合いますよ。」

「分かりました。」

それでは、といいアテネは電話を切り白皇学園の敷地内を探し出した。内心では

（帝からのメールに気を取られて気付かなかった。いつもなら気づくのに…ダメね、反省はソラを見つけてからでも出来る。今は探すことを優先しないと）思っていた。

その頃、ソラは

「あれー？何でミーちゃんがいるのー？」

「珍しいね、ソラがここに来るなんて…っというかここは王族の庭ロイヤル城ガーデンだよ。また、うっかりでここに来たみたいだねえ。ま、私としては、そんなに外に出れないから迷い込んで来れたほうが嬉しんだけどね。」

ミダスはそう答えた。

「おおー、また、来ちゃった？」「いやいや、そこで疑問系にするのは何故だい？」「んー？」

「ちよつと失礼するよ。」

そついいミダスはソラの額に手を当てた

「凄い熱じゃないか！！どうしよう！！まずは寢室に連れてかないと。ってここ部屋はあるけどほとんどソラに壊されたから機能してないじゃん！！」

「んー？頭がポカポカするのは熱のせいー？」

「そうだね。治るまで安静にするのが一番だよ。」

「でも、アーたんに今日の朝ごはんまでには戻るっていったから戻らない」「いやいや、相変わらずだね。今もう昼越してるよ？」「とー。」

（こりゃアテネたちは気付かなかったな。参ったなー料理はできるけどソラは食べれるかな？まあいい、作ってから決めればいいことだからな。）

「お粥を作ってくるからそこで待っていてくれるか？そうだな、私が食べさせてやるぞ。」

「分かったー。待ってるー。」

それを聞きミダスは調理室に向かった。料理を作っているとき思っていたことは過去のことであった。それは、ソラがミダスをそしてアテネを救った話。

2年前私は、城の一部を壊され王玉を持っていたアテネを操り、ソラを殺そうとしたのである。アテネがソラを見つけたのを知って、一年過ぎた頃、ソラが寝ている時に、私は彼の首に剣を落としたが、それは、アテネの思いが強く首を外れ頭の上に落ち、その音を聞き起きてしまったソラは相手を見て驚きながら。

「なんでこんなことするのアーたん!!」

「お前が憎いからだ!!」

「アーたん？違うな。誰かに取り付かれてる？」

「一度見ただけでわかるとは、神がお前の中にいるってのは本当なんだな。それにその目で見るな!!」

ミダスはソラを殺すことに集中していたがアテネが意識を取り戻しかけた。

「ソラ！！逃げて！！今の貴方がかなう相手じゃないのは…小娘は分かっているな。だが邪魔をするな！！」

アテネが表面意識を取り戻した瞬間またミダスに飲み込まれた。力関係上、ミダスの方が上なのは分かりきっていたアテネは、悔しい思いで見ているしかなかった。

「逃げない！！アテネも貴方も絶対に救う！！何でこんなことをするんだ！！」

「貴様に分かるか！！この城は、私と一心同体、つまり、この城が壊れれば壊れるほど私は死に近くなるんだ！！なのに貴様は、数年前城を壊した！！どれだけ苦痛だったかわかるか！！分かっていてもどうしようもない！！」

「そんな……」

その言葉を聞きソラは戦意喪失したように自分の持っていた武器を下に下げた。それを好機と思ったのかミダスは剣を降りおろそうとしたがおろせなかった。何故かというと、赤い目のソラが自分を見ていたから、見られた瞬間、体が金縛りでも起こったみたいに動かせなくなった。

「何故、貴様も邪魔建てする！！貴様ならわかるだろ！！私の気持ちがあ！！そして想いが！！何故そいつの見方をする！！」

「何故？だと。ミダスよ。お前の心はいつの間にも曇ったのだ？それ

に私のことがわからないのか？」

「貴様のことなど知らん！！私の名を呼ぶな！！」

そうか…と続けソラの中に入っている神は

「この少年が考えている理論を適合すれば、ミダス、お主は助かる。と言ってもか？そしてそれは私にしかできない。これは、掛けた。ミダス、お主がソラのことをどれだけ信じれるかにもよってくる。」

「その坊主を信じろだと！！馬鹿な！！ああ、少なくとも今までより過ごしやすくなることは「そんな話、あるとも思っているのか貴様は！！」

「さつきから貴様、貴様、五月蠅い！！お主ごとき、ソラが気をかけなければ消し去ることも可能なんだ！！これ以上私を怒らせるなよ。」

その言葉を聞いたとたん頭の中がクリアになりその神が誰かが分かった。そしてミダスは

「もしかして貴方は、創成神！？」

「ふむ、やっとわかったのか。ミダス、貴様がやった行為は、絶対に許される行為ではないぞ！！」

「……………」

「そしてすまぬことを「何故貴方が謝るのですか？」この城を壊したのは私なんだ。」

創成神が壊したと聞き、信じれないとばかりに

「何故です？」

「ソラが、その少女を、アテネのことを、助けたいと願ったんだ。そしてその時、私はいつの間にかソラの中に入り込んでいた。普通の人間に神が入ることは不可能なのだがソラは違った。何も起こらなかった。少女を救うためにした行為だ。攻めるなら私を攻めろ。」

そういう創成神を見てソラがどれだけ愛されているかを知った。

「そして、ミダスお主にも新しい体を構築する理論を、ソラは考えたんだ。だが、お主には、三つのことをやってもらおう。」

（やはり、殺そうとしたのにそのまま何もせずというわけにわいかないか。）

ミダスはどんな思い処罰も受けるつもりであったが創成神から伝えられた言葉は

「1つ、ソラのことを守ることを命ず。これは数年後、私が表に出れなくなることが起こるからである。2つ、ソラに謝ること。本人は城を、壊してしまったことを、まだ、悔やんでいる。壊したのは私だが、その間の記憶はないんだ。つまり自分が壊したものだと思っっている。3つ、ソラの話し相手になって欲しい。アテネはいるが、それでも寂しい時はある。そういう時に話し相手になって欲しい。その三つが守れば叶えてやろう。」

「そんな内容納得できません!!」

「何故d 私は殺そうとしたんですよ！！それなのにそんな甘い処
「何を言っておる。ソラがそんなことを望むとでも思っておるのか
？ソラは心優しい、重い処罰をあたえれば悲しむ、私はそんなソラ
を見たくない。」

創成神が、そういったのを聞き

「分かりました。その三つの他に一つ、私はソラを殺そうとしたの
に許してくれる、しかも新しい体までくれるこんな幸運なことは
ないです。そしてその心に惹かれました。惚れました。ですので「
ミダス…言いたいことは分かった。」そうですか。」

そして一日後、王族の庭城ロイヤル・ガーデンの呪縛から逃れたアテネ、ミダスがいた。

「アテネさん、すみませんでした。」

「いいわ。私も知らなかったことですしね。お互い様ということだ、
そういえば、ミダスはソラのが好きになっただんでしょ？」

「ええ。理由は言わなくても分かっていると「ならこの王玉を持つ
てなさい。」だと？何故ですか？私は基本、皆さんのところに行く
つもりはありませんよ。」

「ええ、それは分かっているわ。でもソラを好きな人がわかるよう
にしておくのもいいかと思って。それに王玉に意味はもうないもの、
なら目印にするのもいいかと思ってね。」

アテネの提案にミダスはそれもそうねといい

「そういえば、私たち以外にもいるんでしょ？彼のことが好きな子」

「いるわ。そっちにも渡しておくわよ。」

と言うことがあったのだ。

「あれからもう3年かー。そんなに会えるときはなかったけどたまに、アテネと一緒に会いに来てくれるからつまらなくはないのだけど……アテネに頼んで外で生活できるようにしてもらおうかしら。よし出来た。」

ミダスは、お粥をつくりソラのところを持っていった。その時、アテネに連絡をしないといけないなー。と思っていたがソラのことを優先させていた為、直ぐに忘れてしまった。

「はい、ソラお粥できたよ。フーフーしてあげるから食べなさい。」

「うー分かったー。」

10分後、食べ終わったソラは眠たいのか寝てしまった。起こすのも悪いなと思いきミダスは、ソラを背負って、王族の庭城からでてアテネのいるであろう、白皇学園に連れていった。

ソラを背負って歩いていると後ろから

「ソラ君を離さない！！」っといって竹刀で襲いかかってきた人がいた。

ちなみにアテネがヒナギクに連絡を取って約1時間30分経過していた。

そして、ヒナギク達はというと

「アテネさん、ソラ君のことを、街の方では見かけたという情報じたい無いでした。白皇学園の方はどうですか？」

「広すぎてまだ、半分くらいしか探せてないのだけど、まだ見つかってないわ。どこに行ったのかしら？」

その言葉を聞いたヒナギクは、

「私も、手伝うので二手に分かれて学園内を探しましょう。」

「ええ、そうねでは私は、大学の方を探すのでヒナギクさんは、小学校の方をお願いしますか？」

「分かりました。外にはいなかったなので多分学園内にいるとは思っているので、見つけたら連絡をください。」

「ヒナギクさんもソラを見つけたら、連絡をくださいね。誰かにさらわれそうになっていたら武力行使を許可します。」

責任は私が持ちますのでという言葉のアテネがいいひとまずは、別れて探し出した。

「えっと、小学校なら、ソラ君は目立つからってソラ君？」

ヒナギクは、髪の毛が金髪で着物を来ている女性がソラを背負っているのを見つけ、アテネに連絡し、来てもらうようにお願いした。

(もしかして、アテネさんが言ってたように本当に誘拐!?)

と思い、その女性に竹刀で襲いかかった。

「ソラ君を、離しなさい!!」

ヒナギクは隙を見て攻撃したので絶対に当たると思っていたが、その予想は、呆気なく崩れ落ちた。なんと片手で、受け止められたのだ。

白皇学園の大学と小学校は隣に面しているのでアテネはヒナギクに言われた場所にすぐ来ていて

「ミダス!! 貴方こんなところで何やってるのよ!?!」

「ソラが、家に来たから一応、お粥を食べさせて寝たからアテネに届けようと出てきて、そしたらその子に竹刀で襲いかかられたってわけ。」

ミダスは、アテネの質問に答えたがヒナギクは

「アテネさん、知り合いの方ですか？」

「そういうえば、会うのは初めてでしたね。彼女の名前はミダス、この前言ったとおり、元神様で、今は普通の人、ソラを好きな人の一人よ。胸のところに王玉があるでしょ。」

「アテネ、彼女は？」

「彼女は、ヒナギク、王玉を持っている一人よ。ソラが認めた相手でもあるから渡したわ。」

「そう、ヒナギク。今回は、相手が悪かったわね。私は、アテネと同じくらい強いわ。」

二人はアテネを介して自己紹介を終えた。

「アテネ、私もこっちに出れるように出来ないかしら？」

「少し、難しいわね。」

「そう。」

最初から答えが分かっていたのかそこまで落胆した気配はなかったが、ヒナギクの方を向き

「私は、そんなに会えないとは思っけど、ヒナギク、アテネも分かっているだろうけど、ソラのことを泣かせたら許さない。それだけ覚えていればいい。」

「じゃあ、ヒナギクさんのことは認めるの?」

「認めるのは、私ではなく、アテネあなたでしょ。それにアテネが認めたなら、ソラが怪我をしない限りは、私は何も言わない。紫はどうかは知らないけど。」

ミダスはそついい庭園に帰るために踵を返そうとした所に、ヒナギクは

「ミダスさん、あの「どうかした、ヒナギク?」また、あつて話が出来たらソラ君のこといろいろ教えてくれますか?」

それを聞いたミダスは最初ポカーンという表情を浮かべ笑い出した。

「アテネ、私は負けるつもりはないけど、こんなに面白い子なら確かに、この子ならソラの事を任せても大丈夫ね。」

「そうね。まさか私もここでそつという話をするとは思わなかったわ。」

二人はふふふと笑い合い。

「ヒナギク、また逢いましょう。っとアテネソラのこと任せていいわね?」

「ええ。それじゃあ有難うミダス。」

ヒナギクも挨拶をしようとしたとき、もうその場にミダスはいなかった。

「ヒナギクさん、有難う。ソラのために一生懸命探してくれて。」

「いえ、生徒会長として当たり前のことです。それにミダスさんにもあえましたし。」

「ミダスを見てどう思った？」

アテネはヒナギクがどう感じたのかが気になり聞いてみた

「綺麗な人ですね。それに凄く頼りになりそうです。」

「そう。そういえば、今日はどうする？泊まっていく？それとも帰る？」

「今日は、ソラ君の体調も悪いようですし、周りが騒がしいと治りが遅くなるといけないですから、帰ります。それに、ソラ君には元気な姿が一番似合っているのです。」

それではさよなら。といいヒナギクは帰っていった。

それを見てアテネは、ソラを理事長室に連れていきお粥を与え看病した。

翌日、熱も下がり、元気なソラを見てやっぱりソラが元気じゃないと調子が狂うとヒナギクとアテネは思っていたそうだ。

9 話（後書き）

熱を出した一日というかただの普通？の話になってしまいました。

また改稿するかもしれないのでその時は、すみませんがよろしくお
願います。

10話 番外編と言う名の紫子の過去（前書き）

実は、今まで全くもって考えていませんでしたが友達にアテネとミダスの過去があるのに、紫子の過去がないとおかしい。という訳で書け。

と言われてしまい自分自身かなり迷ってます。

相変わらず話がコロコロ変わりますがご了承ください。

2011/10/2 9:25 改稿

10話 番外編と言う名の紫子の過去

昨日、ソラが熱を出したことを聞き、ソラのもとに向かおうとしたが、帝に説得？されソラのもとに行くのを諦めた紫子は元気になったソラと電話で話していた。

「ソラ君。風邪、大丈夫だった？」

「うんーただの風邪みただったから、一日寝たら治ったー。そういえば、昨日、ミーちゃんにあったよー。」

「ミツちゃんは、元気にしてた？」

「うんー！ー！」

しばらく話をし、紫子は時間を見てみるともう9時になっていることに気付き

「もう、9時かー。まだ、話していたいけど、ソラ君は明日学校だからもう寝ないといけないねー。」

「むー…そうだねー。じゃあまた、電話するねー。」

そう言い二人は電話を切った。

「ふう、にしても学校かー。私は行ったことないからなー。ソラ君は何を思っただ勉強してるんだろなー。」

そう口にし、私も寝ようかなーと思って部屋に行くと、一枚の写真

が本からはみ出していることに気づいた、戻そうと手にとってからその写真を見たとき、目が離せなくなった。なぜなら、その写真にはソラに抱きついている紫子の写真だった。

「この写真、久しぶりに見るな。確か、ソラ君が来てすぐのことでも一番病気が悪化した時だよな。あの時は、ソラ君に悪いことをしたな。今の自分が信じれないし。」

何故こんなことを言うのかと思うと、それは、4年前のこと…

「紫子、大丈夫か？」

「うん、お爺ちゃん。私は、大丈夫だよ。今日は、ご飯も食べれたし。」

「そうか、紫子、お前の病気、治せる人間がいたらどうする？」

「痛くないなら直してもらおう。」

帝は紫子が後、一年持つかどうかを知っていたので、アテネから聞いたことのある少年のことを探していた。そしてその会話をした二日後に、ソラが見つかったという連絡を、三千院の本宅の執事長に聞いた。

「帝様、報告したいことがございます。」

「おう、何だ？」

この時期に、報告があることは過去一度もなかったので、帝は三千年で何かあったか？と思っていたが

「探していたソラ様が見つかり、今すぐに連れてくるんだ！！」

その言葉に執事長は

「帝様、私は、反対です。」

「なんだと！！もう一回言ってみろ！！」

「何度でも言いましょう。私は、ソラ様を連れてくるのは反対です！！」

何時もは冷静に仕事を行う執事長 早島実はやしまのみのが、声を荒らげ話すことに驚いた帝は、冷静になり

「どうしてだ？紫子を治せるのは、この世では、ソラしかおらん。」

「そこです。何故、帝様は、ソラ様のことをそこまで信用できるのですか？一度もあったことのない人間は何を考えているかが私にはわかりかねます。もし、ソラ様を呼んで帝様、そして紫子様に何かあった場合は、どうするのですか？確かに、彼は不幸な目に合っています。ですが、それと話は違い、帝様、紫子様に何かあってからでは遅いのです。」

「なら、どうしろと言っんだ。」

「私が、帝様になりすまし、彼にあいに行きます。帝様にも、付いてきてもらいますが、すみませんが、今回は私のお付きとして、彼

の行動を見て欲しいのです。何かあれば私が、怪我をするだけだと思います。」

「俺に、お前の下に付けといるのか？」

「ええ。今回はかりは、私たち執事、メイド全員が、反対をしておりますし、私も反対です。」

「そうか、いつ行く？俺はそれに合わせて用意しよう。」

「行くのは、今からでも構いません。お召し物も準備できております。ですが、彼を誘う時の条件が、必要と思いますが、どういたしましょう？」

「そうだな、ソラの借金の半分を払ってやるとでも言えばいいか。」

「半分？ですか？失礼ですが理由を聞いてもよろしいですか？」

早島は、帝が決めた条件を疑問に思い聞いた

「半分というのは、普通では、払える額ではない。それに半分払えるものがいた場合はどういう行動に出ると思う？」

そこで早島は はっ っと気付いた。

「つまり、あうのと同時に、彼を試すんですね。払える額が半分ということ、それだけ払っても生活ができると言つこと、つまり誘拐して残りを出せというのは簡単ですからね。」

「そうだ、そこで何も起こらなかった場合は、お前も認めるだろ。」

それに、この家にくるときは、目隠しをして、絶対に一人にしなければいいだけだな。」

「そうですね。では、参りませうか。」

そういい、早鳥と帝はへりに乗り込んだ。ソラは、案外近いところにいたのが十分程で付いた。そこでソラがしていたことは、休憩中なのかベンチに腰を下ろし空を見上げていた。帝たちはソラに近づき、後ろから

「綾崎ソラで間違い無いな。」

有無言わせない声で帝が先に聞いた。ソラは、振り向き

「ソラって言う人は、結構いるから、僕であつてるかどうかはわからないけど、一応、綾崎ソラは僕だよ。貴方たちは？」

「そうか私は、三千院 実だ。そしてこっちが、「三千院家に務める、帝というものだ。」

帝たちは打ち合わせ通りに、話を始めた。

「ふーん、それで三千院さんたちは、僕に何かようなのー？」

語尾を伸ばして話すソラに、期待はずれで少し落胆したように帝は

「私の長女が病気で、それを直して欲しいの」「少し前に、お前の話を聞き探していた。報酬はお前の抱えている借金の半分を払うというのはどうだ？」

「へー、借金のことまで調べてあるんだー。さすが金持ちは違うねー。でもね、本来なら本当の当主が話すものじゃないの？ねえ帝さん。」

「……何時から気付いた。俺が本当の三千院家の当主だと。」

「まず、雰囲気が違う。それに執事は、自分の主が話しているときには、普通、話すことはないのと今、実さんは「私の長女」と言ったので自分の娘の名前を呼ばない？の三つかな。後は、正直予想ではない。」

「試すようなマネをしてすまんかった。」

「いいよ、どうせその人が、少しでも怪しい人間は、気を付けたほうがいいとでも言ったんでしょ？」

ソラが予想したことが、殆どあっていることに驚きながら早島は直感でこの方ならば大丈夫というのを感じ取っていた。

「私の名は、早島 実です。ソラ様、一緒に来てもらえますか？紫子様を、見ていただきたい。」

「症状は？ここ最近の食事の状態、過去の食事の状態を教えてください。あとその人に会いたい。」

「かしこまりました。すぐに用意させていただきます。帝様、よろしいですか？」

「ああ、紫子が治るならそれでいい。」

帝に一応、確認を取った早鳥は、直ぐにへりにソラと帝、それに着いてきた人たちをのせ出発した。

「紫子、お前の病気を治せるかもしれない人物が現れた。今すぐ見てもらおう。」

「お爺ちゃん、今までそう言って直せた人はいないんだよ。それに後ろにいる子供は誰？」

ソラは、自分のことをまだ話していないのかと思

「えーっと、僕が、治せるかもしれない人なんだけどねー。」

「ふざけてるの！！そんな子供に私の病気が治せるわけないじゃない！！でていって！！」

「紫子！！」わかった。今は出ていく。また、明日来るからー。」

ソラは、部屋を出ていった。残された帝と紫子は、

「お爺ちゃん、あんな子供に頼るほどぼけたの？」

「いや、紫子、あの子は、アテネを助けた子供だぞ。確かに、子供と思うかもしれないが一度でいい見ってもらってくれ。紫子が死んでしまったら、俺は……」

帝は悲しそうに、でも本当に心配して紫子に話しかけた。

「アテネちゃんを救った人。ソラ君だっけ？あの子がそうなの？」

「ああ、自己紹介をせずに出ていったから、名前だけだな。後は、紫子が聞くといい。」

「そっかー。悪いことをしたなー。また、明日来てくれるようにお願いしてもいい。お爺ちゃん。」

「ああ、分かった。そう伝えておく。ではな」

帝が出ていったのを確認し紫子は、

「彼がソラ君かー。何ですぐに見ることをしずつに出ていったんだろ。まー明日聞いてみればいいかな。」

といい眠たくなったのかベットにはいり、寝てしまった。

次の日

「紫子さん？昨日、あんなに怒っていたのに大丈夫？」

「うん。大丈夫だよー。」

紫子の部屋で朝の食事を一緒にとっていた。

「ところで、紫子ってちょっと長くて呼びにくいから、ゆーちゃんって、呼んでいい？」

「ええ、いいよー。（初めて、あだ名を付けられたノノノ）ところで、昨日何もせずに部屋を出ていったけど、どうして？」

「それは、人の感情は怒っていると冷静に判断できなくなる人がいるからねー。一度、頭を冷やしてもらうには原因がなくなるのが一番手っ取り早いからねー。」

ソラはソラで、ちゃんと考えて部屋を、出ていったのであった。

「それで、急な話なんだけど、治すには手術が必要なんだよねー。どうするー。」

「えっ？触診も何もしてないのにわかるの？」

紫子は当たり前の事を聞いた。

「うん。悪いとは思っただけけど昨日、夜に血を少しもらって血液検査をしたんだ。それでわかった。」

「手術ってことは痛いよね。」

「まあ、痛いかな。嫌！もう痛い思いはしたくない！！」

「帝ー、どうする。僕は本人の許可なくやりたくないんだけどー。」

帝が入ってきたことに気づかなかった紫子は

「お爺ちゃん！いつ入ってきたの？」

「ソラに用事があるから、来てくれと言われてな。ついさっきだ。」

「そうなんだ。」

「紫子、どうしても手術は受けてくれないか？」

帝本人は、最後の確認として紫子に聞いた

「絶対に嫌。」

「そうか」

そのやりとりを見たソラは

「ふざけんな！！世界では助かりたくても、助からない人間だっているんだ！！なのにゆーちゃん！！逃げるの！？痛いからって、それだけで逃げるの！！何で、もつと生きたいと思わないの！！何で、そんなに悲しいことを言うの！！ぐすつ。何で、戦おうとしないの……ねえ答えて！！ぐすつ……えぐつ……」

泣きながら、叱るように紫子に問いかけた

（ソラ君は、優しい子なんだな、他人の為に、こんなに心配をしてくれるんだ。あんなに泣いてくれるんだ。それなら私も我慢して受けてもいいかな。でも、なんだろあだ名を付けてもらってから顔が少し暑いようなこの感情はなんだろう？）

少し顔が赤くなっているのを、帝は見逃さなかった。

（紫子のやつ、ソラのことを好きになったのか？この前、紫子が連れてきた男は、気に入らなかったが、ソラならば、俺も許せるしな。ま、アテネも探しておるしソラが、修羅場を見るのは確定だな。アテネに何度か連絡したのだが出かけているのか、電話に出なかった

しな。)

「わかった。受ける。でも、リハビリってあるんでしょ？」

「ん？ないよー。ただ悪いところを、切除するだけだからー。いつからやるー？僕はいつでもいいよー。」

さりげなく爆弾発言をしたソラに帝と紫子は

「切除するだけなのっ！？」

声をそろえてソラに聞いた。

「うん！今までは見つからなかったけど胃の裏側と、腎臓に、何か悪いものがあるよー。たぶん、見つげにくい場所だから、わからなかったただだよー。レントゲンでもかなり小さいから、見逃しててもおかしくないしー。」

それを聞いた帝は、

(レントゲンを見ただけで、そこまで分かるとは…末恐ろしいな。)

「そうか。紫子、どうする？ソラは準備万端だそうだが。」

「昼からでいい？」

紫子は、時間はそんなにかからないだろうと予想し聞いた。

「うん！四時間ぐらいだから。それに朝ごはん食べちゃったから朝は無理かなー。時間までどうするー？」

「ソラ君と話がしたい!!」

「それなら俺は、手術が始まるまで部屋に戻ってしよう。」

「それにしても、紫子があそこまで、意見を変えろとは、ソラは人の先頭に立つ素質があるかもしれんな。時代が違えば、英雄になっていたかもな。」

そういつて自分の部屋に戻っていった。

時間は飛び無事、手術は終わり。手術室から出てきたソラは、

「成功したよー。二度と悪化しないように処置も施したからー。もう大丈夫だよー」

その言葉を聞き、十分後には屋敷中に広がった。帝は

「有難う、ソラ。何かあれば次は俺が助けてやる。」

涙を一筋流しソラに言った。そしてソラは

「じゃあ、頼みたいことが幾つかあるんだけど? 「なんだ? 借金のことか? 住む場所か?」 それもあるけどー、ひとまず……お腹すいたー。集中してたからー何か食べるもの持ってきてー。」

帝は ポカーンとしていたが我に帰り

「おい！早島！！食べ物をもう、用意させていただきました。こちらえどうぞソラ様。」そうか「

早島がソラを連れていくのを確認してから、紫子がいるであろう部屋に入っっていった。

「ソラ様…「どうかしたー？」本当にありがとうございます！！ソラ様がいなければ、紫子様は手術をすることもなく、お亡くなりになる可能性がありました。三千院家の執事長として御礼申し上げます。」

「「「「「有難うございます！！！！」「」「」

急に大勢の声が聞こえたので、後ろを振り返ると執事、メイド達が頭を下げていた。

「にはー、初めて、こういうふうにお礼を言われた。でも、恥ずかしけど、嬉しいな。それよりおなかすいたー。」

「こらー！！お前たち、ここでお礼を言うより料理の準備を「早島執事長、もう準備は終わっております。私たちは、命の恩人にお礼が言いたくてきました。」そうか、そうだな嬉しいのは、私だけでなく、紫子様を知っているものなら誰でも、嬉しいものだな。それではソラ様、こちらの部屋です。」

部屋の中に入ると皿の上に料理が乗っていたのを見て

「ごういつのってマナーがあるんだよね？マナーまでは僕は、知らないよ？」

「ソラ様、本来ならば、相応のマナーがありますが、本日は無礼講という訳で、好きなものを好きなだけ食べてくださっていいですよ。」

それを聞いたソラは

「やったー！ー！！」

と料理の方に走っていった。流石、ソラとでも言うべきか、マナーを知らないとは言ったが口元に、料理の食べかすを付けながらもマナーだけはしっかりしていた。そのことを見ていた、執事長をはじめとする執事とメイドたちは、生暖かい視線で、ソラのことを嬉しそうに見ていた。

次の日、紫子はソラを見つけて走っていき飛びついた。

「ソラくん、ありがとー。」

「ゆーちゃん、もう、動いても大丈夫なのー？」

「うん！体力もそんなに落ちてないって。」

そう紫子が言ったとき

「ごらー！！紫子！！今日一日は安静にしておけと言っただろ！！」

帝が走って来た。

「おお、ソラもいたか。」

「おはよー。帝ー。」

「ああ、で紫子、今度は逃がさんぞ。大人しく部屋におつてくれ。」

「ソラ君が来るならー部屋にいるー。」

「すまんが、ソラ「わかったー」。「そうか」

紫子はソラを連れ部屋に戻っていった。

「早島！ーいるのは分かっている、出てこい。」

「はい。どうかしましたか帝様？」

隠れてみていたことを悪びれず答えた。

「お前は、紫子がソラのことをどう「好いてますね。本当に心配して怒ってくれる他人が、今までいませんでしたからね、紫子様の旦那様も。」あの男もか、やはり、そう見えるか。」

「はい。帝様の娘様を、怒るということは、普通、存在を消されても、おかしくないですからね。」

（借金は返済しておいてやるか。まだソラは、未成年だし、最終的には選ぶんで結婚するかは、ソラの問題だ。俺が何か言えることではないし、ソラには言いたくないな。）

部屋に戻った紫子とソラは、寝ていた。実は、ソラは寝ておらず、紫子の看病をしていたのだ。そして、部屋に来たとたん寝てしまった。最初は、慌てていた紫子だが、寝息が聞こえるのを確認し、一人執事を呼び、ベットに寝かせてもらい、自分も同じベットで寝たのである。一時間後、ソラが目を覚まし、

「ゆーちゃん、手が痛いよ。」

安心して寝ていたので、紫子は、思いつきり腕を握っていたのだ。そして、ソラが起きたことを感じた紫子は、ベットに腰掛けているソラを見て、抱きついた。そしてそれは、隠れて監視？していた早島に写真に撮られていた。

その時の写真が、今出てきたのである。

その後ソラは、親を三千院の力で見つけてもらって、親と一緒に暮らしていると紫子は、聞いていたが実は、もう一度捨てられ行方不明になっていることは、アテネがソラを見つけるまで知らなかった。その時に、ナギと同じように大喧嘩（こちらは取っ組み合い）になったが、最後はソラの

「喧嘩しないでー。」

という鶴の一声で収まったのであった。そして、今の関係に落ち着いていたのがミダスを救ったあとの話。

ちなみに

「早島、私がソラに抱きついたら、写真撮って。」

「紫子様？何故ですか？」

「だって、病気が治った記念にソラ君との思い出が欲しいんだもん。」

「畏まりました。お嬢様、お任せ下さい。」

とのやりとりを紫子の部屋でやっていたりする。

10話 番外編と言う名の紫子の過去（後書き）

一応、終わりました。

また、明日か明後日に改稿する予定なので何度もすみませんが読んでくれると嬉しいです。

ソラの性格が変わりすぎでしかも神様が出てきてない。

何故こうなったとしか言えないです。

11話（前書き）

予告通りヒナギクとの一日にしたいと思います。

正直、社会体験は、自分の思ったまま書いています。
白皇の生徒なら多分できるだろなという気持ちもありますが。

2011/10/4 0:50 改稿

11話

熱が治った二日後の朝

「ソラ君、生徒会に入ってみない？」

ヒナギクは、ソラに提案した。

「生徒会？何やってる場所？」

「行事がある場合は、その日程を細かく決めたり、後は、普段は会議をやるのよ。」

「????？」

ソラは、よくわからないといったふうに首をかしげた。それを見たヒナギクは、

「じゃあ、一日生徒会の仕事を、体験してみない？」

「おもしろそー。やってみるー。」

「それじゃあ、今から生徒会室に、向いませよ。」

「うん!！」

そういい、生徒会室に向かった。そこにはもう、副会長の霞愛歌と春風千桜がいた。

「愛歌さん、千桜、もう来てたのね。」

「ええ、おや？そこにいるのは綾崎君ですね。何で生徒会室に？」

千桜は、何故、朝から生徒会室にソラを、連れてきたのかをヒナギクに聞いた。

「ソラ君に、生徒会に入ってもらおうと思ったんだけど、何をやるか「生徒会の選挙はもう終わってますよ？」まあ、ボランティアみたいな感じで、入ってくれるなら、私達も少しは楽になると思ったんだけど。」

「つまりヒナギクさんは、綾崎君に、雑用をやってもらおうということですか？」

「一日だけ体験してもらって、どうするかを考えてもらう予定よ。」

ヒナギクは、千桜の質問を予想していたのか、答えた。それを聞いた愛歌は、

（あの様子だと、綾崎君の事が好きなのね。ふふ、どう弄ろうかしら。）

やはり、腹黒いことを考えていた。

「じゃあ、いつもどおり、美希達は、来ないだろうから始めましょうか。」

「分かりました。今日の議題は、社会体験のことです。」

社会体験とは、白皇学園の行事の一つで、文字通り何ヶ所か場所を選んでそこで、一日働くことを、体験することである。

千桜は、何個か、許可が取れた場所をあげた。それを聞いていたソラは、

「ねえー。質問いいですかー？」

「どうしたの綾さ」「ソラでいいよー、紛らわしいから。」「そう、じゃあソラ君、質問とはなんのことかな？」

「何で一箇所で、やらないのー？」

「白皇学園の高等部の生徒が、何人いるかわかってる？」

千桜の質問に、

「この前の、投票からして1000人くらい、いると」「じゃあ、一箇所で、そんなに働ける場所があると」「発想の違いかなー？」

ヒナギク達は発想？ソラ君は一体何を考えているの？と頭をこんがらがせていた。

「何日かに分けて、お客も、白皇の生徒がやればいいと思うんだけどー。大きいところなら三日位できると思うけど？」

「それじゃあ、緊張感がないじゃない。知っている人が来たんじゃない、話ばかりして仕事体験にならないと思うんだけど。」「

「うん、そうだよー。だからこそ三年からはじめる。」「

「「「何で？」」」

やはり、何を考えているかわからないといったふうにソラに聞く。

「えーっと、つまりは午前中は、三年生が、働く場所の正規社員に教えてもらう。そして、昼からは本当の実地、始めてのことだからー緊張してるよねー。そして、客は、二年生と従業員も巻き込んで半分は客としていてもらう。これは、何かあったとき、すぐに対処できるようにする為ー、次の日は、二年生ー、その時、教えるためにつくのは、三年生ーと従業員を前日の半分にするー。これは、前日、一応見ているからー。見ているのとやることは違うことを知ってもらうー。その後は、客が一年生ということ以外、一緒ー。で、最後は一年生、客は、三年生だから、緊張するよねー。でも、失敗しても、対処の仕方を知っているから。間違えたときは指摘をするー。これができるばー、学年の交流にも、つながると思うんだけどねー？」

それを聞いたヒナギクたち三人は、口が塞がらなかった。

「どっつ？」

ソラは不安になりヒナギクたちに聞いた。

「ええ、それなら確かに、交流もできるし、一つの場所できないこともないわね。ヒナギクさんに千桜さんはどう思う？」

「そんな考えが、あるということを知りました。でも、そんなに上手くいくのでしょうか？」

「上手くいかないのが普通だよー。そのことを知ってもらうのが、職場体験だと僕は、思っているんだけどー違うの?」

「間違つてないわ。ソラ君凄いいじゃない。これなら学園全体の行事になるわね。」

ヒナギクは自分が考えなかった事を会議を聞いただけで考えるソラを生徒会に絶対に入って欲しいと思っていた。そこには、

(ソラ君が入ってくれば、一緒にいる時間が増えるノノノ)

という考えもあつたりする。

「では、そうしましょう。会長、いいですか?よろしければ、この案を、天王洲理事長に、渡しておきますが?」

「ええ、いいわ。そろそろ時間だから、これで朝会は、終わりにします。」

ヒナギクがそういうと、愛歌は、

「ソラ君。これをちょっとつけてもらえるかしら?」

愛歌の手にもっていたのは、何時ぞやのネコミミに尻尾を、追加したものであった。

「ちよつ、愛歌さん?何やってるんです?つけたよー。」

その声に、振り向いてしまったヒナギクは、ボンツ と顔を真っ赤にし

「キューーーーーー」。

倒れてしまった。ヒナギクだけでなく、千桜と、愛歌も顔を真っ赤にして

((ここまで、似合うのはどうして?))

そう思っていたが、愛歌は我に帰り、写真を二枚ほど撮ってから、

「ソラ君、私たちは授業があるから行くけど、ヒナギクさんの事、お願いできる？多分一時間くらいで目を覚ますと思うんだけど。」

「分かったー。じゃあこれ返しておくねー。」

ソラは、先ほど付けていた、ネコミミと尻尾を愛歌に返ししながら答えた。

一時間後、愛歌が言っていたように、ヒナギクは目を覚ましたが、クッションとは違う感触が、頭の後ろにあることに気づき何かと確認しようとしたとき、ソラが寝ていることに気づき、

(私、膝枕されてるんだノノもうしばらく、このままでもいいかな。)

そうこうしているうちに、昼休みになってしまった。

「私としたことが、寝顔を見ていて時間がすぎることを忘れるなんて。」

かなり、落ち込んでいた。それを見たソラは、

「大丈夫ー？元氣ないけどー？」

「ええ、大丈夫よ。ソラ君、昼ご飯と一緒に食べない？」

落ち込んでる姿はかソラ君もみたくないんだなと感じ、ヒナギクは、話を变えるために昼ご飯をさそった。だが、ソラは

「昼は、あーたと食べるんだけど？一緒にく「行くわ。」それなら行こー。」

昼休みも終わり、またまた時間が飛んで放課後、ほかの役員も揃っていた。そこで、ヒナギクは

「今日は、一日体験としてソラ君が、来てくれました。それでは、残りの議題を、やりましようか。千桜さんお願いします。」

「本日、朝決まったことを読み上げます。………ということが決まりました。理事長も納得しています。ほかの案件は、今のところありません。ですので、書類の処理を、行いたいと「ねえ、もうこの紙ないのー？」えっ？その書類は、今から行う「もう終わったよー。」「少しいいですか？………本当ですね。書類全部、終わってます。今

日やることなくりましたが、どうしまししょう会長。」

「……」

生徒会一同は、啞然として何も言葉を出せなかった。何故かという
と、ソラがやった書類は、この先一週間で、終わらせる量なのだ、
それを報告している、一時間前後で終わらせた、つまりそれだけ集
中力が、すごいということでもある。朝のことを知っている、ヒナ
ギク、愛歌、千桜もこれには吃驚していたが生徒会一同は

（（絶対、生徒会に入ってもらわないと））

等思ってた。が違うことを考える人もいる。

「会長…彼、何ものなんですか？」

違う学年の役員が聞いた。

「綾崎ソラ君、白皇学園の編入試験を十分で終わらせて、後は遊ん
でいたみたい。ちなみに、テスト結果は満点。そして、体力は底知
らず。しかも、アテ……天王洲理事長と三千院家当主の三千院帝さ
んの、お気に入り。の生徒よ、強さは、この前のでわかるでしょ。」

ヒナギクは、ソラのことを知っている人間を代表して簡単な紹介を
した。それを聞いた役員たちは、

「白皇学園の編入試験って確か大学の問題も一、二問入っていて、
普通、満点合格できないんじゃないの？」

そうなのである、優秀な生徒を入れる、また、どこまで出来るかを

見るために、昨年から、大学の超難問を入れるようにしていたのだ、ちなみに今までの正解率は0%であった。

「えっと、じゃあやることもなくなったし、お茶でもしましうか。」

ヒナギクは話を変えるために、そう言い、それを聞いた千桜は、

「分かりました。準備します。ソラ君は普通の紅茶でいいですよー、喉乾いたー。」では、準備してきます。」

生徒会室の空気が、少し重いことに気づき、予備のカップを出すためということを利用して、千桜は、ソラを連れ出した。

「ソラ君、どのカップがいいか、こっちの部屋にある、棚から選んでもらえますか？」

「んー、じゃあこれ「まてー！！今どこから出した！！」やっぱり駄目「当たり前だ、今から飲むのは、紅茶だぞ。」

「ちょっとした冗談なのにー。でもー、いつまでも気が張ってたら、疲れるよー。」

ソラは、どこからか、ビールのジョッキを取り出した。それに、千桜は、突っ込んでからしまったと思ったが、ソラは、もともと気づいていたのか、普通に言葉を返した。

「いつから気付いて「朝、あつたときー。本当に僅かだけど、喋りにくそうだったよー。」頼むから、皆には、言わないでくれ「わかったー。でも、僕には、普通に話しかけてきていいからねー。」

「有難う、で、カップはどれにする？」

「じゃあ、真ん中のシンプルな奴ー。を二つー。」

「二つ？何で？」

「多分、ヒナちゃんが、質問攻めに合ってるからー、アーたんを呼んだー。」

それを聞いた千桜は、二つ取り出した。ソラが選んだのは、本当にシンプルでクリーム色のカップであった。

「よし、じゃあ入れてくるから「僕もついてって、淹れていい？」ん？淹れたことがあるのか？」「うん！三回ほど」「それは、淹れたうちに入るのか？まあいいか、じゃあついてきてくれ。」

ソラと千桜は、紅茶を淹れにまた、違う部屋に行った。

その頃、生徒会室では、

「彼って、本当に何ものなんですか？いくら、秀才や天才でも、ここまで書類を、一時間で終わらせるのは、異常です。」

やはり、先程の説明では、納得しない人が、出てくるか。と、ヒナギクは思っていた。そこに、コンコン 生徒会室の扉を叩くノック音が聞こえた。

「はい。入っていいですよ。」

「ちょっと失礼するわね。「アテネさん!!どうしたんですか?」ソラに、連絡をもらってね、「たぶん、ヒナちゃんが、質問攻めに合ってる、可能性があるから、助けてあげて!」と電話があつて、言われたのよ。それで、どうしたの?」

ヒナギクは、今日あつたことをアテネに話した。

「成程ね。それは、確かに普通の子には、異常に感じるでしょうね。」

ふう…と、息をつき。アテネは決心したかのような目で

「これから言うことは、絶対に、他言無用、誰かに言ったら許さない。」

そっぴい、話し始めた。

「あるところに、少年がいた。その少年は「アテネさん!!それって…」ええ、でも本当のことを、話さないと納得してくれない子もいるでしょう?」「でもっ…」「いいのよ。結果どうなっても、私が守るし、貴方も、他の人たちも守るでしょ。」

「分かりました。」

アテネが、悲しい表情でそう言ったのを見て、ヒナギクはもうどうしようもないと思った。

「話がそれたわね。その少年は、親に売られた。借金のかたとして。」

生徒会室の、空気が少し重くなった。まさかそこまで、重い話をすると、思っていなかったのか騒ぎ出した。

「静かに聴きなさいっ！」

その一言で、静かになったのを確認し、ソラにあった不幸を、話し終えた。

「このことを聞いて、ソラに対する感情の変化があると思う。でも、今まで通り、接して欲しいの。もう、悲しい思いはして欲しくないから。」

役員たちは、困惑していた。

「分かりました。この話は、絶対に話しません。聞いたのは私たちなので、その責任と義務はありません。」

その沈黙を破ったのは、

「愛歌さん……」

霞愛歌であった。その後、役員全員が話さないことを、約束した。話が終わったあと

「やっぱ、アーたんいたー。紅茶飲んでごうよー。」「ええ、そうさせてもらっわ。」

くすっと笑ったアテネに、ヒナギク以外の人たちは、こんな顔もで

「ソラ、貴方の自由よ、素直に、思ったことを言いなさい。」

ヒナギクとアテネに聞かれソラは。

「うん、一日、楽しかったけど……」

「「けど？」」

「途中から、空気がおかしくなっていた。原因は、僕なんですよ？だから、入れないよー。」

ソラが、気づいていたことに驚きを隠せない、アテネたちは、

「そう……」

としか返せなかった。

「でも、たまに行くのは、それぐらいはいいよねー。」

続けてそういったソラにヒナギクは、

「いつでも、きていいわよ。」

嬉しそうに答えた。アテネは、また人との繋がりができることを、喜んで後ろから二人を見ていた。

「それじゃあ、私は、帰りますね。」

ソラたちと一緒に、理事長室まで来たヒナギクは、帰っていった。

帰ったあとヒナギクは、

「ソラ君が、生徒会に入ってくれないのは、残念だけど、これから時々来てくれるならいいかな。それにしても、まさかあの時、アテネさんが、過去のことを言い出したのは驚いたけど、結果的にいえば、仕方がないのも確かだね。さて、明日も一日頑張りますか。」

といいベットに入り、その日何があったのかを、思い出しながら寝た。

11話（後書き）

なんというかやっぱり、ヒナギクとの一日ではなく。

生徒会役員との一日になってしまいました。

次回はまだ、未定です。

また、明日改稿する予定なので、改稿したあとも、よろしくお願
い
します。

12話(前書き)

咲夜を出します。

正直、かなり文を追加しました。

2011/10/5 11:15 改稿

12話

生徒会体験の次の日、ソラは放課後、ナギの家に来ていた。何故かという、ナギとハヤテが学校に来なかったからである。

「クラウドさー」「クラウドだ!!」ん？ハヤテとナギちゃんっているー？学園に来なかったから心配になってきたんだけどー？」

「ああ、綾崎もお嬢様も、熱を出して休んで、「大丈夫なのー？」熱は下がっているから、明日には、学園には行けるだろう。まったく、お嬢様は仕方ないにしても、執事である綾崎が、熱を出してどうするんだ……」

とりあえず、まだブツブツ呟いているクラウドを、そのままにソラは屋敷の中に入っていった。

「マリアさーん。います「今日は、どうかしましたか？ソラ君。」えーっとハヤテとナギちゃんが学園を休んだから、来てみたらクラウドさんに、熱だしたって聞いて様子を、見にきたー。」

「そうでしたか。では、案内するのでついてきてくれますか」「わかったー。」ソラ君は、元気ですね。ナギにも少しは見習って欲しいのですが…そういうえば、ナギとハヤテ君どちらに先に会いますか？」

「んー。じゃあナギちゃん、「ハヤテ君は、後でもいいんですか？」うん。話したいこともあるしねー。」

「そうですね。では、この部屋に、ナギがいます。」

そついい、部屋の扉をノックした。が、返事が返ってこなかったため、もう一度ノックをした。

「マリアさん。部屋の中もぬけの殻だよー？」

「えっ？どうしてわかるんですか？」

疑問に思い、マリアはソラに聞いた。

「部屋の中から、誰かいる気配がしないからー。」

（何処のゴルゴですか。それにしても、相変わらず、ソラ君は、規格外ですね。そして、ナギはどこに行ったのでしょうか。）

「えっと。何か、下の階でハヤテとも違う、誰かわからないけど三人いるよー。」

「下の階ですか？（こここの下の階だと、PS部屋ですね。三人いるということは、あとの二人は誰でしょうか？一応、用心していったほうがいいですね。とは言っても、ゲーム部屋なので多分あの二人でしょうが。）

マリアは、誰が来ているかを予想し、三千院のSPを呼ばずに歩きだした。呼んで意味がないことを、分かっていたからである。それと、予想が外れても、ソラがすぐ近くにいたので、何が起きてても基本は、大丈夫だろうとも考えていた。そして、話をしながら下の階についた。マリアはノックもせず

「ナギ！！何やってるんですか？寝てないと…って咲夜さんに伊澄さん、何故ここに？」

(やはり、予想通りでしたね。)

「マリアさん、お邪魔してるでー。何か、伊澄さんにナギが風邪ひいて休んだ聞いてなー。どうしとるんやろと思っ来てみたら、ナギここに連れてこられたっちゅうわけ「咲！マリアに「ナーギー、「ひっ」貴方は、熱を出しているんですから安静に寝ていないと」す、少し運動をした方「これのどこが運動ですか？コントローラーを握っているだけじゃないですか！」だ、だが「明日は絶対に、学園に行ってもらいますからね！」」

マリアが、本当に怒っているのを見たナギは、

「わ、分かった」

そう言うしかなかった。咲夜は今気づいたというふう

「マリアさん、マリアさん、そいえば、後ろにおる子は、誰なん？初めて見る顔なんやけど、また新しい執事でも雇ったんかいな？」

「いえ、違いますよ。彼は「綾崎ソラだよー。ハヤテの弟ー。」です。それでは、私は、ハヤテ君の様子を見てから紅茶を入れてきますね。」

といいマリアは部屋を出ていった。咲夜たちは、

「なんや。借金執事に弟がおったんかいな。」

「咲夜、ソラ様は聞いた話だと白皇の会長を簡単に倒したっていう。借金執事の弟も化け物かいな。」

「そもそも、咲、普通の服を着てる執事はいないだろ。」

咲夜は、伊澄の言葉にそう返したて直ぐ、ナギは当たり前前のことを言った。

「貴方はだーれ？」

「おお、悪かったな、うちは咲夜、愛沢咲夜あいさわさくやや、そんなもってこつちが「こうして話すのは、初めてですね鷺ノ宮伊澄さぎのみやみで「たしか同じ、クラスだよー。」そうですね。ソラ様は、どうしたんですか？」

「ナっちゃんのお見舞「人をどっかのジュースの飲み物みたいに言うなー！！」いに来たよー。」

「そうですか。」

「にしても、伊澄さん、同じクラスなのに自己紹介もまだしとらんかったんかいな、それに伊澄さん、ちゃんと学校はいかんとあかんよ?。」

「咲夜、ちゃんとしてるわ。」

ちなみにソラが、学園に来て、まだ四日くらいしか、学園にたどり着いてない伊澄で、あった。そして、一日は、生徒会体験で、おらず。もう一日は、初日で自己紹介だけで終わった日なので、正確には、二日しか会っていないことになる。

「おい、咲に伊澄、気をつけるよ。此奴はジジイの気に入ってる人間だ。」

「帝じいさんが？」

「ああ、母様の病気のことは知っているよな？」

「知つとるで。」「ええ。」

「そういえば、何も聞かんや。もう長いやろー。何も情報がこんなから」「その病気を治したんだ、此奴は「なんだって！！」」

「でもナギ？確か、不知の病で、治し方が分からないんじゃないやなかつたの？」

伊澄は、疑問におもつたことを、ナギに聞いた。

「咲、五月蠅い、おつきい声を出すな。で、伊澄、確かに治し方はわからない筈だったが、ジジイの知り合いが助けてもらったらしく、最後の望みとして、探していたそうさ。そして、見てもらったら、治す方法があつたみたいでな、そんなこともあつて、あのジジイのお気に入りだ。で、伊澄は知ってると思うが、白皇学園の理事長も気に入っている。」

「「はっ???」「」

咲夜が驚いたのは想定範囲として、伊澄まで驚いたのは逆にナギの方が驚いていた。

「伊澄、知らなかったのか？」

「ええ、私が見たのは、全校集会の時の戦い？位しか見たことなか

った「ちょいまちい。伊澄さんは、何でその時にしか此奴「ソラでいいよー。」そうかいな、でソラのことを知らないんや?」

「えっと、気付いたら…」「気付いたら?」「イギリスにい「迷子かいな」ええ、皆が迷子になるなんて。」

スパーンという音が聞こえたと思うと

「阿保かいな。あからさまに、伊澄さんが、迷子になつとるんや。普通、約千人も一気に迷子にはならへんやろ?」

「痛い。」

「ともかく、此奴を泣かすなよ。恐ろしいことが起こるからな。」

ナギは、明日学校に行くことが絶望なのか話を変えようと

「そういえば、ソラはどうしてここにいるのだ?」

ナギたちが話している最中に、いつの間にかゲームのコントローラーを持ち、一人で、遊んでいたソラに、ナギは聞いた。

「そういえば、クラウシさんに、風邪って聞いてお見舞いに来たよー。元気そうで何よりだー。一応、簡単なもの作ったから食べるー?」

思い出したように、ソラがそういつと

「何?何をつくってきたんや?」

「自信作の麻婆豆腐!!」「くえるかいな!!風邪ひいとる人間に何
食わせようとしとるんや!!」「むー、でも美味しいよ?」そこで何
で、首をかしげるんや!!」

「咲、ソラにツツコミを入れるだけ無駄だぞ。「あかん、芸人魂が
燻ってつい、突っ込んでしまっんや。ソラ、借金執事とは違って、
いい芸人や。これからも精進しいや。」

「まあジョーダンで、はい、林檎。」

「風邪にはいいはずやな」。って何でこの林檎、髑髏マークが掘っ
てあるんや?なにげに、クオリティが高いやんけ。」

「髑髏マーク?ひっ!!咲、それをこっちに向けるな!!」

咲夜は、髑髏マークと、言ったが実は、林檎が髑髏のように掘られ
ていた。

「ははあん、ナギちゃんは、怖いんやな!。」

「何を馬鹿ことを!!この、三千院ナギに、怖いものなど」「じゃあ、
ほい」「ギャー!ー!ー!!」

咲夜は、ナギが怖がっていることを知ってわざと、挑発をしてから
ナギに向かって、林檎を投げた。当たり前のように、強がっている
だけなので、叫び声を上げ、部屋のすみで縮こまっている。それを
見た咲夜は、やりすぎたかな?と思い、ソラにどうしてこんなこと
をしたのかを聞いた。

「ソラ、お前何で林檎をあんなふうに掘ったんや?」

「いやー、余りにも素っ気ないからー、やつちやいましたー。ちなみに麻婆豆腐も、ほんとにあるよー。今、いすみんが、食べてるしねー。」

「咲夜、凄く美味しいわ。騙されたと思って食べてみて。」

伊澄さん順応能力高いなー、それにそこまで言わせるやんて凄く料理なんかなー？と思いきや咲夜は食べた、いや、食べてしまった。

「ソラ、家で執事の仕事やってみるか「阿保かー！！さっき言ったことをもう忘れたのか？ソラは、ジジイたちのお気に入りだぞ！！」そんなことしたらお前の家がなくなってもおかしくないんだぞ。」
「そうやったな。でも、この料理を食べてしまおうとなー。」

いつの間にか、回復していたナギを見て、これなら、大丈夫そうやなー、にしても、綾崎家は、やっぱり化け物やな、と咲夜は心の中で思っていた。

ちなみに綾崎家でもこの二人が、異常なだけである。

「ハヤテより規格外だからな。なんでも出来るそうだぞ。」

「そういえば、ソラ、ハヤテのことはいいのか？」

「そうだった。ナギちゃん、ハヤテって「いつもの部屋の中」にいるはずだが？」分かったー。行ってくるー。」

ソラはハヤテに会いに行った。

「んじゃ、ナギ、ウチらもそろそろ帰らないかん時間やし、帰るわ。ほな、行こうか伊澄さん。」

「ええ、分かったわ。それじゃあナギ、また、学園でね。」

「ああ、今日は、ありがとな」

「ナギがお礼を言ったやと！！明日は槍が降るかもしれん」馬鹿言つてないでさつさと帰れ。」なんや、ノリが悪いな。んじゃ、まあ帰るな。」

「さつさと行け。」

そう言い伊澄と咲夜は帰っていったが帰り道の途中で

「咲夜、ソラ様のことどう感じた？」

「なんや、いきなり。そうやなー、少し幼すぎやな。で、伊澄さんが聞かっていうことはあっち関係のことかいな？」

咲夜は一応、鷺ノ宮家のことを知っているので聞いた。

「ええ、ソラ様は、私達では、絶対に勝てない力を持っているわ。」

「それは、鷺ノ宮の家のことも入ってるのか？」

「ええ、対抗できるのは、今のところは、白皇学園の理事長ぐらいじゃないかしら。」

「そんなんが、暴走せんように気を付けとかんといかんのやな。っ

と伊澄さん家に付いたんやな。それじゃあウチも帰るわ。」

そついい咲夜は、自分の家に帰っていった。それを見ながら伊澄は、
「そうね、絶対にそうさせないように、今のうちに対策をとっておかないと。あの女性のことも気になるし。私には、気付いていたみたいだけど何もせずに帰っていったし。」

誰にも聞こえないように呟いた。

伊澄は、学園にミダスが来ていたことを知っていた。そして、もう一つソラの中に、人間とは別のものが宿っていることにも、

その頃、ハヤテの部屋についてソラが見たものは、

「マリアさん、何でハヤテは、服を、着てないのー？」

「えつとこれは、ハヤテ君が、紅茶を零してしまいそれを拭くために脱いでもらったんですよ。」

タイミングの悪いことに、ハヤテの体をマリアが拭いているときにソラは部屋に入っていったのである。

「なんだー。そーなんだ。あ、そういえばハヤテー、」

「どうかしたの？ソラ？」

「これ、お見舞いの林檎と、麻婆豆腐、一つは中が空洞になってる奴、んでもう一個が力作ハヤテの名前がほってあるー。あ、マリアさん、ほかの二人はもう帰ったよー。」

「そうですか、有難うございます。それでは、話すことがあると思うので、失礼しますね。」

「麻婆豆腐ですか？」

「うん！！自信作。」

「一口貰ってもいいで「ナギちゃんのところにもあるよー。」それでは、私はナギのところに行きますね。」

そういい、マリアは部屋を出ていった。ちなみに、ナギには自信作を、ハヤテには、超激辛で作ってきたのである。そのことを知らない、ハヤテは、

「ソラ、ありがとう。早速食べてみるよ。」

ソラがニヤニヤしていることに気付いてはいたが、ハヤテは一口食べた。

「あーーーー！！！！口が口の中がーーーーー」「はい水。」

ソラは、元々予想？していたのでハヤテに、水を差し出した。ハヤテが落ち着くまで、二十分の時間が過ぎた、そしてハヤテは、

「ソラ！！酷いよ。こんなに辛いものを作ってくるなんて。」

「風邪をひいた日には、体をあつたためると「あつためる以前の問題だよ！！」でも、調子は良くなったでしょー？」

ソラに言われ、初めて気づいたが、ハヤテは体の状態を確認し

「確かに、怠さは完璧に治ってる。あの料理に、何か入れたの？」

「んー？悪戯で無茶苦茶辛く作っただけー。他には、何もしてないよー」

「そ、そうなんだ。にしてもお嬢様のお見舞いなら分かるけど、なんで僕まで？」

「だって、どうせハヤテが治らないと、ナギちゃん、来そうにないいんだもん。つまらないし。それじゃあ、今日は帰るねー。」

「分かった。じゃあ、ソラまた明日。」

そして、その後、ハヤテとを別れたソラは、白皇学園にある自分の私室に戻り、アテネに今日あったことを楽しそうに話した。ちなみに、ソラは散歩の時以外、一人になるのを極端に嫌うので、アテネと一緒に寝ている。

アテネも楽しそうにソラの話を聞き、心の中では

（今日も一日、楽しそうで良かった。この笑顔は絶対に守らないといけないわね）

誓うように思っていた。

そして今日も過ぎていく。

12話（後書き）

今日は、少し少なめです。

ただ、咲夜は使ってみた思ったのですが、出しやすいです。

ソラがボケるそれに咲夜はツッコミを入れるというふうになんか本当に出しやすいです。

これから、出番が増えるかどうかは分かりませんが、一応、全員キヤラを出せればいいなと思っています。

それではまた。

13話（前書き）

なんとか書くことができました。

昼ごろに間違えて、話の途中で投稿してしまいました。

一応、消したのですが、読んでいた人がいた場合本当に、すみませんでした

2011/10/7 18:29 改稿

ソラは、散歩中にハヤテに聞いたことのある店を見つけ入っていた。その店の名前は、レンタルビデオタチバナである。ハヤテには、

「あそこのビデオ屋の店長、ワタル君っていう子だけど白皇の生徒が、店長をしている店なんだけど品揃えが豊富で、見たい物が直ぐに借りれる店なんだ。一度行ってみるといいよ。」

と言われていたのである。ちなみに、ワタルも同じクラスだが、前日遅くまで作業していたので、ソラが自己紹介していた時は、寝ていたので、ソラのことには知らないのであった。

「いらっしやいませ。レンタルビデオタチバナにようこそ。」

ソラが店の中に入ると、メイド服を着た女の人がレジをやっていた。

「済みませーん。間違えましたー。ビデオ屋に入ったつもりがどうやら「ここは、ビデオレンタルの店ですよ。」そーなのー？メイド服きている人がいるから、違う如何わしい店かとおもったー。」

「如何わっ／＼／＼」

ソラの言葉に顔を真っ赤にして固まった女性は、奥からの

「サキー！！どうかしたのか？何だ？客「小さな子が店員さ」違う！！俺は、このレンタルタチバナの店長の橘たちばなワタルだ！！」

「へー、ハヤテに聞いてきたけどーき「ん？借金執事の知り合いか

「？」

誰だ？と言う感じで首をかしげたワタルにソラは

「あれー？同じクラスだよー。この前、編入したばかりだけどー。
一応、自己紹介しておくよ、ハヤテの弟のソラです。」

「あー、あの時は、疲れて寝てた、からな悪いな、俺の名前は、橘ワタルだ。でもってついでに紹介しとくところちのメイド服の女は
貴嶋きじま サキです。よろしくお願いしますね。」

ワタルとソラが話している最中に、冷静になったサキは自分で名前を言った。

「わたるんに、さっちゃんねー。「わ、わたるん？ちょっと待て、何だ？そのへんな呼び方は？」えーっとねー。渾名？」

「やめてくれ、普通にワタルでいい。サキもそうだろう？」

「あ、いえ私は、それでもいいですよ。」

サキは、普通に受け入れているのを見てワタルは、

「サキはいいとして、ソラ、俺のことは、ワタルと呼んでくれ。それでどうしたんだ？何か探したものか？」

「んーん、違うよ「じゃあ何しにきたんだ？」ハヤテに一度行ってみるといいって言われたー。だから来てみたー。」

「そうなのか、一応、説明しておくよ、会員制のビデオレンタルの

店だ。年会費と登録料が必要だ。後は、表を見てくれればわかるだろ?」

「そうだねー。」

ソラは、ワタルの言葉にそう返した。その時、自動ドアが開いたと思うと、ナギがSPを連れて入ってきた。

「どうしたんだ? 珍しいなナギが、自分でこの店に来るなんて。」

「まあ、そうだな、最後に来たのは何時ごろ」「いや、初めてだからな。」「……。」

その言葉にサキも同意した。

「そうですね、たいていはハヤテさんが来ますし、時々ですがマリアさんも来ますね。」

「ところで、何でソラがここにいるんだ?」

相変わらず、話しを変えるのは、ナギだった。

「ああ、綾崎に「ハヤテに一度行ってみたらーって言われたから来てみたー。」らしいぞ。ま、何も借りてく気配はないのだけだな。仕事の邪魔をしなければそれでいいし、基本は無害だろ?」

「手伝ってもらえば、いいんじゃない?」初めて来た一般人が、ここにおいてある物の位置を把握できると思うか?」「ふむ、ソラ悪いのだが、ミカのごとく!!を全巻持ってきてく「はいっ!全部だよ!。」という訳で、使えるどころじゃないぞ。やっぱ返ってきてくれ。「な

「なんだー、なつちゃん」だから私は、どっかのジュースではない!!」
「見ないんだー。じゃあ、返してくるねー。」

ワタルとサキは啞然としていた。(何で、初めての場所で、しかも出入口付近で話していて、店の中を回ってないのに持つてくることのできたんだ?)

「ワタルにサキさん、ソラに普通を求めるのは酷な話だぞ。」

諦める、というふうになぎは言った。

「で？話は戻しけど、なんでなががここに来たんだ？」

「うぐっ！言わないと駄目か？」

「ま、言わなくてもいいがマリアさんに連ら「駄目だ!!」マリアに連絡するのだけは。」
「なが、何やったんだよ。」

「実は、な。マリアが大切に育てた花を…「花を？まさか全滅させたとか言うなよ?」
「うっ!」お前、マジかよ。何をやったんだ?普通あんなに広い、畑?を全滅させることは出来ないだろ。」
「燃やしてしまっただ。」

「は？燃やした?どうやってですか?」

サキは、疑問におもったことを聞いた。

それは、とながは話し始めた。

時間は、一時間前に遡る。

ナギは、外でゲームをしていた。

「今日もいい天気だな。こういう天気の日、やっぱり外でゲームにかぎる。それに、マリアが育てた、花も綺麗だし今日は、ここでやるか。」

と花の直ぐ側でゲームをやり始めた。しばらくしてマリアが来て

「ナギ、私は夕飯の食材の買い物に行ってくるので、何かあれば、ハヤテ君に言ってくださいね。」

「分かった。何かあったときは、ハヤテを呼ぶ。」

それでは、といいマリアは屋敷から出ていった。

その後、熱くなってきたのかナギは、ハヤテのところに行き飲み物を貰ってから、ゲームのことを忘れ、部屋に戻り漫画を書いていた。ナギが、おかしいことに気づいたのは、消化装置が鳴り始めた時だった。

「ハヤテ、何なのだ!!」

「お嬢様。敷地内で、火災が発生したようです。」

「火事？何でまた、秋なら分からなくもないが、今は夏だぞ。」

P i P i P i P i P i P i

「すみませんお嬢様、はい。はい。そうですね分かりました。クラウスさん、有難うございます。」

「クラウスはなんだって？」

電話の相手が、クラウスであることを知ったナギは、ハヤテに聞いた。ハヤテは気まずそうにナギに聞いた。

「お嬢様、本日外でゲームをしましたか？」

「ああ、いい天気だったから、マリアの育てている花が綺麗だったから近くで……まさか!!」

ナギは顔色を少し悪くした。そして

「そのまさかです。テレビのコンセントから発火して、マリアさんが育てている花に燃え移り、消火が完了したときには、既に遅くほぼ全部、燃えてしまったそうです。マリアさんは、まだ、買い物から戻って来ていません。携帯電話を忘れていったのか連絡もついていません。」

ハヤテの言葉を聞き顔色が悪かったのが真っ青に変わった。

「ハヤテ、予想では後、どれくらいでマリアは戻ってくると思う？」

「そうですね、出ていった時間からすると、後、三十分以内には戻ってくると思いますよ。」

「そうか、私は、少し部屋にいる。マリアが戻ったら知らせてくれ。」

「ナーギー！！誰が怖いですって？」「ひっ！なっ！何故マリアがここにいるのだ。」ハヤテ君から事情を聞いて、ナギの部屋に行ってみれば誰もいないですし、ハヤテ君に聞いても知らないと言っていたので、ソラ君に電話してみても知っているかを聞いたところ、ここにいると聞いて迎えに来たんですよ？」

にっこり、笑いながら答えた。

「ソラー！！何故教えたー！！」

「いやー。だって、SPの人たちには言っではいけないっていったけど、そこに僕は含まれてなかったからー。それに、マリアさんには、お世話になっているしねー。」

ソラは当たり前のように答えた。

「それじゃあ、ナギ、行きますよ。しっかり言い訳を聞かせてもらいますからねー！！」

「たすけ「自業自得だ、諦める。」白状ものー！！」

マリアは途中で思い出したように振り返りソラに

「ソラ君、ナギの居場所を教えてください有難うございます。」

それでは、と言い帰っていった。マリアは、ほんとに怒っていると、もの凄くいい笑顔になることを知っているナギは、マリアに引きずられながら、ソラたちに助けを求める声をかけたが、ワタルは途中で切り答えた。

「若、いいのですか？」

「今の、マリアさんを相手に助けられると「済みません。」それに、ナギは、悪いことをやったのだから、怒られるのが普通だし、いい薬にはなるだろ。」

サキは聞いたが、ワタルに言われ、謝ることしかできなかった。今起こったことを忘れるためにサキは、ソラに

「ソラさんは、何か借りていくんですか？」

「んー、カードないし、お金も持ってきてないからー、また今度かなー？」

ソラは相変わらず、首をかしげながら答えた。そこに

「あれ、ワタル君とサキさん、こんなところでどうかしたんですか？」

「歩かどうかしたのか？」

「これ返しに来ただけだよー。」

そう言いDVDをワタルに渡した。そこでソラのことに気付いた歩は、

「ワタル君、この人「ハムスター。」失礼な！！何で三千院ちゃんみたいなことを言うのかな！！！」

「何か後ろにー、ハムスターが見えた気がするー。」

「そいつは、綾崎の弟だぞ。」

「えっ？ハヤテ君に弟なんかいたの？それにしても、全然似てないねー。」

「初めましてー、ソラです。」

「私は、西沢歩にしわざあゆむだよー。」

「んじゃ、今日は、帰るねー。見たいものがあつたら、また借りに来るからー。」

「おう、分かった。そういえばカード作ってくか？ただにしておいてやるけど。」

「んー。また今度でいいや。それじゃーねー。」

ソラは、用事がすんだとでも言いたげに散歩に戻った。次は何処に行こうと思っていると知った顔を見つけたので声をかけた

「いすみーん！！どうかしたのーこんなところで。」

「ソラ様、実はナギの家に行きたいのですが、ここはどこでしょう？」

伊澄は、何時ものごとく、迷子になっていた。

「んー？今ナギちゃんの家に行くのはいいけどー、「どうかしたの

ですか？」マリアさんが鬼になってるよー。なんか育てていた花を、燃やしちゃったんだってー。」

「そうなのですか？それは大変ですね。」

「それでも行くのなら、一応、送ってくぐらいならしてもいいよー。」

「

ソラの言葉に伊澄は、

「それでは、お願いしてもいいでしょうか？」

「りょーかい。っと、この前いた、さくやんっていないのー？」

「ええ、今日は、何か用事があるみたいで、私だけナギの家に行くの。」

ソラは仲がいいんだなーと思うだけで、他には何も聞かなかった。

その後、三千院家の屋敷に着いた、ソラたちは、中に入ったが、屋敷の中は静かだった。いや、静かすぎるのである。どうしてだろうと二人して思っていると、

「もう、許してくれー。マリアー。」

「な・に・か・言いましたか？ナギ。今日という今日は許しませんよ。」

折檻中と書かれたプレートがかかっている部屋からナギの鳴き声とマリアの怒っている？声が聞こえた。ソラは中を見てみようと、扉

に手をかけたとき、急に中から扉が開き、

「どうかしましたってソラ君に伊澄さん。済みません、今、ナギに説教しているので、何かようがあればハヤテ君にお願いしますね。」

マリアが顔を出していったので、二人は、

「わかったー。」「分かりました。」

と答え、ハヤテの部屋に向かった。

ハヤテの部屋につき、ソラは、

「突貫だー。」

といい部屋の中に入っていった。

「わっ！吃驚した。ソラ、どうかしたの？マリアさんが、怒っていることは知っ「知ってるー。」「じゃあ何で「伊澄さんを連れてきたー。それじゃ僕は、今日は帰るからー。またねー。」「

「ソラ様、連れてきてくださって、有難うございます。」

伊澄は、ソラにお礼を言った。それを聞いたソラは、

「困ったときは、お互い様だよー。僕が困ったときは、助けてくれると嬉しいけどねー。」

そう言いソラは、今度こそ本当に帰っていった。ハヤテは、

「そういえば、伊澄さん。今日は、どうしたのですか？」

伊澄に、屋敷に来た理由を聞いた。

「ナギと一緒に漫画を書くことと約束をしていたのですが、どうやら今日は、その余裕はなさそうですね。」

「そうですね一応、お嬢様たちが帰ってきたてから、一時間くらいたっています。まだ終わりそうにないですからね。済みません。伊澄さん、今から、紅茶を入れてくるので、リビングまで、お連れするので、待っていてもらっても宜しいでしょうか？」

「はい。ハヤテ様、すみませんが、お願いします。」

ハヤテは、リビングで待つてもらえますかと、言おうとしたが、また迷子になると困ると思いリビングまで一緒に行くことにした。そして、紅茶を入れたあと、学園での話や、屋敷まで来る時に、ソラと何を話したのかを聞き、談笑していた。その後、伊澄も用事があるとのこと、ハヤテはマリアに伊澄を家まで送っていくという旨を伝えてから、伊澄を鷺ノ宮の家まで、送っていった。

ちなみに、説教？お仕置き？が終わったのはそれから、三時間後のことであり、心身ともに疲れたナギはすぐに寝てしまった。

13話（後書き）

明日また時間があれば改稿します。

仕事が早い時間なので、改稿できても夜の六時を超えようと思います。

今回は、マリアさんの鬼化。

ワタル、サキさんとの出会い。

伊澄の迷子フラグへし折りをやりました。

にしても咲夜の話で思ったのですがギルバートはどうしようかなー
と考えています。

のちのち出す予定ですが、使い道が一つしかありません。

それでは、読んでくれる人に感謝しつつ、また。

14話(前書き)

ソラの過去のことを少し書きました。

2011/10/11 1:55 改稿

14話

とある放課後ソラは生徒会室に来ていた。何故かというと一時間前に遡る。

「ソラ君、今日ちょっと放課後でいいから生徒会室に来てもらえる？少し手伝って欲しいことがあるの。」

ヒナギクに言われていたのである。なんだろーなーと思いつつソラは頷いた。

「わかったー。一度部屋に戻ってから行くねー。」

「じゃあ準備しないといけない資料があるから、一時間くらい遅れてきてくれる？」

それを聞き、ソラは私室に戻ってきた。

「ただいまー。アーたん、あれっ？アーたんが、いない？」

いつもなら私室が理事長室にいるのでソラは疑問に思ったが書置きでもしておけばいいかなー。と思い、

アーたんへ、ヒナちゃんに少し呼ばれているので少し散歩してから生徒会室に行ってきます。

「これでいいかなー？うん、いる場所はわかるから多分いいよね。」

じゃあ行ってきまーす。といいソラは誰もいない部屋を出ていった。

ソラは散歩中、生徒会三人娘にあった。

「こんにちはー。」

「おお、ソラ君、ここで何をしているんだ？」

三人を代表して朝風理沙が聞いた。

「ヒナちゃんに、一時間くらい経ったら生徒会室に来てって言われたからー、散歩してるー。」

それを聞き、美希は

「あっ！！しまった！！！」

「どうかし「ソラ君！！有難う。少し用事を思い出したから失礼するよ。」

そっつい美希は、二人を連れどっかに行ってしまった。

「急いでいたのかー。まあ、用事を思い出したのならいいかー。」

普通、そこにいれば何かおかしいことに気づいたがなにせソラなので何も思わなかった。ソラは、まだ二十分位しか時間が経っていないことを時計台の時計を見て後四十分どころですごそーかなー？と思いき散歩を再開した。ソラは次に校舎の中を散歩しようと歩いていった。ちなみに、先程の三人は

「美希ちゃん？どうしたの？」「そうだぞ。急にどうしたんだ？」

「二人とも、今日、ヒナに必ず生徒会室に来るように言われなかったか？」

「「あつー！」「」

「言われていたようだな。私もソラ君が言ったことで思い出しのだが…」

「ど、どうしよう美希ちゃん。」

「ふむ、ここわ、逃げるか」「誰が逃げるって？」「ヒ、ヒナ、どうしてここに？」

三人が逃げようとしたところにヒナギクは偶然？これは必然？とも言わなければならない。もちろん片手には、木刀を持っている。

「聞きたい？」

ヒナギクは聞いたが三人は

「い、いや、違うぞー！ヒナ、今、生徒会室に向かうところだったんだー！」

そついい美希たちは歩き始めた。それをみたヒナギクは

「へえ。来るのが遅いから探しに来たのよ。そしたら、今逃げようって聞こえたから、私はつきり帰ると思っていたわ。それに、そつちは生徒会の部屋がある方じゃなくて校門のある方向なのだけど

「?どづいつことかしら?」

にっこり笑ったヒナギクに言われ逃げきれないことを悟った三人に

「い・い・か・ら・さつさと来なさい!!!!!!」

大声で言った。そして、三人は強制的に連れて行かれた。

その頃、ソラは教室に来て自分の席に座っていた。

「ハヤテもナギちゃんもいすみんや、ワタルも、全員避けてるよ
うに感じたけど僕なんかやっただかなー?」

ソラは、知っている人に一通りあっていたが、全員が何かよそよそ
しいことを悩んでいた。

ハヤテ、ナギとは廊下でばったりあった。

「ソ、ソラ、何でまだここにいるんだ?」

ナギの方から話しかけてきたので、

「ヒナちゃん呼ばれたー。」

「そ、そうか。そういえばハヤテ」

「なんででしょうかお嬢様?っと、済みませんマリアさんから連絡が
入ったようです。」

「マリアは何だった?」

ナギはソラと話さないようにするためにハヤテにメールの内容を聞いた。

「ええ、少し用事ができたので早く帰ってきて欲しいとのことでした。」

「そうか!―それではなソラ!―」

「じゃあまた明日ね、ソラ」

そついい二人は去っていった。ナギたちは、

「急にソラが現れるから吃驚したぞ。」

「ええ、そうですね。他の方が口を滑らせてないといいのですが。お嬢様、僕は、買出しで足りないものがあつたらしいので少し買い物に行つてきます。先にあの場所に行つていてください。」

「さっきのメールはヒナギクからだったのか?とっさの機転だな。」

「ええ。正直あの場所にいるのは危険だと思つたので。」

そついい、ハヤテは買い物、ナギはある場所に向かつて歩きだした。

ワタルとは、外にいるときにあつていた。

「ワタル―?買い物―?」

「お、おう、少し動画研究部で使う物を買ってきてくれて頼まれてな。」

「でも、食べ物って動画に使うー？」

そう、ワタルの買ってきた物の中には食べ物、折り紙、飲み物が入っていた。

「ああ、それはな、部員達と、動画を撮って誰が一番美味しそうかを、競い合うんだ。どの角度から見た食べ物が美味しいか？とかをな。」

「ふーん。ねえそれって僕も行っているの？それとも駄目？」

「あー今日は買い物だけで撮り始めるのは、明日から、なんだよ。悪いな。これを置いたら俺も帰らないと、サキが心配だし」

「分かった。」

それを聞いたソラは、シヨボンとしていたがワタルは気付かず、そう言い、歩いていったが内心は、

（あ、あつぶねえ。諦めてくれて助かった。ばれたらかなりやばい目に合うからな。すまん、ソラ。）

と思っていた。

最後に伊澄だが、

「ソラ様、ここはどこでしょう？」

ワタルと別れたあと校庭内の噴水のある場所で休んでいた所に聞いてきた。

「ここはー構内だよー。いすみんはどうしてここにー？」

「えっと、少し調べものがあって、来たんですよ。」

「調べもの？」

「ええ、と言っても解決しました。ソラ様はどうかしたのですか？
少しいつもと雰囲気が違うように思えるのですが。」

伊澄の言葉にソラは、

「そんなに違うー？」

「ええ、はたから見れば落ち込んでいるようですが、何かあったんですか？」

「うん、ナギちゃんたちに避けられてるみたいなんだ。それで何か
やったのかなーと思って。考えてただけど、わからなかったから
少し落ち込んだのー。」

「そうですね。そんなことがあったのですか。そういえば理事長と
は「連絡が継らなかつたー。」そうですね。済みません、時間を聞
いてもよろしいですか？」

「うん、午後三時三十分だよー。」

「えっ、もうそんな時間ですか？ 済みません、もっと話がしたいのですが、時間がないようなので先に行きますね。」

そういつてやはり伊澄も帰っていった。ソラはベンチに座ったまま

「はあ、やっぱり避けられてる？ 何で？ 何もやってないと思うんだけどなー。あと十分どこで過ごそうかなー。なんか、考えていたら眠くなっちゃった。少し寝よ。」

その少しが一時間弱も眠ってしまうことになるのは起きてから気付くことである。

ソラは小さい頃の夢を見ていた。小学校の時の夢を、そして小さな約束の夢を

「ソラの親が給食費をとったんだー!!」

「絶対そうだー!! 返せよー!!」

（あの両親なら多分そうなんだろうーな。）

ソラは、クラスメイトにかれこれ二十分位問い詰められていたが何も話さず、そう思っていた。

「何しているんだ!？」

そこに、現状を知らない教師が入ってきた。それを見たクラスメイ
トは話し始めた。

「成程、私からソラ君の方には言っておくから今日は帰りなさい。」

そういい、ほかの生徒を帰したが、何も話してくる気配はなく、そ
の日はそのまま帰っていった。次の日からは、教室に入るまでに、
コソコソこつちを向いて話している生徒をよく見た。靴箱には「帰
れ、泥棒!!!」と書かれた紙が数枚入っていたがソラは、

「馬鹿らしい。」

そついい紙をゴミ箱に捨てた。それから毎日、学校に来るたび、仲
間外れにされ、今まで話しかけてきた子も何も言わなくなった。イ
ジメはエスカレートしていき服やノートを隠されるのは普通、酷い
ときは叩かれることもあった。濱田先生は、何も言わず行動も起こ
さなかった。そして、事件は起こつたその先生の一言で

「ソラ君、イジメられる理由を考えたことは有りますか？ないです
よね？貴方の兄は何時も笑っていますが無故か考えたことはありません
すか？私は貴方たち兄弟が怖いのです。何をされても何も言つてこな
い。普通、耐えられる限界があるはずなのですが、貴方たちにはな
いみたいですね。明日から学校を休みなさい。」

ソラは今まで我慢してきたものが急に溢れるような錯覚を受け

「何調子こいたこと言つてんだ!!!原因はてめえだろが!!!阿保か
お前は!!!」

そう言つて濱田に殴りかかった。最初、ソラがいつも手加減をして授業を受けていたことを知らず。子供の力は小さいからこれくらい大丈夫だろと思つていた濱田だったが、一発殴られ自分が倒れたことを知り間違いと悟つた。そこからは一方的な暴力だった。誰も動くことができなかった。それをたまたま通つた何時もソラのことを心配してくれた先生がソラを止めに入った。

「ソラ君！！何をやっているの！！やめなさい！！」

そう言い、佐藤先生は濱田からソラを引きはがした。その後、ほかの生徒に事情を聞いた佐藤先生は、意識が朦朧としている濱田に向かつて

「貴方は守らないといけない生徒に何を言ったのか分かつているのですか！！校長と教育委員会の方には報告させてもらいますからね！！」

誰かが呼んだのか、ちょうど救急車が来たのでそのまま浜田は、搬送された。そして、ソラを連れて静かな教室に行こうとしたところで、ソラがいけないことに気づいた。ソラは、その頃ハヤテのところに行つていた。

「ハヤテ。聞きたいことがあるのだけど。」

「ん？ソラの方から話しかけてくるなんて珍しいね。どうかしたの？」

「何でハヤテは、あんな親の事をまだ信じられるの？」

そう聞かれたハヤテはソラに

「一応、あれでも親だからね。」

ソラはそれを聞き

「僕は、あんな親いらない。親とも思わない。でも、ハヤテは僕のこと一人にせずにいつも一緒にいてくれる。ハヤテなら信じられる。ハヤテは？」

ハヤテにそう聞いていた。

「うん、僕はソラの味方だし兄でもあるんだから一緒だよ。」

ソラとハヤテは指切りをした。

そこで夢は覚めていった。

「うーーん。懐かしい夢を見たな。結局一緒にいることはできなかったけど。」

ふと時間を見てみたソラは、

「あ、一時間も寝ちゃった。ヒナちゃんたち、怒ってるかな？」

そっぴい、歩き出そうとしたとき、後ろから

「ソラ君!!」「ソラ!!」

ヒナギクとアテネが走ってきたのが見えた。ソラはいつも返事をし

ようとしたが、自分が泣いていたことに気付き、恥ずかしくなり二人に背を向け走り出した。

「ソラ（君）！！」

アテネとヒナギクは、まさか自分たちから逃げ出すとは思っていなかったため、最初は何が起きたかわからなかったが、ソラを追いかけた。

「何で逃げるの？」

アテネは呟くように言った。ソラは本気で走っているのか、距離は離れるばかりで、縮めることができず二人はついに見失ってしまった。呆然とし二人は立ち止まった。その後一度生徒会室に戻っていきミダスたちに話した。ちなみにミダスは、ソラの誕生日と言うことで普通に王族の庭城から出てきていた。

「ソラがアテネ達から逃げた！？」

「ええ。何で逃げたかは分からないのだけど。皆は何か知らない？」

「ヒナギクさん、多分私達に原因はあるのです。「何か知っているの！？伊澄さん！！」ソラ様は悩んでいました。私達、この場合ナギ、ハヤテ様、ワタル君そして私の行動に。」

「どういうこと？」

全員が、訳が分からないというふうに首をかしげた。

「ソラ様にあつたとき、よそよそしい態度をとっていたのです。こ

の誕生会を隠そうという感情がたぶん表に出ていたのでしょうかね。ですが、逃げ出す本当の原因は他にあると思います。」

それは何か分かりませんが、と言言葉を切った。それを聞いたアテネは、

「一つだけ、行く場所に心当たりがあります。ヒナギクさん、ミダスついてきてくれますか？」

「ええ。ソラ君が逃げ出した理由も気になるし、それに、私達がいるのだから、誕生日を一人で過ごすなんて寂しい思いはしなくてもいいのだから。」

「勿論！！ソラが泣いているなら元気にしないと！！」

そういい、三人は生徒会室を出ていこうとしたが、ハヤテに

「天王洲理事長、ソラに伝言頼めますか？」

「どうかしたの？」「一つソラが逃げ出す理由に心当たりがあるので。」「何！！」

ハヤテの言葉に全員が、ハヤテの方を向いた。

「どういうこと？」

「だいぶ前、ソラの誕生日の日の出来事が、原因だと思えます。今ここで理由は話せませんがソラを見つけたときに僕が、「これから何時も一緒だから、今度こそ、あの約束を僕は守るよ。」と伝えてもらえませんか？」

ヒナギクの言葉にそうハヤテは返した。

「分かったわ。それじゃあ、ミダスさんアテネさん行きましょう。」

「「ええ。」」

そっくり三人は外に出ていった。

「にしても、アテネ、ソラが行く場所つてもしかして……」

「そうよ、今ミダスはここにいる。そして、ソラが悲しいことがあると必ず行く場所が」

「「王族の庭城!!」」

ミダスは直ぐに分かったのかアテネと話し始めた。ヒナギクは訳が分からず、

「あの…王族の庭城っていうのは何ですか？聞いたことのない場所なんですけど、白皇学園にそんな場所ってありましたっけ？」

「ヒナギク、王族の庭白は、私の住んでいる場所で普段は、道が開いてないの。そして私は無条件では入れるけど、ソラ以外の人は、とある条件が必要になるの。」

「とある条件？」

ミダスの言葉にヒナギクは聞き返した。

「王玉のことよ。ヒナギクさんにも渡したでしょ？王玉が鍵の役割をしているのよ。だから、「ヒナギクと私を連れてきたのでしょ？ほかの人は入れないから。」ええ。そうよ。そして、継っている場所の一つは、理事長室よ。」

「そんな役割もあつたんですか、この王玉には。」

ヒナギクは首から王玉を取り出し見た。

「ついたわ。ミダス、お願いね。」

「分かっているわ。」

アテネはミダスにお願いした。ヒナギクはこれから何をやるかは、分からなかったが邪魔をしてはいけなれないと思いつつ黙っていた。ミダスは入ってきた扉の方を向き、次の瞬間、手から魔方陣が浮き上がり

「閉ざされ、隠されしき城、今、契約に基づきここに扉を開けよ。」

ヒナギクは、ミダスが口を開いていないことに気付いた。その疑問にアテネが小さな声で答えた。

「あれは、思っていることが聞こえているのよ。声としては聞こえずに脳に直接響くような聞こえ方でしょ。」

確かにそうだなと思っていると、理事長室の扉の色が緑から赤茶色に変わった。

「アテネ、扉は通じたわ。じゃあ行きましようか。ヒナギクは、初めてだから迷わないようにね。」

ミダスはそう言って扉に入っていった。

「私達も行きましようか。ソラのいる場所は分かっているのだから。」

「はい。でも、アテネさん、私、ソラ君のこと全然知らないのだと今日、改めて思いました。」

「ソラは自分のことを話したがらないわ。私達にもまだ話していないことが沢山あると思うの。でも、ソラを好きな気持ちは絶対に間違いない。それだけは最後まで、信じているもの。」

アテネは、歩きながら話していた。

「ところで、何処に向かっているのですか？城の外に出ているのですけど……」

ヒナギクとアテネは城の外つまり王族の庭城の庭にいるのである。

「ええ。こっちにソラはいるわ。ソラは悲しいことがあると必ず、私を開放するために行った、柱の墓に行くわ。」

「は、柱の墓ですか？」

「そう。ほら、あそこにいた。ヒナギク、今は行っちゃ駄目よ。ミダスが話を聞くから。」

先に行ったミダスは既に、ソラと高い柱の上で、座って、何かを話していた。

「ソラ、どうしたの？アテネから聞いた、逃げ出したみたいだけど？」

「うん……恥ずかしかった。」

「恥ずかしい？何が？」

ミダスは、原因が何かを知ろうとソラに、聞き返した。

「泣いていたんだ……夢で……昔のことを思い出して、約束のことを思い出して、結局守られることのなかった約束なんだけど……それを思い出して」

ソラはポツポツと語りだした。

「もう、忘れたと思ってた……こんな記憶……自分で封印してたと思ってた……でも……ハヤテにあつて……みんなと過ごして……楽しい毎日を送つて……思い出しちゃった……過去の自分を……」

「過去の自分？」

「うん。小学校の頃の記憶……忘れたい、忘れたかった記憶……」

「そっか。でも、今ソラは、その過去があるからこそ生きているのだよ？自分の過去は、変えられるものじゃないし、変えていいものでもない。少しは私達に、ソラの苦しい気持ちを分けてよ。それとも私たちが役不足かな？ソラが悲しい気持ちになつていたら、私たちが悲しくなってしまう。だから、少しは私たちを頼って。自分一人で悩まず、相談してよ。」

「いいの？この苦しい気持ちを吐き出しても？」

ミダスの言葉にソラはそう返した。そして、

「ソラ、苦しいのなら、泣いてもいいのよ。ここには、私たちしかない、泣くなら一杯泣くんだ。今までの分も、そうしないと心が壊れてしまう。そんなソラは見たくない。」

それを聞き

「ごめっ…なさい…」「謝ることじゃないよ。」「でも…」「大丈夫、私はここに居るから。」「ぐすっ…」

ソラは、ミダスに抱きつき泣き始めた。十分ほど経ち泣き止んだソラは、ミダスに

「ありがとう。ミーちゃん、何かスッキリした。」

「いやいや、いいんだよ。迷惑なんて思ったことないし、ソラが本当の感情を見せてくれたから。いつも心配していた、いつか壊れるんじゃないかって。それは、私だけじゃなくてあそこで見ている二人もそう思っていたと思うよ。」

そっぴいミダスはヒナギクとアテネのいる方を指さした。ヒナギクとアテネはソラが泣き出したのを見て

「ヒナギク、ソラのことミダスに任せて、少し歩きましょうか。」

「そうですね。今のソラ君には、私たちではなく。ミダスさんがい

と思っていた。その後生徒会室に、戻ることをハヤテたちに伝えてから、ヒナギク達は戻っていった。そして、ソラが生徒会室を開けると

パーーーーーン!!!

クラッカーの音が鳴り響いた。

「ハッピーバースデー!!! ソラ君」

ハヤテ、ナギ、ワタル、伊澄、マリア、美希、理沙、泉、千桜、愛歌、サキ、咲夜の十二人が声をそろえてそういった。

それを聞きソラは、

「ありがと、何か書類で困ったことがあるって聞いていたから、こんな誕生日をしてもらえるなんて思ってもいなかった。後、今まで時間を遅くして、御免なさい。」

最初、皆は???という感じで何が起きていたのかわからなかった。そこにアテネが

「そういえば、ソラ、話し方変わったわね。」

今気づいたと言うふうにソラに聞いた。それを聞きそういえば変わったとみんなが思った。ソラは、

「あー、なんというか、トラウマが解決したからかな?多分、今までは、心に少し距離があったんだと思う。人に嫌われたくない。っ

ていう考えが。でも、ミーちゃんが、ヒナちゃんがアーたんが、教えてくれた。一人で我慢しなくてもいいんだって。それに、ハヤテ」
そう言いソラはハヤテに近づき、

「約束のこと、覚えていたんだね。僕は、さっきまで完璧に忘れてた。」

「当たり前だよ。僕たちは、血のつながった兄弟だよ。今まで忘れたことなんてなかった。ソラが忘れていても、僕だけは忘れない、忘れてはいけないうって思っていたから。それじゃあ時間も少ないし誕生日をはじめよう。」

しんみりした空気を変えるようにハヤテは、提案した。

その日は、ソラにとって、そしてヒナギク達にとっても忘れることのできない誕生日になった。

ちなみに、ソラの話し方が変わったのを見た理沙と美希は

（（話し方が変わるだけであそこまで変わるのだな／／外見もかっこいいからな／／どうしたんだろソラ君を見ていると顔が熱くなる／／／））

と思いアテネたちは美希たちを見て

（（（やっぱり話し方が、外見に追いつくとソラ（君）の事を好きになる生徒が多いのね。）））

そう思っていた。

14話（後書き）

イジメのことですが、作者が内容は違いますが実際受けたことのあるようなことを書きました。

先生に言われたことが一番、自分にとってショックでした。

泉はハヤテのことを好きなままで里沙と美希はソラのことを好きにさせようかなと思っています。

今その先生は、自分が学校を卒業してから他の生徒にも同じことをやってみたいで、辞めさせられました。

先生の名前は実名ではありません。

毎回、イジメで自殺とか聞くと少し気分が悪くなります。

15話（前書き）

今回は作中でかなり似た表現を使っています。
誕生会のプレゼントの話です。

自分の文才のなさが浮き彫りになった話です。
自分は誕生日にプレゼントを貰ったことがないのでこういつぶつか
なと思いききました。

2011/10/12 8:18 内容と前書き後書きを一部改稿
2011/10/13 11:55 漢字間違いに気づき改稿

誕生日の次の日、ソラはプレゼントを見て昨日のことを思い出していた。

貰ったものは、

ナギとマリアからは、腕時計。

ヒナギクは、青色のイルカのペンダント。

アテネからは、パソコン。

美希、泉、理沙の三人からはハヤテとヒナギクの恥ずかしい動画。

愛歌からは、ネコミミ・イヌミミのセット。

千桜からは、目覚まし時計。

ハヤテは、服。

咲夜からは、メイドカフェ、ひまわりの無料券。

ワタルとサキからは、ポータブルDVDプレイヤー。

伊澄からは、狸の置物。

そして、ミダスからは、一歩乱あったが、剣（非殺傷）を買っていた。

ソラが生徒会室に入ったあと、直ぐに、アテネが

「それじゃあ、急だけど、ソラにプレゼントを渡しましょうか。まず、私からのんだけど、ソラが前から欲しがっていたパソコンがプレゼント、運ぶのが大変だから部屋に置いておいあるわ。だから、ここでは渡せないわね。」

「あの箱って、やっぱりパソコンだったんだね。部屋に一度帰ったときにはもう置いてあったから何かな？とは、思っていたけど。ありがと、アーたん。大切にするよ。」

「もう見たのね。なら戻ってから使えるようにしましょう。」

次はハヤテが、

「ソラ、僕は、そんなに高いものは買えないから、一応、服を買ってきた。」

「開けていい？」

ソラは、ハヤテが頷いたのを確認し、袋を開いた。中には、黒を基準とし服で、赤のラインが一本腕から脇、裾に向かって入っている服だった。それを見た、ナギたちは、

((ちょっと、誕生日に渡すには、趣味が悪くないか？))

と思っていたが、ソラが、

「僕の好きな色も、ちゃんと覚えていたんだ。それに、前見たときこの服買いたいと思っていたからありがと。ちょっと待っていて、今から着てくる。」

ソラは、自分が主寶ということを忘れ、着替えに出ていった。それを見て、ナギ達は、

「主寶が出てっつてどうするんだ？にしてもハヤテ、良くあの服を買う気になったな。小さい頃と、趣味が変わっているということは考えなかったのか？」

「ええ。ソラなら、変わってないと思いました。それに、お嬢様、

服というものは、着る人によって印象がだいぶ変わりますよ。」

ボタンと扉が開きソラが帰ってきた。

「どう？これ、似合う？」

ソラが帰ってきた事を確認しようと振り返った瞬間、ボンッ！という音が聞こえるかと思うほど、アテネ、ヒナギク、ミダス、そして理沙と美希は顔が赤くなった。他にも、ハヤテ以外、そこに居た人は、大小の違いはあるものの、顔が赤くなっていた。なぜなら、ソラは、髪型も変えてきていた。何時もは、少し長い髪を、後ろで縛っていたが、ゴムを外し、ストレートにしていたからだ。そしてその髪型は、とソラの美貌は、一種のホステスを思い浮かべるほどだったからだ。

(((服とソラ(君)が似合いすぎて、顔が熱くなるノノ)))

ミダスたちはそう思っていた。落ち着きを戻すまで、十分ほど掛かった。その間にソラはハヤテに言われ、いつもの服に着替えてきていた。

「次は、私たちだ！！ソラ君、」

美希はそういい一つのDVDを取り出した。

「私たちの、動画研究部の集大成だよー。」

泉がそういつのを聞き、何これ？とソラが思っていると

理沙が

「これにはハヤ太君とヒナギクの周りには言えない恥ずかしいあんなことや、こゝんなことが、入っているぞ!!」

と言った。最初は何を言われているのか分からなかったハヤテとヒナギクは、我に帰り、

「「ちよ、ちよっと何やっているんですか（やってるのよ）!!」

慌てて、渡すのを止めようとしたが、時すでに遅しく、ソラは貰っていた。

「「ソラ（君）!! それを見ずに僕に（私）達に、渡して頂戴。」

二人は声を揃えていったが、ソラは

「一度見たら、渡すね。」

にっこり笑い、答えた。それを見た愛歌は、

（私と同じかそれ以上に、いい性格しているわね。）

と思っていた。二人が落ち込んでいるのを他所にプレゼントを渡していた。

「丁度いいな。俺とサキからは、ポードブルDVDプレイヤーだ。何なら、設定は簡単だから今から、み」「ワタル君？そんなことしたら、どうなるかわかったものじゃないわよ（わかりませんよ）？」
「わ、わかった。分かったから、その手にもっている、木刀をしまつてくれ。ハヤテは首にかけている手をどけてくれ。」

ヒナギクとハヤテは、ワタルの言葉を聞き、瞬時に移動し何処から出したのか木刀を、ハヤテは手をワタルの首に押し付けていた。ワタルは、ヒナギクが木刀を、ハヤテが手を引くのを見て安心したが、その時、みんなが思ったことは

（ ）（ ）移動したのが見えなかった。どれだけこの場で見られることが嫌なんだろ。（ ）（ ）

と思っていた。

「と、とりあえず、誕生日おめでとすごございます。これで何時でもレンタルビデオを借りても見ることができるので、レンタルビデオタチバナにDVDを借りに来てくださいね。」

サキは、ヒナギクたちを見ないように、プレゼントを渡した。その時、一緒にDVDを借りに来て欲しいということをソラに伝え、さりげなく商売をしていた。さすがに、ヒナギクとハヤテの行動に驚き誰もそのことに気付かなかった。

「うん、さっちゃん。また今度、見に行かせてもらうね。」

ソラがそういったのを聞きサキは

「お待ちしています。」

「それじゃあ次は、私ね。」

愛歌は袋を渡し、ソラに

「簡単につけられるものだから、今から付けてきたら？後、髪型はオールバックにして頂戴。」

「うん？分かった。どっちをつければいいの？」

そう聞いたソラに、

「一度離してもう一回もう一方を付ければいいのよ。それじゃ、お願いね。」

ソラは、外に出ていったのを見て愛歌は

(ふふっ、あれを見た時の、天王州さん達の反応が楽しみだわ。)

この時、愛歌は自分の反応のことを忘れていた。先程の服の時にも、アテネたちには劣るものの、かなり顔を赤くしていた事を本人は気付いていないので当然といえば当然であるが、

「付けてきたよ。愛歌さん？」

ソラが入ってきたのを見て、愛歌はヒナギクたちの顔を見るより、先に固まってしまった。

(何で、こんなに私の顔は熱いの?)

「どうかした？」

何も話さない愛歌に向かってソラは言葉をかけた。

「な、何でもないわ。似合ってるわ。そうでしょ、ヒナギクさん？」

愛歌はなんとか意識を取り戻しヒナギクに聞いた。ヒナギク達はプシューシューという感じで固まっていた。

「ソラ君、そろそろ、次の人が渡すから、それ取ってもいいわ。」

これ以上見るのは危険だと思った愛歌はソラに向かってそう言った。それを聞いたソラは、

「分かったけど、今日、皆固まりすぎ、もっと楽しもうよ。」

と言ったが。皆の気持ちは一つだった。

（（（（だ、誰のせいで固まっているのか言い出せない。（（（（

「ほんなら次はウチやな。ウチからは…ウチの経営するメイドカフェ「ひまわり」の無料招待券や。」

それを聞いた千桜は、

（ちょっと、咲夜さん一体何やってるんですかー！！私が働いているんですよ！！そんなところにソラ君が来たら一発で私ってばれるじゃないですかー！！）

そう思い、咲夜にアイコンタクトをした。咲夜は、

（そんなに心配しんでも大丈夫やろ？この券は、休日は使えへん平日限定の券やし。）

そう返した。一応、納得した千桜は、それならいいかと考えた。そ

のことがのちのち間違いであったことは、また今度、書かれるかもしれない。

「有難う。咲夜さん、メイドカフェってというのは行ったことがないから、また行かせてもらう。」

「言い忘れとつたけど、それ、平日しか使えんようになったから、休日に行っても使えへんで。」

「そうなの？分かった。」

ソラと咲夜が、話終わったのを確認し千桜は、

「それでは、次は私だな。何にしようか迷ったが、私からは、目覚まし時計だ。たぶん、ソラ君には、必要はないと思ったのだけ。」

千桜から目覚まし時計をもらったソラは、

「有難う、大切にするよ。」

それを聞いた千桜は

「でも、ソラ君は寝坊しないだろ？少し遅かった場合は、天王州理事長が起こしてくれるだろうし他の物は多分皆が用意しているだろうと思っただけにしてみた。」

その話を、ミダスはクスクス笑いながら、

「アテネ、貴方有能みたいね。」

そう言った。ソラ以外の皆は何のことか分からず、首をかしげた。

「ミダス、貴方は意地悪よ。こんなところでそんなこと言い出すんだもの。」

「悪かったね。でも、知っている人は可笑しくって笑い出すわよ。」

ヒナギクは代表して顔を少し赤くしているアテネと、まだ笑っているミダスに

「アテネさん、ミダスさん、それにソラ君もどうかしたんですか？」

不思議に思っていることを聞いてみた。その言葉にミダスは、

「ああ、ヒナギク実は、「ミ、ミダス！あ「朝はアテネの方がかなり弱いんだ。何時もソラを、起こす側じゃなくてソラに、起こされている側なんだ。」

「えっ？」

ヒナギクはアテネの方を見た。アテネはいつもの堂々とした雰囲気ではなく、涙目でミダスを睨んでいた。それを見てから、次はソラを見た。

「アーたんは、朝が弱いのは本当のことだよ、自分で紅茶を入れて目を覚ましているから。でも、毎日起こしている訳じゃないよ。周りに一回ほど起こしてるだけ。」

「そうなんだ。」

「いい、ヒナギクたち、今ここで聞いたことを忘れることをお薦めするわ。じゃないと私が何をするかわからないもの。」

アテネはそう言った。それを聞いた、ヒナギク達は、聞いたことを忘れることにした。

「ソラ様、次は私が、渡しますね。私が選んだのはこれです。」

伊澄は、今までどこに隠していたのか、等身大の狸の置物をこちらに渡してきた。

「伊澄さん。あんた阿保かいな。誕生日に狸の置物って何考えとるんや?」

咲夜は、皆を代表して言った。

「えっ?でも、昔、誕生日にはその人を思っている分だけの大きさの狸の置物を贈るって咲夜が言ったのよ。だから狸の置物を買ってきたんだけど?」

「そんなこと言ったことあるようなないようになって伊澄さん、私の誕生日に毎回、狸の置物を持ってきたんはそういう理由やったからなんか?」

「ええ。」

「今でも信じてることが信じられへんわ。」

そう言った咲夜に伊澄は、少し声を落とすし、

「咲夜、また私に嘘をついたのね？」

咲夜はまずいと思ったのか話を変えた。

「伊澄さん、「伊澄、今はソラの誕生日の最中だ。」ナギ、助かった。やるなら、終わってからたっぷりお仕置きをするんだ。」なんてや！！助けてくれへんのか？」

「咲、今回はお前が悪い。だから罰を受ける。」

ナギの最終宣告に、他の皆は頷き、そして咲夜は落ち込んだ。

「それじゃあ再開しようか、で私とマリアだが、腕時計だ。それと、マリア「分かりました。理事長、ミダスさん、それにヒナギクさん、これは、ソラ君がもっている時計の女性用の時計です。」

「「いいのですか？」」「「いいの？」」

ソラの誕生日なのに、アテネたちは貰えるとは思っていなかったのに驚いて聞き返した。マリアは、ナギが何も言わないので、代弁した。

「その時計は、私とナギの感謝の気持ちでもあります。」

「感謝ですか？」

ヒナギクは何の事か分からないので聞き返した。

「はい。ソラ君がいなければ紫子様は亡くなっていました。でも、ソラ君に返せるものは今のところ何もなく、こういうふうに誕生日

を祝うしかないんです。ですが、それでは私と、ナギは感謝しても
しきれません。そして、帝様に、天王州さん達も、紫子様がお世話
になったことを聞きました。ヒナギクさんには何時も、ハヤテ君や
ナギが、お世話になっていきますし。そこで、少し形が違いますが、
同じ時計を贈りたいと思いました。今まで辛い思いをした、ソラ君
には幸せになつて欲しいんです。そしてその時計には、文字盤を見
てもらえればわかりますが、『Not own one, I
have people helping each other
つまり、自分は一人じゃない、助け合う人がいる、ということ彫
り込んであります。それを持っていて欲しいんです。』

そう言ったマリアは、真剣な目で三人を見ていた。

「「「分かりました（分かったわ）この時計は受取ります。」」」

それを聞きマリアは、一息付いた。

「なんか凄いことになっているね。」

ソラは三人を見てそう言った。ソラを見てヒナギクは、

「私からは、イルカのペンダントよ。」

鉄で出来た小さなイルカの飾りが付いたシンプルなペンダントだっ
た。

「有難う。ヒナちゃん、何時もかけるようにするよ。でも、そうい
えばアーたん、この学園ってネットクス関係ってしていてもいいの
？」

ヒナギクが付けている時点でいいのだが、当たり前前のことを聞いた。

「いいわよ。あまりにも大きいものは禁止しているのだけど、そのくらいの大きさのものなら付けていても大丈夫よ。」

アテネが答えたのを聞き、

「そっか、ならいつでも付けてるね。」

ソラはそう言ってヒナギクに笑いかけた。そこにミダスが、

「最後は私だな、私はこれだ。」

ミダスが見せたのは封筒だった。それを手に取り、ソラは他の皆と一緒に封筒の中に入っていた紙を、見てみた。そこには、婚姻届が入っていた。名前もちゃんと書いてあり、ハンコウを押すばかりになっていた。

「ソラ君！！いつの間に婚姻届なんて書いたの！？私…！！」

「ソラ！！ミダス！！どういうこと！！聞かせ…！！」

本気でアテネとヒナギクは怒っていた。そして続きの言葉を言おうとしたとき

「ミーちゃん、悪ふざけはよそっね。」

ソラが、少し声音を落としていった。ミダスはそこで、冗談が悪い方向にいつてしまったことに気づいた。なにせソラが本気で怒っているのだ。

「ソ、ソラ？御免なさい。軽い冗談で「やっていいことと悪いこと」があるでしょ！！」御免なさい。」

ミダスが本当に誤っていることを確認したソラは、

「ミーちゃん、怒鳴って御免なさい。」

そう言った。ヒナギクやアテネたちはソラが怒るところを初めて見たので驚いて何も言えなかった。

「私からの本当のプレゼントはこれだよ。」

ミダスは布でくるくるに巻かれた物をソラに差し出した。

「何これ？ミーちゃん、開けてみていい？」

「うん。普通は使わないものだから、飾りとして使ってくれればいいよ。」

ソラは了承を得てから開けた。中に入っていたのは綺麗な鞘に入った一筋の剣だった。

「ミーちゃんこれいいの？」

ミダスに聞いた。

「いいんだよ。もう使わないだろうしね。」

そう言った。

「有難う、大事にするよ。」

「さて、ソラに全員のプレゼント渡ったからこれからは料理を食べましょう?」

アテネは少し悪い雰囲気飛ばすように皆に声をかけた。

「それもそうだな。それじゃカンパニー」

「……カンパニー……」

ミダスが言ったことにヒナギク達は、返し料理を食べ始めた。

しばらくするとソラがテラスに出ていくのが見えた美希と理沙は泉に

「泉、私たちは少しソラ君と話してくるから、ヒナ達の相手を頼む」

そう言いテラスに歩いていった。

「ソラ君、誕生日おめでとう。」

自分一人だと思っていたためソラは、振り向いた時驚いていた

「美希さんに理沙さん、どうかしたの?」

「私たちは少し君と話したいと思ってな。」

美希はソラにそう言った。

「話したいこと？何？」

「君は人を好きになったことは有るか？」

理沙はソラにそう聞いた。

「そうだね。好きになったことは無いね。信用はしてるけど、信頼はしてない感じかな？今までのことがあるからね。」

それを聞き理沙と美希は、

「私たちは、今日とある人を見ていて、初めて人を好きになった。でも、何人もライバルがいる、美人な人や頭のいい人、そんな人たちを相手に私は、戦えるなんて思っていない。でも、この好きという気持ちは変えられない、こんなとき私たちは、どうしたらいい。」

ソラは口を開いたが、閉ざした何故かというと、

「簡単よ。諦めなければいい。「相手がどれだけ強くても、自分の気持ちが出われないと思っても、足掻き続ければ、光が見えるかもしれない。「見えなくても、そこまでの道は裏切ったりしない。」

後ろから、三人の言葉が聞こえてきたからである。

「ヒナ、天王州理事長、ミダスさん、私は、私達はソラ君のことが好きでもいいんですか？」

理沙は聞いた。それにミダス達は、

「好きでもいい？じゃない！！好きなら好きと言っただ。私達は、

ソラが誰を選んでも何も言わない。好きなら勝ち取れ。私が言えるのはそれだけだ。最後には私を選んでくれるとありがたいがね。」
そう言い中に入ってしまった。

「そっか、私達は、私達が動きたいようにすればいいのか……。ヒナ、天王州リ「アテネでいいわ。」アテネさん、今更だが、花菱美希はソラ君の事が好きだ、この気持ちは、諦めたくない！！絶対に勝ってみせる！！」

「私、朝風理沙も、美希と同じで、ソラ君のことが好きになった！私も負けたくない！！ソラ君の争奪戦？でいいのかな？に参加させてもらおう！！」

それを聞いた、ヒナギクは

「そう。私も絶対に負けないわ！！アテネさんやミダスさん相手にも勝ってみせる！！」

美希たちと同じように、宣言した。アテネは、笑いながら

「これを持っていなさい。」

二人に王玉を渡した。

「それは鍵になる。絶対になくさないようにね。」

そう言い、アテネはミダスのように部屋に入ってしまった。

「僕の事、皆忘れてない？」

ソラの一言で、ヒナギク、美希、理沙は、そういえばソラがテラスにいたことを思い出した。三人とも顔を真っ赤にしてテラスから部屋に入ってしまった。ソラは一人、残りさっきのことを考えていた。

「好き…か。僕にはまだそのことがわからないけどそういう気持ちの人がいることを覚えておこう。さて、夏とはいえ外は少し肌寒いな。僕もはいろう。」

そして、テラスには誰もいなくなった。

「にしても、昨日のことは吃驚したな、美希さんと理沙さんまで僕のことを好きって言うんだもん。」

ソラは、自分に好意を持っている人間のことを気付いていないわけではなかった。

「ま、あと数年あるんだから、真剣に考えればいいのだろうけど。つともう、学園に行く時間だな。アーたんはもう仕事に行っただし。行きますか。」

そう言いソラは自分の教室に歩いていった。ソラが教室で見たものは、理沙、美希も昨日のヒナギク達に渡された時計をしていたことであった。それを見てソラは笑ってしまった。

実は、昨日の誕生会が終わったあと、理沙と美希はナギの家に行き

「ナギちゃん、頼みがある」

そう言ったとき、マリアは、予想していたのか、二人に箱を渡してきた。

「その中には、時計が入っています。天王州さん以後五個同じものを作って置いて欲しいと誕生会の時に言われたので、至急で作りました。ですがお二人方が少しでもソラ君を泣かした場合は返してもらえません。ソラ君には三千院家と天王州家が付いていることを忘れないでください。」

真剣な顔でそう言ってきたが急に表情を変え

「それと私的には、二人の事を応援していますよ。頑張ってくださいね。」

と言っやりとりをしていた。

15話（後書き）

本当に誕生会の内容はやらないつもりでした。でも、やってみたくなくなってしまったものは仕方がないと思いやりました。

もの凄く後悔していますが、作ってしまったものはどれだけ拙い文でものしたいと思います。

内容とかなり関係ないものは載せませんが。

今回紫子は出ていません。

ナギがいるのとあまり三千院の本宅から出たくないのが原因です。プレゼントは後日手渡しされる事を紫子が出てくる違う話で書きたいと思っています。

英語は間違っていた場合済みません。

16話(前書き)

どうしてこうなったと思う作品です。

自分の中では最初の方が面白くできていると思います。

作ればつくるほどつまらなくなって言ってるようなそんなわけでは
しくお願ひします。

2011/10/15 11:00 内容を少し改稿

16話

「えー今日は、一日だけこのクラスで、学園生活を体験する人がいます。」

雪路は、教室の教壇の上に立ちいきなり言い始めた。

「お姉ちゃん、どういうこと？」

ヒナギクは、当たり前前的事を聞いた。

「学園長の指示で一人、学園生活をさせてみたい人がいるらしくて、このクラスになったのは、生徒会の役員がほとんど揃っているのもう一つ理由があるんだけど、そっちは直ぐにわかると思っわよー。私も、最初は吃驚したもので。」

そう言い、雪路は、

「じゃあ、入ってきてください。」

教室の扉が開くとそこにいたのは、

「じじい！なんでここにいる！学園生活を体験だと！ついに呆けたか。」

ナギはそう言った。そう、そこにいたのは三千院帝であったからだ。それを聞いたクラスメイトは、

「「「「えー！！！！ナギのお祖父さん！！？」」「」「」

学芸会のように、声を揃えて大声をあげた。帝は、

「違うわー！ナギ、僕はソラに会いに来ただけだ。何を思ってこの年になって学園生活なんぞ送りたくもないわー！ソラ、すまんな、抑えきれなかった。今日一日と約束をさせておるから頼む。」

「帝、頼むって何を？何となく予想だけはいったけど。」

帝は、ソラの言葉が年齢相応になっていることに気付いたが、アテネから事情は聞いていたので何も言わなかった。

「わかっているならいいのだからっ！！」

帝は急に倒れた、何かと見ていれば

「もー、お爺ちゃんったら、私が迷惑をかけるみたいなこと言って酷いと思わない？アテネちゃん。」

椅子を持った女性がアテネと一緒に立っていた。アテネは呆れたような顔で、

「今の行動を見ていると、貴方が来ると、騒動になるのは確定ね。怪我人だけは出さないでね。」

その女性を見てまたもやナギが、

「紫子母様、何でこんなところに？理事長まさかとは思っただが、ええ、そうよ。ナギさん、今、貴方が考えているとおり、紫子が今日一日、学園生活を体験してもらおうよ。」

「ナギ、久しぶりね。全く、本邸に遊びにきたら驚かそうと思っていたのに、全く来ないんだもん。お母さん、泣いちゃうぞ。」

全員が心の中で（（は？次はナギちゃんのお母さん？若くない？））

雪路は、どうしていいのか分からなかったが、アテネが助け舟を出した。

「紫子、知っている人もいると思うけど、一応自己紹介した方がいいんじゃない？私はここまでついてくるだけで、自分の仕事があるから、また昼にでも会いましょう。」

そう言い、紫子に椅子で殴られ気絶している、帝の足を持ち引きずって理事長室に帰っていった。それを見送ってから紫子は、

「えーっと、初めましての人は初めまして、久しぶりの人はお久しぶりです。ナギの母親の三千院 紫子です。今日一日だけど、よろしくねー。」

それを見たソラは、

「ゆうちゃん、よく来れたね。帝が絶対に駄目って言うと思っていたんだけど？どうやったの？」

「お爺ちゃんが、寝ているうちにヘリの中に入れて出発、学園にっいてから起こした。」

紫子の言葉に周りは唖然としていた。相変わらずだなとソラは思っ

ていた。

「そういえば、口調変わったってアテネちゃんから聞いたけど……うん。そっちの方が前よりかっこいいよ。あっプレゼント渡してなかったね。じゃあ、はい。これ誕生日プレゼント。」

そう言い小さい包を取り出し、ソラに渡した。

「ゆーちゃん。中を見ていい？」

紫子が頷くを見て、ソラは開けた。中に入っていたのは、シャーペンとボールペンだった。

「ソラ君は、まだ学生だから、勉強に使うものを送ったほうがいいかなと思って、純金で作ってもらったの。だから、壊れることはないと思うよ。お爺ちゃんからは、また違うものがもらえると思うよ。」

「有難う。ゆーちゃん、大切にに使わせてもらっね。」

そういうのを待っていたかのように、雪路は

「あのー、今授業中なんだけど、そろそろいいのかなー？」

「あつ。忘れてた。」

完璧に二人は忘れていた。ちなみに覚えていたのは雪路とヒナギクの二人だけだったりする。美希と理沙は、

(ミダスさんやアテネさん、ヒナもそうだけど、あんなに綺麗な

人もいるの?」

とショックを受けていたりする。それに気づいたヒナギクは、小さい声で二人に

「私もそうだけど、完璧な人間はいないわよ。美希や理沙にも、本人たちにしかない良いところがあるはずよ。落ち込んでいるのじゃなくて、自分のいいところを伸ばす、又は見つけるほうが、価値はあるわ。実際、ソラ君は、人を見比べたことってある?ないでしょ?本人をしつかり見てくれている。だから、大丈夫。」

そう言った。それを聞いた美希と理沙は、ソラは確かに自分たちとヒナたちを比べることは今まで一度もなかった事を思い出した。

(「落ち込む前にすることがある…か。そうだな、私達はあの日、ソラ君の誕生日の日に気持ちを伝えてあるんだ!!それに今更、引く気はない!!」)

「じゃあ授業を始めるわよ」

キンコーンカーンコーン

「終わったわね。まあいいか、範囲は終わらせてあるし。んじゃまあ、ソラ君、ヒナ、紫子さんのことよろしくね!。」

そついい雪路は職員室に戻っていった。雪路の授業でやったのは、帝の乱入、紫子の紹介、ソラにプレゼント手渡しぐらいである。

時間は過ぎ、放課後になり紫子の近くによって来たのは、ナギ、ハヤテ、ソラ、伊澄、ワタル、愛歌の六人である。

「紫子さん、お久しぶりですね。一応私の方には連絡が来ていたの
で、知ってはいましたが、本当に見るまで信じる事ができません
でした。」

「愛歌ちゃんのところには、連絡がいったんだ。そういえば……」

愛歌たちが話しているのを見て、ヒナギク達は、

（久しぶりに会うのだしそつとしよう。）

と考え場所を移そうとしたが、紫子はアテネから王玉を持っている
人間の顔までは知らないが、名前は聞いていたので、

「ヒナギクちゃんに美希ちゃん、それと理沙ちゃんはどこにいるの
ー？」

とソラたちに聞いていた。ヒナギク達は

（（な、何で私たちのことを知っているのだろ？）（）

困っているのをよそに、ソラは、

「あそこにいる三人だよ。アーたんから聞いたんだ。ヒナちゃん！
！ゆーちゃんが呼んでるよ！！理沙ちゃんと美希ちゃんも！！」

ソラから、声が掛かった。ヒナギク達はソラがいる場所、つまり紫
子のいる場所に歩いていった。他の生徒は、何が起きるんだろと見
守っていた。

「どうかしましたか？紫子さん。」

ヒナギクは、紫子に聞いた。

「少し聞きたいことがあって、ソラ君を好きって本当？」

いきなり、その話になった事に戸惑いながら美希は、

「本当のことです。この気持ちだけは、負けません！！」

「私達もそうです。」

理沙達が答えるのを見て、紫子は

「クスッ。アテネちゃんが言ったとおりだ。ソラ君がいても、本当の気持ちを隠さずに話すなんて、凄いな！。私も負ける気はないけどね。」

それを聞いたナギは、

「ちょっと待った、母様？今ソラの事を好きと聞いた？それは、どういう意味出だ？」

「人として、そして、男として…だよ。ナギ、私も政略結婚みたいなものだったんだよ。恋愛感情はなかったかな。」

少し暗い声で言うのを見てナギは、話すタイミングを間違えたと思っていたが、ナギが言いたいことはそのことではなく、

「母様、私は、反対はしません。それどころか、選ばれることを祈

っている。」

ナギの言葉に、周りはざわついた。

（（あのナギが反対せずに賛成した！！！！））

「ナギ、有難う。でも、どうして？貴方は、亡くなった夫との子供なのよ。」

「私は父のことは顔すら見たことがない。それに、母様には幸せになつて欲しい。それが、私の今の感情だ。ジジイも納得しているみたいだしな。」

そう言った。紫子はナギに小さい声で

「私は、ナギのことを応援しているからね。ハヤテ君の事好きなんでしょ？」

「なつ、なつ、なつ、なんで知っているのだ！！！」

隠しているつもりだったナギは、顔を真っ赤にしながら紫子の言葉に返した。はたから見れば、丸分かりなのだが、そこに

「ねえ、誕生日の時の貰った、メイドカフェひまわりに今から行くと思うんだけど誰か付いてくる？」

ソラは急に話を変えるために、昨日貰った券を見せながら言った。結果ついてくるのは、ヒナギク、愛歌、紫子、美希、理沙、アテネの六人になった。ナギはゲームをやりたいと帰り、ハヤテはそれについていった。泉は、補習をやっている。ちなみに、理沙と美希は

ソラとの時間を減らしたくないため、猛勉強し、平均点を上回る得点を出していたりする。千桜は、用事があるといい、ワタルはサキが心配と言って、帰っていった。伊澄は、途中までいたがいつも通り迷子である。

「ソラ君、咲夜ちゃんに行くっていう連絡してたの？」

紫子は、咲夜の店に行くために歩いている途中で聞いた。

「言っていないよ。平日なら何時でもいって言ってたから、連絡の必要はないかな？と思って、それに連絡したら、用事があっても来そうだからね。」

ソラは紫子にそう返した。そして店の前につき、中に入っていた時、ソラと紫子、愛歌以外の全員が固まった。なぜなら、

「お帰りなさいませー ご主人様ー お嬢様ー 席にご案内します」

千桜がいたからである。千桜本人は、

（何で平日とは、言ったけど今日来るんだよ！！ナギの母親が来たなら普通ナギの家に行くんじゃないのか！？バレた？いや、まだ何も言っていないからバレてはいないはず。なら、案内したテーブルには極力近づかずに帰るまで乗り切るしかない。）

かなり焦っていた。なぜなら今日は、本当ならば、バイトの日ではなかったからだ、一人急用でバイトに、来れなくなり、千桜も、紫子が来ているから今日は来ないだろうと思いきふに入ったのだからだ。

「ねえ、あれってハル子だよ？いつもと違ってメガネはしてないけど…」

ヒナギクは周りに聞いた。

「そうだな。何故こんなところでバイトしているのかは知らないが千桜だ。」

「さつき見たら、ネームプレートにハルと書いてあった。」

美希と理沙もヒナギクと同様、啞然としながらも、見る所はちゃんと見ていた。

「な、何かあったのかしら？千桜さん、困ったことがあったら相談に乗ってあげないと。」

アテネはどうして、こんなところでバイトしているのかを真剣に考えていた。

「それは本人に、聞いてみればいいんじゃない？話し辛い理由なら後でアーたんが、相談に乗るってことをいえばいいんだし。」

「そうですよ、見てしまったものは仕方がないんですし、理由をちゃんと聞きましょう。」

上から、ソラと愛歌が答えた。そこに先ほどとは違うメイド姿の人が、

「ご主人様、お嬢様、ご注文は、お決まりでしょうか？」

そう聞いてきたので、ソラが

「さつき、ここに案内してきてくれた人って呼んでもらえる？少し聞きたいことがあるんだ。」

にっこり笑いながら店員に聞いた。すると、店員は顔を真っ赤にし

「少々、お待ちください／＼／ただいま呼んでまいります／＼／」

スタッフルームに、走っていった。

「顔真っ赤にしていたけど、僕の顔見るのってそんなに嫌だったのかな？」

ソラはソラで見当違いのことを思っていた。それを聞いたヒナギク達は、

（（（（ソラ（君）あんな子が好きなのかな？何かイラつときた。））））

と考えていたが、

「ん？どうかしたの？皆難しい顔して、悩んでる顔より、笑ってるほうが綺麗だよ。」

ソラの爆弾発言？紫子たちは顔を真っ赤にさせさつきまで考えていたことを忘れていた。流石、ソラというべきか、本人は天然でやっているので気づいてない。すると、そこへ

「何かご用でしょうか？お嬢様、ご主人様」

千桜がやってきた。

「ハル子。何やってるの？」

（バレてるーーーー！！！！）

「やだなーお客様、いったい誰と勘違いさ。春風千桜。白皇学院生徒会書記。メガネが似合うクールな女の子。でしょ？」

愛歌の言葉を聞き

「いや違うんですよ。皆さん、これには…「用事っていうのは、メイドの仕事だったのか。かなり、可愛い服を着ているな。」

美希はあえて千桜の言葉を遮り話し始めた。

「それで、どうしてここでバイトしてるの？」

アテネが千桜に、話を聞いた。詳しく話を聞いたところ、父親の会社が倒産しそう。バイトしないといけない。バイトを探していた所、たまたま声をかけられたからバイトをしている。その後、融資してくれる人が見つかり、父の会社は倒産しなくなった。ちなみに基本は咲夜のメイド。ということだった。

「何か大変そうね。」

ヒナギクはそう答えた。それを聞いた千桜は、

「この話は、絶対に学校の人にはしないでください…!!」

「学園に内緒といっても…「ア」たんここにいるよ?」

ソラにそう返され、ガクつとへたり込んだ。それを見た紫子は。

「アテネちゃん?確か学園ってアルバイトって禁止じゃないよね。」

「そうね、そこらへんは生徒の自由にさせているわ。普通は、アルバイトなんてする人は少ないからね。」

「と、言う訳みただよ。千桜ちゃん。よかつたね。後はここにいる人に、話さないようお願いするだけなんだけど、ソラ君お願いね。」

ソラは紫子が何を、言いたいのかを理解し、千桜は、何を言うんだろ?と黙っていた。

「千桜ちゃんがここでアルバイトをしていることを言った人は…」
「言った人は?」

ソラが途中で言葉を切ったことを疑問に思った美希たちは、ソラに聞き返した。

「言った人は僕が嫌いになるよ。これは千桜ちゃんのプライドに係わることだからね。面白おかしく話していいことじゃない。」

そのことを聞き、全員が

()()(嫌われたくなんかから絶対に話せない。)()()(

愛歌は別のことを考えていた。

（ソラ君に嫌われる。これを聞いただけで、何で心が痛むの？私がソラ君に嫌われたくない？どうして？）

いままで思ったことのない感情に戸惑っていた。そして、全員が話さないことを約束したことによって、千桜は、

「それじゃあ、私は仕事に戻りますね。注文はどうしますか？」

「私とソラ、紫子はレモンティーで。ヒナギクさんたちはどうしますか？」

「それじゃ、私達もレモンティーで。」

アテネの言葉に理沙は代表して答えた。

「レモンティーが七個ですね。承りましたー。それでは、少しお待ちくださいね。」

そう言い千桜は戻っていった。

「普段の千桜とは、想像がつかないな。」

美希はそう言ったが、それは、全員が思っていたことだった。その後一時間ほどメイド喫茶で話したあと、解散することになった。千桜は、家に帰ってから、今日あったことを思い出し

（今日はソラ君が、いてくれて助かった。でも、どうしたのだろうか

？ソラ君のことを思うと顔が熱くなってドキドキする。今まで感じたことのない感情だから何かわからない。今度、咲夜さんにでも文句と一緒に聞いてみるか。(

ソラたちは、

「アーたん。」

「どうかしたの？ソラ。」

「千桜ちゃんって大変だね。色々あって疲れてないのかな？」

アテネは

(ソラは優しい子だから、でもソラ、貴方はもっと苦しい目に合ってきたのよ。これからも苦しくなる日が来るかもしれない。その時のソラが、そしてソラの心が、私は今から心配よ。)

と思っていたが、口には出さずに、

「そうね。でも、本当に苦しい時があれば、その時、手伝ってあげればいいのじゃない？本人が、千桜さんが、苦しい時には、ソラ、貴方が駆けつけてあげれば…」

(ソラ、貴方も苦しい時は、私達に頼ってもいいのよ、頼りすぎは悪いことだけど偶に頼るぐらいなら、止まり木くらいなら、私はいつでもなっあってあげる。でも、この言葉は、今言えることじゃない。)

「そうだね。その時は、絶対に駆けつけて力になってあげる。もちろんそれは、アーたん達も、だよ。」

「そう、じゃあお願いね。今日はもう時間も遅いし寝なさい。」
ちなみに、紫子は理事長室に帰ってきてすぐ、帝と一緒に本邸に帰っていった。

アテネはソラが寝たことを確認してから、帝との会話を思い出していた。

「ソラを操れるですって！！？帝どういうこと！！！」

「確定の情報ではないのだが、神をも操れる道具が葛葉家には、存在するらしい。使用は一回しか出来ないそうだが、今までその道具が使われたということはないらしい。」

「そんな道具があれば、対応のしようがないじゃない。何か使用できなくする方法はないの？それに、そんなものを使ったら使った本人の精神が危ないんじゃない？だから、葛葉家にだけ伝わっておるのだ。」
「どういうこと？」

「元々、葛葉は、神を降ろす巫女をしていたのだ。今はその儀式はできないが、血は残っている。つまり、道具を使用しても普通の人間より遙か精神は安定している。」

「じゃあ今のところは、ソラとキリカが合わないように注意してあげればいいのね。」

「ああ、それしか対策は立てようがないしな。すまん、アテネ、俺が表立って動ければ、いいのだが、今はそうもいかん。」

「そうね、情報ありがとう。にしても吃驚したわよ。紫子に連れてこられるなんて…」

「今回は、直接伝えかったから態とだ。」

「そう、じゃあ今日一日は紫子をソラと一緒に行動させるわよ。」

「ああ、そうしてくれるとありがたい。」

という会話を、昼までにやっていた。

16話（後書き）

ヒロインは9人で終わりにしたいと思います。

九人目は誰にしようか迷っている最中ですが、ちなみに全キャラを出したいと思っていましたが、無理そうです。

そこまで続きそうにないです。ということである意味ネタバレになっ
てしまいますが一回いつやり始めるかは分かりませんが事件を起
こし一度エンドさせてから番外編で全キャラを出したいと思います。

優柔不断な作者で済みません。

17話（前書き）

なんとか投稿が完了しました。

親が急に今日来て、部屋を見て掃除しろ。とのことで部屋掃除に一日かかってしまい、こんな時間に投稿することになりました。

2011/10/17 1:14 一部文字違いを改稿

昨日途中まで作っておいてよかったです。

改稿はいつも通り明日行います。

17話

紫子の学園生活、一日体験が終わってから暫くたったが、千桜はいまだにソラの事で悩んでいた。何故かというところ、普段なら直ぐに相談できる、咲夜に会えるのだが、咲夜は今、海外にいて連絡もつかない状態だったからだ、

「はあ、この気持ちはなんだろう。最初あったときはこんなことなかったのに、愛歌さんに聞くのもなあ、絶対に弄られるだろう」「あら、千桜さん。私がどうかしましたか？」

千桜は、隣に愛歌がいることに気付かないまま、独り言を呟いていた。そして、まさか聞かれているなんて思わなかったので、

「あ、愛歌さん！！吃驚させないください。」

そう返事を、返すしかできなかった。

「私に聞かれると不味い事ってなんですか？」

「い、いえ。なんでもないですよ。」

(ソラ君の事で悩んでいたなんて言ったら、絶対に弄られる。どうにかしてここを乗り切らないと！！)

黙っている千桜を見て愛歌は、

「ソラ君の事ですか？」

「何でわかつたんですか!!」

「やっぱりそうだったのですか。」

（かまをかけてみたらあつさり話しましたね。でも、困りましたね。私も、ソラ君の事で千桜さんに相談しようかと考えていたので、どうしましょう?）

愛歌に、かまをかけられたことに気付いた千桜は、

（しまった!!絶対に追及される。でも、愛歌さんに相談するのもいいのか?いや、絶対に駄目だ!!後で、どうなるか分かったものじゃない。）

と、考えていたが愛歌が何も話さないことを不審に思い愛歌の方を見てみた。そうすると、どうしてだろう、愛歌は、悩んでいるようだった。

（珍しいな、愛歌さんが何かに悩んでいるなんて。どうかしたのかな?）

千桜は、愛歌のいつもの行動との違いに戸惑いながら、

「愛歌さん?どうかしましたか?悩んでいるように見えますけど。私でよければ、相談に乗りますよ?」

（愛歌さんに、他の人には、秘密ってことでソラ君の事を最近よく考えている理由を聞いてみようかな?知っているかもしれないし。）

愛歌は、本当に戸惑っていた。

(ど、どうしましょう。ソラ君の事を聞きたいのですが、千桜さんも、同じことを思っているでしょうから…しかたありません。素直に言ってみましょうか。)

「実は、千桜さんには、悪いのですが、ソラ君の誕生日の日から、頭の中で、ソラ君の事ばかり考えているんです。」

「えっ？愛歌さんもですか？実は、私もなんですよ。それで、咲夜さんに、相談しようとしたのですが、海外に旅行に行ってしまったって、連絡がつかないんです。」

(愛歌さんもソラ君の事で悩んでいるなんて予想外だな。普段なら悩む事なんてあり得ない人なのに…)

「千桜さん？今何かイラツと来たのですが、何を考えていたのですか？」

千桜は冷や汗を流しながら、

「な、何も考えてはいませんよ。それより、この気持ちを、相談する人を探さないと、私たちは、一応、同じことを考えているのですから。」

話を変えるためにそう切り出した。

「話を変えられた気がしますが、今は、そうですね。千桜さんは、誰か他に相談する人は、いますか？私は、知り合いが多いわけではないので…」

そついい、聞いてきた。千桜も多いわけではない。しかも、

(番号を知っていても、ソラ君の関係者やヒナたちだから、相談できない。どうしよう。)

「私も、同じなんです。海外に繋がる携帯でも持っていれば、咲夜さんに連絡してもいいのですが…私の「では、私の携帯を、使ってくださいって結構ですよ。」本当ですか!!」

千桜は、愛歌から携帯電話を借り咲夜に電話した。暫くコールが鳴った後、咲夜は電話に出た。

「愛歌さん?どないしたの?」

「咲夜さん、私です。千桜です。」

「ハルさんかいな。愛歌さんの携帯で電話するうちゆうことは、なんかあったんか?」

咲夜に聞かれ、千桜は、自分の考えを、疑問に思っている気持ちの事を伝えた。

「えーつと、実はですね。この前、ソラ君の誕生会を開いたじゃないですか。」

「あー、あの後は、大変やった。怒る伊澄さん相手に、かなり逃げ回ったんやからな。誰も助けてくれへんし。で?それがどないしたん?」

咲夜が伊澄から逃げ回ったのは、誰もが自業自得だろと思っていた

が口にはせず、答えた。

「それから、昨日、メイドカフェにソラ君が来て、少し助けてもらいました。その後からなのですが、ソラ君の事が頭から離れないんです。顔も熱くなったりします。私は、何か病気なのでしょうか？」

咲夜は真面目に聞きとある答えをだした。

（これって、ハルさん。ソラの事好きになったんとちゃうか？どないしょ。）

「ハルさん、それって恋とちゃうか？顔を見ただけで、顔が赤くなったり、反らしてしまったり、脈拍が上がるやる。」

「こ、恋……ですか？今まで、したことがなかったので分かりませんでした。」

千桜は、存外冷静であった。何故なら、

「ハルさん、意外に冷静なんやな。普通もつと慌てるんとちゃうんか？」

千桜が冷静なことが以外で咲夜は、そう聞いた。

「いえ。今、目の前で普段の行動と全く違う行動をとっている人がいるのでそれを見たら冷静になりました。」

愛歌は、恋という言葉聞いてから、オロオロと右へ行ったり左に行ったりと動いていた。額には汗までかいている。

「誰か、おるんか？というか、まさか、愛歌さんか？」

「そうですね。私も、愛歌さんも初めての気持ちで戸惑っていたので、咲夜さんに、相談したんです。」

「そうなんか。」

（ハルさんが、好きになるんは、時間の問題やと感じてたんやけど、まさか、愛歌さんまで好きになるとは、世の中よお分からんなあ。）

咲夜は考えていたが、千桜の言葉で考えを打ち切り、

「相談に乗ってくれてありがとうございます。」

「相談というか、ウチの思ったことを言っただけで、やからホンマにあっているかは、わからんからなー？」

咲夜は、そう言って電話を切った。

（この気持ちは、恋だったのか。道理で今まで感じたことのない感情だったわけだ。でも、咲夜さんも本当に好きなのは、分からないって言うっていたな。他には誰に聞けばいいのか？）

電話が切れたことを確認し、

「愛歌さん、本当にその気持ちが恋なのかは分からないそうですよ。咲夜さんは言っていました。自信はなさそうでしたから。」

一応、愛歌が落ち着いたのを見て、

「他に誰に相談しましょうか。ヒナ達に、相談するのは絶対にダメなのはわかっていますが、そうになると「マリアさんに、聞いてみましょう。」マリアさんというの？白皇学院の元生徒会長をやっていた方で、今は三千院ナギさんのメイドをやっている方です。」

愛歌は、どこかに電話をし始めた。電話が終わってすぐに、

「迎えが来てくれるそうなので、ここで待っていてほしいといわれました。十分ぐらいかかると思うので、その喫茶店にでも入っていきましょう。」

千桜と愛歌は喫茶店に入って待っていた。待っている間、二人は何も言葉を交わさなかった。約十分後、車が来たのを見て会計を済ませ、二人は車に乗り込んだ。そして、三千院家につき、愛歌は、さっそくマリアに切り出した。

「マリアさん、実は、誕生会を行った後、ソラ君の顔が忘れられなくなつて、ソラ君に会うと凄く恥ずかしいのです。ドキドキも止まらなくて、私は何か悪い病気にでもなつたのでしょうか？」

「えーっと、私は恋愛をしたことがないので正確なことは言えませんが、それはいわゆる恋した状態にばっちり当て嵌まると思うのですが…。」

それを聞き、愛歌は、キューーーーーーという効果音が聞こえてくるほど顔を真っ赤にさせ、気絶してしまった。

「「愛歌さん！ー！！」」

「「どうやら、刺激が強すぎたみたいですね。千桜さんは、あんまり

驚いてないのですがどうしてですか？」

マリアは聞いてみた。

「なんとなく、咲夜さんに聞いた時には、そうなのかもしれない。とは思っていました。それに、目の前で自分より慌てている人を見たときって冷静になりませんか？」

「それは…そうですね。一応、愛歌さんの家には連絡をして今日は泊まっ行ってもらうことにして、千桜さんはどうしますか？泊まっついていきますか？」

「いいんですか？」

千桜は、マリアに聞き返した。

「ええ。部屋は有り余っていますから、一人や二人どうということはないですよ。」

「それなら、お願いします。」

「わかりました。それでは、電話はしておきますので、こちらへどうぞ。」

マリアは愛歌を持ち上げ歩いて行った。それを見た千桜は、あの細い体のどこに気絶している人を持ち上げる力があるんだろう？と思いつつ、ついて行った。案内された部屋は、二人部屋で、愛歌と一緒の部屋だった。そのことに安心していると、

「それでは、夕食の時間になりましたら、声をおかけしますね。」

それでは、といいマリアは、部屋を出て行った。十分ほど時間がたった時に、愛歌は、目を覚ました。

「大丈夫ですか？愛歌さん。急に倒れるので吃驚しましたよ。」

目を覚ました愛歌に千桜は、声をかけた。愛歌はボーっとしていたが、

「んっ…。ここは？何処ですか？私は確か、マリアさんにつ／＼／

「その様子だと、覚えているようですね。ここは、ナギの家の一室ですよ。愛歌さんの家と、私の家には、マリアさんが連絡してくれて、今日は、泊まることになりました。いきなりですが、愛歌さんは、ソラ君の事が好きなんですよね？」

「／＼／確かに、いきなりですね。そうですね、もう隠しても仕方がないですね。私はソラ君の事が好きです。千桜さんはどうなんですか？」

愛歌は聞かれたことを答えてから、千桜にも聞いた。

「そうですね。好きなのかな？と自覚したのは、この前の、メイドカフェで助けられた時ですね。」

「そうですね。ヒナギクさんたちには、いつ伝えますか？なるべく早い方がいいとは思っていますが…そんなに早く心の準備はできません。」

「私は、週明け、もしくは明日言いたいと思っています。いつまで

も言わないというわけにはいきませんし、それに、早めに言った方がいいと思いますしね。」

千桜は、かなり早い段階で自分の気持ちをヒナギクたちに言うことを決めていた。なぜなら、

「今のソラ君の行動を見ているとあり得ないとは思いますが、早く言わないと、答えを出してしまっただけでは遅いですからね。」

そう考えていた。それを聞いた愛歌は、

「確かにあり得ないとは、思いますが、確率は0ではない以上、千桜さんが言った通り、早めに言った方がいいかもしれませんね。ただ、問題として……」

「そうですね、理事長、ヒナ、美希、理沙に伝えないといけない。ということですね。ミダスさんと、紫子さんには、理事長から連絡がいくとは思いますが。明日、理事長に言いたいとは思っていますか……」

それを聞いた愛歌は、

（千桜さんは、凄いな。自分の気持ちを、あんなにも簡単に打ち明けられることができるんだもの。それに、怖くないのかしら？私は、断られると思うと凄く怖いのに……）

「千桜さんは、ソラ君に選ばれなかった時の事を、考えていますか？」

「ええ、でもそんなに変わらないと思いますよ。恋愛対象が、友達

に代わるだけだと思えますし…何より、ソラ君が、態度を変えるなんてところを、考えられません。」

確かに、そうだ。と思い。愛歌は、

「私も、明日理事長室に行きます。千桜さんだけでなく、私も、気持ち伝えてみよう」と、思います。それに、千桜さんには負けたくないですしね。」

「私も、愛歌さんに、負けるつもりはないですよ。ま、それを考える前に、理事長たちに勝つにはどうしなければならぬかを考えないといけません。」

二人で、明日は、どう切り出すかを考えていた時、マリアさんが入ってきた。

「失礼します。食事の準備ができました。」

もう、1時間もたっていたのかと、千桜たちは思い、話を中断しマリアについていき料理を食べた。ちなみに、食堂に行くまでに、

「あら、千桜さんに愛歌さん、どうかしたんですか？ここに来た時とは違い、何かを決意した目をしていますが。」

「そうですね。私たちも、ソラ君の争奪戦に参加する気持ちを、明日、理事長や他の人に伝えようという覚悟をしました。ですので、その違いだと思います。」

それを聞き、マリアは千桜と愛歌の方を向き、

「なるほど。そうでしたか。私は、ソラ君が幸せな限り、何も言うことはないです。」

そういい、食堂にしていたようでマリアは、先に食堂に入っていた。夕食を食べている際、ナギとハヤテがいないことに気付き千桜は、

「マリアさん、綾崎君とナギはどうしたんですか？」

「ナギとハヤテ君なら、伊澄さんの家に泊まりに行っています。どうしても、今日考えなければならぬ、キャラクター？がいるそうなのでとは言っていました。」

マリアの言葉に、愛歌は、

「ゆっくり休みたいでしょうに、こんな時に、お邪魔してすみませんでした。」

無理をしているのではないのかと思い、誤った。その言葉にマリアは、

「ナギ達が急に伊澄さんの家に泊まることが確定したので、作ってしまった料理をどうしようか悩んでいたの、ちょうどよかったです。」

そう答えた。だが、料理を温めなおしたのは、2度手間ではないのか？と千桜は思ったが、何も言わなかった。

「マリアさん、遅くなりましたが、先程は、相談に乗ってくれたのと部屋まで運んでくれて、有難うございます。」

「いきなり、倒れたのは驚きましたが、それにしても、ソラ君は、会う人会う人おとして行っていませんか？誰か心に決めた人がいる場合は何も思わないようですが…」

マリアは思っていたことを口に出した。が、それは当たっているとえば当たっているのです、二人は何も言わなかった。そして、二人は料理を食べ終わり用意された部屋に、戻っていった。

「にしても、まさか愛歌さんが誰かを好きになるなんて…世の中、吃驚することばかりですね。帝様に報告してみたらどうなるのでしょうか？まあ、ソラ君の幸せを願っているのですから、何も言わないでしょうけど…」

実際、言ったとしても、本当に、

「ソラの幸せが一番だ。愛歌には悪いが、今回ばかりはソラを優先させる。」

としか言わない。

部屋に戻ってから、愛歌と千桜は寝ようとしたが、寝れず、結局話していた。

「愛歌さん、明日、一緒に行きますか？それとも別々で、行動しますか？」

それを聞いた愛歌は、

「二人で行きたいのは山々なんだけど、これは、個人の問題だから、

一人で行く方がいいと思うのよ。どちらが先に、理事長に会いに行くかなんだけど、そこからへんはどうする？一応、理事長 ヒナギク 美希・理沙という順番か、ヒナギク 美希・理沙 理事長という二通りの道があるのだけど、千桜さんはどちらがいいですか？」

「それでは、私は、理事長からまわりたいと思います。」

「千桜さん？いいのですか？」

「ええ。ヒナとは何時でも言おうといえば言えますし、ただ、問題としてソラ君の事で何か喧嘩するかもしれないませんが、そこはなんとかするしかないです。」

そういう千桜に愛歌は

「分かりました。それでは、明日の放課後に行きましょう。」

覚悟はもう決めた。という風に愛歌は言葉をしめ、眠りについた。相変わらず、明日の事で緊張して寝むれなかったのは、当たり前のお約束であった。

17話（後書き）

次の話は、流れでわかると思いますが、アテネたちとの話です。

今回はソラの出番はありませんでしたが、次回はある筈です。

絶対とはかけないので済みませんが、少しは出したいとは思っています。

18話（前書き）

実は18話は、昼の二時頃には出来ていました。

どうしてこんな時間に投稿する羽目になったかというところ、色々ありますが、親友にBLOODY MONDAY LAST SEASONの一卷を買ってきてもらったのですが、前二作の内容を忘れていたので読み直していました。先程読み終わりましたが…

あと、ハヤテのごとくの最新刊が明日の事を忘れて買ってきてほしいと言ってしまう29巻が3冊になってしまいました。

他には会社の上司が様子を見に家に来てくれました。

2011/10/19 1:06 一部文を追加、改稿

今日、私こと、春風千桜と、霞愛歌は理事長たちに認めてもらうため、そして宣戦布告？をするために行動していた。私は、理事長から話していくため、理事長室に向かっていた。心の中は心臓が飛び出そうなほど脈を打っている。そして理事長室の前につき、

（ついに、着いてしまった。でも、今から引き返すことなんてしたくないから、それにここで引き返したら、後で来た愛歌さんに悪い）

千桜は、覚悟を決め理事長室の扉をノックした。中からは、天王州アテネ、白皇学院の理事長を務める女性の声が聞こえた。

「どうぞ、開いています。」

「失礼します。」

千桜は、そういい理事長室の中に入っていった。アテネは、予想外の人間が来たことに少し驚いていたが、すぐに気を引き締め、

「千桜さん、どうかしたのですか？何か生徒会で急な要件でも、できたのですか？」

と聞いたが、違うことは、アテネが一番理解していた。何故なら、生徒会の用事ならば、書記である千桜ではなく、副会長の愛歌か、生徒会長のヒナギクが今まで来ていたからだ。

（用事ではないわね。つまり、私に何か言いたい事が有って来たというのが一番有力なところね。）

ある意味、驚異的な洞察力でアテネは見抜いていた。

「今日来たのは…理事長に言いたい事が有り来ました。」

「そう、それは悩んだ末、ここに来たのよね？いいわ。お茶を用意するから少し待っていてくださる？ゆっくり聞くわ。」

そついい、アテネは紅茶を入れに部屋を出て行った。そして、アテネが出て行ったことで気が緩んだのか一息ついた、そこで千桜は、自分がすごく緊張していたことに気付いた。暫くすると、紅茶と小さいケーキを持ってアテネが部屋に入ってきた。

「それでは、千桜さん、大切な話というのを聞きましょうか。」

そうアテネが切り出したので、千桜は素直に

「ソラ君の事なのですが…「ソラがどうかしたのですか？」いえ…この前の私のバイト先に来た時のこと覚えていますか？」

数日前に、何人かで千桜のバイト先にいるとは知らずに行った時の事を、アテネは思いだし

「ええ。そういえば、あの時は、済みませんでした。」

アテネが誤るのを見て、千桜は、

「誤るのは、自分です。何故かと言うと、ソラ君の事が、そのアルバイトに来たとき、私が、助けて貰いましたよね。その時から、「ソラの事で頭がいっぱいになって顔が熱くなったりする…ですか？」

はい。どうやら、ヒナ達と同じように、好きになってしまったそうです。」

「そうですか。ヒナギクには聞きましたが、ソラの事を裏切る行為は、自殺行為、ということをおわかっていますか？分かっていないようなら、説明しますが、三千院家当主、三千院帝、天王州家当主、天王州アテネ、の二人が、ソラの幸せを願っているのです。裏切りを行ったとたん「分かっています。もし、裏切り行為をしたのなら、私自身、覚悟は出ています。」そうですか、」

「そういい、急に雰囲気が変わり、アテネは笑いながら

「それなら、いいのです。ちなみに先程は、少し脅しも入っています。試したようで済みませんが、何故試したかという点、まだ、ヒナギクさん達には言っていないませんが、ソラを狙う人間が出てきたからです。命を狙っているのか、違うものを狙っているかは、まだわかりません。ですから、ソラの事クラスメイトとしても、好きな人の一人としてもよろしくお願いしますね。」

「分かりました。微力ですが、力になります。」

千桜は、

（ソラ君って、危ない綱渡りをしている状態なんだな。今の天王州さんの言葉から聞き取ると、ソラ君は、狙われていることを知らないと思っていた方がいいのかな？）

推測通り、アテネはソラに伝える気はなかった。伝えてしまった方が楽なのは確かなのだが、変にソラが警戒しては、予想通りの行動を起こさずに、急な犯行になってしまおうとどうしようもなくな

るからだ。

アテネは、千桜が何を考えているかを予想し、聞かれる前に答えた。

「千桜さん、たぶん考えていると思いますが、ソラはこの事を知りません。」

「やはり、そうでしたか。先程の天「アテネでいいわ。ソラの事を好きになつた人には、私の名前を預けているから、これで学院生活以外は対等でしょ？」そんな事を考えて名前を預けていたんですか。話は戻しますが、アテネさんの話を聞き、予想はしていました。伝えていない理由も、だいたい、分かります。」

千桜のその言葉に、アテネは驚きながらも笑いながら、

（頭の回転は、千桜さんが、生徒会の中では一番早いのかもね。私の言葉だけであそこまで予想できる人なんかいないもの。）

そう思っていた。千桜は、

「それでは、まだ行かないといけないところがあるので、そろそろ失礼します。」

そういい、席から立ち上がった。

「そう、ヒナギクさんや美希さん達のところにも行くのですか。」

「はい。ヒナには悪いのですが、譲りたくないですから、それと、アテネさん、今日は一日、理事長室で、過ごすのですか？会議など

は、今日はないですよね？」

「ええ。今日は会議も何も無いから、ここで書類整理をしていると思うわ。それがどうかしたの？」

アテネは千桜の質問の意図が分からずに聞いた。

「今日、たぶんもう一人ここに来ます。ですから、その時いないと可哀相じゃないですか。」

(もう一人？誰かしら？)

考えていたが、埒が明かないと思いきえるのをやめ千桜に、

「そうですね。分かりました。それでは、極力ここを離れないようにします。」

それを聞き千桜は理事長室を出て行った。その頃、愛歌は、生徒会室で、ヒナギクと話をしていた。

「ヒナギクさん、少し話したいことがあるのですが、よろしいですか？」

愛歌の方からヒナギクに話したい事が有るということは、今までそんなになかったので、ヒナギクは、首をかしげてから、

(どうしたんだろ、愛歌さん、何時もと雰囲気少し違うような、何か決意したような表情だけど、聞いてみればわかるからいいか。)

と、思い。愛歌に

「珍しいですね、愛歌さんの方が相談してくるなんて。どうかしたんですか？」

「実は、ソラ君の事なのだけど…」

愛歌から最初に出た言葉に、少し驚き、

（なんで愛歌さんがソラ君の話をも何かあつとのかしら？でも今日は、普通に授業を受けていたし。）

「ソラ君が「私も好きになってしまったみたいなの」えっ？そ、それは、冗d「冗談でこのことは言わないわ。本気です。」

ヒナギクは少し焦りながら

「そ、そうですね。人の事を好きになるのに、冗談では言いませんよね。済みません。」

そう言いながら、心の中では

（愛歌さんが、ソラ君の事が好き？なんでそうなったか想像はできないけど、今の愛歌さんは、本気で言っている。なら、私も自分の気持ちをぶつけないと。）

考えていた。それを愛歌は、ヒナギクが落ち着くまで少しの時間待っていた。

（やっぱりヒナギクさんでも、慌てますよね。私もまさか好きになるとは思っていませんでしたから。）

「愛歌さんは、どうしてソラ君の事を好きになったのですか？」

ヒナギクは落ち着きを取り戻し愛歌に聞いた。

「ヒナギクさんは、私が可愛い子を見ると、苛めたくなるってこと知っていますよね？それで、この前の誕生日の時、ソラ君や天王州さんが赤くなつた顔を見たくなくてソラ君に、イヌミミとネコミミをつけてもらったのです。その時のソラ君の笑顔がいつまでたっても忘れられなくてそこで、咲夜さんと、マリアさんに相談しこの気持しが恋ということを知りました。」

「そ、そうなんですか。でも、私は誰にでも言っているのですが、愛歌さん相手でも負けませんよ。」（いや、私愛歌さんの性格なんて知らなかった。）

愛歌は、

「えっ？それだけ？私はもつと責められると思っていたんですけど……。」

「愛歌さん、私もアテネさん、ミダスさん、紫子さんに、話しました。直接話したのはアテネさんだけですが、二人は認めてくれました。簡単言えば、私もソラ君を奪おうとする人の一人なんですよ。今の場合は、アテネさんとの生活を奪おうとしています。でも、アテネさんは、ソラ君が選んだ人なら、誰でも任せられます。と言っています。ですから、私が責める理由はないんです。」

それを聞き愛歌は、

「ヒナギクさん達は優しいんですね。他人の事をそこまで信頼できるなんて、私もいつかそういう日が来るのでしょうか。」

「何を言ってるんですか？もうなってるじゃないですか。私やこれから美希たちのところに話をしに行くんですよ？急に何も宣言さずにな奪われるのなら、確かに責めます。でも、話に来てくれまして。それは、私たちの事を信頼しているのと同じですよ。」

「そういう考えもあるのですn」失礼します。「千桜さん、予想より早かったですね。」

愛歌の言葉の途中で入ってきたのはアテネのところに行っていた千桜だった。千桜は、もう話し終わって理沙たちのところに行っていると思い入ってきたので、まだいることに驚きながら、

「ええ、一応今日は理事長室に一日いると言っていましたので、愛歌さんも探さなくて済みましたね。」

二人が何の話をしているのかわからないヒナギクは、黙って見ているが、愛歌は、

「ヒナギクさん、私は伝えたいことを言ったので、次は理沙達のところに行ってきます。」

それでは、と言い愛歌は部屋を出て行った。それを見たヒナギクは千桜に

「どうかしたの？愛歌さんも急に来てソラ君の事が好きって言うていたけど、まさかハル子もってことは…」「それを今日、伝えに来たんだ。アテネさんには今、伝えてきた。」「…えっ。本当なの？」

「ハル子もか。理由を聞いてもいい？」

ヒナギクに言われ、アテネに言った事と同じ言葉を言った。それを聞いたヒナギクは、

「そうなんだ。じゃあこれからは友達でもあり、ライバルでもあるんだね。」

「アテネさんの時も思ったのですが、ちょっと優しすぎですよ？先にソラを好きになっていたのに、もし私がソラ君と付き合うことになった場合、大丈夫なのですか？」

「愛歌さんにも同じように聞かれたから答えだし、ハル子も思っていると聞くけどソラ君が誰かを好きになったからって、対応が変わると思う？」

昨日、千桜が愛歌に言った言葉を言われ、そこで自分も愛歌と同じくらい不安になっていたことに気付いた。

「ありがとうヒナ、実は昨日、同じことを私は、愛歌さんに言っているのです。かなり、不安になっていたんですね。ところで、前から気になっていたのですが、ヒナはソラ君の事を好きになった理由ってなんですか？」

自分も話したのだから、ヒナギクにも話してほしいと言うように千桜は聞いた。ヒナギクは、少し顔を赤くさせながら、

「少し失敗をして、連れてかれそうになったところをソラ君に、助けてもらったのよ。」

千桜はそれを聞き、

(どうしたら、失敗して連れ去られそうになるんだ？)

と思っていたが、口には出さずにヒナギクを見ていた。

「 もういいじゃないノノハル子は、王玉ってもらったの？ 」

ヒナギクは恥かしいので、話を変えるために、王玉の話聞いた。

「 これですか？ 確か、部屋を出る前に渡されましたね。 」

そう、千桜が理事長室を出る前に、

「 千桜さん、無くさないように肌身離さずに、これを持っていなさい。それはヒナギクさんも私も、美希さん達も持っています。 」

と渡されていたのだ。

「 これは、王玉というのか？ アテネさんは条件を話してくれたけど、他の事は話してくれなかったからな。詳しく聞かせてもらってもいいですか？ 」

眼鏡の端をクイツとあげ、眼鏡を光らせヒナギクに千桜は聞いた。

「 ハル子、なんか怖いわよ。とは言っても、私も名前くらいしか知らないわね、あとそれは、扉の鍵でもあるみたいだから無くしたら絶対に駄目よ。それくらいかしら。 」

期待した以上の情報が得られなく千桜は、少しがっかりしていた。

「美希達の所にも行くんでしょ？それなら、一度、生徒会室に来なさいって伝えてくれる？」

千桜は、ヒナギクに言われ

「分かりました。伝えておきます。それでは、また。」

そういい、千桜は出て行った。それを見たヒナギクは、

（いつかはそうなるとは思っていたけど、予想より早かったわね。にしても愛歌さんとハル子がか…ソラ君のそばにいと、何が起るか分からないわね。）

そう思っていたが、口から出た言葉は一つだった。

「ハル子も愛歌さんも今日はいないから、仕事が終わらない。ソラ君にでも来てもらってまた、手伝ってもらおうかな。」

そういい、ヒナギクはソラに電話した。ニコールめでソラは電話に出た

「ヒナちゃんどうかしたの？まだ、生徒会の仕事の最中だと思うんだけど…」

ソラは時間を見たのか、そう言ってきた。

「今日は少し用事があったて、ハル子と愛歌さんがいなくて、仕事が終わらないのよ。そこで、お願いんだけど「今から、手伝いに行

くね。「ありがとう。」

「時計塔ガーデンゲートの窓ってあいてる？」

ソラは何故かそんなことを聞いて来たのでヒナギクは、

「ええ、あいているけど、どうしたの？」

「じゃあ、あと二分ぐらいで着くと思うよ。」

後ろから凄い風音が聞こえている事には気付いたが、何故、窓が関係あるのかな？と、窓の方を見ながら、ヒナギクは思っていたが、次の瞬間、スタッという音が聞こえ、ソラがその位置に立っていた。ソラは、

「ナギちゃんの家において、学院まで送ってもらった時に、電話がかかってきたから、近道でへりを時計塔の上空で停止飛行してもらって、飛び降りた。」

ヒナギクの疑問にソラは質問される前に答えたあたりさすがである。その後一時間もたたないうちに仕事は終わってしまった。その頃愛歌は、美希と理沙、泉の所にいた。

「美希さん、理沙さん、泉さん三人とも生徒会の活動時間中ですよ？どうしてこんなところにいるんですか？」

にっこり笑いながら三人に声をかけた。それを見た理沙たちは、

（や、やばい。私たちは久しぶりにサボったが泉はいつもどこかに行っていていなかったな。それにあの笑顔は不味い！！）

と美希と理沙は思い泉は、

（美希ちゃんたちもたぶんサボってるだろうから怒られるのは一緒だよ。）

「泉さん？何故いつもあなたただけ来なかったのですか？後ろの二人はちゃんと来ていましたよ。」

「えー！美希ちゃんも理沙ちゃんも行ったのー！？」

「ああ、私たちは今日、久しぶりにサボっただけでいつもは行っただぞ。泉はいつもどこにいたんだ？」

「私は、二人の事を探しながら散歩をしてたよ。」

それを聞いた愛歌は、

「そうですね泉さんは、先に生徒会室に行ってください。今日は、私と千桜さんは少し用事があったて今は、ヒナギクさんしかいませんよ。それと、二人には少し、話したい事が有るので…」

それを聞いた泉は一目散に生徒会室の方に走って行った。理沙と美希は、アイコンタクトで

（私たちって何かやったか？）

（私も分からない。）

会話をしていた。そこに愛歌が

「お二人はソラ君の事が好きなのですよね？」

その言葉を聞き美希が

「ああ、私はソラ君の事が好きだ、だから最近、生徒会も余りサボらなくなっただけ授業もちゃんと受けている。それは、理沙も同じだ。」

「私もそして千桜さんも、ソラ君の事が好きになってしまったので、報告をしに来ました。ああ、大丈夫ですよ。恋愛に関しては「ジャブニカ弱点帳」は使いません。それを使うのは、私のプライドが許しません。」

その言葉を聞き、理沙達は顔を真っ青にしていたのが治りかけた。

「ヒナには、言ったのですか？」

美希は聞いた。それに愛歌は、

「今さっき、話をしてきました。理事長の所は最後に行く予定だったのでこれが終わったらすぐに行きますよ。」

「なら、私たちを後回しにして、理事長のところに行つて来たらどうかな？それにソラ君の事を後から好きになった私たちは、ヒナたちが納得しているのなら何も言わないですし。あとから生徒会室で、証拠を見せてもらえばいいです。」

そういい、理事長のところに行くのを促した。

「ありがとう、それじゃあ行ってくるわ。」（証拠って何のことかしら？）

王玉のことを知らない愛歌は、疑問に思いながら理事長の所に向かった。それを見て理沙は、

「まさか、愛歌さんがソラ君の事を好きになるとは思ってもいなかった。」

「そうだな、でも、後で千桜も来るようなことを言ってたから少しここで待っていようか。」

二人はその場から動かずに談笑をしていた。そこに、噂をすれば何とやらと言つ訳で、千桜が歩いてきた。

「美希さん、理沙さん、少し話したいことが「ソラ君の事が好きだつて?」「ど、どうしてそのことを知っているんですか!?!?」

美希達が知っていることに驚き、声を大きくして聞いた。

「さつき愛歌さんが来たんだけど、その時、少しそういうことを言ってたから、本当かどうかを聞いてみた、まあ、すぐに分かったが…」

「そうなのですか。それで、理沙さん達は、何か言うことってありますか?」

美希と理沙は少し考えてから、少し笑い

「アテネさんに何か貰った?ペンダントみたいな小さなネックレス

「なんだけど？」

「これですか？」

千桜は、首に紐をかけたまま、制服の胸元の所から取り出した。それを見て

「私たちから言うことは何もないな。アテネさんがそれを渡したってことは、認められた証拠にもなるからな。それじゃあ、生徒会室にでも行こうか。行かないと愛歌さんが怖いし……」

それを聞き、千桜は、

「ヒナに呼んできてほしいと言われたので、来てもらう予定でしたが手間が省けましたね。それでは、行きましようか。」

三人は、話しながら時計塔に向かって歩いて行った。そして愛歌は、アテネと話していた。

「愛歌さん、貴方も千桜さんのように、ソラの事を好きになったのですね。」

最初から確信したように愛歌にアテネは聞いた。

「そうです。理由を話した方がいいですか？」

「いえ。たまたま生徒会室に用事があったとき、話を聞いてしまったのでいいですよ。ただ……」

急に室内の空気が下がった。そして体が震えてきた事に驚きながら、

アテネの言葉を待った。

「体が、万全じゃないのでしょうか？調べさせてもらいました。その体でソラの近くにいるとソラが心配して思い通りに動けなくなることは考えたことはありませんか？」

アテネはそう言葉をつづけた。それを聞いた愛歌は、

「確かにそうです。でも、それとソラ君を好きな気持ちは関係ありません！！」

震えを飛ばすように言ったつもりが、思ったより声を張り上げていたことに、愛歌は自分自身、驚いていた。それを聞き、

「そうですか、安心しました。もし私の言葉を最後まで否定しなかった時は、渡すつもりはありませんでした。これを、持っていきなさい。」

そういい、王玉を愛歌に渡し、

「それでは、生徒会室に行きましようか。私も少し用事がありますしね。」

アテネは、歩いて行った。それに愛歌は、着いていき生徒会室に行く途中、千桜たちとも会い、愛歌は、美希と理沙に王玉を見せ笑いあい。生徒会室に入った、そして中にソラがいることに気付き愛歌と、千桜は固まってしまった。するとアテネが

「ソラ、千桜さんと、愛歌さんが言いたいことがあるそうよ、私達はこのにいるからベランダで話を聞いてきなさい。」

そうだった。そのことに驚いた、千桜と愛歌は生徒会室の中にいる人を見たがこちらを見たにやにや笑っているだけだった。そこで、二人はこのためにソラがここにいて、他のメンバーもいることに気付いた。

「ハルさん、愛歌さん何かあったの？」

「実は、今ここにいる人たちには認められたのだが、私はソラ君の事が好きになっちゃったみたいなんだ。」

「私もそうみたいです。ソラ君あなたが好きになりました。答えはちゃんと考えて出してくれればいいので、私の気持ちを今、伝えておきます。」

二人は、ソラにそう答えた。聞いていたソラは、

「今は……まだ僕は、誰も選ぶことができない。」

それを聞き、千桜と愛歌は顔を曇らせた、この時、盗み聞きしていた、泉以外の人も一緒に曇らせていた。

「でも、いつか、絶対に自分の答えを見つけて愛歌さん、ハルさんそして、そこで盗み聞きしている人、全員に伝えに行く。それまで、辛いとは思いますが、待っていただけますか？」

ソラが盗み聞きしていると言ったときガタツゴトツと音がして、ヒナギク以外の全員が出てきた。それを見てソラは、

「人に流されない、自分の意見を必ず考えてきます。ですので、今

は御免なさいとしか言えません。」

そう言った。アテネは、ソラに近づき頭をなでながら

「何時までかかってもいいのよ、ただ、ちゃんとした答えを出さない。ソラが本当に悩んで出した答えなら、私は、いえ、私達は何も言わない。それでも私を選んでくれれば、嬉しいのだけど、これはここにいる全員が考えている事よ。」

「アーたん、皆、ありがとう。」

ソラはアテネの言葉に、そう答えた。そこに千桜と愛歌は、

「盗み書きしてたんですね。それに何時こんなことを考えたんですか？」

「考えたのは私よ、ちょうど用事があつたときに、来てみたらソラがここにいたから、それなら、この前は、美希さんと、理沙さん、ヒナギクさんの公開告白だったから、次は、千桜さんと愛歌さんで思ったのよ。」

さらつとアテネが答えたので、愛歌たちは追及できずに終わってしまった。そして、次の日には、愛歌と千桜も時計をしていたのは、驚くことではない。ちなみに他の生徒は、生徒会の役員がつける時計と、勘違いしているため、何か騒がれることはなかった。

18話（後書き）

今回の話は、また千桜と愛歌がメインです。

ソラの出番は最後の方に在りましたが、自分で考えたキャラクターなのですが無茶苦茶になってます。

へりからノーロープバンジーで飛び降りるとか絶対に無理です。

となりましたが、面白く読んでいただけたらと思っています。

19話（前書き）

始めてからあつと今にもう19話です。

改稿は明日できればいいなと思っています。

今回は作るのが難しかったです。

黒幕をどうするか悩みましたが、結局、内容通りにしました。

黒幕は、まだ他にもいます。

登場はいつになるかわかりません。

2011/10/21 0:45 一部文の追加、改稿

「時計もあと一つだな。ハヤテ、ソラはフラグ体質なのか？」

「多分そうなのでは？僕もここまで早く時計が一個になるとは思っていないんですけどし…」

勿論、時計を持っているのは、ミダス、天王州アテネ、桂ヒナギク、三千院紫子、花菱美希、朝風理沙、春風千桜、霞愛歌の八人だ。ハヤテとナギがソラの事を話している時、違う場所では、伊澄が、ソラのことを好きな八人を呼んで話をしていた。伊澄曰く、初穂の未来視で、何か嫌な予感がするとのことで、直ぐに集まって話を聞いた。

「今日、集まってもらったのは、ソラ様のことです。初穂お母様が、未来視をしたそうなのですが、未来が見えず、その代わりこの文が見えたそうです。」

そう言い伊澄は、紙を二枚全員に配った。一枚目には、

『王玉、拾個、揃い、壊れしとき、悪が空から降り立ち悪に染まる』と書いてあった。アテネ、ミダス、紫子以外の全員は、王玉の個数を知らないため、十個って事は、あと二つあるんだ。と考えていたが、ミダスが、

「ちょっと待って、伊澄、これは本当に出たことなのか？何かの間違いでは「それは、ありえないと思います。」そうか…」

伊澄が返した言葉にミダスは、そう言い、悩んだように、目をつぶって何かを考え始めた。アテネと紫子も何かを考えているようだったが、それを不審に思った愛歌は、聞いた。

「ミダスさん達、どうかしたのですか？」

「いや、普通なら、考えられないことが書いてあったから、どうしたものかと思つてな。アテネたちもそう思つたでしょ？」

「考えられないこと？」

ヒナギクは、聞き返した。その言葉に、次は紫子が答えた。

「ヒナギクちゃん、実は、アテネちゃんが管理してたのだけど、王玉は九個しかないはずなのよ。だから、十個つていうのは本当ならばありえない数字なの。ここでの十個の意味が違う意味ならばいいのだけど……そのままの意味だと、おかしいことになる。」

それを聞いた、伊澄を含め全員が

「……………は？」「……………」

声を揃えて口に出した。これには流石に伊澄も驚きを隠せなかった。それもそのはず、今まで、鷺ノ宮初穂は、一度も未来視を外したことがなかったからである。これは、何時もおっとりしている、初穂に聞くより、色々詳しい銀華ぎんかに聞いたほうがいと判断し、呼びに行くために、部屋を出ていった。最初、伊澄が外に出たのでどうかしたのか？とみんな思っていたが、銀華を連れてきたので、相談してみた。

「お婆様、この未来視と違いがあるのですがこんなことあるのですか？」

「初穂の未来視に違いがある？そんな馬鹿な？」

銀華は、疑問に思ったが、アテネ達の言葉を聞き、間違いのことを知った。理由はさすがの銀華も知らなかったが、予想を付け話し始めた。

「いいか、これは予想だが初穂の未来視は、あっているかもしれない、何故なら、本当に九個とは限らないからな。ただ、お主たちが十個ある内の九個は持っている、それなら、あと一つは、他の誰かアテネ達は、予想がついておるだろ？その者たちの手にあるか、王玉そのものが、何かと繋がりを持ち、意思を持つておるかもしれん。ただ、そうなった場合は、一番危険なのは、何かわかっておるな？ソラが、持っている可能性も捨てられないがな…それに意味が違うとしたらその場合は、おてあげだ。」

そのことを聞き、ミダスは顔色を悪くしながら、

「どちらにしろ、ソラの命が危ないということになるのか。アテネ、そろそろここにいる人間にも、話しておいたほうがいいのではないのか？それに、ソラは王玉を持っているのか？」

アテネは、銀華の言葉に悩み、ミダスの言葉に決意したように目を開き、話し始めた。

「そうですね、何時までも隠せることでは有りません。質問は後で受け付けますから、ひとまずは、聞いてください。先にミダスの質問に答えますが、ソラは確実に持っています。何故かということ、

子供の頃、寝巻きになるとき下着以外、脱いでしまう癖があったので、その時、確認した時があります。庭城に入ってきたので、不思議に思っただけかめたことがあります。その癖は治っていますが…そして、千桜さんには、この前少し話しましたが、ソラは、狙われています。命かもしくは、それ以外のソラに関する何か、なのかはまだ分かっていません。ですが、確実に何か仕掛けてくることは確実です。何か質問はありますか？」

それを聞いた、美希は

「ソラ君は誰に狙われているのですか？そして、ソラ君はそのことを知っていますか？」

「ソラを狙っているのは…」「アテネ、私が話す。」

ミダスがアテネの言葉を切り話すのを変わった。

「先に後の質問を、答えるとソラはこのことを知らない。知らない方がいいこともある。変に警戒して相手に、予想外の行動を取られるよりはマシだろうと私達が判断して、ソラには伝えていない。そして、ソラを狙っているのは、今の所分かっているのは、ソラの両親、そして、葛葉キリカ、暮里詩音、の四人だ。他にもおるのだが、分からなかった。そして、葛葉家には、その代で、一度だけ人を操る術を持っていることも判明している。」

理沙達は、

「ソラ君の両親が今更何をしに？元学院長の目的は？」

「ある意味、最悪なこと…だな。ソラの過去のことを思い出せば分

かと思うが、多分また、同じことをするのだから、次は心まで操って…そして、キリカは…アテネお主に復讐することであるうな。そのために、綾崎家の人間と手を組んでいる。」

「やっぱりそうなのね。」

アテネがまだ知らないことを、ミダスは知っていたため、先にアテネに伝えた。他の皆の反応は、当たり前のように怒っていた。それはそうだろう、ここにいる人は全員ソラの幸せを願っているのだから、

「ソラ君から聞いて最悪な両親とは思っていたけど、そこまで人として最悪なんて、絶対に許せないわ。」

ヒナギクは、怒りながら、皆の方を向き言葉を発した。そして、それは他の人も一緒であった。そこに、伊澄と銀華が含まれているのは、驚いていたが、普通、子供を持っている人間は怒ると思いが直した。すると銀華は何を思ったのか、

「ソラの護衛なら、僕たち、鷲ノ宮家がやってもいいぞ。一応、少しは対応できると思うしな…」

そして、一応、伊澄がソラの護衛？をすることに決まり、次の、もう一枚の紙を見てみた。そこには、先ほどとは違い、

『希望が絶望に、九つの光の輝き、黒に染まる時、支える輝きにより光を戻し、九の光になり、空からの悪、討ち滅ぼす。』

紙を見たが、先ほどとは、真逆のことが書いてあることを、不審に思い千桜は、銀華に

「銀華さん、これってさつきと真逆の言葉ですよ。九の光、つまり王玉の持ち主、私達のことだと思つのですが。違いますか？」

「頭の回転が早い娘があるな。そうだ、間違つてはいない。ただ、客観視だけはするな。ここに書いてある言葉が何の拍子で変わるかわからんからな。」

そう言い、銀華は、用事があるといい部屋を出ていった。千桜は、

「ただ、あと一人は誰になるか？戦闘は皆無の人が私を含め少ないので、どうしますか？それに、先ほど、銀華さんには、聞けなかったのですが、空からの悪、確実にソラ君が操られてしまう運命にあります。その時、伊澄さんまで操られてしまった場合のことです。私達は、最悪の状況も今の内に考えておいたほうがいいのかもありません。」

部屋にいる全員に聞いた。ミダスは紫子とアテネに

「そうなのよね、でも、戦いについては、宛がないわけじゃない…
そうでしょ？アテネ、紫子」

そういった。

「ええ、私は、マキナがいるからこっちに来てもらえればいいわ。戦闘なら、私より弱いけど、ヒナギクさんより強いはずよ。一時期、ソラの実験台にさせられていたから…さすがに可哀想だったけど、強くなったからいいかなと思つて、放置したのは私なのだけ…」

それを聞き皆が

(普通に言えることじゃないだろ…自分の執事をなんて目に合わせているんだ?)

と思っていたが、口には出さずに、聞いていた。紫子は、

「私は、この中で唯一、ソラ君と戦うことができる人間だしね。勝つことは出来ないけど、何もなければ負けることもないよ。ただ、ソラ君相手に私は戦えないかな。アテネちゃん後で説明しておいてくれる?それに、この戦いは、情報戦でもあるから、私たち全員が、ソラ君を守ることになるよ。」他にも、守る方法はいくらでもある出来ることをすればいい。」

紫子の言葉を遮りミダスは言った。その時、紫子の携帯電話がなった。相手は帝であつたため直ぐに電話にでた。

「お爺ちゃん、こんな時に電話なんて、どうかしたの?」

紫子は、帝に聞いた。帝はさっきまで、ソラと話していて、ソラに言われたことを紫子に話した。それを聞いた紫子は、小声で話してから電話を切り。皆の方を見た。アテネは、

「どうしたの?帝から電話ってことは何かあつたの?」

と聞いた。それに紫子は、

「ソラ君が私達のことを疑問に思っているらしい。私達といつても、ここにいる全員ではなくて、私、アテネちゃんミダスちゃんの三人みたい。何かピリピリしているって言っていたみたい。予想より感情に敏感になつてみたいだね。」

紫子はそう話した。その後は、談笑をしてから、ソラに何かあった場合はすぐに連絡しあい、極力、ソラを一人にしない事を話し合い、帰ることになった。正直な話、ミダス、紫子、アテネは、ソラを一人にしないというのは、できないだろうと考えていた。流石、ソラの事を昔から知っているだけある。そして話している最中ソラは、帝と電話で話していた。

「帝、最近アーさんと、ゆーちゃんが少しピリピリしているように感じるのだけど、何か心当たりはない？」

ソラは、少し雰囲気が変わったことを敏感に察知し、疑問に思っていたが、本人たちに聞いても答えてはくれないと思い、帝に聞いていた。勿論、帝は知っているが、答えることは出来ないため

「ソラ、すまん。僕は、よく知らないのだ。頻繁に紫子と連絡をとっているのは確かなのだが、聞いても教えてはくれなくてな…」

帝は、ソラに嘘をついたことに対し少し心が痛む感じがした。それを感じ、帝は

（僕も、丸くなったな。前なら、三千院家を大きくすることを優先に考え、大切なものを失ってから気づいていたのに、今は誰かの心配をしている。ソラにあったことまで、僕に影響をもたらすとは…恐ろしいものだ。）

そう思っていた。この時、ソラは何か違和感があると思ったが、気のせいかと思いい何も言わなかった。

「じゃあ、何かわかったら優先して教えて。これから、少し散歩に

行こうと思っっているから。」

それを聞き帝は、

「分かった。何を隠しているかは、分からないが、こっちでも、調べてみる。ソラも無理はするなよ、無理して倒れたら、悲しむのは一人じゃない。」

「わかった。無理をしない程度に、休みながら、いろいろ調べてみるよ。それじゃあね。」

そう言いソラは電話を切った。帝は、電話が切れたことを確認すると、直ぐにアテネに連絡をした。だが、アテネは電池がなくなったのか、留守番電話に切り替わった。それを確認すると、直ぐに次は紫子に電話をした。こちらは直ぐに繋がり

「お爺ちゃん、こんな時に電話なんて、どうかしたの？」

「ああ、今すぐに紫子、ミダス、アテネに話しておいたほうがいいと思ってな。ソラが三人のことをさっき電話で聞いてきたぞ。最近ピリピリしているけど何か知らない？と言うように、何か理由は分からないが気づき始めていることは確かだ。」

帝の言葉に紫子は驚きながら、

「お爺ちゃん、何かソラ君に話した？」

話していたら、不味いと思い、帝に聞いた。帝は、

「いや、何も言ってはいない。こんなことソラ、本人には、口が裂

けても言うことができない。何か儂のことで疑問には思ったかも知れんが、今のところは何もボロは出していないはずだ。」

それを聞いた紫子は、

「ありがと、こっちでもそれに対する対策は立て用がないけど、一応、決まったことは、キリ力対策として、鷺ノ宮家の人が護衛に付いてくれるみたい。いつも一緒とは言えないけど、それでも、対抗できる人がいるのといないのでは、だいぶ違いが出てくると思うから。それに、ある意味、適任と言えば適任だしね。こっちで決まったのはそれくらいかな？」

帝に決まったことを話した。ちなみに紫子と、帝が使っている携帯電話は、絶対に盗聴不可、ハッキングで入ることもできないほど嚴重なものなので、普通に話しても外に情報が漏れることはない。話すことが終わったのか、紫子は、電話を切った。そしてその頃、ソラは、野々原と一緒にいた。

「野々さん、久しぶりです。鍛錬は順調ですか？」

「ソラ君では、ありませんか。お久しぶりです。鍛錬の方はお坊っちゃんがいるので、そこまで進んでいません。ですが、暇でしたら、ここで一勝負していただけますか？」

ソラに野々原は、試合を申し込んだ。ソラは、断る理由もないので、普通に受け二人は、道場まで、歩いてきた。道場では、剣道部が活動していたが、野々原とソラの二人が入ってきたのを、副部長が、確認し野々原が近づき、少し話をした、すると、副部長は部員に集合をかけた。何故かというと、

「これより、野々原さんと、綾崎が試合をするそうだ。その間、我々は、見取り稽古をし、二人から何でもいい技を盗め！！盗めなくても参考にできることがあるはずだ！！なんでもいいから見つけ出せ！！」

そついい、試合を邪魔しない程度に離れ、正座をして二人の試合を見るように指示をだした。この二人の試合は、正直、参考にも何もならないことを、まだ、知らない。それもそのはず、常人の人間が見えないほどの速さで動くからである。副部長は、二人の真ん中付近に立ち、審判を務めた。

「それでは、両者とも宜しいでしょうか？」

二人が頷くのを見てから

「始め！！」

始まりの合図を放った。最初二人は動かなかつた。二分、三分と時間が過ぎ、ちょうど五分を過ぎた辺りで野々原が攻撃を仕掛けた。ちなみにこの勝負は、純粋な剣道の勝負であるため、二人とも、身体能力だけで戦っている。そして、野々原の攻撃が当たると思つたとき、ソラは一步横に動き頭をそらしながら、野々原に向かい胴を放った。野々原の攻撃は、ソラに当たらなかつたが、野々原もソラの意図に気づき、直ぐに後ろに下がつたので、胴を受けることはなかつた。そして二人は、また向かい合い。

「野々さん、前より強くなりましたね。」

「そつ言っていただけだと、嬉しいですね。坊っちゃん的生活以外にも鍛錬の時間をつくりましたから、それでも、まだ追いつけてい

ないのは分かっています。私と同じくらいの力でやってくださっていますよね。」

確信しつつ野々原は聞いた。ソラは、気づかれたと言うふうには、

「やはり、気付きましたか。そうですね、まだ本気を出すほど、野々さんの体は作られていません。ですので、いつか、本気を出しても対抗できるようになってくれると、僕も嬉しいですね。それでは、少し稽古をしてあげます。来てください。」

そう言い、強さを野々原より少し強いくらいまで、上げた、野々原は心の中で、

(やはり、敵わないですね。本当にお強い方だ。)

と思いつつも、ソラに向かって攻撃した。次も、面を狙っていたためソラは、

(こんなものなのか？普通、一度通じないと思ったら、色々試すために違う攻撃をしてくるとおもったんだけどな？)

そう思っていた。が次の瞬間狙いが面ではなく逆胴に竹刀が来るのが見え

「なっ!!」

驚きはしたが、一応、止めることができた。野々原は、予想通り進んだことに、驚きながら次はそのまま小手を狙い攻撃した。それは、流石にソラも予想をしていたのか小手への攻撃を避け、その瞬間を、狙い面を放った。その面は綺麗に入った。あまりの綺麗さに、審判、

そして周りで見えていた部員、試合をしていた野々原も見とれてしまった。試合は終わり、野々原は剣道部の副部長にお礼を言った。すると、

「また、試合をするときは剣道場を使ってください。私たち部員も、いい刺激になりました。逆にお礼を言わないといけなくらいです。有難うございます。」

それを聞き困惑する、ソラと野々原がいたが、気を取り直し、

「また、借りる時があるので、その時は、宜しくお願いしますね。」

ソラがそう言うと、

「いつまでもお待ちしています。それでは、私も続きをしないといけないので失礼します。」

野々原たちは、剣道場の出入口で話していたので、副部長は、中に入っていく、部員に指示を出し始めた。それを見て、二人は一度頭を下げ道場から出ていった。

「にしても、悔しいですね。やはり、ソラ君には、勝てませんでした。」

野々原はそう言った。それを聞いたソラは、

「野々さんの逆胴は本当に吃驚しましたよ。まさかあそこで放つてくるとは思いませんでしたし、それとあそこでは、小手ではなく、もう一度胴を狙うか、危険を承知で、面を狙ったほうが勝てましたよ。僕は、少し面を打つタイミングをずらしていたので、判断ミス

でしたね。」

それを聞き、試合中の違和感が何かを知った。そして、正門まで来たとき、外からアテネが来るのが見えソラは、

「アーたん、どこ行ってたの？」

「ソラ、それに野々原さんまで、二人はなにかやっていたの？」

アテネの言葉にソラが答える前に、野々原が、

「剣道で、ソラ君に一勝負してもらいました。最後は完敗でしたが、私としては経験が詰めたので良かったです。それでは、私はもう帰らないといけないので、ソラ君また、試合をしましょう。」

最後にそうソラに伝え、野々原は去っていった。ソラはアテネがどこに行っていたのかももう一度聞いたがアテネは、

「大切な会議があつて少し出ていたの。終わったから、散歩をしつつ学院に帰ってきたところで、ソラと野々原さんにあったのよ。」

そう言った。ソラのことで出かけていたことは、まだ伝えることができないと思い、会議ということにしたのであった。

19話（後書き）

黒幕は今の所綾崎夫妻、葛葉キリカ、暮里詩音です。

綾崎 涼母親の名前を勝手に考えました。

後は、野々原を出してみました。話がなくなったときは野々原との試合の話になりそうです。

予想外に文字数を稼げたので…

20話（前書き）

今回は前半がハヤテとソラの話です。

後半はオリジナルの新キャラが登場します。

ひとまず改稿は今日中にできればいいと思っています。

2011/10/22 20:32 一部文を追加・改稿

話は少し戻り、ソラがハヤテの所に泊まった時の話である。ソラが来ていたがハヤテは、ソラの事、謝金の事を気付いてあげることができず、ソラを苦しませたことに、罪悪感を覚え何も話せなかった。そこにソラが、

「ハヤテ、こうして会うのは、久しぶりだねー。元気だったー？」

聞いてきた、ハヤテは、何でこんなことを聞くのだろう、恨み言の方が先に出るはずなのに…と考えていたが、

「うん、一応ね。結局、あの親達には僕も売られちゃったし、もう合うこともないとは思っけどね。ソラは…」

そこで、一旦言葉を切った。ハヤテは僕のこと恨んでない？と言おうとしたが、言うのが怖かった。自分は、恨まれてもおかしくないと思っただけ、嫌われたくないという思いも、同じくらいあった。ハヤテは意を決したように、ソラに

「ソラは…僕のことを恨んでない？」

ついに聞いてしまった。ハヤテは、何を言われてもおかしくない、我慢するんだ。と考えていたが、ソラは予想外に、

「恨んでないよー。」

そう言った。ソラの言葉を聞きハヤテは、驚きながらも信じる事ができず

「嘘だ！！絶対に恨んでる。本当のことを言ってもいいんだよ。今、ここには二人しかいないんだし。」

そう、決めつけていた。ソラは、ハヤテが考えていることを感じ取ったのか、

「決めつけは良くないよー。それにー、恨んで、罵詈雑言を言われたほうが、楽なんだろうけどー。それは、甘えだよー。」

ハヤテが何か言う前にそう言った。そして、

「それに、ハヤテも、同じ目に合ってるしねー。だから、たいして、何も思っていないよー。」

それを聞いたハヤテは、

「ソラは強いね。僕なんか、心が弱いから、どうしても嫌な方向に考えちゃうし、駄目だな。」

言った。ソラは、首をかしげ、

「十分、ハヤテも強いよー。普通あの事は、聞いて来れないしねー。それを話して、しかも、自分の心が弱いつて認めてるー。それはー、心の強い人しか、できない事だしねー。それにーアーたんたちが、助けてくれたー。ハヤテには三千院ちゃんがいたようにねー。それなら、もうこの話はなしにしよー。」

そう言った。そして、ソラが、ハヤテに

「学校で、普段、何してたか教えてー。今まで一度も中学に通ったことがなかったからー。」

「分かったよ。と言っても、普段がバイトばかりだったから、あまりというか二人ぐらいしか友達もいなくて、何処にも遊びにも行かなかったしね。つまらないよ、バイトの話とか。」

「バイトに話って何？聞きたい。」

ソラの言葉にハヤテは仕方ないな。と思い話し始めた。

「時期は、今くらいで、少し熱くなってきたときだったのだけど、その日は安全なバイトをしていたんだ、安全といっても工事の旗振りだったから、車には気を付けていたんだけどね、一緒にバイトしていた源さんっていう人なのだけどその人と話しながらバイトをしていたんだ。」

「坊主、こんなところでバイトってお前、学校はどうした？」

源は、当たり前前のことを聞いてきた。それにハヤテは笑いながら、

「学校は通っていますよ。ただ、事情があってバイトしなければいけないので、それに、今は夜ですよ？学校の時間は関係がないじゃないですか？」

ハヤテは源の質問に答えた。それを聞き、

「世の中、終わっているな。あんたみたいな子供がこんな時間に働かないといけないなんて」

源さんは一応ハヤテが高校生であることを知っているので、そう言った。ハヤテも、確かに家は、ある意味例外がいる家だからな。と思いつつ、笑い言葉を濁した。休憩時間に入り、皆が移動するのが見えたのでハヤテも移動しようとしたとき、着物を着た女性が、工事現場に歩いていくのが見えたので、ハヤテは源に、

「少し気になることがあるので先に休憩に行っていてください。自分もすぐに向かいますので……」

「あつおい！！何なんだ？彼奴は……」

ハヤテは源の呼び止めようとする言葉を振り切って、走っていった。少女との距離は一定の距離までは詰めることができたが、そこからは、距離を詰めることができなかった。そして、遂には見失ってしまった。一応、周りに人が居ないことを確認してから休憩所に戻っていった。その後、時間まで仕事をしているとき、

「坊主！！危ない！！」

との声に反応して振り返ったとき、安全柵が倒れてきてハヤテは避けたとき、車に轢かれた。相変わらず、その時には、体は尋常じゃないほど丈夫になっていたの、掠り傷一つですんだ。相変わらずの不幸体質である。

「っていう出来事があったんだ。その着物の少女は、伊澄さんってことは最近知ってことなんだけどね。」

そして、借金のことを説明し、ナギのお小遣いで、支払いをしてもらって、今、ナギの執事をしているということを一通り話した。ハヤテは、ソラに何をしていたかは聞かなかった。ソラも聞いている

だけで話すことはなかった。話が終わったあと、ソラが

「そういえば、ハヤテってたしか、運動神経いいんだよねー？いま、僕と試合したらどっちが勝つかなー？」

ワクワクという文字が背景に浮かぶほどソラは笑いながら聞いてきたハヤテは、小さい頃から自分が、一度もソラに勝負事では、勝っていないことを思い出したが、今の自分ならば、勝てるかもしれないとも思っていた。その認識は、次の日に甘かったことを知ることになる。ハヤテが強くなっている以上、ハヤテより辛い境遇にあったソラが、ハヤテより弱いわけはなかった。

「ソラ、今は出来ないけど、お互いに本気が出せる場所ができれば、戦おう。正直、僕は、負けたくないしね。」

ハヤテはソラに、宣戦布告をした。

「そういえば、ソラ、イクサ兄さんのこと「知らない。そんな人のことなんか知らない。」そう、分かった。そういえば、今日からソラも、白皇学院の生徒だけど、校舎の中ってわからない所ってある？」

ソラにイクサの事を聞いてから、ハヤテは自分が失態をしたことに気づいた。なにせ、ハヤテは、同じ目に合っているが、イクサは何処か困っている人を、助けにあちこち回っているのだ、一番辛いつきにきてくれなかった。もう一人の兄のことを忘れたと思うのは、当たり前のことかもしれない。そして、話を変えるために、白皇学院のことを聞いた。

「アーたんに場所を一つ一つ説明してもらったから、大丈夫。散

歩もしてるから、だいたいの設備と部屋はどこにあるかは覚えてよー。旧校舎の方もだいたい覚えてるからねー。」

それを聞きハヤテは、心の中で

(やっぱりソラは、凄いな、僕はまだ、覚えきれてない部屋もあるのに、完璧ではないにしても、一応は覚えてるんだ…)

思いのほか、ハヤテの話していた出来事で、時間を取られたのか、時間は四時三十分であった。時計を見たソラは、

「僕はそろそろ帰るねー。まだ一時間ほどあるから、休んだほうがいいよ。倒れたら、悲しむ人がいることを忘れないでねー。」

そう言い、ソラは門から外に出て帰っていった。

その日から数日たち、そしてクラウドとソラが戦い？もう一度クラウドが本邸に出張する日が来た。

三千院本邸

「にしても、また急に話きたな。何があったというのだ。」

クラウドは、数日前にも、本邸に来ていたので、何故自分が呼ばれたのかは知らなかった。そして、知らなかったことはある意味、幸せで、とてつもない不幸であった。何故かというと、ソラがクラウドと戦ったことを、帝、そして執事長の早島の二人が電話で聞いていたからである。その状況は、帝に電話したときに遡る。

ソラはアテネには何も言わずに、帝に電話していた。

「おお、ソラか、今日はどうした？何か欲しいものでも…？」

そう帝がソラと話しているとパンツという音がした。帝は何事かと見てみると、紫子がそこにいて、

「ソラ君からの電話がここに来た気がする…！」

と言っていた。帝は驚きながらも

「紫子、お前は本当に人間か？何だ？その驚異的な予知能力みたいなもの「お爺ちゃん変わって…！」ぐはっ…！」

紫子は帝を押し倒し電話の受話器を取った。帝は、受身を取ることができずに床に勢い良く、頭をぶつけ気絶した。それを見ていた、早島は、慣れているのか、帝を背負いベットに運んでから、また戻ってきた。

「ソラ君、久しぶり、元気だった？」

「元気だよー。ゆうちゃんも、声から分かるけど元気そうだねー。帝って大丈夫なのー？」

ソラは帝のことが気になり聞いた。それに紫子から少し受話器を借りスピーカーに切り替えてから、早島が

「ソラ様、お久しぶりです。早島ですが、帝様は大丈夫ですよ。時々ありますが、今は、寝室に運んでいますので、直ぐに目を覚ますと思います。」

そう答えた。それにソラは、

「お久しぶりでーす。早島も元気そうでー。そういえば、この前、三千院ちゃんの家遊びにいったんだけ「ナギお嬢様の家に、ですか？」そうだよー。「ナギって元気だった？」うん！ハヤテもいたし元気そうだったよー。それで、この前、行った日に屋敷の柵を飛び越えて入ったときにクラウシさん？と戦ったんだー。なんでもハヤテや三千院ちゃんとマリアさんに何も聞いてないって殴りかかってきたー。適当に手を出したら気絶しちゃったけどねー。」

ソラが話終わる前に、紫子と早島は黒いオーラを出し始めた。テレビ電話ではないので、相手の顔が見えなかったのが双方共に、よかったと言えるだろう。早島は直ぐにスピーカーから切り替えてから紫子に、

「紫子様、私は、あの馬鹿をここに呼ぶ準備を始めますので、失礼しますね。」

そう言ってから、またスピーカーに切り替えた。紫子は目で頷き、それを見てから、

「ソラ様、どうやら私に急用が出来たので、今日はこれで失礼しますね。また静かにお茶でも飲みながら話しましょう。」

「そうなんだ。それじゃあ仕方ないねー。ケガとか病気には気を付けてねー。」

「有難うございます。」

それでは、と言って早島は、部屋を出ていった。早島が部屋を出たのを確認し紫子は、

「クラウドには攻撃されただけ？他には何もされなかった？」

他に何かソラに対して言っていないかを確認した。ソラは何を言われたかを答えて言った。

「……………って言うことぐらいかなー？」

全部聞いた紫子は、怒りかけながらも、ソラには悟られないように話し始めた。

「そうなんだ。そういえばねこの前、卵割ったら二つ黄身が入ってたんだよ。あれには吃驚したなー。」

そう言いながらも心の中では、

(クラウド、オシオキじゃ済まないことをしないといけないみたいねフッフ、どうしてあげようか…)

かなり黒いことを考えていた。その後世間話をして、帝が戻ってくるまで話してから、電話を切った。その後、クラウドのことを紫子が話した。

「なんだと！！それは本当か！？」

「ソラ君が嘘を付くと思う？」

「クラウドを直ぐに呼び出せー！！」

最初は半信半疑であったが、紫子の言葉に納得し、帝は怒った。直ぐに呼び出されることになり練馬の別宅に連絡を取った、だが連絡に出たのはマリアだった。

「珍しいですね、帝お爺様、どうかいたしましたか？」

「クラウドはおるか？直ぐに変わって欲しいのだが…」

帝の言葉にマリアは、確か今日は、少し用事があつて、休みをとっていたはずと思い

「今日、クラウドさんは、少し用事があると言っていて休みをとっていませんよ。至急に伝えることがあつたとしても、戻ってくるのが、明日の昼ごろになるので、その時に伝えましょうか？」

「いや、また電話する。マリア、聞きたいことがあるのだが、ソラにクラウドが殴りかかったというのは本当のことか？」

帝の質問に、

「不審者と思い殴りかかったというのであれば、あっていますね。監視カメラにも写っていました。ただ、確認を誰にも取らずにいきなり殴りかかるのはどうかと思いましたが、見つけたときには気絶していたので、暫く放置させてもらいましたが…」

そうして、時間はたち、クラウドが本宅に来るときに戻る。

「帝様から、連絡を貰ったときは驚いたが、急用とは、私は何かしたのか？」

いつも、誰かが来ると執事とメイドの誰かが迎えに来るというのに誰も出てこないことを不振に思いながら屋敷の中に入っていった。屋敷の玄関の扉を開けたとき、二人の人が立っていた。その二人とは、執事長の早島 実と今回が初登場のメイド長の鬼姫おにひめじゅくであった。年齢はクラウドより若く二人とも29歳である。(ちなみに、位では、執事長の方が上ではあるが、二人は同期であるため、何も感じていなかったりする。)二人を見たクラウドは、

「早島執事長、鬼姫メイド長、ただいま戻りました。至急のようとはなにかありましたか？」

聞いたが二人は何も言わずに無表情で、クラウドを見ているだけであった。困惑しているクラウドに、鬼姫は、

「その顔を見ると、何故、呼ばれたかわからないようですね。」

そう言った。クラウド本人はなぜ呼ばれたのかを本当に知らないのでも言えなかった。そこに早島が、

「クラウド、三千院の執事の掟を忘れたとは、言わせないぞ!! 本来ならば一度、戻ってきたときに報告がなければおかしいことをしているのにまだ気づいていないのか!!」

「あの、私は掟に背くことをしてしまったのでしょうか？」

クラウドは、心当たりがないと思いそう返してしまった。それを驚いたような顔をし、次に怒ったように、鬼姫が

「三千院の執事の掟、メイドの掟、第一最優先事項!! ソラ様にた

いする行動で失態を起こした場合は、必ず本宅、帝様に連絡し、処罰を受ける！その事を、別宅ではありませんが、ナギお嬢様の住んでいる屋敷の執事長が忘れたとしても言うのですか！！ソラ様は、気にしていないようでしたが、普通、許されることではないのですよ！！」

そうなのである、ソラが紫子を助けてから、帝が執事の掟を作り替えたのである。執事・メイドの掟とは、昔から三千院家で働く人間の心構えなどを綴っており、その掟を守らなければきつい処罰を受けることになるのだ。そしてそれに気づいたクラウドは顔を真っ青にさせて、

「す、済みませんでした！！私としたことが「言い訳はいい！！帝様が待つている早く行ってこい！！」

謝ろうとしていたが、早島に言葉を遮られた。そして、帝がいる部屋に行けと言われ。クラウドは顔を真っ青にしたまま、移動をした。その時逃げる可能性はないが一応、鬼姫と早島の二人も着いてきた。帝の部屋の前につき早島が部屋をノックした。

「早島です。クラウドをお連れしました。」

「そうか、入れ。」

言葉を聞くだけでも、限りなく怒っているのが分かり、クラウドは真っ青から遂には、血の気がなくなり、青白くなっていた。早島と鬼姫が扉を開け、クラウドは中に入った。二人は中に入ったことを確認し、一礼をしてから扉を閉め、部屋の前に立った。中では、

「クラウド、お前何をやったのか分かっているな？」

「は、はい。」

震える口で、なんとか言葉を話すことができた。それを見て帝は、

「では、処分を言うぞ。クラウド、お前は、練馬の別宅の執事の見習いから始めろ！！綾崎にも同じことを伝えておけ！！いくらナギが綾崎のことを気に入っていたとしても、これは命令だ！！マリアにはもう伝えてある。以上だ！！」

そう言い部屋を出ていった。それを見て早島は、

「クラウド、執事長というものは、何があってもお嬢様をお守りする意外に、決められたことがある。今回それをお前は守れなかった。私が暫く、別宅に行き執事長を少しの間務めることになった。鬼姫には悪いが私がいけない間執事とメイドを統括してもらわなければならない…それに、帝様は言わなかったが、期限は二週間だ。」

そう言った。それを聞きクラウドは、自分の失態の処分に付いて聞いた。

「メイド長、私は首ではないのですか？」

「本来ならば…即刻、首です。ですが、この処分には、ソラ様の意見も入っています。貴方は、ソラ様に攻撃したそうですが、ソラ様に守られたのですよ。次にあったときには、感謝しなさい。」

そうして、クラウドは、二週間の執事見習いとして、ハヤテと一緒に早島に扱われた。ハヤテの扱いにナギが黙っているはずもなかったが、早島の

「お嬢様、我俣を言ってはいけません。ソラ様の兄であろうと、今は三千院の執事です。知っておかなければならないことを知らない、確かに、クラウスが教えなかったというのもありますが、それで特別扱いはできません。マリアも知っています。」

との言葉で黙るしかなかった。元々ナギは本宅の執事、メイド長は苦手であるのだ。ちなみにマリアは、仲がかなり良かったりする。そして日は過ぎてゆく。

20話（後書き）

早いものでもう二十話です。

話がグダグダになってしまいました。

ここで新キャラの説明ですが

鬼姫 雫

早島と同期で、実は付き合っています。周りは結婚をまだしないの
かと思っていますがまだするつもりはないという設定です。

クラウドより年下ですが25歳の時にメイド長を就任、位的にはク
ラウドよりかなり偉い立場です。

それではここらへんで、失礼します。

21話（前書き）

今回はあの方の原作ブレイクをしました。

改稿は明日行います。

始まりの文を見て期待などはしない方がいいです。

期待していなくても、最後はこんなものかと思うと思います。

2011/10/23 19:15 一部文の追加、改稿

とある日、ソラは伊澄とお茶を飲んでいた。勿論、抹茶である。最近は、よくある光景で、時々、アテナや美希、理沙、ヒナギクなどソラの事を好きなメンバーが混ざったりする。休日には、紫子が来たりしていた。ミダスはあまり来ないが、それでも、前よりは頻繁に顔を出すようになった。そして、ソラをなるべく一人にしないでいた。この時、ソラには、かなりのストレスが貯まっていたが、ミダス以外は、誰も気付かなかった。ソラは、基本的に散歩は、一人で行動したいタイプだったのでストレスが貯まるのは当たり前といえは当たり前ではあった。そして事件？は起こってしまった。ソラは抹茶を飲み終わったあと伊澄に

「いすみん、ちょっと散歩行ってくるね。」

そう言ったが伊澄は、いつも通り、

「ソラ様、私も付いていきます。」

言ったが、いつもは直ぐに散歩に行き始めるが、今日は少し違った。ソラは座ったまま、伊澄に向かって

「今日は一人で行きたいんだ。お願いだから一人で行かせてくれない？最近一人になる機会が何故か減ってるから…」

思っていることを口に出した。だが、ソラは知らないが、伊澄はソラのボディガード役でもあるため、離れるということは考えていなかった。それをソラは察したのか、次は、

「少し、トイレに行ってくる。」

と言い、伊澄のそばを離れた、伊澄は御札の力でソラがどこに行ってもわかるように制服に隠して貼っていた。これが、素肌に近い部分に貼っていたのなら、起こらなかった。

ソラはトイレに本当に行き、その後、トイレの近くに隠していた服に着替え、制服は隠してあった場所に置きそのまま、出かけてしまったのだ。伊澄は二時間経ち、美希たちが来るまでそのことに気付かなかった。そして、ソラは学園を出て街の方に歩きだした。

「やっと逃げ出すことが出来た。いつも誰かがついていて、行きたいところにも行けなかったからな…何で一人にしようと思わないかは分からないままだけど…まあ、今日は楽しみますか。」

と言いソラは、歩きだし暫くし、初めてくる銀杏商店街に来ていた商店街を見て回っていると、一件の本屋を見つけ、ソラは中に入っていた。中には、色々あったがソラが手にとったのは一冊の絵本だった。何故かその本に興味が走ったのだ。

題名は、『一人ぼっちの神様』内容は、一人の神様がいたその神は、誰からも尊敬されていた、だが友達はいなかった。

何故なら、その神は、神様全体の統括者であつたからだ。相談したいことがあつても誰にも相談することは出来なかった。

ある時、人間のいる地上に降り立った。髪たちはパニックになった。統括者がいなくなったのだから当たり前である。

そしてそこで恋をした、その女性と結婚し幸せな生活を送っていた。だが、それを見つけた他の神は、女性が、神を誑かしたと思ったの

だ。直ぐに討伐隊がその女性を殺害した。

それを見て、一人ぼっちの神は、怒り狂った。

「何故だ！！何故彼女が殺されなければならない！！世界よ！！私は憎むぞ！！」

一人ぼっちの神は、墮天してしまい、他の神たちは、自分たちの間違いに気づいた。だが、その時にはもう遅く、幸い死者はいなかったが、天界に多大な被害を与えた。そして、統率者の代理により会議が行われ、永久封印されることが決まり、捉えられ封印が決行された。最後に言った言葉は、

「これで、私は、一人ではなくなる……済まない……そして……あり……が……と……う」

その言葉を聞いた他の神たちは、ある者は涙を流し、ある者は怒り、その場に、墮天したものを封印できたことにたいし喜ぶ者はいなかった。と言う話であった。最後のページを見てみたが、そこには絵も文字も書いてなく白紙のページだった。

この本の作者は何を思っただろうか？白紙にしたのかは分からないが、ソラは多分この神は、最後は幸せだったんだな……と思っただろう、本をもとあった場所に戻し本屋を出ていった。

ソラ本屋をでたとき時間は夕方になっていた。本屋で二時間ほど過ごしていた事に気付かなかった。そして次は、喫茶店を見つけた。喫茶店の名前は『喫茶どんぐり』名前にひかれ中に入った、すると中には、ヒナギクがいた。

「いらっしやってソラ君じゃない。今一人なの？」

「あら、ヒナちゃん。その子は知り合い？恋人かしら？」

厨房の方から、和服の上にエプロンを来た男？加賀北斗かがほくとが顔を出して聞いた。ヒナギクは、顔を真っ赤にさせながら、

「ち、違います／＼何、言ってるんですか／＼」

と言ったが、北斗は、

「違うにしても、彼のこと好きなのでしょ？顔が真っ赤よ。」

そのことに何も言えなくなったヒナギクは話を変えるために、最初に、ソラにかけて言葉をまた聞いた。

「ソラ君、今は一人なの？」

ソラは伊澄から逃げていたので、

「うん、一人で散歩したかったから、いすみんにトイレに行ってるっていつて抜け出した。」

ソラの行動力に呆れながら、ヒナギクはレモンティーをソラに出した。ソラが一人で動くのは危険とは知っているが、ヒナギクは、縛られるのを嫌うだろうからいつかはこうなると思っていたので、たいてい驚くことはなかった。後で一応、伊澄に連絡をしておこうと言っただけは考えていた。その頃伊澄は、美希たちとあって

「伊澄さん、ソラ君はどこに行ってるんだ？」

「ソラ様ならトイレに行っていますよ。からこれ二時間くらい…長いですよね。」

普通に答えたのを見て、理沙は、

「伊澄さん、たぶんソラ君に、逃げられていますよ。」

その言葉に、伊澄は頭の上で???と思い、札を取り出して確認してみた。すると先程確認した時と少し場所がずれていることを知った。そして急いで立ち上がり、

「美希様、理沙様、至急で、理事長に連絡してください。できれば、千桜様と愛歌様にも…私は確認してきます。」

そう言い、伊澄は歩いていった。それを見て美希は、

「私は、アテネさんに連絡するから、理沙は「分かった。二人には連絡する。」

連絡をし始めた。そして、すぐに集まり、伊澄が制服を持ってきたことで、アテネたちは、顔を真っ青にさせていた。アテネは普通ソラが制服を脱いでまで行動するとは考えていなかったからだ。そして伊澄は、

「学院の中には、ソラ様の気配はないです、いるとしたら、学園の外です。」

そういったのを聞き、急に手を自分の胸の前へ上げミダスと同じように紋様を浮かべた。伊澄はそれを見て、

(やはり、鷺ノ宮より、上位にある家ですね。札もなしに実行できることができるのですから。)

「いた。確かに伊澄さんが言うようにソラは外にいるわ。ヒナギクさんの気配も近くにあるから…誘拐ではなくて良かった。」

力が抜けたのかアテネは、急にペタンと崩れ落ちた。それを見ていた美希と理沙、愛歌、千桜は、アテネさんって本当になにもの？と思っていて人外のことをやっていたのにもかかわらずこの反応だけとは流石である。一応、ソラを迎えに行くために全員が喫茶店に向かった。そして、喫茶店についたとき、ソラは疲れたのか寝ていた。それを見たアテネは、

「ヒナギクさん、有難う、ソラを暫くここにいさせてくれて。」

「いえいえ。後で、連絡しようと思っていたのでちょうど良かったです。それで、ソラ君のことなのですが、一人にしないなんて無理じゃないですか？」

ヒナギクや他の皆はソラが寝ていると、油断していた。それは、アテネも例外では無かった。

「やっぱりそうだったんだ。僕を一人にしないために、いすみんや、他の人が、いつも一緒にいたんだ。何でか知らないけど、そうだろうなとは思ってた。」

「ソラ！！起きていたの！！」

アテネは完全に油断したと思いソラに聞いた。ソラは、

「そつだよ。最近皆の行動がおかしいことに気づかないと思う?」「
本人たちは気付いていないようだが、傍から見たら、直ぐにおかしいと思う頻度で、アテネが教室に顔を出したり、全員が集まってくる。」

「何を隠しているのか知らないけど、僕にとって都合の悪いことだよな。」

アテネはいつも通りソラを落ち着かせようと近付いた。だがソラは、

「ソラ…「こないで!」!」

その言葉にアテネは足を止めてしまった。いつもなら、ソラが何を言おうが、構わず歩いていくが、今回はソラに後ろめたさがあるのか、止まってしまった。その瞬間、ソラはアテネの隙をついたように走り出し、外に出ていつてしまった。流石政治家の娘、直ぐに美希はソラを追いかけたが追いつけるはずもなく、すぐに戻ってきた。するとそこに、

バンツと喫茶店の扉が開き

「ソラはいる!」!

ミダスが入ってきた。皆は、ミダスがここにいることに驚いた。だが、ミダスの言葉に返す人はいなく、静かに時は過ぎていく、二分ぐらい経ったときに、ミダスが

「アテネ、何があった。教えて。」

静かに聞いた。そこには怒りが入っていた。そして、ミダスが話を聞いたあと、アテネに近付き、いきなり、頬を思いつきり平手打ちした。それに、皆は驚いていた。まさかミダスがアテネに、何も言わずに叩くとは思っていなかった。

「ミダ アテネ、何故直ぐにソラを追わなかった。お前しかここでソラに追いつける人間がいるとも思うのか！！いい加減にしろ！！何を守るために私との契約が続いていると思っっているのだ！！それに、ソラの中のアレがキリカたちの手に渡ったらどうなるか分かってるの！！」

ヒナギクは、ミダスに話しかけようとしたが言葉を遮られしかも、聞き逃せないことまで言った。それに対し理沙は、

「ミダスさん、アレとは何なのですか？私達に何を隠しているのですか？教えてください。」

その言葉を聞きミダスは、自分の過去の話をし始めた。そして、追加で

「ソラの中には創世神がいる。この世の理の最高権力者、絵本にもなっている。『一人ぼっちの神様』っていえばわかる？あれの最後のページは書かれていないのではない。まだ決まってるのではない。物語の最後が決まれば勝手に書かれる。元々そうであったかのようにな。」

そう話した。皆。一度は読んだことのある絵本であった。先ほど、ソラも読んでいた。話が終わり、放心状態のアテネにミダスは、

「この件の結果しだいで、力は返してもらっぞ。これ以上、私は黙

認できない。」

そう言い残し出ていった。その頃、ソラは、狂犬公園のブランコにいた。

「やっぱり、僕は皆のお荷物みたいだね。それに、また逃げちゃったし…これからどうしよう。」

ソラは悩んでいた。逃げたはいいが、行く宛がない。庭城は直ぐにミダスに分かってしまうので行くことができず、他の人の家つまりナギの家に行けば誰かに連絡が行く。一応、お金は持ってきているが、そこまであるわけでもないので泊まるところは考えないといけない…そう考えていた。どういう状況でもソラは頭が働くのは流石としか言えないであろう。するとそこに後ろから声をかけてきた人がいた。

「貴方、こんなところで何をやっているの？服を見たところ、いいところの子みたいだけど…もしかして迷子？」

「違うよ。僕は家出みたいなものかな？貴方はどうしてここに？」

「それより、少し話をしない。」

そう、少女が話しかけたとき、少女のお腹のなる音が聞こえてきた。その少女を見ると、顔を真っ赤にしていたので、ソラは、

「御免ね、僕お腹が空いちやっただから、奢るから食事でもしよう。そこで、少し話でもしようか？」

と話しかけていた。そして、二人はファミリーレストランに入って

食事をした。その後、

「そういえば、まだ名前を伝えてなかったね。僕の名前はソラ、綾崎ソラ、君の名前は？」

「私の名前は水…あまみやゆう雨宮悠よ。」

あからさまに偽名であることは分かっていたが、何も気にしないというふうにはソラは、

「そうか、悠ちゃんか、えっとそれで話したいことって何？」

ソラが聞いたことに少し体を固まらせてから、

「親が子供を売るってことあると思いますか？」

いきなり、そんなことを聞いてくるので、ソラは驚いて言葉が出なかった。それを見た雨宮は、

「済みません。いき」あるよ。「えっ？」「何度でも言っけど、あるよ。親が子供を育てることをせずに借金のかたとして売るのは僕の周りではよくあることだよ。」

少し怒りながら話していることに気づかず、ソラは話していた。そのことに次は雨宮が驚きソラの顔を見た。

「なんでっ？って顔しているから、一応言っておくと、僕も親に借金のかたに売られたからね…大人なんて信じたくない。助けてくれたい人はいるけど、悠ちゃん、親に二回売られた子供の気持ちってわかる？」

ソラに言われ雨宮は自分の前にいる人間が自分より辛い境遇にあったことを知った。その時、

「ソラ！！こんなところで何をして…い…る…の…つて誰？」

ミダスがソラを見つけ入ってきた。そしてソラが誰かと話しているのを見て、少女を睨みながらソラに誰か聞いた。雨宮は急なことで更に体が固まってしまった。ソラはそれを見ながら、

「えっと、彼女は雨宮 悠さん、さつき公園でこれからどうしようか考えているときにあったんだ。少し訳ありみたいだから、話を聞いてた。多分僕と同じ境遇の子だと思うんだ。どうにかしてあげたいんだけど、アーたんから逃げちゃったし、みんなに迷惑をかけちゃったから、どうしようか悩んでいたんだよ。」

それを聞き、ミダスはソラに

「ソラ、一応アテネのところに戻りましょう。それと悠、助かりたいのなら着いてきなさい。運が良ければ助かるかもしれないよ？」

そう言うってからソラをつれ外に出ていった。雨宮はどうしようか考えたが、一応ついていくことにした。だが、ソラ達は、先程の公園に来ていた。ミダスは振り向き、

「ソラ、私が来た理由と言いたいことは分かるわよね？」

ソラに聞いていた。ソラは勿論分かっているので、

「僕の心がミーちゃんに伝わったんだよね。」

「そうよ、ならわかっているわね。」

そう言うってから、ソラの顔面を思いつきり殴った。アテネの時とは力加減が違い本当に全力で殴った。その現場にちょうど着いた愛歌達は、

「ミダスさん何黙ってなさい！！」黙れませ「五月蠅い！！今、ソラの本当の気持ちがわかるのは私だけだ！！そしてソラが何を考えていたか教えてあげましょうか！？」

ミダスの言葉に、美希たちは黙り聞くことを優先した。

「ソラは、自分がいることで、皆に迷惑が掛かっている！！自分はお荷物だっと思って考えていたのよ！！どうして私がここまで怒っているかわかる！？」

そして、ソラは立ち上がった瞬間、泣きそうな顔をした、愛歌がソラの頬を叩いた。どういふことを愛歌だけは理解していた。

「愛歌は分かったようね。ソラは叩かれてもおかしくないことをしたのよ。私達はソラのが好き！！なのに、私達のことを信じれていない心がある！！違うか！？」

「そうだね。でも何で何も言ってくれないの？僕を一人にできない理由とか、僕を信じているのなら言えるでしょ？」

それを聞きミダス達は苦い顔をした。事実ミダスたちもソラのためと言いつつもどこか信じていないところがあつたのだ。そのことを初めて理解し、自分達の方がソラの事を信じていないということ

理解した。そして、そのことでソラが不安に思っていたことも…。そこに、アテネがようやく来て、

「ソラ、御免なさい。私達の方が貴方のことを信じれていなかったみたい。お願いだから、もう自分が、お荷物なんてこと言わないで！！私達が隠していたことは謝る。時が来たらちゃんと話もする。だから、戻ってきて。お願い。」

アテネの言葉に全員が頷いた。それを見たソラは、

「信じていいんだよね？僕は一人じゃない皆が側にいるってことを信じてもいいんだよね。」

聞いたことに皆が

「……………当たり前（です）（よ）……………」

と答えた、そこで初めて自分たち以外の人間がここにいることに気付いた。アテネは、

「貴方はだ」「この子は雨宮 悠さん。この公園で合った。僕と同じ運命を背負わされた人だよ。」

その言葉を聞き、ミダスとアテネは、何のことを話しているかわかった。

「そう、貴方、家はないのですよ。家に来なさい。」

アテネは声をかけた。ほかの人間は訳が分からないと首をかしげていたが、ミダスが、

「ソラは二回、借金のかたに親に売られている。つまり、その運命
ってこと。あの子の借金がどの程度の金額かは分からないのだけど、
アテネはもう払う気満々みたいよ。」

そう言った。

「いいんですか？」

「ええ、ソラを引き止めてくれていたのと、ソラが貴方のことを助
けたいと思っているのに、助けられない訳がない。来なさい。」

少し少女は考えていたが、急に頭を下げ、

「済みませんでした。」

ソラ以外の人間はまたもや訳が分からないという顔をしていたが、
雨宮が、

「皆さんを、騙していました。私の本当の名前は、水連時ルカすいれんじです。」

その言葉にソラと千桜以外は、

「……………えっ?」「……………」

「……………(水連時ルカって確か歌手で有名な子じゃなかったっけ?)
……………」

と思っていた。

21話（後書き）

水連時ルカ借金返済完了。ハヤテとは違い歌手活動をしているので早いうちに支払いは終わりそうです。

無茶苦茶設定が出てしまいましたが、これからも読んでいただけると嬉しいです。

最初は、ソラとアテネの喧嘩を予定していましたが、どうでしょうまさに書いている途中でどんどん文が変化して、最終的にはミダスがソラを愛歌がソラを叩いています。

細かい設定を作ることができずにこの話の間は他の人は何をやっているんだという場面がこれから多くなりそうです。

自分も気を付けますが、ご了承ください。

22話(前書き)

ルカの話が入っています。

改稿はできれば明日行います。

2011/10/25 一部文を追加

22話

庭城で、アテネは、ミダスと会話をしていた。何の会話かというと、

「ルカだけど、ソラの事を好きになるのは、時間の問題だ。そうした場合、九個の王玉が揃う、伊澄の予想なら、何かアクションをしてきても、おかしくない。アテネ、どうする？一応、対策として王玉を渡さないという手もあるが…」

ルカの話をしていた。だが、それよりアテネは気になることがあった。それは、先日ミダスが言った、『能力』にかんじてだった。

「それより前に一つ、ミダス、私の能力はどうするの？私は、ソラを守りきれないわ。今回のことで、その事が分かった。」「そのことだが、私達がソラの事を、心から、信じれていないからこそ今回の事は起こった。つまり、責任は私にもある。それなのにアテネ、お前だけを責めることなど、出来はしない。そして、遅くなったが、あの時は、叩いてすまなかった。許せないなら、叩いてくれてもいい。」

先日、叩いた件についてミダスは、頭を下げた。アテネは、

「叩くことなんてないわ。叩かれてもおかしくないのだし、そういうえば、ソラには誤ったの？今日の朝、見てみたらかなり腫れていたけど…」

力の限り全力で殴ったのにもかわらず、ソラの頬は、腫れただけであった。とはいってもかなりの酷さであることは、間違いない。そして、ミダスは誤っていなかったのか、汗をダラダラ流しながら、

「そういえば、昨日はあのまま帰ったから、ソラに何も言ってなかった。アテネ…どうしよう?」

ミダスの予想外の言葉にアテネは驚きながら、

「まさか、誤ってなかったなんて…ソラは気にしていないようだったけど…一応、誤りに行っておいたほうが、いいのじゃない?」

「そうね、今日にでも、誤りに行こう。それで、話は戻すが、力はそのまま持っていてくれればいい。それと、ルカをどうするかだが…私の養子にしようかと思っているわ。」そうか…だが、法律上はまだ無理だろう?同じ年齢なのだし。」

そうなのである、まだ、アテネとルカは16歳である。それを忘れていたのか、アテネは、

「そういえば、そうだったわね。どうしましょうか…「帝の坊やに頼んで見たらどうだ?何なら私から言ってみるが…」お願いできる?」

「分かった。そろそろ、時間じゃないのか?今日は、私も行くが…」

アテネが時計を見てみると時間は七時三十分を指していた。今日は、ルカを案内するために少し早めに学院に行った方がいいのであった。ミダスに扉を繋げてもらい、アテネはミダスと一緒に理事長室に戻った。すると、そこにはソラがいた。ソラのことを見たミダスは、顔を真っ青にさせた。それはそうだろう、ソラの今の顔は、ルカが氷を当て冷やしているとはいえ、頬が腫れてしまい、右の目をあけることが出来ない状態に、なっていたのだ。

「ミダスさん、アテネさん、お帰りなさい。」

帰ってきた二人にルカは声をかけた。アテネは、ソラを見てから

「ルカさん。朝より酷くなってない？腫れが凄く大きくなっているように感じるのだけど…」

ルカに聞いた。ルカは、

「そうですね。腫れはかなり酷くなっています。誰か治癒ができればいいのですが…そんなに都合良く出来る人がいるとは思いませんが…ミダス、貴方なら、できるのじゃない？」

ミダスは、アテネに言われてから、そういえば、自分の力の中には治癒を専門とした能力が、あることを思い出した。

「普通にできるな…。」

室内にも拘らず、どこからか、風が吹いた。それを誤魔化すように、

「ルカ、少し退いてくれ。今からやる。このまま学院に行かせることはできない。治癒の前に先に言うておく、ソラ…昨日は殴ってしまっ、すまなかった。気が済まないのなら、叩いてくれてもいい。」

ミダスはソラにそう言うてから、力を使いソラの頬の腫れを直した。ソラは、治って、普通に話せるようになってから、怒った顔をして

「ミーちゃん、頭出して。」

そう言った。ミダスはその言葉に従うように、目を瞑って、ソラの方に頭を向けた。すると、何の衝撃もこずに、髪の毛に触られた感触があったので、ミダスは目を開けてみると、目の前に自分の顔が写っていた。何故かという、鏡が置いてあったからだ。そして、いつもと違う所があると思っていると、ルカが

「ミダスさん、その髪留め似合っていますね。」

そう言った。そして、なぜ今まで気付かなかったのか、何時もは長い髪をポニーテールにしているか、何もせずにストレートにして目が少し隠れていたが、今は、頭には黒いカチューシャがしてあった。ミダスは、叩かれると思っていたので、カチューシャを付けられていることに気付いていなかった。

「ソラ、これは？」

ミダスはソラにカチューシャのことを聞いた。

「今まで、お世話になったのと昨日、迷惑をかけたお礼だよ。どうしようか考えたけど、目が見えたほうがミーちゃんは、綺麗だからカチューシャにしてみた。髪留めのピンにしようかと思ったけど、小さいと無くす可能性があるから、それなりに大きいカチューシャにしてみた。」

ソラは、ミダスに答えた。ソラの言葉にアテネは少しだけだがムツとしたが、結局何も言わなかった。そして、ソラが治り、時間もギリギリになったので、アテネとミダスとソラ、そしてルカは、ソラの教室に向かった。教室に着くまで何故か誰にも合うことなく、着いた。そして、雪路がいるであろう、教室をノックした。普通なら

雪路が扉を開けるはずが、扉を開けたのは、ヒナギクだった。

「どうかしまつて、アテネさん、ミダスさん。今日はどうかしたのですか？まだ、お姉ちゃん来てないみたいで…「いいのよ。勝手に紹介はさせてもらうから。」紹介？」

ヒナギクは、ソラとルカがアテネたちの後ろに居ることを気づかずにそう答えた。アテネは。

「そう、紹介よ。ミダスとルカさんの…ね。」

その言葉を聞き、ルカとソラが後ろに居ることに気付いた。ヒナギクは分かりましたと言い、中に入っていった。中に入ったヒナギクは、クラス全員に、

「アテネさんから、伝えたいことがあるそうなので、皆、席についてくれる？」

その言葉を聞き、クラスの皆は、渋々ながら、席に着いた。それを確認すると、外に出て

「準備は出来ました。アテネさんお願いします。」

それを聞きアテネは、ミダスとルカを廊下に残し教室に入っていた。

「今日は、編入生を紹介します。と言っても一人は、非常勤の講師で「ちよつと待った！！アテネ聞いてないよ！！そんな話。」そうだったかしら？」

扉を開けて入ってきた人を見て、知っている数人以外は、

（綺麗な人だな…）

と思っていた。そして、アテネは、ひとまずミダスを無視し、話し始めた。

「もう一人は、多分皆知っていると思うのだけど、少し事情があり編入してきた子です。それでは、入ってきてもらいますね。」

そう言うと、外に呼びかけた、すると

「こんにちは、綾崎ソラです。皆知っていると…」

ソラが自己紹介し始めたのを見て、アテネはどこから取り出したのか、ハリセンでソラの頭を叩いた。

「貴方が自己紹介してどうするの？」

ソラに言うてから、次は外に出て連れてこようとしたが、外には誰もいなかった。おかしいと思い。教室に戻ってみると、ソラの席にルカが座っていた。本人は、どうしていいのかわかっていない様子でキョロキョロと、周りを見渡していた。ルカのことに気付いたのは、千桜とヒナギクだけであった。何故ルカがソラの席に座っているかというと、ミダスが、ソラとアテネの漫才？をしているときに悪戯で、移動させていたからである。

「いたいた、ソラの席に座っていないでこちらに来なさい。水連時ルカさん。」

合いの一人一人が全員綺麗なんだけど…私、狙ってたのに…自信なくす…)

と思っていた。ちなみに、千桜は、

(ル、ルカは、何でばらしてんだよ!!普通に生活ができなくなるじゃないか!!)

と考えていたところにミダスが、

「私は、ソラのが好きだから、ラブレターとかは勘弁してね。」

爆弾発言をした。クラスメイトはもう何も驚くことがないと言うふうに、

((ソラ関係なら仕方がない。))

と思っていた。ヒナギク達は、

(たぶん、自分のことを助けてくれるきっかけになったソラ君の事を好きになるのは、時間の問題だな。)

とある意味、諦めていた。

「ルカさんには、基本、学業を優先しますが、どうしてもでないといけない公演等がある場合が時々あります。それと、周りの人に、白皇学院に通っているといことは、他言無用です。これは、何が起るかわからないからです。一応、注意事項はそれだけです。そして、ミダスですが「いやー、遅れちゃったーって、え?な、何でここに理事長様が「教師なのに遅刻とは、いい御身分ですね。桂雪路先生?」

ミダスを紹介しようとしたときに、雪路がやっと教室に入ってきた。時間は、一時間目が始まっていた。雪路は、まさかアテネがいるとは思っていなかった。普通に入ってきて固まった。それを見て、アテネは

「ミダスには、このクラスの担任をやってもらおうかと思っています。これ以上、桂先生に任せておくと、どんな悪影響が出るか分かりませんから……いいですか？雪路さん。貴方は副担任に降格処分です。ちなみに、これは決定事項です。という訳で、ミダス自己紹介をお願いね。」

雪路が落ち込んでいるのを見て、自業自得と思ったのか、誰も何も言わなかった。ミダスは、

「アテネに紹介されたけど、私は天王州ミダス、アテネとは苗字で分かんと思うけど、親戚関係ね。得意な科目は歴史、人の黒歴史もいろいろ詳しいから、また機会があったら話してあげる。年齢はそれなりに高いけど気にしないで。趣味は、ソラの観察かな、色々私を縛って物から解き放ってくれた人だから……」

少し、昔の話を懐かしむように話した。アテネはここまでミダスが話すことを予想していなかった。驚いていた。そして急に笑ったかと思うと、

「アテネも私と同じで助けてもらっているしね。他には、紫子もそうよ。」

ミダスが言い始めたのに、いきなりだったので、アテネは何も言えなかった。紫子の名前が出たことにナギが、反応し、

「ミダス先生は、母様の事を知っているのか？」

そう聞いた。ミダスは、

「知っているも何も、帝の坊やの所には時々遊びに行っていたからね。紫子に聞いてみれば分かると思うけど…行くのが嫌なら電話でもしなさい。」

その言葉にナギは驚きしかなかった。何故かというと、

（あのジジイを、坊や扱いだと！！命知らずな人間もいたのだな。）

と思っていたと、ソラの携帯電話が鳴った。ソラは誰かを見るとミダスに携帯電話を投げた。

「ミダス、帝から電話。何か言いたいことがあったでしょ？話してみたら？」

授業中だというのに、マナーモードに設定していないことに、アテネが

「ソラ、これから、授業中は電源を切りなさい。真似する人が出てきたらどうするの？」

と言った。ミダスは、ソラとアテネが話しているのをよそに、電話にでた。

「帝の坊や、私だけが分かるか？ああ、ミダスだ。少しお願いしたいことがあるのだけど、いいか？嫌だと？そうか分かった。やれ。」

何を話していたかというと、

「帝の坊や、私だが分かるか？」

「ミダスカ、ソラはどうした？」

「ああ、ミダスカ。少しお願いしたいことがあるのだけど、いいか？」

「話を聞いとらんの、断るといったらどうなるんだ？」

「嫌だと？そうか分かった。やれ。」

「結局そうなるのか。それで何をやればいいのか？」

という会話をしていた。ナギは目の前で、普通に帝を坊や扱いする人間がいることに、やはり驚きを隠せなかった。それは、帝のことを知っている、愛歌と伊澄、美希も驚いていた。

「ルカを養子にして欲しいのだ。本人には昨日、了承済みだ。あとは、坊やが動くだけ。」

「決まっているではないか。分かった、ミダスカの養子にすればいいのか？それともアテネか？」

「後者だ、本人は知っている。苗字を変えるかは、本人に最終的に決めさせる。一応、水連時の方で頼む。」

「分かった。それでソラはいるか？少し用事があるのだが…」

小声で養子のことは話していたので、誰にも聞き取られることはなかった。そして、携帯電話を、ソラに返し、

「坊やが、ソラに用事があるって言ってた。要件は聞いていないから、早く出たほうがいいと思うわ。それとルカ、今日中に水連時か天王州どちらか選びなさい。早く決めたほうがいいわ。あの件は大丈夫だから。」

ミダスはソラとルカにそう言った。周りは何を言っているかわからない為、何も言わなかった。ソラはミダスから返ってきた携帯電話で帝と話していた。こちらの内容は、

「ソラ、久しぶりだが元気だったか？」

「元気ですよ。帝は？」

「僕は、何時までも元気だよ。それで、いつも通り体の健診をして欲しいのだ。」

「何時から？」

「なるべく早めにして欲しい。」

それを聞いたソラは、

「分かった。今直ぐ、ヘリをここに向かわせて…一人連れていきたい人もいるから。」

その言葉を聞き、帝は、驚いた。何しろ今までソラが、連れていき

たい人物など、いなかったからである。そして、ソラに帝は、

「そうか、どうせなら、ソラ、お前に告白した人間を全員連れてきてもいいぞ。」

ソラは、それを聞いて、

「なら、十人が普通に乗れるヘリを一つ、時間は今日の放課後をお願い。」

そう言った。帝は時間が遅くなるのは、全員抜けると授業にならないうということ、理解していたので、ソラが決めたことは何も言わなかった。そして携帯電話を切った。

「ソラ君、ナギのお爺ちゃんは何を言ったの？」

理沙は気になり聞いた。

「今日、帝の家に泊まる。それで、皆も一緒に来てくれてもいいって。僕は、少し用事を済ませないといけないから、そんなに一緒に入れるわけではないけど、ルカの事も紹介しとかないといけないし…」

ソラがルカの名前を呼び捨てにしていったのを見て、ヒナギク達は、

「私の名前も、呼び捨てで言ってみて。」

と反応していた。そして、呼び終えた頃には、保険室に運ばれる人が一人、愛歌、机に俯せで撃沈しているのが、四人、ヒナギク、美希、理沙、千桜、そして顔を真っ赤にしているのが三人、アテネ、

ミダス、ルカ、である。

クラスの皆、特に女子は、暖かい目線で、それを見ていた。男子の連中は、血涙を流しそうなくらい、目を開けていた。時間は過ぎ、放課後になり、帝の屋敷にいく時間になった。各自、一度家に帰り、泊まりの荷物を持ってきた。

次の日から、四日ほど休みなので、荷物も多くなると思っていたが、全員、エナメルバツクー一つ持ってきただけだった。ソラとミダス、アテネに関しては手ぶらである。何故かというと、帝の家に、服が置いてあるからだ。

全員乗ったことを確認し、へりは帝の屋敷に向かって飛んでいった。ヒナギクは、流石というべきか、へりに乗る前から寝ていた。

22話（後書き）

どうでしたでしょうか？

学院内での日常はかけないので、自己紹介と雪路の降格、帝の検診（これは次回予定）を記入してみました。

23話(前書き)

一日目の途中です。

しかもとある人たちがしか出ていません。

2011/10/27 12:54 文字の間違いがあり修正

三千院本邸、帝の部屋にソラ達は、来ていた。理由は、本邸に招いてくれたお礼が言いたいと、ヒナギクをはじめ、数人が言い出したからだ。愛歌が、

「お爺様、お元気そうで、よかったです。そして、本宅に招いてくれて有難うございます。私も、本宅に来るのは、初めてですから…」

帝は、誰が来るかを気にしてはいなかったもので、愛歌が来ていることに驚いていた。ちなみに、本宅に招いたことは、気分だったので、特に気にしていなかった。

「愛歌、お前もソラを好きになったのか!? 久しぶりに驚いた気がする。」

それを聞き、アテネとミダスは、ソラの事が好きな人の事までは、調べていなかったことを知った。何故かという疑問は出来たが、キリ力達の情報収集で忙しかったのだらう…と結論をつけた。何故かというと、ミダスは、基本庭城から出ることができなかった為、情報を集める手段がなく、アテネは、ソラの世話?と学院の経営で、忙しく調べる時間がなかったからだ。つまり必然的に、情報を集めるのは、帝の仕事になってしまふことが、当たり前といえば当たり前なのである。愛歌は愛歌で、まさか帝が知らないとは、思っていなかったのか、

「お爺様、知らなかったのですか? 私は、てっきり知っているものばかりと思っていました。そうですね、私も、ソラ君のことが、好きになりました。お爺様は、反対ですか?」

愛歌は帝に、そう聞いた。帝は、

「反対ではない。僕は、ソラの事を気に入っているからな…ただ、愛歌、体の方は大丈夫なのか？去年は、かなり悪かったから、心配していた。これだけは言うておく、ソラのことが好きなら、絶対に無理はするな。体の調子が悪いときは必ず休め。僕からは、それくらいだ。」

そう言った。そして、帝は続けて、

「屋敷の中は、メイドや執事に聞けばなんでも答えるようにしてあるが、一応、このカードを見えるように首から下げていてほしい。このカードは客人だと証明するものでもある。ソラとアテネ、ミダスの三人は、本宅（こゝろ）の人間なら分かっているから、しなくてもいいぞ。特にミダスは、こういうのは嫌いだっただろ？」

そう言われ、ミダスは、

「勿論、嫌いよ。ソラから貰ったもの以外で、私が、つけるわけがないじゃない。例外として、アテネに貰ったものは、別だけど…それでも、嫌なものはつけないわ。それに、今つけているイヤリングは、特別よ。」

ミダスがつけているイヤリングは、寝るとき以外は、常につけている。

「特別？ミダス、それは誰かに貰ったの？てつきり、自分で選んだと思っていたのだけど？」

アテネは、疑問に思いミダスに聞いた。ミダスは、言いにくそうに話し始めた。

「ええ、これは、私が選んだというのは少し違うけど、特別なイヤリングよ。このイヤリングは、昔、自分でデザインしたのを、とある人に作ってもらったのよ。宝物なの、ソラとの記念でもあるし…アテネは、私のこと知っているでしょ？」

「私が、知っている？ああ、そういうことね。確かに、記念ね。あまり言っていていいことではないけど…」

アテネとミダスはお互いに何か知っているようで、意味深く笑った。周りの人は、状況についていくことができなかったが、帝にカードを渡され言われたように見えるように、首からかけた。ミダスは、

（あの御方（創成神）の作ってくれたイヤリングなのだもの…）

と思っていた。ミダスは、尊敬はするが、創成神の事は、たいして好きでもなんでもない。のである。そのことを知っているのは、アテネとミダスだけであり、この話は、ほかの人間は、知らない。その後、帝とソラは少し用事があるということで、部屋を出ていった。ちなみに、健康診断のことは誰も知らない。部屋の割り振りは、一人一人部屋を割り振ってある。ソラは、帝の健康診断を行うため特別に、特別な人が来たときにしか使わない部屋にいる。

「来たのはいいのですが、私は少し疲れたので今日は休みたいと思います。」

愛歌は、流石にずっとヘリで移動してきたのに疲れたのかそう言い、部屋に戻っていった。千桜も、愛歌についていき、その後も疲れが

急に来たのか、そのまま、部屋に戻って寝てしまった。次の日の朝、ソラは、帝に結果を伝えた。

「帝、健康診断の結果なのだけど、特に異常なし。何か怠ってことはないのでしょうか？」

ソラは、帝に聞いた。帝は、特に何も感じなかったもので、頷き返事を返した。そして、朝食を食べているときに、やっと皆が起き始めた。最初に、食堂の部屋を開け入って来たのは、やはりというべきか、ヒナギクだった。ヒナギクは、先にご飯を食べているソラと帝を見て、

「おはようございます。ソラ君、三千い」帝でいい。「帝さん。早いですね、何時に起きたのですか？」

そう聞いた。それに帝は、

「僕とソラは、昨日は寝ていないからわからないな。」

そう答えたのを見てから、やっぱりそうだったんだと、思っていた。何故なら、ソラが寝ながら、朝食を食べていたからである。ソラは、結果を最速で出すために、寝ずに作業し、帝は、結果が気になって眠ることができなかつたのである。

「ヒナちゃん、僕これ食べたなら寝るから、アーたん達に、なるべく部屋にこないで欲しいって伝えてくれる？」

ちなみに、昨夜から、紫子が何故出てこないかというと、ソラ達が来ていることを知らせると、帝の要件をぶち壊してでも、遊ぼうとするので、伝わっていなかった。昨日の夜に全員に伝わっていたの

で、全員が早く寝たことが逆に良かったとも言える。紫子の朝起きる時間は、かなり遅い、十時くらいまで寝ているのが普通になっているので、メイド、執事共に起こしにいなかった。そして、ソラが眠りながら食事しているうちに、全員が食堂に揃った。ソラが眠そうにしているのを見てルカが、

「ソラ君、大丈夫？ 凄い、眠そうだけど…何かあったの？」

そう聞いた。千桜達も気になっていたのか、ソラを見た。

「昨日中に終わらせておきたいことがあったから、まだ寝て寝ない。これから寝るけどなるべく昼まで寝させて。」

訳を知らない全員が驚いていた。ミダスは、

「おい、帝、ソラに何をやらせた。答えの結果次第ではただでは「すまん、健康診断だ。いつ」は？ 何「だから、健康診断。紫子を治してもらってから、ソラに頼むようにしていたのだ。結果が気になつて数日眠れない時があつて、それから、一日で終わらせてくれるようになったのだ。なるべく、内密にしておいて欲しかったから何も言わなかった。」

「そうだったのですか。確かに、結果が気になつて眠れない時があるので、その気持ちはわかります。」

理沙は、帝の言葉にそう言った。愛歌達は、まだポカーンとしていた。それを見て、帝が、

「昨日も言ったが紫子には、今日の夕方までは、ソラが来ていることとは言つては駄目だぞ。大丈夫とは思うが、下手したら、ソラが倒

れる可能性がある。ソラにはそんな思いしてもらいたくないだろ？」

全員、頷いたのを確認してから、帝は食事が終わったのか、部屋を出ていった。次に食べ終わったのは、ソラで、部屋に戻ろうと歩きだしたが、直ぐに方向転換し、ソファーに向かい、寝てしまった。それを見た、ヒナギク達は、ジャンケンをし始めた。何故かという

と、ソラを部屋に連れていくのが誰？と言うことになり最終的には、ルカと千桜の二人になった。ソラを部屋へ運んで食堂に帰る時、千桜がルカに聞いた。

「ルカ、もう同人誌は書かないのか？」

そうである、ルカは、借金を返すために、歌手としての活動とは別に、同人誌を書いていた。そして、その同人誌の、販売を千桜に頼んでいたのである。だが、アテネが借金を払ってしまった今、歌手活動だけで、返せてしまうのである。つまり同人活動はどうするかを、千桜は、聞いていたのである。ルカの同人誌のファンでもある千桜としては、残念でもあるが、事情が事情であるため仕方ないと諦めてもいた。だが、

「同人活動は続けるよ。ただ、毎回出せるわけではないし、私は会場には行けないから、これからも頼むことになりそうだけど…お願いね。」

「仕方ないな。親友の頼みだ。それと、もう一つ聞きたいことがソラ君のことでしょ？」ああ、ルカは、どう思っているんだ？」

「私は、そうだね。伝えられない気持ちがあるって知って苦しいかな。」

「伝えられない？ 苦しい？ 何で？」

千桜は、ルカの言葉に意味が分からないので聞いた。

「だって、私は借金があるんだよ。しかも多額な…こんな状態で好きって言っても「ルカの気持ちはどうなんだ？ 好きなのか？ 嫌いなのか？ 今私の聞いている事はそういうことだ。本当の気持ちを教えてくれ。」

建前は関係がないと、千桜は言いルカに、本当は、ソラの事をどう思っているかを再度、聞いた。

「私は、うん、そうだね。正直な気持ちは、ソラ君のことが好き。私を助けてくれた、助けてくれるきっかけを作った人だよ。好きになるのが、当たり前じゃない。最初は運命かと思った。でも、ソラ君の周りの人はソラ君のことが好きな人がたくさんいる。」

「その割には、普通に接していたな。」

「やっぱり、うまく誤魔化せていたみたいだね。本当は、顔を真っ赤にするとところだったんだよ。ソラ君の顔もまともに見れないし…」

ルカの言葉に千桜は、必死に隠し通そうとしていたことを知った。しかも、誰も気付いていない時点で、流石としか言いようがなかった。ちなみに、この後、千桜は、アテネにこのことを話していた。アテネは聞いたあと、

「ルカ、少し用事があるから、来なさい。」

ルカを呼び出した。アテネから呼ばれたことに、ルカは用事？ 何が

あるんだろ？と考えていたが、アテネがルカに聞きたいことは二つあった。一つは、苗字のことである。水蓮時のままか、それとも、天王州に変えるか。の最終確認である。そして、もう一つは、千桜に聞いたソラについてである。場所は、食堂から、アテネに割り振られた部屋に変えた。

「ルカ、二つ聞きたいことがあるの、一つは、帝に頼んで、私の養子ということにしてもらったから、後は、登録するために、苗字をどうするか決めて欲しい。水蓮時のままで行くか、それとも私の、天王州に変えるかを今日中に選んで教えて欲しいのだけど…その目を見ると、もう決まっているようね。」

アテネを見るルカの目は、真剣なものに変わっていた。ルカはアテネに、

「私は、苗字は変えませんが、水蓮時ルカで、お願いします。」

アテネは、少し驚きながら、

「いいの？貴方の苗字を変えないと、過去の辛い思いに、またとらわれてしまう可能性があるのよ？」

「苗字を変えて、自分の過去をなかったことにするなんてしたくないです。私は、過去にも勝ってみせます。」

それを聞き、ルカはルカで、自分のことを考えているのだな…と思い。アテネはルカに、

「そう、辛いことがあったら言いになさい。私と貴方は、苗字は違っても、同じ家族なのだから…。それと二つ目が、千桜さんから

聞いたのだけど…ソラの事を、好きというのは、本当のこと？嘘をつかないで教えてちょうだい。」

ルカは、まさか千桜が、アテネに言っているとは、思っていなかった。驚いていた。それを見た、アテネは、疑っていたわけではないが、千桜が言っていたことが、本当のことだということを知った。

「ちーちゃんから聞いたんですね。そうです、好きですが、自分の気持ちは、伝えることは、できません。」

はつきりと、アテネに向かっていった。アテネは、一つ溜息をついてから、話し始めた。アテネが話し始めたのは、ソラと自分の過去、ミダスとの過去だった。それを聞き、ルカは、それがどうしたのだろうか？と思っていたが、アテネは、最後に言った…

「ルカ、私達は、一回は、ソラの事を傷つけているの、それに比べたら、貴方の事情が可愛いものに見えてくるでしょ？それと、自分の過去に勝つといった者が、未来について諦めてどうするの？自分の気持ちを抑えることが、どれだけ辛いことか、それが、憎しみや、好きということなら尚更に辛いわ。」

「私の借金が可愛いものなんてどうしてそんなこと言えるんですか！！それは、貴方に見してみれ」ソラが死ぬ可能性があったとしてもそのことが言える？」

ルカは怒り、アテネに反論したが、アテネは途中で遮った。その言葉聞いて、ルカは、

（死ぬ？何で？ソラ君はそんなに危ない賭けをしていたの？）

と考えていた。それをアテネは、気付きルカに

「さつきも言ったけど、私は、ミダスに体を操られ、ソラを殺しそうになった。この時点で、本来なら私がソラのことを好きになる資格なんてないわ。」

そう言った。その時、急に扉が開き、

「アテネ、あまり自分を責めるな。あの時は、私が悪かったのだから…それに、過去に縛られることだけは、もう、したくない。」

そこにいたのは、ミダスだった。ミダスは、アテネが何か言う前に、

「千桜が珍しく、アテネに話しかけたと思って何を話したかは、聞いた。ルカ、我慢はするな。ソラは、鈍い人間ではないからな。いつかその気持ちの色々苦しめることになる。」

その言葉を聞いたルカは、ミダスとアテネを見てから。

「私は、ソラ君のことを好きでもいいのでしょうか？」

「それは、ルカ、貴方が決めることよ。私が決めることじゃない。」

二人は声を揃えて同じことを言った。そのことに、アテネとミダスは互いの顔を見て笑い出した。それを見ていたルカは、

(羨ましいな。お互いに笑える人がいるなんて…)

自分にも千桜がいるということはずっかり頭の中から抜け落ちていたためそう思っていた。そして、ルカは、

「自分の気持ちは、一時の感情なのかもしれません。なので、少し様子見ていいですか？自分の感情を疑っているわけではないのですが、もし、この感情が一時の物だった場合、ソラ君を好きな人に失礼です。」

そう言った。それを聞いたミダスは、

「時間はいくらでもあるが、ルカ、貴方は、有限ではない。早く自分の本心を決めて、これからどうするかをしっかりと決める。相談くらいになら、私が乗ってやる。」

あまり歳が離れていないと思っていた人が、凄く大人びた顔で言うのでルカはついつい、ミダスにとって禁句？という言葉を言ってしまった。

「ミダスさんって本当に何歳なのですか？」

アテネは、ルカの言葉を聞いて、顔を真っ青にした。そのことに気付いたルカは、ミダスの方を恐る恐る見てみた。すると、

「どういふことかしら？私が見た目と年齢の差を気にしていることを知ってその言葉を言ったのなら…ゆ…る…さ…な…い…」

ミダスは、にっこり笑って言ったが、実際、黒いオーラを出し、目は全然笑っていないかった。ルカは恐怖しながら

「ミ、ミダスさんの年齢なんか知りませんよ。それどころか、教育

免許を持っているから二十五歳位と思っていたのですが…違いましたか？」

実際の年齢からすると、かなり、否、無茶苦茶若い年齢を言われたので、先程、ミダスから出ていた黒いオーラが、なくなった。そして、嬉しそうに、

「そんなに、若く見える？初めてそんなこと言われた。実際はもっと歳上だけど、私の前で年齢の話はしないでね。」

わかった？と言うふうになを押ししてくるので、ルカは頷くことしかできなかった。そこで、ルカは、或ことを思い出した。

「そういえば、アテネさん、私ってアテネさんの養子になるんですよね？」

「ええ、そうだけど、どうかした？」

ルカの質問に答えたアテネは、何でそのことを確認するのかわからないので、一応普通に返した。その後少し考える素振りを見せたあと、ルカは、

「アテネ姉さん、ミダス姉さん、これから、お願いします。」

と言い頭を下げた。アテネは、少し笑ったあと、ルカに、

「私は、それでいいけど、ミダスは、本当は「それでいい。」「いいの？」」

ミダスは、天王州家の人間ではないので、アテネが訂正しようとし

たとき、ミダスがそのままいいと言ったので、最後まで言わずに確認を取った。

「初めて、姉と呼ばれた。新鮮なものだな……」

アテネの言葉をあまり聞いておらず、感動していた。そして、いつの間にか昼の時間になっていたので、食堂に戻り、食事をした。昼は、紫子も来ていて、

「ソラ君リーダーが反応してる。」

と、訳の分からないことを言っていた。ちなみに、ルカたちが話しているとき、ヒナギク達は、千桜に、ルカも空のことが好きになったということ話を話していた。その後は、愛歌がいるので、あまり動き回れず、本宅の図書館で、本を読んだり、トランプで遊んだりして時間を過ごしていた。

23話（後書き）

今回は、昼からの話になります。

改稿はまた明日、次は明日か、明後日に投稿すると思います。

キーワードに亀更新？を追加しました。

24話(前書き)

昼から夜にかけての話です。

改稿はできれば明日行います。
改稿が遅れて済みませんでした。

2011/10/30 12:38 一部内容の追加、改稿

24話

結局、ソラは、昼まで寝ていた。紫子は、ソラ君レーダーで、ソラが来ていることを予想したが、予想した部屋の前に、早島と鬼姫いるのを見て、部屋に入るのを断念した。何故かという、数年前、

「ソラ君が来てるってほんと？」

紫子は、三千院に仕えている執事に話を聞き、早島に聞いていた。ちなみに、当時はもう執事長になっていた。紫子の言葉に早島は

「ええ、紫子様、確かに着ておりますが、少し調子が悪いとアテネ様から聞いておりますので、部屋には入らないでくださいね。」

ソラの体調不良＝恩返しのお機会、と考えた紫子は、早島の言葉に

「わかった。ソラ君に看病の料理を作ってくる。」

そう言い、走って行ってしまった。それを見て、早島は、それくらいならいいだろうと判断し厨房に行かせた。そして、料理を持ってくる少し前に、鬼姫が通りかかり、

「実、紫子様がどこに行っただか知らない？勉強の時間なのにまだ来てないの。」

「雫か、紫子様なら、ソラ様の体調不良を聞いて、今料「何だと！紫子様が料理いかん！早「どうした？」どうしたも無い、紫子様は料理を食べたことがないのか？」

鬼姫が、焦っているのを見て、どうしたのかわからない早島は、頭に？を浮かべて、

「ああ、一度も食べたことがないが、それがどうかしたのか？」

「そういえば、あの事件の時は、実は出張だったか。紫子様の作った料理を食べて、帝様が、入院しそうになった。それ以来、紫子様が厨房に入るとは禁止されたが、注意できる人間が私たち以外に、この屋敷の中にいると思うか？」

「いないな。僕、ここは任せた。俺が止めに行ってくる。俺ならたいていの料理は食べられる。」

そう言い早島は、走り出した。そして少ししたとき、

「あれ？何で鬼姫がいるの？」

何故か厨房とは反対側から、紫子が料理を持ってきた。

「紫子様……」

鬼姫は、少し黒いオーラを出しながら、

「帝様から、許可をもらってから作ってきたのですか？」

そうである、紫子が料理を作るのには、帝の許可を得てからでしか作ってはいけないことになっていたのである。そのことを紫子はすっかり忘れていた為、何も言わなかった。

「何も言わないということは、許可を、貰ってないのですね。では、

「試食はしましたか？」

「それは、厨房長が、してくれた。顔を真っ青にしてたけど食べてくれて、美味しいって言ってたよ。」

厨房長の事を鬼姫は、心の中で、あの馬鹿何をやってるの？と思ってたが紫子の方を向き、

「私にも、一口もらっても宜しいでしょうか？」

そう聞いた。数年前に実験として何度も食べさせられたことがあるので、早島だけでなく、鬼姫も大丈夫であった。

「いいよ、はい。」

手渡されたスープ？は緑色になっていた。それを見ても、鬼姫は色が悪いだけ、味は違うと思いきんど口に運んだ。そして無言で笑い、もう一回スープをすくい紫子の口に入れた。すると、紫子の顔色がどンドン真っ青になっていった。

「紫子様、自分の料理をソラ様に食べさせていたら、どうなったかわかりますか？」

紫子はあまりの自分の料理の不味さに何も言えなかった。

「そうですか、何も言えないですか。では、勉強を後回しにして本日は、徹底的に格闘練習をしましょうか？」

「栗、すまない、見つからなかった。厨房長が倒れていたから、医務室に運んでおいたが…紫子様、ここにいたのですね。鬼姫？どう

した？」

「早島か、この料理を食べればわかる…私は紫子様に力比べと言う名の教育指導をしてくる。」

口に入れて飲み込んでから、ビクビク震えている紫子を見てから笑い

「やりすぎに気をつけろよ。」

そう言うだけだった。その日、紫子の叫び声が一時間ほど途切れることはなかった。そのことが、頭の中から離れていないため、紫子は、ソラに割り振られた部屋に入るのをやめた。そして時間は、昼になりソラは食事のために食堂に来ていた。食堂には既に、紫子、帝、ミダス、アテネの四人以外の人間が揃っていた。

「ソラ君、よく寝むれた？と言っても五時間くらいだけ…」

「まだ少し眠いけど、存外、大丈夫そうだよ。誰にも起こされなかったけど、誰か部屋の前にいたの？」

絶対に、紫子のことだから入ってくると思っていたソラは、皆に聞いた。皆は知らないようだったので、唯一知っている、ルカが、笑いながら、

「行こうとしたけど、ソラ君の部屋の前に早島さんと鬼姫さんがいたからだと思うよ？出ていきたくても、出ていけないように廊下の角でうつうつしながら、一時間くらい、立っていたから。」

それを何も言わずに、ずっと見ていただけのルカは、さすがと言えるであろう、ちなみに紫子はルカが見ていたことを知らない。この

後、ルカは、鬼姫と早島に先程まで紫子がいたことを話した。驚いたのは、二人とも紫子がいることを知っていたのである。それを聞いてから部屋に戻っていった。部屋でやっていたのは、曲を作っているわけではなく、同人誌の作成をしていた。昨日、千桜に言われ、一冊はこの連休中に作っておこうと思ったのだ。だが、どうしても昨日千桜とアテネ、ミダスに言われた言葉が気になり作業を中断して、食堂に行ったとき、直ぐに空が入ってきたのだ。それを聞き、ソラは、

「後で、実と雫にお礼を言つとかなないといけないな。聞きたいこともあるし……」

そう言った。早島と鬼姫の名前を呼ぶのは今の所三人しかいない、一人はアテネ、そしてミダス、ソラの三人である。紫子は二人にいろいろ教えてもらっているため、今は二人と話すときは敬語が少し入っている。ちなみに、知らない人が下の名前を言つと、二人とも切れて襲いかかるので注意である。何故、ソラ達が名前で呼べるかというと、ソラは、紫子を助けた張本人である事、アテネとミダスは、ふとした拍子に、呼んでしまい、襲いかかった二人を、軽くあしらったからである。何故、切れるかというと本人たち曰く、

「自分の名前は、たとえ使っている人でも、認めた人以外には呼ばれたくない。」

と早島が言っていた。

「実が認めた人ぐらいにしか呼ばれたくない。」

と鬼姫が言っていた。付き合っているので、お互い気の許せる相手といるときは、呼び捨てで呼んでいる。周りは、早く結婚しないの

か？と思っっている人間ばかりである。ちなみに、帝は二人の名前を呼んでしまい、襲いかかられ、一日動けないほどの怪我を負わされていた。首にならなかつた事は、不幸中の幸いである。そして、食堂に来た皆は、食事をとつてから、ソラが、早島たちにお礼に行くため、食事を引き下げに来た、メイドに居場所を聞いた。

「早島執事長と鬼姫メイド長ですか？多分、今は休憩の時間なので、部屋にいると思いますよ。いつも寝るとき以外は、働いているので、一日に二時間くらい休憩を取るように、私達が説得したので…」

それでも本当は、もっと休んで欲しいのですけど…続けてそういった。それを聞いたソラは、メイドにお礼を言い部屋を出ていった。それを見てルカは、自分が先程から悩んでいたことを思い出し、ソラについて行けば何かわかるのではないか？と思い後を追いかけて、付いていくことにした。他の人たちは、昨日、千桜に聞いていたの、見送るだけで、誰もついていこうとはしなかった。その後直ぐに、ミダス達は、入ってきた。

「あら？ソラはまだ寝ているの？ルカもいないようだけど…」

アテネはソラとルカが居ないことを見て、そう言った。それ以外にも、ちょうどいいとも思っていた。それを聞いた理沙が、

「アテネさん、ソラ君は、早島さん達に、お礼を言いに行きました。で、それをルカが追いかけたんです。昨日千桜にいろいろ聞いていたので、誰も追いかけずに、ここにいました。」

「そうなのか、ならちょうどいい。この前の話の続きで分かったことがある。帝に調べてもらっていたのだが…」

そう言った時、その場の全員が、真剣な顔をして、話を聞き始めた。美希は、

「その新しい情報とはどういう情報ですか？一応花菱の家でもいろいろ調べてもらっています。が…」

その時、美希の携帯電話の着信音が鳴った。美希は電話をかけてきた人物を見てから、直ぐに電話にでた。電話してきた相手は、美希の執事をしている男だった。

「そう、分かったわ。それじゃあ、引き続き頼むわ。ええ、それじゃあね。」

そう言い、電話を切った。そして、振り返り

「私の方も情報が少し入ってきました。情報は一つだけです。ソラ君の、国籍が日本に戻され、親権も綾崎涼、綾崎瞬の二人に戻っています。」

それを聞き、アテネと帝が驚いていた。なにせ二人はあちこちから手を回し、バレることがないように、ソラの国籍を変えていたのだ。バレるはずがないと思っていたのだ。

「それは本当か!？」

帝は声を荒らげて聞いたことに、美希が萎縮してしまい泣きそうになっっている顔を見て自分がどれだけ焦っていたかを知った。ミダスは、

「美希、落ち着いてからでいいから、話してね。」

美希の頭を、撫でながら、落ち着くのを待った。待っている最中に、帝のことを睨んでいた。三分ぐらい経ったとき美希が

「ミダスさん、有難うございます。それで、どうやら、元学院長が絡んでいるようです。あちらは、闇組織、まで使って、国の上層部を脅し、変更したそうです。」

それを聞き、愛歌達は、何も言葉を出さないが、怒っていた。今までは、生徒に迷惑をかけているだけで実害のような被害はなかったからである。それが今回は、脅して国まで動かした、それ以上にソラに対する行動が気に食わなかったのである。紫子は、話しを変えするために自分たちの情報を言った。

「こっちは、違う情報だよ。二つでも、一つは確定情報ではないからまだ言えないわ。そして、確定情報が、キリカの人を一回だけ操ることができると、道具の情報、これから一番気をつけないといけない道具ね……」

そこで一度話を切り

「鏡、普通の鏡みたいらしいの、見分けがつかないってことではないみたいだけど…安心もできないわ。名前を『心の迷宮』と言っらしいわ。これに対抗できる手段はないらしい。鷲ノ宮家でも、対抗できずに操られるらしいわ。ただ、一回を除いて操ることはできなくなる。効果を消すのも一回、それ以上は精神的に無理みたいね。」

そう言い、鏡には気を付けることを促した。それを聞き、

「ソラ君の国籍は、後でどうにかするとして、ひとまずキリカの居場所と、ソラ君に対する対策を建てないといけませんね。」

ヒナギクは言ったが、鷲ノ宮の力で効かない物をどうすればいいのかという結論が出てしまった。ミダスにしても、一度も見たことがない物をどうにかできるはずもなかったからだ。話の平行線をたどってしまうことが見えたので、千桜は、

「ルカにはこのことはまだ伝えない方がいいですよね。」

ルカに、話していいのか迷っていたため、この場で、全員に聞いた結果は、伝えることに賛成したのが、ヒナギク、千桜、理沙の三人だった。他は、全員反対であった。理由としては、

「今の状態で伝えてしまうと、どこで情報が漏れるかわからない。」
「混乱して、どういう行動を取るかわからなくなる」

という意見が出たのである。実際のところは、全員が、伝えたいと思っていたが、確率が少しでもあるのなら、反対するべきと思う人間が多かったのだ。結局、伝えることは、先送りになった。その話をしているとき、ソラとルカは早島の部屋の前に来ていた。鬼姫の部屋に行ったが、誰もいなかったため、早島の部屋に来たのである。ソラはノックをした。すると中から、早島の声が聞こえてきた。

「どうぞ。部屋の扉はあいているので入ってきてください。」

ソラとルカは言われたとおり、中に入ってしまった。するとそこには、食後のお茶なのか紅茶の準備をしている早島とそれを見ている、鬼姫の姿があった。二人はソラたちの方を見て、早島が

「ソラ様、ルカ様、どうかいたしましたか？」

と聞いてきた。ソラは、

「今日、部屋の前でゆーちゃんが入ってこないように、見張っていてくれたみたいだから、お礼を言いに来た。紅茶を飲むのなら僕が、淹れようか？」

そう言った。二人はソラの淹れる紅茶の美味しさを知っているので、早島と鬼姫は、顔を見合わせて

「では、お礼ということ、淹れてもらってもよろしいでしょうか？」

普段ならば、絶対に言わないことを、早島が言った。休憩と仕事では、性格？を分けているのか言った。それを聞いて、ソラは二人をソファーに行くように言ったが、二人ともその場を動かずに、ソラの紅茶の淹れ方を見ていた。ソラは気にせずに入れてから、

「どうかしたの？僕が紅茶を淹れるのを見ていたようだけど？何か間違いでもあった？」

聞いた。それに鬼姫が、

「ソラ様の淹れ方は、毎回見させてもらうようになっています。私達は、帝様にお仕えする身、ソラ様のように美味しい紅茶を出したいという気持ちがあります。ですので、見て勉強にしているのです。」

そう言った。早島たちにしても、ソラが淹れる紅茶は超えることができない味、いつか追いつき、そして、追い越したい壁であるのだ、

ちなみに、鬼姫と早島では、早島の方が紅茶を淹れるのは、美味かつたりする。料理では、鬼姫の方が上ではある。二人は、相手の短所を、自分の長所で埋め合わせているのである。失敗が少ないのは、フォローし合っている結果でもあった。ルカは、ソラの淹れた紅茶を飲み、驚いていた。

「美味しい。初めてこんな美味しい紅茶を飲んだ。今までは、インスタントだったから…」

ルカの言葉に、鬼姫が

「ルカ様、紅茶だけでなく、ソラ様は、料理でも私達は、美味しさで負けていますよ。一度、お菓子を作ってもらえば「お菓子なら、出来てるよ。」

その言葉に、いつのまに用意したのか分からなかった早島たちに、

「ちょっと作り方を短縮したし、途中からは指定して作ってもらったから美味しいかわからないのだけどここに来る前に少し作ってき

た。」
ソラはそう言い、マドレーヌとスコーンの入った、バケツトを差し出した。中には人数分のお菓子が入っており、作りたてなのかお菓子に触れたとき、まだ少し、あつたかかった。

「流石ですねソラ様、味が前よりも美味しくなっております。それに少し甘めにしてあるのか、疲れも取れますね。」

ソラのお菓子を一口食べ、早島は味の感想を言った。ちなみに、ルカは美味しすぎて、言葉が出ない状態だった。鬼姫は、ルカの様子

を見て、笑いながら

「ソラ様、また今度でいいので、私の料理を食べて、悪いところを教えてくださいませんか？前までとの違いを教えて欲しいので…」

「ええ、いいですよ。雫の作る料理は、食べることに美味しくなってるから、それと、実、雫もだけど、二人とも疲れを貯めすぎているから少し甘めに作ってみました。どうだった？」

少し甘めに作ってある理由をソラは、答えた。二人は傍から見たら疲れはないように見えるが、隠しているだけで、かなりの疲れがたまっているのだ、それに気付いたソラは、前来たときに少し休むように言うように、他の執事とメイドに言っていたのだ。そしてそれを聞いた執事とメイドはこれまでに以上に頑張った。そのおかげで今は二時間も寝る以外で休憩が取れるようになった。何かあると休憩が取れないので、その場合は仕方がないが、基本的に休めることになった二人は、休憩していても暇なので、プライベートで楽しむようになった。これが、二人の結婚はまだなのか？という疑問をたくさんの人たちが浮かべることになったが、本人たちはまだ、次候補が決まってないため、休むことができないと言っている。帝は、二人が早く結婚し、子供を見せてくれることを楽しみに待っているが、それは、まだまだ先の話になるだろう。

「いえ、美味しいですよ。ちょうどいい甘さ加減で、もっと食べたいくらいです。」

それを聞いたソラは、

「食堂の皆の所にあるから食べに行く？」

と聞いた。そうなのである、二人の為もあるが、四人が居ないということは、何か大事な話があるのだろうと思っていたので、全員分作っていたのである。ちなみに、ソラたちが食堂についたとき、本来なら有り得ないことだが、紫子たちだけでなく、メイドと執事も一緒になって食べていて、ちよつとしたお茶会になっていた。執事長とメイド長が来るとは思っていなかったもので、その場にいたメイドと執事は顔を凍ばらせた。それを鬼姫と早島は見てから

「今日は、特別に見なかったことにしてやる。その代わり、明日失敗したものは、それなりの罰があると思え。私からはそれだけだ。」
そういって、中に入って一緒にお茶会を楽しんだ。ちなみに、この日の作業は、既に全員が終わらせていた。それを知っていたのもあって、何も言わなかったのもあった。

24話（後書き）

どうでしたでしょうか？

メインが前半と後半に別れています。

結婚式はいずれやりたいと思いますが、表現が難しいので、拙いものになるかもしれません。

25話(前書き)

納得行っていない話が出来上がりました。

一度消して書き直すかもしれません。

次の日の話です。

2011/11/1 19:30 一部文の追加修正、改稿

昨日のお茶会の後、お茶会に酒が入るはずも無く、飲める人間も少ないので、結局昼頃始めていたのにかかわらず、夕方になっていた。その後は、一部を除く全員の女性が、体重のことで悩んだりするのだが、それはまた別の機会にするとしよ。そして、少し夕食を取り、全員が寝ることにした。紫子は、ソラと一緒に寝ようとして、それを予想していた、雫に首根っこを掴まれ引きずられていった。本当に、何故、メイドを首にならないか不思議である。翌日になり、全員が食堂に来ていた。

「今日は、全員揃ったね。昨日は、アーたん達が、いなかったし…理由は聞かない。いつか話してくれるんでしょ？」

ソラは、そう言って、ミダスたちの方を見た。ちなみに、長い机に左右に別れて座っている。ソラは、本来、帝が座る上座（この場合、扉から一番遠い席）に座っている。帝は三千院の当代当主にも拘らず下座に座っていた。何故かという、ソラの隣に誰が座るかということで、少し争いになりかけたのだ、その時、帝が勝手に上座に座らせたのである。周りは文句を少し言っていたが、ミダスとアテナ、ルカ、ヒナギクは、見ていた。ミダスは、ソラの質問に、

「ええ、時が来たらしっかり話すわ。まだその時ではないから…話すことはできないわ。御免なさい。」

ソラには悪そうに、話したが、ソラは、たいして気にしていなかった。何故かという、ミダスは言った言葉を、絶対に守ることを、知っていたからだ。それに、ソラにも隠していることが、幾つかあるため、何も言わなかった。

「じゃあ、その時になつたらちゃんと教えてね。危険なことだけはなるべくならやって欲しくないけど、危険な綱渡りをしないとダメなことなんですよ？」

ソラは、なんとなく予想を付けていたので、そう聞いた。すると、食堂にいたルカを除く全員が、息をのんだのが分かった。料理を運んでいた、執事、メイドもあからさまに、動きが遅くなった。ソラは、自分とルカ以外の人間は全員関与しているのを、この時、初めて知った。だが、ソラは、知らないふりをすることを決めた。その行動を見て、その場にいた、執事とメイドは、気づいていないと思つていたが、ヒナギク達は、ソラが今の瞬間に気づいたことを見抜いたが、ソラが何も言わないのならば、それでいいだろうと思ひ、結局何も言わなかった。

「そういえば、ソラ君、今日の予定って決めてる？よければ、この休みに出ている課題のわからないところを教えて欲しいのだが……」

理沙は、ソラに聞いた。ソラは少し考え、今日は何も予定を入れていなかったことを思い出し、

「分かった。僕も手を付けてないから、一緒にやろう。他には、やってない人っている？というか、直ぐにここに来たから、誰もやってないでしょ？」

ソラの言葉に、白皇学院の生徒全員が、理事長と担任教師がいるのにもかかわらず、課題があることじたい忘れていた。慌てて、準備にかかり始めた、ちなみに、ヒナギク、愛歌、千桜は、ソラと一緒に教える側に回って教えていた。基本は全員が出来ていたので、数時間で終わる内容だった。その間、暇になった大人陣は、課題をや

っている子供人を見ながら、食後のお茶を飲んでいた。すると紫子が、

「そういえば、ミダス、ソラ君を思いっきり殴ったて本当？」

ミダスは、紫子がいきなり話し始めるので、直ぐに頷いてから、失敗したと思った。何故なら、紫子は、少し黒いオーラを出しながら、聞いていたのである。

「いや、あの、殴ったのは本当のことです。」

紫子のオーラに気おされてしまい、話し方が、敬語になっていることに気づいていないミダスを見ながら、アテネは笑って見ていた。すると、急に紫子が、

「アテネちゃんも、ソラ君の事を悲しませたって聞いたのだけどそれはどうなの？」

自分にも回ってくるとは思っていなかったのか、安心しきっていた、アテネは体を固くしてしまい。そしてそれを肯定と思った紫子は、

「何で二人もいながら、ソラ君を悲しませるのかな？」

そう聞いた。勿論、自分たちが悪いので説教を受ける気ではいたが、急にソラが、紫子に

「ゆーちゃん、教えるのが終わったから、一緒にお茶でも飲もう。」

ソラ達は順番で変わりながら教えていたので、暇になったとき紫子たちがいる所に遊びに来たのである。ソラが来たことで、紫子のオ

「ソラはなくなり笑っていた。アテネとミダスは、ソラが来たことによつて、黒い雰囲気はなくなったことを、心の中で感謝していた。時間が決まっているのか、ソラは、少し話してから、すぐに行つてしまった。ちなみに、お茶を飲んでいるときに話していたのは、昨日のお茶会のお菓子についてであつた。内容はというと、

「ソラ君、昨日食べた、お菓子美味しかったけどなんていうの？」

「本当！！初めて作るものだから分からなかつた。名前はスコーンとマドレーヌそれに、沢山一気につくると、味が変わったかなり美味しくなるから、心配してたんだ。」

ソラは、スコーンとマドレーヌが、自分の想像以上に好評だつたことを喜んでいた。ちなみに、この時紅茶を入れていたのは、ソラではなく、実と雫だつた。二人とも、ソラには及ばずながら、かなり美味しい紅茶を、淹れていた。最初は、淹れていたが、少し疲れた顔を見せたとき、見逃さなかつた二人が、交代を申し出たのであつた。言葉に甘えてソラは、ソファで少しゆっくりしたあと、紫子たちの方に、歩いていった。次に来たのは、ヒナギクだつた。紫子は、悪戯心を刺激され、ヒナギクに

「少し散歩しましょ？この屋敷のベランダから見る、景色って凄く綺麗だから気に入ると思つよ？」

と言つた。ちなみに、紫子は、ヒナギクが高所恐怖症なのを知つていて、態とヒナギクに言つたのである。ヒナギクは断れるはずも無く、紫子の後をついて行つた。ベランダに出たとき、紫子の服の裾を握っているのは仕方がないことだろう。

「どつ？ここから見る景色って綺麗でしょ？それと、ヒナちゃん？

私の服の裾を握ってどうしたの？」

分かっているのにもかかわらず、紫子は、ヒナギクに聞いた。ヒナギクは、紫子が笑っていつていることを見て、自分が高所恐怖症とということを知っていると確信した。

「紫子さん、私が、高所恐怖症のことって知っていますよね？」

「うん。知ってる。確か前、聞いたことがあった気がするから……」

普通に返してくるとは、思っていなかったのか、ヒナギクはポカーンと口を開け、暫く紫子を見ていた。その後、千桜が来たときは、

「このメイド服着てー。」

と言いネコミミがついているメイド服を着させたりしていた。何故、紫子が黒くなっているかという点、実は、ソラが久しぶりに来たこと、暫く遊べるのが楽しみで、テンションが上がりすぎて、なっていたのだ。この後も、帝のヒゲを引っ張ったり、ルカのファッションショーを強行したりと、色々やっていた。余りにも、勉強の邪魔をするので、理沙がソラに小さい声で、

「ソラ君、紫子さんの後ろから、抱きついて、『少し大人しくしてね。』って言うてくれる？このままじゃ、いつまでたっても終わらない。」

そう言ったが、実のところ、自分に被害が来て欲しくないために、ソラに向かってそういったのである。ソラは理沙に言われたとおり、紫子の後ろにゆっくりと静かに近づいた。紫子はそのことに気付かずにはいた。周りは気付いていたが、紫子の暴走を止められるのは、

もはやソラしかいないことを理解していたので、何をするかは分からなかったが、見ていた。そして、紫子に抱きついた。

「何？つてえ？ソラ君？」

最初、紫子は誰が抱きついてきたのか、分かっていなかった為、後ろを見た。するとソラの顔がすぐ近くにあるではないか、ソラは紫子が混乱しているのを見て、

「今、勉強の途中だから、少し大人しくしてね。」

理沙に言われたことを言った。すると、紫子は、顔が真っ赤になり、小さな声で、

「はい／＼／静かにしています／＼／」

何とかその言葉が紡げたのだろう、そう言った。ソラが離れてから、ミダスたちがいるテーブルの方に歩き、椅子に座ったかと思うと、机に、倒れ込むように突っ伏してしまった。それを見て、紫子以外のヒナギク達は、物欲しそうな顔で、ミダスとアテネは、ニヤニヤしながらも

（ ）（ ）（紫子 （さん）羨ましいな）（ ）

と思っていた。ルカも、そう思っていたので、今は、勉強中だから勉強のことを考えないと、思い首を振りその考えを追い出そうとした。ルカは、根が真面目なタイプなので、本当に集中していないと一度に一つのことしかできないのである。するとそこへ、ソラがルカの顔をのぞき込み

「ルカ？どうかしたの？」

そう言った。ルカは急なことで、驚いて声を上げて倒れてしまった。まさか、ソラの事を考えていたときに、目の前に来るとは、思っていなかったのだ。ちなみに、ルカが驚くところを見て、愛歌たちは、ソラとルカ以外が集まり、

「今の反応を見ると、ソラ君のことをかなり意識していますね。どうやら、ルカさん本人は、気付いてないみたいですが、あの真っ赤な顔を見ると、恋している女の子っていう顔ですし…」

最初に愛歌が言った。すると、ミダスは、

「この連休中に、ソラの事を好きだと意識するかもしれない。アテネ、王玉は持ってきているよな？今の内に準備しておいたほうがいいと思うぞ。」

と言った。他の人は皆、頷いていた。ちなみに、紫子だけは、その話に入っていなかった。まだ、先程のダメージがあるのか、ピクリとも動かなかった。それを見て、少し心配になった千桜は、話を遮り

「紫子さん、大丈夫ですか？」

そう聞いた。だが紫子は、それでも顔は上げずに、微かに頷くだけだった。その状態の紫子を、皆は暖かい目で見ていた。ちなみに、ルカとソラは、自分たち以外が集まっていることは知らなかった。

「大丈夫？ほら捕まって…」

倒れたルカにソラは手を差し出した。ルカが握ったことを確認する

と、勢い良く手前に引いた。すると、ソラが思っていたよりルカは、遙かに軽く、次は、自分の方に倒れてきた。ソラは、驚いたが、倒れることはなく、抱きかかえる形で、ルカを支えていた。ルカは、パニックになってしまい、ソラの顔面を叩いてしまった。ルカ自身、咄嗟の行動だったので戸惑ってしまい、暫く、沈黙が続く、

「だ、大丈夫！？ソラ君。御免なさい、ああいうふうに、抱きしめられたのは初めてだから、つい叩いちゃった。」

ソラはポカーンとしていたが、叩かれた理由が分かったため、

「大丈夫だよ。もっと痛いのをこの前体験したから…それに、思ったより体重量轻いけどちゃんと食事してるの？今のままだと、栄養失調になるよ。」

ソラの言葉を聞き、ミダスと愛歌は、少し呻いた。ミダスは、次の日に謝ったが、愛歌は、謝ることを、忘れていたのである。そのことを思い出した愛歌は、

(ど、どうしよう。そういえばまだ、ソラ君に謝ってなかった。ソラ君のことだから、気にしてないって言うだろうけど…)

と普段、血行が悪く青白い顔をなっているのに、更に青くして悶々と考えていた。それをミダスは見抜いて、

「ソラ、ルカとの楽しみの最中済まないが、愛歌がソラに話したいことがあるそうだ。悩んでいるから、暫く散歩してきがてら、聞いてやれ。」

そう言った。まさか、ミダスが言い出すとは思っていなかったので、

思わずミダスの方をすぐに見た。すると、こちらを見て頷いた。それで、愛歌は理解し、ミダスに頷き返した。美希達は、何がなんだか分からないという感じで、首をかしげたが、二人が部屋を出ていくのを見送った。そして、見送ってから、ミダスにどういうことを、代表してヒナギクが

「ミダスさん、愛歌さんの話って、何も話していないのによく分かりましたね。」

ミダスは、ヒナギクの言葉に、

「先程、ソラが痛い思いをしたと言っていたら？つまり、私が殴った後、愛歌も叩いた。愛歌は、そのことを謝っていなかったから、顔を青くしていたのだと私は、推測をつけたのだが：違っているかもしれないけど一番当てはまるからな。」

そう答えた。それを聞いて、愛歌さんにしては珍しいポカミス？をするんだな。と思っていた。場所は変わり、愛歌とソラは庭に出ている。何も話し出さない愛歌にソラは、

「愛歌さんって体が弱いつて聞いたけど、今は大丈夫なの？」

いつも疑問に思っていたことを聞いた。愛歌は、謝るのにもどう切り出していいのか迷っていて、話せずにはいたので、ソラから話してくれたことは、良かったと思った。

「ええ、子供の頃から入退院を繰り返していて、去年、かなり悪くなったときに、手術をして、今は順調に回復しています。まだ、体育などの運動は参加することができません。私は元々、運動神経が無くて、基本は見学していましたか…」

「そうなんだ。じゃあこれから、今回みたいに皆と、出かけるときは誘えるね。今からでも、すごく楽しみ。」

ソラは、笑いながら、自分の事のように喜んでいた。他人の事を真っ先に心配するのは、相変わらずとしか言いようがなかった。だが、愛歌にしてみれば、一緒に出かける事ができるなら、無理はしない程度に着いていくつもりだったので、自分の事を考えてくれていたソラのことが嬉しく更に好きになっていた。そして、いつの間にか玄関まで戻ってきていた。そのことに愛歌は焦った。まだ謝ることが出来ていなかったからだ。ソラが玄関から入ろうとしたとき、

「ソラ君！！ちょっと待って！！」

愛歌はソラの事を、呼び止めていた。自分でも無意識に言葉を発していたので、驚居っていた。ソラも驚いていたが、扉にかけていた手を扉からはなし、愛歌の方を向いた。ソラがこちらを向いたことで意を決したように、

「ソラ君！！この前は、叩いて！！御免なさい！！」

勢い良く頭を下げた。それを見た、ソラは愛歌の方に歩いていった。愛歌は、コツンコツンという音で、ソラが近づいてくるのを感じながら、目を瞑った。すると愛歌の頭に何か触れた。何が触れたのか分からなかった。目を開け見みると、ソラが頭を撫でていた。そして、

「大丈夫、僕は皆の事をもう疑いたくないし、疑うつもりもない。それに、あれは色々なことがあって、全員、余裕がなかったっていうのもあるから…愛歌さんだけじゃなく、僕も悪いことをしたんだ。」

つまり、おあいこつて事。だから、謝る必要はないよ。」

頭を撫でながらソラは、そう言った。そして、二人は、最初にいた食堂に戻ろうとしたとき、愛歌の携帯電話に、帝からメールが届き内容を見てみると、『居間に場所を変えたから、こつちに直接来てくれ』という内容だった。確かに、何時までも食堂にいるわけにはいかないのです、場所移動をしたほうがいいと思い、メールの内容をソラに伝えてから、居間に向かった。居間に入ったときミダスに、

「どうだ？しつかり言えたか？」

そう聞いてきたので、愛歌は

「ミダスさん、有難うございます。どうしようか悩んでいたのですが、それにソラ君は、予想通りですが、たいして気にしていないって聞いていました。それと、自分も悪いから、これからは皆の事を信じる。とも言っていました。ですから、私も心からソラ君のことを信じてみたいと思います。」

それを聞き、愛歌にミダスは頷いた。ミダスも今回のことは、心に迷いがあったことに自分自身、反省をしていた。そして、勉強に戻ると、何故か全員が午前中だけで、課題を終えることができたのである。そして、午後からの話はまた今度。

ちなみに、紫子は、全員が移動しても、机に突っ伏していたので、早島に、机ごと移動させられていたりする。

25話(後書き)

終わり方が、おかしくなっています。

書いていたらいつの間にかこうなっていました。

改稿は出来たら明日行います。

26話(前書き)

二日か三日に1話投稿できればいいかなと思っています。

交代勤務に復帰したので、本当に不定期更新になります。

2011/11/2 21:52 一部内容の追加、改稿

26話

紫子の暴走と課題に一区切りが付き、ソラは皆がいるにもかかわらず、一人で散歩に出ていた。ミダス達は、三千院家の本宅では、警戒する必要もないと思いい送っていた。ルカも、周りの皆と話すことがなく、一人で椅子に座っているのは、気まづさがあるのか、ソラが散歩に出る前に、外に出ていっていた。ヒナギク達は、歌手としての活動を聞きたかったので、少し残念そうではあったが、何かやるのだろうと思いい、何も話しかけなかった。ソラは、午前中、愛歌と来た庭に来ていた。

「今日も一日、天気だけど、雨はいつ降るのかな？お日様が出ていて気持ちはいいけど雨が降ったときも、風情があつて好きなんだけどな。」

そう言ったあと、子供の頃にやった、

「あーした天気になーれ」

と、履いていた靴を、飛ばした。結果は、裏だったのだ

「明日は、雨かでもこれって占いの一つだから、当たるとは限らないしね…」

そう言ったが、ソラは、基本的に、なんでも当ててしまうときがあるので、限りなく雨が降る可能性が高いのであった。ソラは、飛ばした靴を履いてから、また歩きだした。次は、庭と違い、森の中に入ってしまった。すると、暫くすると悲鳴が聞こえてきた。その悲鳴は、家の中にいる人たちにも、聞こえていた為、直ぐに捜索隊が出

た。ヒナギクたちも手伝うと言ったが、三千院家の本宅に初めて来て、地理が分かっていないため、鬼姫たちに断られていた。悲鳴の主は水蓮時ルカであった事は直ぐに解った。その悲鳴は直ぐに途切れてしまったが、ソラは、だいたいの位置を把握して森の中を走り抜けた。すると、一本の木の先に、ルカがぶら下がっていた。下は、地面がなく海になっていてしかも十メートル以上下にあるためどうしようもなかった。ソラはその状態のルカを見て叫んだ。

「ルカ！！何やってるんだ！！」

「ソラ君！！助けて！！」

ルカはソラに気付きそう言った。何故このような状態になったかという、話は約十分前に戻る、ルカは散歩をしていたそして

「二日間、皆と過ごしたけど、話しかけてきても素っ気なく答えるだけなんて、私何やってるんだろ…はあ…」

美希たちが、話しかけても最低限の言葉しか返していなかったことに、ルカは自己嫌悪に陥っていた。しかし、仕方がないと言われてもおかしくはないであろう。何故なら、急に借金がなくなり、歌手活動から、学院生活に変わり、親代わりになる人もできた。しかも、歳が同じ年である。緊張するなどというのが、おかしいのである。このままでは、駄目だと思っても変える勇気がないのである。すると、一匹の猫が足元にやってきたその猫をルカは、撫でてから、

「君は、いいね、誰にでも寄っていける。そんな勇気が、私にも欲しい。歌手としてなら、性格を切り替えているから、話せるけど、普段はそんな事出来ないよ…」

と話しかけていた。そして、抱き抱えた。猫が、言葉をわかるはずも無く、『ニヤー』と鳴き返すだけだった。この猫は、度胸があるのか、抱きかかえている状態でも鳴き叫ばず、ルカを慰めているかのように肩に何回も手で叩いていた。ルカは、それを見て更に落ち込んでいった。何故なら、猫にすら慰められているのか…と想っていたからである。すると、猫が急に暴れだした。ルカは、急に暴れ出したので、驚いて猫を離してしまった。そして、猫は少し歩くと立ち止まってこちらを見ていたのである。最初は何か分からなかったが、近づくとまた一定の距離を保ち歩いていった。

「どうかしたのかな？ともかくついてってみよう。」

猫についていくことにしたルカは、一定の距離を保ちついて行った。暫くすると、道から外れ森に入った。猫の位置が、見づらかったが、待っていてくれるため、見失うことなく、とある木の根元に着いたが、ルカは足に少し切り傷をしていた。森の中を歩く事自体が、数回目の経験だったので、半ズボンで来たのは間違いだったと思っていた。歩いている最中に、木で切ってしまったのだ。そして、どうしたのか猫を見ると、木の上を向いて鳴いた。ルカは見てみると、そこには子猫がいた。高いところに登ってしまい、降りられなくなったのだらうと判断して、下が海になっていいることには気付いたが、お構いなしに、ルカは木に登り始めた。

「もうちょっと、大丈夫だからね。」

子猫に、そう言いながら手を伸ばした。すると子猫は、人が怖いのか、木の枝の先の方に歩いて行ってしまった。そして、遂には落ちてしまった。それを見てルカは、咄嗟に落下している猫に飛びついた。片手は木の枝を持っていた。先程の叫び声は、猫に飛びついたときに、あまりの高さで驚いて叫んだのである。そして、ソラが、

森の中から出てきたのを見て助けを呼んだ。ソラは、ルカが危ない状態にあるのを見て、何時もの笑っている表情から真剣な顔つきになり、どう助ければいいのか考えていた。すると、後ろから、早島と鬼姫が駆けつけてきた。ルカの状況を見て、直ぐに何があったのかを推測した。

「実！！！！！！どっちでもいいから長いロープ持っているか！？あったらすぐに出せ！！俺が行く！！」

何があるかが分からないので、早島は、一応、一つ十キロほどある救命の道具を、ちょうど持ってきていたのでその中にロープがありソラに渡した。その時、一緒にパラシュートも渡した。そして、渡すときに早島が、

「ソラ様、私が行きましようか？」

ソラに向かってそう言った。それを聞いたソラは、

「いい。俺が行く、その代わりに、最悪の事態に備えて、一分以内に、下にボートの準備をしておいて欲しい。」

そういった時には、もう鬼姫が指示をだしていたのか、ボートが下に着ていた。それを見てから、ソラは鬼姫を見て、

「このことは内密にしてくれる？危ないことをやったらダメっていうのは分かっているけど、彼女を助けたいんだ！！頼む。」

鬼姫と早島は、ソラが人を助けるのにここまで必死になっていることに驚きながらも、頷いた。そしてすぐに、ロープを腰に巻きつけ、ルカの方に歩いていった。歩き方は、怯えている感じは全くなく、

かなり集中しているのが分かった。そして、自分の体重で木の枝が折れてしまうギリギリのところまで来て、ソラは一息吐き出し、ルカに向かって飛んだ。ルカは、ソラがロープをしていることは知っているがまさか飛ぶとは思ってもいかなかったため、驚いていた。ルカに抱きついたと思うとソラは、パラシュートを開いた。勢い良く飛んだので上には何もなく、一気に上昇した。ソラは、ひとまず無事だったことを確認してから

「なんとかなって良かった。怪我はしてない？」

ルカは、怒られると思っていたので、ポカーンとした表情をしていたが

「だ、大丈夫、この子も落とさずにすんだから……」

ソラに猫を見せた。死ぬかもしれない状態だったのに猫のことを心配していたルカに、ソラはキレた。

「ルカ！！今は猫の心配じゃない！！死ぬかもしれないのだぞ！！道具が一つでも揃ってなければ、どうなっていたか分からない！！結果としては、助かったけど、そうならなかった運命もあるかもしれない！！そうならどうするつもりだったんだ！！」

まだ、パラシュートで下降中なので、ルカの耳元でソラの怒っている声だけが聞こえた。ルカは、ソラが怒るのを初めて見たので、体をこおばらせてしまった。ソラは、顔をこちらに向けていないが、ルカが泣きそうになっていることに気付き、少し声を落とし、

「これから、何かあったら絶対に教えて。手伝うから、無理はもうしないで、僕たちは、家族なのだから、遠慮なんかする必要はない

よ。アーたんもそのことを気にしていたし、それにヒナちゃんたちだってもっと話したいはず。だから自分を誤魔化さずに、本当のルカであたっていったらいいんだよ。何か失敗したら僕たちが、フォローするから、だから、お願い、もう無理はしないで…」

自分たちが、家族と言われて、この時、ルカの心に少し痛みが走った。ルカは、家族に捨てられているので、その言葉に反応したのだろうと思えばらくそのままだった。するとソラは、何も言わなくなった。そして、ソラは、鬼姫と早島のいる所へ着地した。そこには、居ても経つてもいらねずにミダスたちが来ていた。事の顛末を聞いたアテネは、ルカの方に歩いていき、抱きしめた。そして

「お願い、もう自分を犠牲にするのはやめて。悲鳴を聞いてすごく心配したのだから…」

そう言った。その言葉を聞き、ルカの視界はボヤケてきた。自分が泣いていることに気付いたのは、アテネに抱きつかれたときに、アテネの服が少し濡れたのを見たからだ。

「1」、御免なさい…」

ルカは、そうアテネに言うことしかできなかった。その後、ルカとアテネを気遣ったのか、周りには、誰もいなかった。どこに行ったかというと、図書館に移動していた。

「こここの図書館の中に、子猫の飼い方があると聞いてきたんだけど、どこを探そう。」

三千院家の図書館は二階にある。ちなみに二階の通路を覗いて全部部屋が中で継っており、部屋の中にあるのは、全部本である。なん

という無駄な作りであろうか。何冊あるかは、帝でも知らない。知っているのは、図書館の司書だけである。その司書は、何処にいか分からないので、司書を探すより、本を探したほうが早いとソラ達は思い、手分けして探し始めた。ソラは一时间ほどして、まだ自分の一も調べられていないことに気付き、ソラだけは、司書を探し始めた。図書館内に絶対にいるということは、早島が言っていたので確実である。ちなみに、何故調べているかというところ、助けたのはルカなのだが、何故かソラに懐いてしまい。離れることなく付いてきたのである。

「いないな。これじゃあいつまでたっても子猫の飼い方が「お主の前の本棚から三つ右の本棚、上から一段目右から五冊目を持っていくといい」

どこからか、声が聞こえてきた。ソラは、何処にいたのだろうかと周りを見渡したが、誰かがいる気配は無かった。その為、聞こえてきた声の通りの場所を見てみると、

『三千院家の猫の飼い方シリーズ。猫の躰はどうすればいいのか？』
という本があった。シリーズになっているのにも関わらず、一冊しかないことに疑問を覚え本の中を見てみた。すると中には、三千院ナギが飼っているペット（虎）のタマの写真があった。ソラは、それを見て心の中で

「くだらない本を出しているな。どうするんだよ、これ……」

と思っていたがつい口に出してしまった。そういえば前、早島と鬼姫が、こんなことを言っていたのを思い出した。

「いいですか、ソラ様、図書館には、色々本がありますが、絶対に読んではいけない本があります。一つは、帝様のポエム集。あれは、見に絶えません。冗談抜きで、目が腐ります。そしてもう一つが、三千院出版の本です。頭がおかしいのではないのか？と思いたくなる本ばかりですので、燃やしてもらっても構いません。そして、司書は変態です。気を付けてください」

ソラは、一本のマッチをどこから取り出し、火をつけた

「これは種も仕掛けもあるマジックです。一気に本が燃え上がるでしょう。」

そう言い、火がついたマッチを、本に近づけた、すると、

「ちよーと待て！！お主はいきなり何燃やそうとしているのだ！！本が勿体ないだろうg」この本を刷ったほうが、資源の無駄になって、そのほうが、勿体ないと思うのは、僕だけ？」

急に現れた人物に、驚きもせず、ソラは聞いた。ちなみに、急に現れた人物の格好は、魔法使いのようなローブを着ていて、顔も隠している、男か女かも分からなかった。

「何を言う！！この本の素晴らしさは、見よこれを、紫子様の九歳の頃の写真と同等であるぞ！！燃やすなど言語道断！！」

ソラは、早島の言葉に

（ああ、確かに変態だ。どうしようもなく変態だ。ル力達にあわせ
る前に、いつそ今の内に息の根を止めといてやるっか？）

あからさまに紫子の盗撮写真と思われる物を見てソラはそう思った。その時、実は鬼姫がソラの手伝いに来たところで、ちょうどその話を聞いていたのである。ローブの人は、まだ紫子の素晴らしさを、語っていた。鬼姫は、怒りを抑えながら、司書の肩を叩いた。ソラ以外誰もいないと思って話していたので、司書は、ギギギギという音が聞こえるかと思うほど震えながら、後ろをむいた。そこにいた、背景に炎が出ていて、笑っている鬼姫を見て、

「それでは、僕は仕事に「戻らなくていいわ。今から教育と言う名の肉体言語を教えます。ソラ様、本はこちらにありますので、置いておきますね。」

「栗、本は有難う。それと、容赦なく、これ以上何もできなくなるほど、痛めつけてね。もう二度と、こんなことができないように司書に教えてあげて…」

ソラは、鬼姫の怒りの理由を知っていたので、追加して言った。それを聞いた鬼姫は、ソラにっこり笑いかけ、

「それでは、失礼します。」

一礼して、一瞬の内に司書を連れて、視界から消えた。どうやって消えたかというと、

「栗、瞬歩上手くなったな…まだ少し、改善の要素があるけど…合格点はあげられるな。後で実伝えておこう。と、そうだ、早速この本を皆の所に持っていこう。待っているかもしれないし…」

城中に数秒後、悲鳴が響いたが、鬼姫の

「死にさらせやーーーーー!!」

と言う怒号も一緒に聞こえてきたので、何もなかったように過ごした。ソラは、皆のところに戻った。アテネとルカも来ていたので、ソラはアテネに、

「本は、あったから持ってきたけど…：そういうば、アーたん、この子猫って学院内で飼える？駄目なら、誰か探さないといけないのだから…」

アテネは、学院内で飼うことは出来ないため、誰か飼えるかを聞いた。だが、各々の事情があり、この場では、一人を除いて、誰も飼えなかった。その一人とは、

「アテネちゃん、ソラ君その猫なら、このまま三千院の屋敷で飼えばいいと思うよ。お爺ちゃんには、許可を貰うよ。それとたまに、皆で遊びにきてくれると嬉しい。私もこの子もね。」

紫子は子猫を撫でながらそう言った。確かにこの場で一番適切なのは、紫子の言うとおり、元々いついていた三千院の本宅で飼うことだった。ソラ達は、帝にお願いをしいった。すると、あっさり許可がもらえたので、子猫は紫子が世話をすることになった。そして、時間が過ぎ、晩ご飯の時間になった。猫は一緒に食べると、衛生上悪いとのことで、今は、執事の一人が世話をしている。夕食後に、ソラは早島に言い忘れていたことを言った。

「実、時間少しいい？」

「ソラ様、どうかいたしましたか？何か御用でも？」

基本的には、ソラから話しかけることはあっても、質問はあまりなかったもので、何かしてはならないことをやってしまったか？と思い不安になっていた。そのことを感じたソラは、

「違う。僕に一言伝えて欲しい。瞬歩、前みた時より、かなり上手くなったね。と伝えて欲しいんだ。もう、僕が教えることはないし…」

格闘の中で瞬歩だけは、早島ではなく、ソラが教えていたのだ。何故かというと、早島は力で押すタイプ。最終手段が技術を使うのである。鬼姫は、速さで相手を翻弄するタイプ違う力をもった人間の事を教えるには限界があった。その為、ソラに、鬼姫は速さを、早島は技術を教えてもらっていた。強さは、実力を出し切ると、アテネと同じくらいの強さである。それを聞いた早島は、

「承りました。鬼姫に、伝えておきます。それで、顔を見ると他に質問がお有りのようですが、そちらも私が聞いてもよろしいでしょうか？」

ソラの顔色を見て、ソラが悩んでいることを見抜いた早島は、ソラに聞いた。ソラは、驚きながら

「分かったの？」「ええ。いつもと少し「じゃあ聞いてもらおうかな。ルカのことなんだ。」

「ルカ様ですか？」

ソラから意外な人物の名前が出てきたことに、心の中で驚きながらも平然を装って早島はソラに聞いた。

「壁を作っているみたいだから、それをとつぱらいたいのだけど、
どうしていいか分からない。僕とルカは、同じ鏡合わせの人間。僕
には救ってくれた人がいる。なら、ルカを救う人もいるはず、僕は、
僕は！！ルカを救いたい！！」

声を荒らげていった。早島は、少し考え

（ソラ様はここまで感情を戻していらしたのだな。ならば、私もソ
ラ様を全力でサポートするまでだ。だが、私が動いてもそれは意味
がない。ならば、ソラ様の思うがままにしてもらうのがいいのでは
ないか？）

「ソラ様、私はサポートには回りません。心に壁を無意識に作って
いるお方は、私では、どうしようもないからです。ですが、一度経
験なされたソラ様ならば、話は別です。アテネ様に、してもらった
ことを自分なりに考え、行動するまでです。」

そう言った。それを聞きソラは

（自分なりの行動…）

「分かった。自分なりに頑張ってみる。」

「ええ、頑張ってください。止まり木ぐらいになら私になって差し
上げます。ソラ様はルカ様のために羽ばたいてください。」

ソラの言葉に返した。早島の言葉を聞くとソラは、笑ってから

「お願いね。それじゃあ僕はもう行くね。相談に乗ってくれてあり
がと。」

そう言い走り去っていった。それを見てから、早島は壁に寄りかかり、

「そういうことだそうですね。ルカ様。辛いかもしれませんが少しずつ、壁を取り除いて、いつかルカ様の本当の笑顔を見せてくれることを、私は願っています。それでは、私は、仕事があるので、失礼しますね。」

実は、ソラは、考え事をしていて、ルカが近くにいることに気付いていなかった。そして、早島は気付き、ソラには何も言わずに、ソラが立ち去ったあとに、ルカを見ないように話しかけた。ルカは、ソラの言葉に顔を真っ赤にしていた。ソラに助けられてから、顔をまともに、見ることができなくなっていた。その気持ち、何かわからないままだったが、ソラの言葉に自分の事を振り返ってみると、確かに壁を作っている部分があった。しかも、それは、ソラに対してだけだった。そして、早島の言葉にルカは、

「頑張ってみます。」

と小さい声で答えた。その言葉が聞こえたのか、早島は小さく笑ってから歩いていった。

26話（後書き）

一応、フラグ？なのでしょいか？今回の話は、作っている最中に、何度も書き直して出来た作品です。

ある意味テンプレかもしれませんが。三千院家の本宅でピンチになることは余りないと思ったので、ご都合主義で書かせてもらいました。

普通はパラシュートを開くには遅すぎのタイミングだと思います。

作品とは関係がないのですが、本日夜勤明けで、休みだったので、せせらぎ街道まで行ってまいりました。行くだけで100k離れているのでかなり疲れしました。

27話(前書き)

一応、昼ごろに起きたので作ってみました。

2011/11/5 3:13 一部分を追加改稿完了

時間は過ぎ、休みは三日目になった。三千院本宅から白皇学院までは、片道、五時間ほどで行くことができるが、学院のことを考えると今日つまり三日目の午後ここを出たほうがいいと、ミダスとアテネが判断して帝たちに話した。帝はそのことを了承し、ヘリを出すことを約束した。紫子は、少し文句を言ったが、愛歌の体調のことを思い出し、納得することにしたのである。ミダスは、

「急だけど、今日の午後に帰ることになったから、午後の一時に、玄関の所に集合して、荷物は、執事やメイドに言ってもいいから、持ってきて頂戴。」

ミダスが最初に言った通り、本当に急に言われたことなので、理沙たちは、

「明日も休みじゃ」「愛歌と私の体調のことを考えて頂戴。私は長いこと庭城ロイヤルガーデンから出ていることは出来ない。本来なら一日に一回は休まないといけない。もう三日目だ。それに、本邸本館は庭城あそことは、本当の門でしか、繋がってないから行くことも出来なかった。」

ミダスの言葉に、愛歌は、翌日の学院のことを考えていたので、ありがたく聞いていたがヒナギクと千桜、美希は、ミダスが言った言葉に疑問を覚えた。

「ミダスさん、本当の門とは、どういうことですか？開けては、ならないのですか？」

ソラとアテネはミダスの顔を見ていた。ミダスが、苦虫を、噛んだ

ような顔をしていた。どうして、ソラとアテネが見ていたかという
と、本宅にある扉を開けるとどうなるかを知っていたからだ。ヒナ
ギク達に、ミダスは仕方ないと諦め、話し始めた。

「この扉を開けると、ソラ以外は、私とあえなくなる。他の扉も
全部閉まってしまい、王玉も意味をなさない。私より格が上の神し
か入って来ることが出来ない。ソラが何故、入ってくることができ
るのは、ルカ以外は、分かっているだろ？つまり、この扉を開
けることは出来ない。」

私とあいたくない人物は、喜ぶだろうが…と続けた。それを聞いて、
ヒナギク達は、言葉を詰まらせることしか出来なかった。ルカは、
首を傾げていたが、ソラに

「ミダス姉さんって何を言ってるの？それに、ソラ君だけあえるっ
てどういうこと？」

聞いた。ソラは、ミダスとアイコンタクトをしてミダスに許可をも
らってから

「ミダスは、元々、人じゃない。神様の内の一人なんだ。ミダスの
過去は知っているでしょ？そして、本来住むところも違う。元々、
庭白は天王州のものだから、アーたんは、入れるかもしれないけど、
それでも、今までみたいに頻繁にはあえなくなる。つまり、ルカは
絶対にあえなくなる。それでもいいのなら帰らないという手もある
けど、ここにいる皆は、そんなことは考えない。僕も考えて欲しく
ない。」

そう言った。それに皆は、納得し今日の午後に帰ることが決定した。
実は、ミダスにはまだ余裕があったが、何が起るかわからない為、

早めに休むことにしたのである。ちなみに、ミダスは、一ヶ月ほどなら余裕で、外に出ていられるだけの力はある。前は一日出ているだけでも辛かったのではあるが、ソラがミダスにかけた公式を少しじり、一ヶ月、外に出ていても大丈夫にしたのである。そのことを知っているのは、ミダスとソラしかいない。アテネも知らなかった。

「それじゃあ、今日は自由だから、好きに行動していいわよ。私は帝と少し話があるから、今から行くわ。」

アテネはそう言ったミダスを見てから、ついていくことにした。ミダスが帝と話したいことがあること自体が珍しいので、ソラ関係だと思ったのも理由には入っている。ミダスとアテネが部屋を出ていくのを見てから、ルカは、ソラの方に歩いていき。

「ソラ君、今日、帰る前に少し話があるのだけど、聞いてくれる？まだ、心の準備が整っていないから、その時間にして欲しいの。」

「うん？分かった。じゃあ、一時間くらい前になったら、場所を僕に連絡してくれる？それ前に、準備が整ったら、連絡してくれてもいいよ。」

それを聞いて直ぐに、ルカは出ていった。千桜はそれを追いかけるように出ていったので、ヒナギク達は、千桜に任せておけば大丈夫であろうと思い、ソラがいるところに、歩いていった。そして、愛歌が

「ソラ君、ミダスさんのこと知ってたのになんで教えてくれなかったの？なにか理由があるの？」

「僕はいいが、アテネ、お主はどうだ？ 全ては、アテネお前が決める。」

ミダスと帝に見られたアテネはしばらく考えてから、

「ミダス、どうしてそんなこと言い出したの？ 何か理由があるはずよ。全てを教えて頂戴、確かに白皇学院にいるのは危ないかもしれないけど、それ以外にも理由があるでしょ？」

アテネは、一つ結論を出してミダスに聞いた。すると、ミダスは

「やはり分かったか。確かにもう一つ理由はある。それはもしも、親権を使われてソラを奪われてしまったては遅いからだ。そんなことが起これば、直ぐにキリカの手に移ってしまう、闇組織を通して脅しをかけてきていることから、直ぐに動き出すのは確かだ、そしてここにいれば、政府もすぐには動くことができない。牽制のつもりでもあるが、一応の時間稼ぎにはなるだろう。問題は、他にもあるが、応急の対策としてはそれしか無いと思ったのだ。もう一つ対策は取れるが、これは今のソラの見方を、立場を壊してしまう可能性がある。正直、そんなことはしたくない。」

そう言った。すると、アテネは、

「ミダスの言葉も最もだけど、ソラを抑えることができる人間が、ここにいると思う？ 雲達でも無理なのはわかっていてでしょ？ ソラの強さは、強くなったところじゃない。今では、私を相手に普通に手加減をしているのよ。ミダス、貴方もその事は分かっているのでしょ？ それをどうにかすることを考えないと、この作戦は失敗するわ。」

実は、誕生日後のソラは、最初アテネとの鍛錬の時、いつも通りの力でやったつもりが、軽く吹き飛ばされて気絶していたのである。誕生日の日にソラが、どこまで変わったかが、良く分かることであった。ちなみに、その後かなり手加減している為、今、ソラがどこまで強いのかは分かっていない。帝とミダスは、アテネが普通の運動では、拮抗していると思っていたので、計画が破綻したことを知った。その後は、少し話し合ったが、ここに匿うことができるだけの材料がなく、結局、白皇学院に連れて帰るということになった。そして、ルカと千桜は、というと、

ルカは、部屋を出たあと、逃げるように走って行った。千桜はそのことを、部屋を出て知ったので、ルカを追いかけるために走り出した。運動神経がかなりいいルカに普通の千桜が追いつけるはずも無く、最後は見失ってしまったが、千桜は一つ心当たりがあったので、急いでも仕方がないと思い、歩いていくことにした。しばらく歩き、目的地に着いた。それは、一本の桜の木の前だった。

「やっぱ、ここにいたのか、ルカが走り出すから追いつけなかったよ。この前、言っていた言葉を覚えていたから良かったけど……」

誰もいないと思っていたので、ルカはいきなり話しかけられたことに、小さな悲鳴を上げてしまった。そして、後ろを振り向き、千桜がいることに気づき

「ちーちゃん、急に話しかけないでよ。驚いたんだから。いくら私でも怒るよ?」

「そこでなんで疑問形なんだ?それと、何か相談したいことでもあるのだから?私なら、普通に相談に乗るから、言ってくれ。」

千桜は、朝、起きたときにルカに『相談に乗って欲しい。今日、少し時間を開けてくれる?』と千桜に、言っていたのである。ルカは自分自身が、千桜に相談ごとがあるということと言っていたのを、朝の会話で忘れていたのである。そのことに気づいた千桜は、呆れながらルカに、

「ルカ、やっぱりどっか抜けてるところがあるな。朝、私に言ったことを今まで、忘れていたのだろ?確かにあの話には吃驚したが…」

千桜がミダスの話を聞いても何も感じていないのか気になり相談ごとの前に聞いた。

「相談ごとの前にミダス姉さんの事どう思った?人じゃないなんて正直、過去を聞いても信じれなかった。でも、今日の話のとき、誰も何も言わなかった。そこで、ミダス姉さんが本当のことを言っていたって知った。最初、ちーちゃんはどう思った?」

「そうだな。私も最初は信じることは出来なかったな。だって、知り合いが実は神様でしたって言われても普通は信じれないぞ。だけど、神様だからって、何も変わらない、普通に笑って、泣いて、怒る。それなら、特別な人間だと思ったほうが遥かに楽だぞ。」

笑って言う千桜に、ルカは、

(最初はわたしと同じことを思ってたんだな。)

そう思った。その後は、千桜に、相談したいことを聞いていた。

「昨日のことなんだけど、ソラ君に私は心に壁があるって言われた

の。自分でも、壁を作っているのはわかってる。でも、どうしたらいいのかが分からない。ねえ、ちーちゃん、私はどうしたらいいの？」

千桜と話している時は、何も壁は作ることはないが、確かに外の人と話す時のルカは、話すらそうにしているのは、千桜も感じていた。だが、それはルカ本人の問題であるため、千桜は、

「それは、ルカ次第だよ。他の人を信用していない心が生み出しているとは私は思っている。多分、それは無意識の状態だと思うから、それに、ソラ君とアネさん意外に一回でも本心を言ったことあるか？」

まずは、そこから治すしかないと思っていたため思い切って言った。ルカは、考える素振りを見せていたが直ぐに、結論に至った。何故なら、ヒナギクは時々話すが、後の人たちとは、あまり話したことがないのだ。

「ソラ君とアネ姉さんとはよく話をするけど、ほかの人とは余りしてない。ちーちゃんは別だけど…後は、ヒナギクさんが向こうから話しかけてくれる位かな？」

その言葉を聞き、人と話すこと自体が駄目なのか、先ほど言った通り、信じきれないのか千桜は分からなくなった。するとそこに鬼姫があらわれ

「ルカ様、話しを勝手に聞きました。我が儘を言ったことはおありでしょうか？友達にしましても、少しくらいの我が儘ならば許してくれるものですよ。一回言ってみたらどうです？それと、自分の秘密を少しでも教えてみては如何でしょう。」

「鬼姫さん、私とルカの話しを聞いていたのですか？」

千桜は、聞いた。すると、鬼姫は

「私は、武術の練習にここを使います。ルカ様が走ってきたので、どうしようか迷いましたが、千桜様が来ていることに気付き、何もしませんでしたが、少し迷っている感じがしましたので、こうして話しかけた次第です。お叱りならば、後でいくらでもお聞きします。」

サラっと言った。千桜は、誰もいないと思っていたので少し恥ずかしくなったのか、顔を赤くした。それを見て、鬼姫は何を思ったのか、カメラをだし、千桜の顔を撮ったのである。

「な、な、なにをしているんですか！！鬼姫さん！！」

写真を撮られた千桜は、もっと顔を真っ赤にして、鬼姫のカメラを奪おうとした。すると、一般人相手に使うものなのか、瞬歩を使い千桜の後ろに移動した。

「千桜様、私のカメラを奪いたいのなら、本気で来てください。でない、ソラ様にこの笑顔を見てもらいますよ？」

鬼姫は、笑いながらそう言った。千桜は、それだけは絶対に阻止しなければならぬと思ひ、鬼姫に向かって走り出した。普通に走ることしかできない千桜が瞬歩を使うことが出来る鬼姫に勝てるはずもなく、翻弄させられていた。最初、ルカは見ていただけであったが、我に帰り、鬼姫が移動する場所を予想し、カメラを奪うために飛びついた。鬼姫は、ルカの行動も見ていたのか、直ぐに瞬歩を使

い避けた。

「ルカお嬢様、何故このカメラを奪おうとしたのですか？このカメラには、千桜様の顔写真しか入っておりませんよ？」

ルカがカメラを奪うことを手伝ってくれると思った千桜は、少し楽になると思っていたがそれは間違いだった。

「そのカメラを奪ってソラ君の反応が見てみたい！！鬼姫さん！！違う人の写真も撮ってきて！！」

思わぬ言葉に、鬼姫と千桜は時間が止まったように、止まりそして驚きながら振り向いた。まさか、ルカの言葉からそのような言葉が聞こえてくる等、つていかなかったからだ、そして、鬼姫は笑い、千桜は何をしてもカメラを取らないといけなくなった。

「私から、カメラを奪うことができたのなら、その望みを叶えましょう。」

鬼姫がそう言ったことで三つ巴の戦い？が始まった。だが、戦闘経験者の鬼姫に千桜とルカが、適うはずも無く結局、奪うことは出来なかった。そして、鬼姫は、

「それでは、条件を変えましょうか。私に触れることができたのなら、望みを叶えましょう。」

そう言った。千桜とルカはヘトヘトなのかうまく動くことが出来なかった。だが、二人は諦めることなく、鬼姫に向かっていった。最後は、千桜が疲れて気絶したところにちょうど瞬歩で移動してしまい、千桜が触れたことになった。千桜が意識を取り戻すまで、ルカ

と鬼姫は、話していた。

「ルカお嬢様、どうですか？思いつきり動いてみて、何か感じましたか？何を思いましたか？悔しかったですか？」

その言葉に、

「悔しくはあるけど、すごく楽しかった。でも、いいのですか？私たち相手に、疲れる戦法で付き合ってくれて……」

ルカは鬼姫がかなり疲れていたのを、遊んでいる？時に気付いていた。普通は、瞬歩など使わなくとも、鬼姫が勝つことは可能だったのである。そのことにルカが、気付いていることに驚きながら

「ええ、ルカ様、大丈夫ですよ。それに、楽しかった記憶は、何時までも心の中に残ります。それに、最後の方は気持ち良かったのではありませんか？途中から、かなり動きが良くなったので、私はそう思ったのですが……それと、何故、悔しいと思ったのか分かりますか？」

そう聞いた。ルカは、

「悔しいのは勝てなかったからだと思う。動きが良くなったのはわかりま「楽しかったですよね、今までの思い出の中でどの思い出が楽しかったですか？私と遊んでいるときの笑顔は綺麗でしたよ。心の壁は、自分と向き合うこと、他人と向き合うことだと私は思っています。ルカ様は、先ほど、私に全力で向かってきました。つまりは、そういうことです。損得勘定は後回しでいいのです。」

ルカは、自分は何のことで心に壁を作っていたかが分かった。裏切

られたくない、という感情が一番だったのは、確かだがそれ以上に、自分の借金のことだった。そのことを話して、皆に見られる目の事を考えてしまって、自分が言いたいことを言えなかったのである。そのことに気付きルカは鬼姫に

「有難うございます。私は、分かりました。自分が何を思っていたのか、何に怯えていたのか…くだらないことだったんですね。今まで少しの間過ごしてきたのに、結局は、皆からソラ君から見られる目のことを気にしていたんです。信じれきていないと言われてもおかしくはないです。それと、ソラ君を思う気持ちがあつきました。ソラ君に家族と言われて心が痛んだのは、私は、ソラ君の事が好きだったんですね。」

鬼姫はその言葉を聞き、救う人があれば救われる人もいるということとを本当の意味で知った。実は、早島に、あまり手を出すな。と言われていたのだ。だが、きっかけは何であれ早島が言うことは守れなかったのだ、しまったなと心の中では思っていた。だが、直ぐにまあいいかと思うことにした。その後、千桜が目を覚まさないので、鬼姫が担いで戻ることになった。ちなみに時間より二時間ほど前ではあったが、ルカはソラに電話をして待ち合わせをしていた。

「ルカ？心の準備は出来た？みたいだね。顔構えが、出て行く前とは違ってる。それなら聞きましょうか。大切な話を…」

ソラはそう言い、ルカが何か言うのを待った。暫くしてから、

「ソラ君、鬼姫さんと少し遊んで気付いたんだ。私自身が皆の事を全然信じていないということに…」

「ちょっと待って、雫と遊んでそんなに汚れるの？何をしたの？」

ル力はソラに言われ自分の今の状態を見てみた。すると、服は泥がついていて、膝は疲れが来ていたのか笑っていた。ル力はソラに向かって笑った。それを見たソラは、笑い方自体が違う所を見て、誤魔化したと思ったが、何も言わなかった。

「それでね、今まで悩んでいたことを言うことにする。ソラ君、私は貴方の事が好きです。ちゃんと考えた結果がそうだった。助けられたのが切っ掛けではあったと思うけど、今の私のこの気持ちに嘘や偽りは絶対にはないです。」

そう言い切った。ちなみにその場にはやはりと言うか、鬼姫に連絡を受けた、紫子たち八人と帝、鬼姫、早島の三人が隠れてみていた。愛歌と千桜は

「こういふのを見るのは余りいい気分がしませんね。それが、ソラ君への告白だと思うと余計に……」

ヒナギク達をジト目でみて二人とも思っていたが、愛歌は口に出していった。周りは苦笑いで誤魔化すしかなかった。鬼姫は早島に

「栗、手を出すなといっただろ。ソラ様が自分でなんとかすると言っていたのに、その役を奪ったのだぞ。ま、起こってしまったことは仕方がない。これからは、注意して行動してくれ。後、個人的には、よくやった。それと、ソラ様が、栗は瞬歩が上手くなったね、僕が教えることはもうない。と仰っていましたよ。良かったじゃないですか。」

そう言いながら、鬼姫を撫でながら話した。鬼姫は顔を真っ赤にして何か言おうとしたが、何も言わずに撫でられていた。ソラは、小

声で

「御免ね、そこにいる皆には言っているんだけど、まだ答えは出せない。これから真剣に考えといけないからね。」

そう言っただけで扉の方に歩きだした。その言葉にルカは、

(そこにいる皆？何を言っているの？ソラ君は？)

ルカソラが扉を開けてから、そこに皆がいることに初めて気付いた。急に扉が開けられたので、美希たちは支えがなくなり倒れてしまった。早島と鬼姫、帝はただ単に来だけなので、扉にはもたれておらず、倒れることは無かった。

「見ていたんですね…私がソラ君にしか聞かれないことだったのに…」

ユラーリという表現がしっくりくるような動きをして理沙達の方に近づいていった。顔は髪で隠れてしまっただけだったが、赤く光っているように見えるのは気のせいだと思いたいが、元々ルカの瞳の色は赤いので何も言えなかった。ヒナギク達は、逃げようとしたが、アテネが

「ルカこれからは、家族でもありライバルでもあるわよ、これを持っておきなさい。これについては後で説明するわ。」

そう言い、王玉を渡した。それを見て、ルカは

「有難うございます。でも…一人目捕まえました。」

そう言つて。アテネを投げ飛ばした。ヒナギクたちは油断しているとはいへ、アテネを投げ飛ばしたことに驚いて動けなかった。ちなみに投げられなかったのは、ソラと早島、鬼姫だけで、ミダスも帝も投げ飛ばされていた。一回投げ飛ばしてスッキリしたのか、

「これからは、ソラ君を争奪戦？に参加するので宜しくお願いしますね。それと、私を怒らせないほうがいいですよ？」

そして、皆が目を覚ました頃に時間が来てしまい、急ぐことはなかったが、その為時間が一時間遅れで、へりに乗り込み帰っていった。自分の部屋からへりを見ながら、帝は

「ミダス、アテネ、ソラのことには頼んだぞ。儂は、まだやらねばならないことがある。まあ、あの九人がいれば何かない限りは、多分大丈夫だろう。」

そう呟いていた。

27話（後書き）

本家で少し作ってから、自分の家に帰ってきて作ったので、少し前半と内容が違うかもしれませんが、ご了承ください。

あとがきで書く事ではないのですけどね…

今回はかなり急に休日を終わらせてみました。

何故かという知り合いに話が進まなくてつまらないと言われたからです。後は、流石にもう二話ほど作れる技量がないので今回は知り合いの言葉に賛成して終わりにしてみました。

他にも色々その知り合いには指摘を受けているのですが、ほとんど無視しています。

でも、読んでくれることには正直感謝しています。

愚痴になってしまいましたが、最後までお付き合いしてもらえると嬉しいです。

28話（前書き）

27話のあとがきでまた、分かりずらく書いてしまったことを、ここで詫びします。休日を終了と書きましたが、三千院の本宅での休日のことです。

一日残っているので、この29話と30話までが休日の最後になります。

申し訳ありませんでした。

2011/11/6 17:49 一部分の追加、改稿

ソラたちが、三千院本宅から帰ってきた次の日、ソラは、色々な、と言つかヒナギクを除く全員の家に呼ばれていた。天王州家は信用することが出来てもソラ自身の事を何も知らない為、実際にあつてみたいと言う話があり、ソラは各々の家に向かっていた。最初は、美希の家だった。幹の家に着き呼び鈴を鳴らした。しかし何も反応がなかった。暫く待っていると、いきなり、後ろから何かが迫ってくることに気付いたソラは、後ろを確認することなく、その何かを掴んだ。それは、ナイフであった。すると、どこからか拍手の音が聞こえてきた。

「いきなりこんなことするなんて、危ない家だったんですね。後、これお返しします。投げるんで、避けないと死にますよ?」

ソラは、少し怒っていた。会いたいと言ってきたにも拘らず、攻撃を仕掛けてきたのもそうだが、一応ソラの扱いは客なのである。客相手に、武器を使い攻撃をしてくる人間がどこにあるというのか? ソラは上にナイフを投げた。ソラに向かってナイフを投げた人間は、どこに投げているんだ? と思い笑った。すると、上から自分の頬を擦るようにナイフが落ちてきた。そのことに驚きながら、ソラの方を見てみると、

「今直ぐ出てこないと、次は本気で当てるよ。今のは、態と外してあげたけど…」

自分の方を見て睨みながら、そう言ったのである。男は、恐怖で動くことが出来なかった。そして、ソラは、男が出てこないことを確認すると、石を拾い、投げようとした。そこに、

「君が、ソラでいいのか？私は、美希お嬢様の執事をしている神楽紅（こう）と申すものです。失礼ですが、試させてもらいました。ですが、お嬢様の言うとおりで、かなり身体能力は高いようですね。」

扉と反対方向を向いていたので、ソラは、自分の事を馬鹿にしたような雰囲気を醸し出している、神楽の方を見た。そして、

「ねえ、上に気を付けないと、怪我するよ。何時からいたのかは知っているから、時間差で、一つ投げておいたから、そうだね、後三秒……」

ソラの言葉に、上を見て直ぐに嘘でないことに気付き、後方に飛んだ。すると、今までいた場所に、石が落ちてきた。

「危ないですね。そのような方を、通すわけにはいかな「じゃあ帰る。他にも行かなきゃならないところが、後三箇所ほどあるから、じゃあね、無能な執事さん。」

そう言い、ソラは帰ろうとした。神楽は、自分が無能と言われて、頭に血が登り、ソラに殴りかかった。ソラは、それを、後ろを見ないまま動き、避けた。そこに、

「おい！！何をやっている！！」

神楽が出てきた門の所に二人の人間が立っていた。その男の言葉に体を一瞬震わせてから

「し、執事長、メイド長も何故このような場所にき「私が聞いているのは、その御方に、何をしようとしたのだ、と聞いているのだ。」

なぜ答えられない。」

顔を真っ青にして何も言わずに下をむいてしまった。神楽を一瞥してから、ソラの目の前に立ち、頭を下げた。

「花菱家の執事の一人がご迷惑をおかけしました。申し訳ありませんでした。私は、この花菱家に務めさせてもらっている執事長の神楽かと申します。以後お見知りおきを……」

その言葉に、ソラはやっとまともな人が来たことに安心した。だが、先程の男と同じ名前のことが気になり

「あの執事も、同じ名前なの？さっき自己紹介で、神楽の名前を言っていたけど？」

執事長の神楽は、男を睨んだ。すると隣にいた女性が、

「いえ、あの方は、苗字も名前も違います。たぶん、お嬢様が呼んだソラ様に、嫌がらせをして、帰しそれを神楽に押し付けるつもりだったのでしょう。一応、来てみて正解でした。これで何回目の失態ですか？貴方は、明日からもう一度研修をしてもらいます。嫌でしたら、お辞めください。」

一方的に言った。男は力一杯手を握り締め、悔しそうに下をむいたまま、

「了解しました。明日から、教育プログラムに行かせてもらいます。」

そう言って、屋敷の中に入っていった。それを見たソラは、自己紹

介をしていないと思い話し始めた。女性の名前を知らないソラは、

「初めまして、綾崎ソラです。神楽さん、えーっと「失礼しました。自己紹介がまだでしたね。私は、花菱家のメイド長をしている、宮下した一かずき?と申します。皆様からは、一か姫かずと呼ばれています。お好きな方で、宜しく願います。」じゃあ、姫さんで、一応今日は、少ない時間ですが宜しく願います。」

途中で聞き、そう返した。宮下は一方で来ると思っていたので、姫できたことが予想外だったのか、閉じていた目を開けてソラを見た。その瞳は、澄んだ血のように真っ赤になっており、猫のような縦目で、人ではありえない瞳だったが、ソラは凄く綺麗だと思っていた。とは言ってもこの作品、純粋な日本人で髪や目の色が違う人が多いのも事実だが、宮下の瞳はその色を凌駕していた。そして、直ぐに自分の目を見られていると思い、閉じてしまった。神楽は、ソラの反応が想像通りだったことを確認してから、

「ソラ様、今の瞳のことどう思いますか？」

宮下は、まさか神楽が、自分の目の事を言い出すとは思わなかった。ので、驚いていた。ちなみに、花菱家では、メイド長の方が、位が上なのである。

「僕の見えたら…」

そこで、少し言葉を切られたことに、宮下はすごく不安になった。

(気味が悪いと言われたらどうしよう…美希様は、ソラ様が来ることを楽しみにしていたのに…私のせいで帰ってしまったら…)

そう考えていたが、ソラは、

「凄く綺麗だと思います。ルビーみたいで輝いていて、姫さんはその瞳の方が似合っていると思うよ。他には、特にはないかな？それがどうかしたの？」

瞳の色の事がコンプレックスだった宮下は、それを聞きソラが美希と同じ反応をしたことに、安堵し息を吐き出し、宮下は最初、美希とあったことを思い出した。

「ねえ、宮下は目を何で開けないのだ？開けることができないのか？」

私はその時は、メイドではなく、ただ、美希の家庭教師として呼ばれていたのだった。何故、自分が選ばれたのかは、分からなかったが、美希は、やはり気になるのか聞いてきた。

「いえ、美希様、私は目が開けられないわけではなく、目を開けたくないのです。この目は、危なすぎますから…では、美希様、勉強を始めましょ」「目を見せてくれないと始めたくない。」

美希の言葉に、家庭教師として招かれたのに、勉強を教えていないとなると、直ぐに首になることに焦りながら、

「どうしてもですか？」

美希が頷いたのを見て、諦めるしかないと思っていた。そして、覚悟を決めて、目を開けた。目を見た美希が息を呑むのが聞こえて来たことに

「私は、この目が嫌いです。人間の目ではなく、猫の目なのですから…このせいで、両親に捨てられましたから。お祖父さんとお祖母さんが私を育ててくれたので、苦痛はありませんでしたが…」

目を見て、真実を知ってしまった美希は、自分が開いてはいけない扉を開いてしまったことより宮下の目を見て

「凄く、綺麗じゃない。私は好きよ、その目の色は、気にしないでもいいのじゃない。私は気にしないしね。」

そう言ったのである。そしてその後は、トントン拍子で、話が決まり、花菱家の美希付きのメイドをすることになった。それから、数年でメイド長にまでなってしまった。ちなみに、美希の叔父と両親の反応は、

「少し違うところがあったほうが、人は輝く。いつか自分のその目を堂々と開けられる日が来るといいな。」

「美希が、言ったと思うけど、私は、その目のことは、特には何も思わないわ。美希は、家庭教師が嫌いで、悪戯をして、追い出すことが多かったけど、貴方なら大丈夫そうね。美希のことを宜しく。」

そう言うだけだった。実は、今まで雇った家庭教師は、美希の母親が言うとおり、美希が自分の間違いを指摘したりするので嫌になり辞めていく人が、多かったのである

一度、そのことを思い出しクスツと笑った。ソラはそれを見て首をかしげたが、宮下がソラに

「それでは、ソラ様これから美希様の所にお連れします。ついてきてください。」

そう言つて、踵を返し歩きだした。綺麗と言われて嬉しかったのか、そわそわしたような歩き方だった。そして、数分歩き一つの部屋の前に着いた。宮下はノックをしてから

「宮下です。美希お嬢様、ソラ様がいらっしやいました。居間にお通ししたほうが宜しいでしょうか？」

美希の部屋の中で、ゴソゴソ何かが動く音が聞こえてから

「部屋に入れてください。」

そう言つた。実は、親が会いたいというのは口実で、ソラとの思い出を作っておきたいのだった。考えることは、全員一緒なのか、打ち合わせをしていたのか、朝に二件昼から二件家を回ることになつた。ソラは、扉に手をかけようとしたが、それ前に、神楽が、扉を開けた。ソラは、神楽に少しお礼を言つてから、中に入つていった。

「美希ちゃん、遊びに来たよ。というかこんな真似しなくても、呼ばれたらくるのに。」

ソラは、だいたいの理由に気付いていた。美希の親は、忙しく、普段から家にいないことは、知っていたからだ。美希は、やっぱり気付いたんだと思ひ。

「やっぱりバレてた？ソラ君は頭の回転が本当に早いね。それじゃあこれから何をする？私は、少し本屋に行きたいのだけど…」

美希は、少しの間でもデートをしたいのか、ソラにそう聞いた。ソラは、断る必要がないのだが、少し考えてから

「僕も、欲しい本があるかもしれないから行く。確か昨日が発売日だった筈なんだよね。」

ソラが本を買うとは知らなかった美希は、ソラが何を買うのかが気になった。ソラは、ソラで、美希がどういう本を読むのか知らないため何を読むんだろと思っていた。

「ソラ君は、どういう本を読むの？私は基本的に、将来は、政治関係の仕事に就きたいから、そっち関係の本だけど……」

美希の言葉にソラは、少し笑いながら

「小説と漫画で出ている本だよ。題名は『ソラのごとく!!』なんだけど、読んでみると親近感を覚えるような本だったから、ついハマっちゃって……」

そして、二人は本屋につき、自分の買う本を、買った。すると時間が来たのか、二人の時計が鳴った。ソラは、美希の執事が来るまで、本屋の外で待ち執事が来てから次は、理沙の家に向かった。ちなみに、神楽が別れ際にソラに聞こえるぐらいの小声で

「ソラ様、今日は有難うございます。美希お嬢様も、宮下も喜んでおりました。次回は今回のような不手際がないよう気を付けますので、またいつでもいらっしやってください。」

と言っていたのである。ソラは、当たり前な事を言ったりしたりしただけなので、何故お礼を言われるのかが、分かっていたが、

一応受け取ることにした。そして、徒歩で十分ぐらいの所にあるので、ソラは理沙の家まで歩いていくことにした。理沙の家に着きどこから呼べばいいのかが分からなかった為、賽銭を入れてお参りをしていた。すると

「この時期に、参拝客とは珍し…ん？君は理沙の言っていたソラ君かな？ああ、そういえば、自己紹介がまだだったね。俺は、理沙の兄貴の朝風あさかせ夜だよる。ソラ君の事は毎日理沙から聞いている。だが、ここで一つ言わせてもらおうと、」

一度、夜が言葉を切り、何を言うのかをソラが、待っていた。すると、

「ハーレムなんて羨ましいんだよ！！何だ水蓮時ルカって無茶苦茶ファンなんが「何やってるんだ兄貴は、」

理沙が、どこからか出てきて、夜に麻醉銃を打ち込んだ。ソラは、夜が寝ていることを確認し、

「理沙ちゃん、さっきこの人が兄って言っていたけど本当？」

理沙に聞いた。理沙は

「認めたくないが、本当に私の兄貴だ。残念に育ったから。頭の中は何時も春だよ。」

ソラは、麻醉銃をどこから出したのかは聞かなかった。すると、誰かが歩いてきた。

「よ、夜が倒れておる！！さては、貴様がやったのだな！！皆のも

「この子供を捕まえる！！」

理沙が何かを言う前に、般若の面をかぶった人間がどこから出てきたのか、二十人ほどいた。そして、ソラに攻撃を始めた。ソラは、

「危ないな、怪我をしたらどうするの？結構、痛いと思うよ。」

そう言い、一人一人確実に、一発で気絶させていった。時間にして、十秒程で終わった。それを見ていた男は、

「お主、何者だ！！この神社に何かようなのか！！」

ソラに聞いたが、答えは違うところから、聞こえてきた。

「お爺ちゃん、この前言ったと思うけど、彼は、同じクラスのソラ君だよ。もしかして、聞いてなかった？それで、兄貴は訳の分からないことを言っていたから、私が麻酔銃で眠らせた。」

その言葉を聞いて、お祖父さんは、しばらく考えて

「おお、そうだったか。すまんな、僕は、この神社の神主をしている、朝風あさかせ 小次郎こじろうじゃ。」

ソラは、今日は、自己紹介されることやすることが多いなと思っていたが、自分も返した。すると、何か用事を思い出したのか、倒れている夜と般若の面をした人をそのままにして歩いていった。そして、理沙がいつもと違う、巫女服を着ているのを見て

「理沙ちゃん、巫女服姿って初めて見たけど綺麗だね。」

理沙は、まさか急に言われるとは思わなく、顔を真っ赤にして、

「有難う／＼／」

と小さくしか言えなかった。理沙が普段通りに戻るまで十分の時間が必要になったが、十分後には、私服に着替えて出かけ始めた。どこに行ったかというと、

「ここの喫茶店の料理が美味しいのだよ。」

理沙にそう言われその喫茶店を見つみると『喫茶どんぐり』と書いてあった。理沙は、ここに一度、ソラを迎えにきてからよく来るようになった。中に入ると

「あら？またソラ君と理沙じゃない。どうして二人が？」

またもや、ヒナギクがいたのである。理沙は気まずそうに、今回のことを話した。

「両親が、あつてみたいっていうから家に呼んだのだけど、その両親がいなくて、仕方ないから昼でも食べに行こうっていう話になって、ここに来た。最近、ここで食べることが私は多いよ。ヒナがない時が多いけど。ちなみに言っておくと、ソラ君はさっき、美希のところに行った昼からは、同じ理由で、愛歌さんと千桜の所に行くらしい。」

そう言った。ヒナギクは、自分の親は母親の方は、もう紹介していたのと、色々な理由でソラと二人になることが多いので何も言わないことにした。そして、

「それで、理沙達は、何を食べるの？ここは喫茶店と言ってもかなり食材が極端だから、作れるものと作れないものがあるわよ。今、北斗さんもいないし。」

紅茶をだしてそう言った。メニューがないので、ソラは、焼きそばを頼み理沙は、いつも食べる、エビフライ定食を頼んだ。二人が頼んだ料理は五分くらいで運ばれてきた。

「ヒナちゃん、この店、客が少ないけど、いつもこんな感じなの？」
全然客がこないことを不思議に思い、ソラは、ヒナギクに聞いた。
すると、ヒナギクはやっぱり聞かれるかと思ひ。

「そうね、基本的にはこのくらい、この店は、ついでに始めてみただから特には収益に期待はしてないみたいけど…前、北斗さんが言っていたから確かだと思うわ。だから、理沙みたいな、常連さんしか来ないのよ。」

そう言った。すると、ソラは

「ここで、誕生日会とかって開けるかな？もうすぐ、ミーちゃんの誕生日だから、開きたいなと思ってただけ。一回、北斗さんに聞いてみてくれる？」

ヒナギクは、ミダスの誕生日は誰も知らなかったもので、ソラが知っていることに驚いたが理沙は、自分と食事をしているのに、違う人のことを話され、少しムツとしていた。それにソラは気づき、

「理沙ちゃんやヒナちゃんの時も期待していてね。」

とウインクをしながら言った。それを見た、ヒナギクと理沙は、顔を真っ赤にして頷くだけだった。その後は、紅茶を飲みながら、理沙と二人で話していた。ヒナギクは、邪魔するのは無粋だろうと思いかウンターに入っていた。何を話していたかというと、

「ハヤテに女装趣味が有るとは思わなかったな。まさか、メイド服を来ているとは思わなかった。」

誕生日の日に貰った、ヒナギクとハヤテの恥ずかしい動画集の話だった。動画は中でハヤテとヒナギクに別れており、ソラは、ハヤテ編だけを見たので、ヒナギクのDVDは、まだ見ていなかったりする。

「だろ、数年あつてないだけでどれだけ人が変わるかがよくわかっただろう。」

その話を少ししてから、まだ時間があることに気付き、外を散歩しようとお会計をした。

「ヒナちゃん、紅茶代が入ってないけど、いくら？」

ヒナギクは、料理の代金だけを取っていたのだが、

「いいのよ。紅茶代は、それよりアテネさんたちと以外出かけるのは久しぶりでしょ？楽しんできたほうがいいよ。」

その言葉を聞いた理沙はラッキーだと思っていたが、ソラには聞かない声で

「何があつたかはまた教えてもらおうわよ？私も話すから……」

ヒナギクは抜かりがないのか、そう言った。そして、理沙は先に外に出ていたソラを追い喫茶店を出ていった。後日、アテネとミダスがいるところで、話しを聞かれていた四人を見たが、全員が笑っていたのでソラは、散歩に出かけていた。次は、ソラと理沙は、公園に来ていた。

「ソラ君は、こここの公園によく来るのか？ルカに聞いたとき、初めて会ったのがこここの公園だと聞いた。」

理沙の質問にソラは、

「こここの公園の丘から見える、夕日と星空が好きだから、よく来るね。他にも理由はあるけど、今のところは、それくらいかな？」

空を見ながら答えた。理沙は、ソラを見てから、自分も見上げた。

そこに、ちょうど鳥が飛んでいくのが見えた。その鳥を見てソラは、

「おいで。」

手をだしてそう言った。その鳥は雀と同じくらいの鳥で、ソラの事を警戒することもなく、近付き、手の上に乗った。理沙は、自分が見ているものが信じきれない気持ちがあった。普通鳥は、人が近付くと逃げるのが当たり前なのに、その鳥は、ソラの言葉が、分かったのかと思うほど、あっさりと手のひらに乗ったのだ。

「その鳥は、どういう種類かわかるのか？」

理沙は、ソラが何度も呼んでいるので懐いて、警戒心が無いと判断して、ソラにどういう種類の鳥で名前は何かを聞いた。すると、

「ここに来たときに直ぐに懐いた鳥だけど、種類とかは知らない。知らなくても、変わることはないと思っっているから。餌はあげてないしそこまで懐かれる理由が分からない。」

ソラは、そう答えた。理沙は、ソラでも知らないことが、あることに驚いていた。だが、ソラも人間、ミダスとは違い、知らないことがあってもおかしくは無いと思った。実は、ミダスは物忘れが激しい部分があるため、そこまで何でも知っているわけでは無かった。鳥を肩に乗せて、その後も、

「ソラ君、学院に来てもう結構経つけど慣れた？私と美希は最近成績の事も気にするようになったから、それほど悩むことはないけど、ソラ君は気になったことってある？」

話しを話していたが理沙が学院の事をソラに聞いた。ソラは、前々から一つのことを気になっていたので質問することにした。その質問とは、

「何でこの学院の昼休みの時間はあんなに長い？」

そうである、白皇学院の昼休憩の時間は、二時間とかなり長い、掃除をするわけでもなく、食堂で必ずご飯を食べないと駄目と言ったともない、極端な話、数人は外でご飯を食べてくる生徒も居るくらいだった。ソラの質問に

「白皇学院は、いいところの、お嬢様とお坊っちゃんがたくさんいる所だから、数年前に、時間を長くして欲しいと連絡が大量にあつて時間が、一時間から二時間に伸びたみたいだ。」

その話を聞いて、ソラは、結構くだらない理由で変更になったことを知った。その後も、暫く散歩をしながら話していたが、公園の時計が十二時を指していることに気付き、二人は、時間が来たことを知った。理沙は、

「じゃあ次は、千桜の家だったな。また学院であおう。」

そう言って帰っていった。ソラは、理沙が見えなくなることを確認してから、千桜の家に歩き出した。

28話(後書き)

今回は、美希と理沙を出させてもらいました。

次回は、千桜と愛歌です。

29話(前書き)

後編です。シリアス?の部分が出ています。

2011/11/8 13:14 一部分を追加、改稿

理沙と別れてから、ソラは千桜の家に向かった。美希の家から理沙の家に行くのと違い、二十分程離れているため、歩いていては、待ち合わせの時間に間に合わない。と思いソラは、走っていくことにした。走ったためか、ソラは五分ほどで千桜の家に着いた。千桜の家は、美希や理沙と違い普通の家からしたら大きいが屋敷ではなく一軒家であった。呼び鈴を鳴らし少し待っていると、ソラが知らない女性が、出てきた。よく見てみると、千桜に似ていたので、

「ハルちゃんのお姉さん？ハルちゃんにあいに来たのですが…いますか？」

そう聞いてみた。すると、女性が何か答える前に、

「お母さん、誰が来たのー？」

千桜の声が聞こえてきた。ソラは、そこで、目の前にいる人物が、千桜の母親ということを知った。ソラの事に気づいていない千桜に「千桜、貴方にあいに来た子がいるわよ？こんなかわいい子連れ込んで何やってるの？お母さん気になっちゃう。」

そう言った。そして、その言葉を聞き千桜は、走って玄関まで出てきた。その時、転んだのか、頭にはたんこぶを作っており、そのことが恥ずかしいのか、顔が真っ赤になっていた。その千桜を見た、母親は、

「この子に、千桜のお姉さんかって聞かれたけど、お母さんもまだ

まだ捨てたものじゃないわね。千桜はどう思う?」

「何を言っているのだ、お母さんは、それと、ソラ君いらっしやい。今から着替えてくるから、少し待っていてくれるか?」

ソラの返事を聞くまでもなく、千桜は、中に入っていった。それを見て千桜は素直じゃないわね、と笑いながら

「ソラ君? だっけ? 千桜の準備が出来るまで、中に入って待っていて。私はこれから、カラオケに行くからお茶とかは出せないけど、楽しんでいってね。」

そう言い、靴に履き替え、玄関を開けっ放しにして出ていった。ソラは、玄関を開けっ放しのことを見て、大丈夫か? この家に、泥棒や強盗が入ったら何もかも取られないのか? と思っていたが、何時までも、扉を開けっ放ししておくのも悪いと思い中に入っていた。暫くして、居間に千桜が降りてきた。千桜は、まさかソラが家の中に入っているとは思わず、

「お母さん、この服ってどっちがいいと思う?」

居間に入ってきた。そして固まった。何故かというと、今の千桜の姿は、スカートを履いてはいるが、上はシャツだけ着ていたからだ。その後、直ぐに千桜は、ソラでも目で追えないほどの速さで、居間を出ていった。扉越しに、

「ソ、ソラ君ノノお、お母さんはどこに行ったかわかるノノ後、黒と青どっちの色が好き?」

ソラに聞いた。ソラは、自分の知っていることを千桜に伝えた。

「さつき、カラオケに行くとかで、家を出ていったよ。お茶は出せないけど、中で待っていていれば、直ぐに出てくると思うって言った。それと僕は、どちらの色も好きだけど、強いて言うならば、青の方が好きだよ。だって、青空って見ていると気持ちがいいでしょ？」

ソラは、好きな色と理由を千桜に言った。その言葉を聞いた、千桜は直ぐにゴソゴソと持ってきていた服を着始めた。そして、居間に出てきて

「そういえば、今日は知り合い同士で、カラオケ大会があるから出かけるって、昨日の夜に言っていたな。それと、お待たせ。それじやあ出かけようか。プランは一応、私が決めておいた。その場で変更はあるかもしれないが、行こうか。」

そう言ったので、ソラは千桜についていくことにした。千桜は、どこに行くかを教えてはくれなかったが、近くのバス停からバスに乗り、とあるバス停まで乗った。降りてすぐに、近くにある、喫茶店に入った。そこは、コーヒーが主体の喫茶店で、飲み物はコーヒーと、ミルクしかなかった。三十分ほど、その喫茶店で話してから外に出た。話していたことは、

「ソラ君は、今日はアテネさんに何か言ってきたの？いつもどこか行くときは伝えてから出てくるってこの前、言っていたけど…」

そう聞いた。それにソラは、

「最近は何も伝えてないよ。この前から、どこかに出かけても、アーたんは何も言わないから。楽しかったかどうかくらいは聞くけど、それ以上は何も聞いてこなくなった。一人でも、大丈夫と思ったの

だと思っけど？それがどうかしたの？」

逆に、ソラに聞かれてしまった千桜は、咄嗟に答える事が出来なかった。何故かというところ、アテネには内緒で、デートしようという話しを四人で決めて、出かけていたのだ。表の理由として、親がソラと話してみたいと言ったから、と言う隠れ蓑を使ってまで、行動にでたのである。その計画は、理沙がヒナギクにあった時点で、台無しになっているのを理沙以外はまだ知らなかった。

(答えられない。アテネさんたちに内緒で、デートをしようとして、この計画をたてたなんて…)

何も言わない千桜を不思議にソラは見ていた。そして、

「どうかした？僕の顔を見て。何かついてる？」

千桜にそう聞いた。

「いや、ただ前は、言ってから出てきていたと聞いたから、今回も言ってきたのかなと思って聞いたんだ。それじゃ次は、あそこにあるゲームセンターに行ってみようか。私は、久しぶりに来るけどソラ君は来たことある？」

誤魔化すように、ソラに向かって千桜は言った。誤魔化し切れたいは思ってはいなかったが、ソラが

「動物園とかの娯楽施設は、小さい頃、お祖母さんに連れていってもらったことがあるけど、カジノ以外のゲームセンターは初めて。アーたんとは、観光地を回っていただけで、あまり娯楽施設には行ったことがない。カジノは行ったことがあるけど、オーナーに泣き

つかれたから、それ以降は行っていない。」

「オーナーに泣きつかれたって何をやったのだ？」

ソラの言葉に、少し不思議に思った千桜は、ソラに聞くことにした。お祖母さんに連れて行ってもらったという動物園の話は、タブーだと思い聞かなかったことにして、ソラが話し始めるのを待った。すると、

「数年前の話なのだけど、アーたんが仕事が入って、どうしても僕一人で過ごさないと駄目な日があったんだ。その時に、カジノというものをやったことがなかったから、行ってみた。そしたら、スロットをやったのだけど、毎回7が揃ってコインが大量に出てきた。他の物でも、ポーカーもファイブカードが揃ったり、ルーレットでは、適当に言った番号があたりたり、そんなことばかりだったから、途中でオーナーが直々に出てきて泣きつかれた。それから、一度も顔を出していない。」

啞然としながら、その言葉を聞いた。それもそうだろう、普通は出すことが出来ないように出来ているところで、何もしていない人間が当たりを連発するのだから……千桜は、これから、欲しいぬいぐるみがあったときは、ソラに任せれば必ず手に入ると思った。その後は、シューティングを最初に二人でやり始めた。ソラに最初の動作を教えると、早速やり始めた。ゲームの最後の方になると、千桜とソラは阿吽の呼吸で声を掛け合うことなく、そして、相手の邪魔をすることもなく最後まで来ていた。ちなみに、二人とも、一回ずつやられただけで、後はノーミスでクリアしていた。終わった頃には、周りに人だかりが出来ており、拍手喝采だった。ゲームセンター自体を盛り上げてくれたお礼として、ここのゲームセンターのオーナーに、二人はお揃いのマグカップを、貰っていた。

「初めてシューティングをやってみたけど、楽しかった。最初に一回しか死ななかったのもあると思うけどね。千桜ちゃんも、凄くうまいね。このゲームをよくやっていたの？」

千桜が、一度ソラを守るために死んだ事に、ソラはそう結論を出し千桜に聞いた。すると、

「この前作のゲームはやったことはあるけど、このゲームは初めてだったから、まさか一回の自機の死亡でクリアできるとは、全く思ってたなかった。ただ、ソラ君は本当に初めてやるのって思うほどうまかったから吃驚したよ。」

そう言った。その後は、UFOキャッチャーを楽しんだ。千桜は、何回やっても、欲しいものが取れなかったが、ソラが少しアドバイスをするのとコツを掴んだのか、それ以降は、とり放題状態だった。流星に千桜は悪いと思ったのか、

「ソラ君、そろそろ出ようか。それに、時間は大丈夫？次は愛歌さんだったよね。家ってわかる？」

ゲームセンターから出ることにした。時間はまだ、三十分は余裕であることを知っていたが、聞いた。

「まだ、時間はあるよ。でも家は住所しか教えてもらったことしかないから、よく分からない。一応、家の形と色は教えてもらったから、直ぐに見つかるとは思うけどね。」

その言葉を聞き、千桜は、歩けば時間内に愛歌の家につくと思いい、案内をすることにした。

「ソラ君、今から歩けば、愛歌さんの家に時間前に余裕で着くから散歩がてら連れていこうか？」

そう聞いた。ソラは、まさか千桜が道案内をしてくれるとは思っていなかったのだ。

「いいの？まだ、遊ぶ時間はあるけど…ハルちゃんがそれでよければ、お願いします。」

「じゃあ、歩いていこうか。」

そういい、千桜の家がある方に歩いていった。愛歌の家は、ゲームセンターとは反対の方にあるので、散歩といっても、バスで千桜の家の近くのバス停まで戻ってから、歩きだした。暫くは、

「ソラ君は、部活や生徒会には入らないのか？入ればレギュラーを簡単に取れると思うけど…」

千桜は、少し疑問に思っていたので、ソラに聞いた。ソラは、普通の人より遥かに運動神経がいいので、運動部に入れば直ぐにメインのメンバーに入ることが出来るという確信を持っていたので千桜は、どうしてなのかな？とかなり前から思っていたのである。ソラとしては、あまり聞かれなくなかったことだったので、少し考えてから、

「この前も言ったけど、人間は異質を嫌う。それに、僕が入ったところで、僕主体になるか、もしくはいきなり現れた人がレギュラーをとってみて…ハルちゃんはと思う？少しいらつかない？後で入ってきた人間が、うまいという理由だけで、自分の出番を取ってしまう。それに、学院は、お金持ちが一杯いるからどんなことになる

が分かったものじゃない。だから、僕はどこにも入らない。」

千桜は、ソラの言うことに一理あることを知っていたので、何も言えなかった。すると、愛歌の家の近くに来ていたことに気づき、時計を見てから

「あそこの、大きい家が愛歌さんの家だよ。時間は丁度だから、そのまま呼び鈴を鳴らせばいいと思う。それじゃあ、私は「千桜さん、少し上がっていきませんか？」

急に後ろから誰かに声をかけられ吃驚していた。すると、ソラが、

「愛歌さん、昨日ぶりです。体は大丈夫？」

愛歌が後ろにいることを、ソラの言葉で知って千桜は後ろを振り向いた。そこには、愛歌さんと一人の女の人が立っていた。

「愛歌さん、驚かさないでくださいよ。いきなりだったので、吃驚したじゃないですか。それに、もうすぐ愛歌さんの時間ですよ？いいのですか？」

すると愛歌は、

「ええ、ソラ君に家の道案内をしてくれたのですよね？有難うございます。でも、電話をしてくれたら、こっちにいる「初めまして、千桜様、愛歌お嬢様のお世話係しております。霧崎結女きりさき ゆめ、と申します。紅茶でもお出ししますよ？」

千桜も初めて見る、女性に驚いていた。それと、何故自分にだけ、初めまして、と挨拶をしたのが分からなかった。普通なら、ソラ

にも言うはずだからだ、だが千桜は

「愛歌さん、新しい人を雇ったのですか？今まで見たことがないのですが…」

愛歌が何か言う前にソラが

「お久しぶりです。ユメさん元気だった？この前、行ったときになかったからてっきりやめたのかと思っていましたが、愛歌さんのメイドをやっていたんだね。三千院の方は、なにか理由があると思っていたから何も聞かなかったから分からなかった。それに髪の毛伸ばしたんだね、前はショートカットだったのに、どちらも似合っているからいいけど…」

「ソラ君、結女の事知っているの？一人事情があつて、辞めることになったから、帝お爺様に連絡したら結女が来たの。それで、私の世話係をしてもらっていたの…」

愛歌はそう言った。すると、

「ソラ様、お久しぶりです。私は元気ですよ。ソラ様もお元気そうで何よりです。それでは、こちらへどうぞ。」

そう言い、結女は中に入っていった。顔色ひとつ変えずに屋敷の中に入っていった。千桜は、結局中に入っていくことを断り帰っていた。ちなみに、結女は顔色を全く変えなかったが、心の中では

（ソラ様と聞いていたけれど、まさかあの人が愛歌様と知り合いとは思わなかった／＼／久しぶりに見ただけどかつこ良くなっていたな／＼／愛歌様が好きな人というのは残念だけど、全力でサポートし

ないと。それにソラ君あの時のことはもう忘れているだろうしね)

とかなり嬉しがっていたりする。実の事を言うと結女の初恋の人物はソラでもあったりする。結局、気持ちを伝えることができない関係になってしまったので、どうすることも出来なかったが、中に入っていた愛歌とソラは愛歌の部屋に来ていた。部屋の中には、ぬいぐるみが大量にあった。

「すごいぬいぐるみの量だね。吃驚した。」

愛歌はその言葉を聞いて、

「私には似合いませんか？」

恐る恐る聞いた。ソラは、特に何も思っていないなかったのと、ミコノスのアテネの部屋には愛歌の部屋にあるぬいぐるみの倍位の量があるので、これが当たり前と思っていた。

「似合う、似合わないは、特に気にすることじゃないよ。だってそれは相手が思い描いていた自分との違いだから。それにアーたんのミコノスの別荘には、地元の人に貰うのか、この部屋の倍くらいの量のぬいぐるみがあるし、それに治りつつあるとは言っても、一人じゃ寂しい時もあるから、僕はいいと思うよ。」

それを聞き。安心した表情を見せた愛歌に

「そういえば、ユメさんと一緒に外に出ていたみたいだけど、何処かに行ってたの？」

外に出ていた理由を聞いた。すると、

「暫く、家の周りを体力の回復もあわせて、散歩するようにしている。それに今まで出ていなかったから、近くに店が出来ているのかも知らなかった。知らないことが結構あることに最初は吃驚したのよ。それと一つ聞きたいのだけど、結女のこととは何時から知っているの？」

愛歌は、最初三千院のメイドとして知り合っただと思っていたが、愛歌の部屋に来るとき、ソラの顔色が少し悪いように感じ、ソラの体力を考えると、疲れから来ていることでは無いと判断した。千桜と別れたからと言っても、また学校であえる。つまりは、原因は、愛歌自身か、結女になると思っていたのだ。そして、愛歌の予想は的中した。

「小学校の時同じクラスだったんだ。ユメは、僕が虐められる前に一人、父親がいないことで、虐められていた。それを、僕が助けたことがあるんだ。暫くして、ユメは家の事情で引越すことになって、それから久しぶりにあったのは、三千院の本宅のメイドをしていた。気にはなっただけど、あつて直ぐに気づいたけど、ユメの方はもう忘れていたのか、さっきと同じ態度だった。だから、僕も何も言わないことにした。」

ソラの言葉に、愛歌は結女にとって悪いことを聞いてしまったと思っただ。その後、結女が紅茶を持って入ってきた。愛歌は、その結女を見てソラの事を言おうとして止めた。何故かというと、結女の目の下が少し赤かったからだ。結女は、扉の外で聞いていたのである。ソラが自分の事を覚えている。ということが嬉しく、そして辛く持つてきた紅茶を、また厨房に持っていき暫く泣いていたのである。結女は愛歌が見ていることに気付き小さな声で、

「愛歌様、いいのです。私は、ソラ君に覚えていて頂けただけで幸せですから。それに、過去に縛られては、前には進んだとは言えません。思うだけならば自由ですから…ですから、愛歌様は、頑張ってください。」

そう言い、一礼して部屋を出ていった。ソラは、何を話しているのかが聞こえなかったので、首をかしげて愛歌の方を見ていた。

「どうかしたの？何か話していたみたいだけど、何かあった？」

愛歌は、何も言えなかったが、

「ソラ君、何も無いわ。たいして必要なことじゃなかったから、大丈夫。これから何をしましょうか？私は、今日はもう外に出ることができないから、屋敷を出ずに出来ることになるわ。」

ソラは、少し考えて特に何もしたいことがないので、話しをするようにした。愛歌は、小さい頃は病院に入退院することが多かった。その為、自分の夢は小さい頃は、医者になりたかった。助けてもらったから次は助ける側になりたかった。ということ、そして、その夢は、自分の体力のなさで諦めるしかなかったこと。暫く話していた。ソラの夢は、小さい頃から何も思っていなかったというのと、愛歌は何も言わなかった。ソラの過去については、美希の話を聞いているので、知っていたからだ。そして

「ソラ君に聞いておきたいことがあるの、もしソラ君が、無理だと思うことができたらどうする？一人で解決できないことが出来たら…」

愛歌が何を言いたいのかは分からなかったがソラは真面目に考える

ために暫く黙って考えた。そして、

「誰かに頼る。その時、頼る人はその場によって変わってくる。自分が冷静にならないといけない時は、誰か殴ってくれる人に近くにいるもらう。そんな状況になったら、多分来るのはアーたんやミーちゃんではなく、野々さんか、ハヤテだと思う。男友達では、一番信用しているからね。それがどうかしたの？」

ソラは答えてから、いつもなら愛歌が質問してくることはないことだと思いき返した。すると、愛歌は顔を少し青ざめながら

「今日、ソラ君が誰かを助けるために、命を失った夢を見たの、本来なら今日は散歩自体も駄目だったのだけど、結女に頼み込んで気分転換をしたの。お願いだから、絶対に何かあったら焦らずに、私や皆に相談して。夢みたいなことになったら、私は、私達はどうすればいいのかわからなくなる。だからお願い。」

愛歌がパニックしていないことを、判断してからソラは、

「分からない。その時の場合にもよるから、絶対に約束は出来ない。だけど、もし余裕があったら絶対に一人では突っ込まないことを約束する。それじゃあ駄目？」

実のところ、今日あったソラを知る人物には、ほとんど同じことを言われていた。朝は美希と理沙とヒナギクに午後からは、千桜と愛歌に言われていた。何故こんなことが起こるのかはソラも、分からなかったが全員が同じことを言っていたということは、誰にも話さなかった。その後は、夕食の時間まで話しソラは愛歌の家を出ていった。夕食を誘われたが、ソラはアテネとミダスが昨日、外に食べに行こうと約束したことを愛歌に言い、学院に帰っていった。愛歌

はあの二人にはなるべく逆らいたくないので、納得するしかなかった。そして、ソラが帰ったあと、愛歌は結女の部屋の前に来ていた。扉を開けようとしたが、鍵がしまっていて入れなかった。中に結女がいると確信した愛歌は、

「結女、本当にソラ君のことは諦めるの？私には、遠慮をしなくてもいいのよ。ひとまず出てきて。話をしましょう。」

と話しかけた。暫くすると、扉が開き、結女が出てきた。結女の顔は、先ほど見た時より、確実に泣いていたのが分かるほど、目の下が赤くなって目は充血していた。そして、

「愛歌お嬢様、済みません。今日のお仕事は出来そうにないです。失恋がこんなに悲しいものだとは知りませんでした。」

そう言うってから崩れ落ちてしまい、また泣き始めた。愛歌はそれを見て、結女がソラの事を確実に諦めることにしたことを悟った。そして次の瞬間、愛歌は屈んで結女を抱きしめた。すると、涙が溢れてきたのか先程より大きな声で泣いた。

「御免なさい。貴方に辛い思いをさせてしまつて。今日は、泣けるだけ泣きなさい。私が側にいるから。そして、明日からはまた貴方の元気な顔を見せて頂戴。」

愛歌はそう言った。その後、結女は愛歌の胸で泣き疲れたのか寝てしまった。愛歌一人では運ぶことができなかったので、一人執事を呼び、ベットに寝かせた。その時、執事は結女が寝ていることに文句を言おうとしたが、先程の泣き声が聞こえていたのか何も言わなかった。そして次の日に愛歌の所に結女が来て

「愛歌お嬢様、お早うございます。昨日は申し訳ありませんでした。今日から精一杯頑張りたいのでこれからも、宜しくお願いします。」
と言った。それを見て

「もう大丈夫そうね。それなら私は何も言わないわ。貴方がいないと、私は家で誰を頼ればいいのか分からなくなるわ。だから、こちらこそ宜しくね。」

愛歌は自分の思っていることを伝えてから、学校に向かった。

ちなみに、ソラ達は何を食べていたかというと、ミダスが食べてみたいということ、ハンバーガー屋でハンバーガーを食べていた。何故ミダスが食べたいと言いつ出したかという、マキナに日本で一番おいしいものはバーガーだと言われたからである。その後マキナは二週間ほど行方不明になった。

29話（後書き）

題名を付けたほうがいいのかと思ってはいますが、その話にあった題名を付けるのが難しいと思いつめました。

30話(前書き)

30話まで来てしまいました。
相変わらずグダグダになっています。

連休が終わり、次の日の朝ソラは朝早くに生徒会室に来ていた。生徒会室には、ハヤテも来ていた。何故かというと、またヒナギクに少し手伝って欲しいことがあると言われたからである。何を手伝うのかというと、

「ソラ君、ハヤテ君そこにある書類で私が見ないといけないものは、こつちに振り分けてそれ以外は、自分たちの判断で処理してくれる？まさか、ここまで、マラソン大会に意見や要望が出るとは思ってなかったから。先生たちには伝えてあるから、今日の授業は免除になつてる。生徒会だけじゃ追いつかないからお願いね？」

原因は自分たちにあることを知っているので、ソラとハヤテは席につき書類の整理をしはじめた。だが、机の上を見ると書類が山積みになっている。何故ここまで意見が来たのかというと、連休前時間間は遡る…

ソラとハヤテは、マラソン大会の事を知ってヒナギクに話しを聞きに行った。その時、

「今年は何かいつもと違うマラソン大会にしたいのだけど、二人は何かいい案はある？あるのなら教えてくれる？」

「ヒナギクさん、僕たちはマラソン大会のこと自体、今日初めて知ったのですよ。種目が別れているのは聞いたときに分かりましたが、実際どういう種目があるかまでは、僕もソラも知らないですよ。」

まさか、聞きに行ったのにヒナギクに相談されるとは思わなかった

ので、ハヤテはヒナギクにそう答えた。その言葉を聞き、ヒナギクはそれもそうか、と頷き説明をした。

「危ないという理由で長い間封印されていたのを、代理の学院長がそれを復活させた五つの行事の内の一つよ。全員が基本的に強制参加で一番短い距離は500m一番危ないのが、マラソン自由型これは、白皇学院を一周するのだけど、ポイントが五ヶ所あるの。そのポイントを全部回ってゴールする。第一ポイントはバラの花を貰う、その花が散ったらその時点で終了。ただ自由型はコースを外れても、ポイントを回ればいくら近道をしても構わないわ。壁とかを壊すと自分で弁償しないといけないから、基本はみんなルートを守って走る。それと、参加者の妨害をしても違反にはならないって言う危険な競技だから、二人一組で走ることになっているけどゴールはどちらか一人がすれば問題はないわ。基本的にはこれくらいね。」

ソラとハヤテはヒナギクの言葉に啞然としていた。普通マラソン自由型などの危ない競技を学院で行なっているものなのかと思っていたからだ。そして、

「さっきも言ったけど、今年は一味違うマラソン大会にしたいと思っただけあるかを考えていたの。ソラ君、ハヤテ君何か案があるのなら教えてくれる？」

ヒナギクに再度聞かれ、ソラとハヤテは悩んでから

「参加者が何をしたいかアンケートでもとってみればいいんじゃない（ではないでしょうか）」「」

二人は口を揃えて言った。そしてその案は採用され、集会で

「生徒会長の、桂ヒナギクです。今年のマラソン大会のことで、アンケートを取りたいと思います。それぞれこうして欲しい、ああして欲しいと言う希望があると思います。その為、しばらくの間各々の教室のところにポストを設置しますので、自分の希望を記入して投函してください。注意事項として、マラソン大会自体をなくして欲しいという意見は受け付けませんのでご了承ください。以上、生徒会からの報告を終わります。」

そう言うてからが大変だった。なんとポストはそれなりに大きいのだが、昼放課の時点で紙が入らないということが起こったのだ、生徒会はその現状に慌てて一日三回に分けて生徒会室に紙を運び込むことになった。そして現在に至る。ちなみに生徒会室に二十を超え、大きいダンボールがあるがその中身も、手紙だった。時間は戻り朝の生徒会室は、

「えっとヒナちゃん、こっちの紙を全部確認してそれから暫くならここを抜けてもいいよ。その間は僕が二倍の仕事をやっているから。」

ソラに言われその紙を見てみた。するとそこには『お酒を飲んでから走りたい!!』『お金をもと増やして欲しい!!』という紙が三十枚以上あった。ヒナギクは、犯人が一人しかいないことを理解してから、生徒会役員に向かって

「ちょっと私は出かけてくるから少しの間お願いね。」

前髪で目を隠して口元は笑っていつているので、ただでさえ黒いオーラが出ていて怖さがあるというのに、何時もの倍以上怖くなっていた。それを見て、愛歌でさえ首を上下にカクカクさせ頷いた。そのことを確認してから、ヒナギクは木刀片手に走っていった。暫

くして、

「お姉ちゃんーん！！何を投稿したか分かっているの！！！！そこに座りなさい！！今日と言う今日はもう許さないわよ！！！」

と言う大声が聞こえてきたのである。ちなみに授業中で授業が終わるまでクラスの中で怒られていたのである。時間にして、三十分程度であった。ヒナギクの大声で、一時授業が中断して先生方が、雪路が教えているクラスを見に来た。だが、直ぐに理解し自分の教えていたクラスの戻り授業が続けられた。ヒナギクの怒声をBGMにして…ヒナギクはスッキリした顔で戻ってきた。

「ソラ君、知らせてくれて有難う。流石にこれだけの数があるとき届かないところがあるから皆もフォロワーしていきましょう。あと泉を連れてきたから、少しは楽になるといいなあ。」

「ヒナちゃん、なんでそこでそういうこと言うのかな。私だって頑張る一人だけ逃げ出していたのに？美希と理沙は来ているわよ？」

ヒナギクに言われテーブルを見てみると、理沙と美希はこつちを見ることがなく、忙しく紙を仕分けしていた。よく作業を見てみると、美希と理沙が分けたものをソラがまた選別しそれがヒナギクのところに来ていた。ヒナギクは、最初のやり方より効率がいいことに気が付き、ハヤテと愛歌にも同じようにすることを指示した。昼は一人ずつ交代で行っていたが、ソラとヒナギク、ハヤテは昼を食べることなく作業していた。その後は、放課後までかかったが一応仕分けは完了した。すると、アテネとミダスが生徒会室に入ってきて。

「お疲れ様、一応下の階に食事を用意しました。一度区切りをつけて食べるようにしてくださいね。特にハヤテ君、ソラ、ヒナギクさ

んは食べてないようですから必ず食べるように!!」

「私も手伝えるときは手伝おうか？細かい仕事は苦手だけど…それと、さつき守衛の方には泊まれるように伝えておいたから泊まって作業する人は家に電話しておくといい。」

そう言った。ヒナギクは泊りがけで作業しようとしていたので、ミダスが先に手配をしてくれていたことに感謝した。その後、アテネに言われたとおり食事をした。その時に、ほかの生徒会役員とハヤテは自宅に連絡をとり学院に泊まることを伝えていた。すると何故か、神楽、宮下、霧崎、野々原が手伝いに来た。何故野々原がいるかというと、ソラが連絡して時間があるのなら手伝って欲しいといったところ、直ぐに駆けつけてくれたのだ。ヒナギクは、

「今日は、有難うございます。野々原さんも大丈夫ですか？」

「ええ、東宮お坊っちゃんが寝坊したときには、それなりのお仕置きをさせてもらうということを本人に言ってから来させてもらったので大丈夫ですよ。それより、早く始めましょうか。いつまで立つても終わりませんよ。」

野々原は、そう言い作業をしはじめた。それを見て、ソラも始めようとしたが、小さな段差に躓いて転んだ。

「ソラ君!!大丈夫!!」

ヒナギクは、ソラが何もないところで転けるのを初めて見たので、慌てて駆け寄った。周りの人間も驚いていた。野々原は、ソラのことを見て、

「ソラ君、何か体におかしいと思うことはありませんか？もし、あるのなら隠さずに教えてください。」

野々原の言葉に、

「何か、少し目眩みたいなものが一瞬した。今は大丈夫だけどなんだったんだろう。さてやろうか。」

立ち上がりながら、ソラはそう返した。その言葉に野々原は

「ヒナギクさん、ソラ君は暫く休ませたほうがいいかもしれません。今日一日、一人で何倍もの仕分けをしていたのでしよう。疲れるのは当たり前です。ソラ君が抜けた穴埋めは、力不足かもしれませんが私がやります。」

その言葉に、ソラは

「まだ大丈夫だ「倒れてからでは遅いのですよ。もしここで休まずに倒れてしまった場合、誰が辛い思いをするかを考えてください。自分だけではないはずですよ。私達がいるのですから、何でも自分ではやろうとせずに、人を頼ってください。その方が私達も嬉しいのですよ。」

返そうとしたが、野々原に途中で遮られた。ソラは少し考えてから、

「野々原さん、それじゃあ一時間ほどお願いしていい？あとヒナちゃん、あそこのソファ一借りるね。」

そう言い歩いて行った。結女は、どこからか毛布を取り出し、ソファで寝たソラにかけた。そして、寝ているのを確認してから頭を

一撫でして、

「ソラ君はいつまでたっても変わらないね。無理しなくてもいいんだよ。」

そう言い戻っていった。ヒナギク達も頑張っではいたがソラは、自分たち以上の苦勞を変わってやっていたことをその時知った。ソラは、一人で三人分の作業を止まることなくして、しかもヒナギクが居ない時はヒナギクの方までやっていた。倒れるのは当たり前であった。愛歌以外の人は、結女とソラが知り合いの事を知らないのも、何故そのような行動にでたか分からなかったが愛歌は、結女に聞こえないように小さな声で

「ソラ君に小学校の時に助けられて好きになつたみたいです。この前、家に来たときにそういう話をしていました。事情があつて、その後直ぐに引越したみたいですけどね。それと、この前あつたときに諦めは付いているそうです。」

その言葉を聞き、アテネとミダスは顔を見合わせ、

「私達も手伝うから一人余るわね。悪いのだけど、結女さんでしたっけ？ソラの事頼んでもいい？膝枕でもしてあげて。」

結女に対する罪悪感で一杯になりながら、そう言った。結女は吃驚していたが、愛歌が頷いたのを見て諦めたのか、ソラに膝枕をして頭を撫でていた。一時間後、ソラが何も言われていないのに起き上がった。目を開けて直ぐに寝ていたが、結女が見えたので、直ぐに膝枕をしていてくれたと思い、

「結女ちゃん、有難う。だいぶ疲れがとれたよ。」

そう言い、立ち上がり結女に毛布をかけてから、机のある部屋に行った。

「お待たせ、疲れもとれたし僕も始めるからね。ユメちゃんは寝ていたから毛布をかけて寝かせておいたから。」

愛歌に何かを聞かれる前に、ソラは言った。

「それと、ユメは愛歌さんのお世話係だからいいとして、神楽と姫はここにきても大丈夫なの？執事とメイドの長としての仕事は結構大変なのじゃない？」

そこで、美希以外の人間はそれなりに偉い立場にいる人が来ていたことに気付いた。だが、そのことより、仕分けを優先させるために何も言わなかった。今の時刻は九時を回ろうとしていた。仕分けはほぼ完了したので、そこから面白そうと思うものをとっていくことになった。アンケートの中には『仮相マラソン』や『リレーマラソン』（普通は駅伝という）等あった中で一番多かったのが、クラス対抗のリレー式マラソンだった。だが、これでは力関係がかなり傾いてしまうのも事実なのでどうするかを、話し合った。

「皆、この意見にはどう思う？何かクラスで救済措置をとったほうが確実だと思うのだけど…：どういう方法で救済措置を出すか意見のある人はいる？」

一応、話は聞いているが宮下達は答えなかった。これは、学院の行事自分たちは手伝いはしても意見は最後に言うだけでいいと思っていたのだ、そしてそれはヒナギクにとつてありがたいことでもあった。何故なら、手伝ってもらった後にまた意見を出してもらうのは

悪いと思ったからだ。千桜は、少し考え

「力関係はどうすればわかるのですか？今のままだと家のクラスが圧勝してしまう可能性がかなりあるのですが：何ととっても、ハヤテ君、ソラ君の綾崎兄弟、そして高いところ以外完璧超人のヒナギクがいるのですから。」

そう言った。

「じゃありレーなのですから、例えば自由型に出た人はリレーの方には出れないとか、何か規制を付ければいいのではないですか？そしてそれを、運営側には先に知らせておいて参加者には大会直前に言うということも出来ません。どちらかに力が集結してもらっては困りますしね。」

愛歌は自分が納得していない状態で考えたことを言ったが、

「あのー、一ついいですか？距離を駅伝みたいに分けてみてはどうでしょうか？距離を変えることで自分に自信のある方は、長い距離を走り自身が持てない方は短い距離を走ると思っんです。もしくは、走る距離の長さはこちらが決めて、一人がどれだけの距離を走るかは生徒の自由にすればいいのではないのでしょうか？」

ハヤテは、力関係があるのならと一応自分が感じた意見を出した。
ヒナギクは、

「その案はいいかもしれないけど、一人が走る最低の距離を決めておかないと最悪、一人だけが、ほぼすべての距離を走ることになりかねないわ。」

その後も、あーでもない、こーでもないと言っていたが、宮下はソラが一言も話さずに全員を見ているのが気になり、

「ソラ様、先程から何も話しておりませんが何かいい案でもあるのですか？それとも、思い浮かばなくて話してないだけですか？」

そう聞いた。そこで、意見を言い合っている生徒会役員とハヤテは気付いた。いつもなら何かしら言うてくるのに対し今日は何も言っていない。ということに。野々原とアテナミダスは気付いていたが何も言わなかった。ソラは頬をかきながら、

「意見つて程でもないけど、去年の体力測定の結果つてある？あと体育の成績。それがあれば、均等に力配分をすることができるし、種目を変えちゃうけどクラスでの参加じゃなくて自由参加にしてその中でリーダーを決めればいいと思っただけ？後は体力測定の結果と成績で班を振り分ければいい。」

これぐらいだけ？と言った。確かにその方法ならば効率がいいが結果的には致命的な穴がある。

「それだと、少し面倒になりませんか？名前を誤魔化して出た場合とかはわかりませんし、それに希望はクラス対抗でのマラソンかなり外れてしまいます。」

「うん。そこでもうひとつ考えたのが、さっきと同じで成績を出しておく。それからクラスで出た人間の結果で距離を変更する。ちなみに、参加者は先に申し込みをしないと出られない条件にする。補充ももちろん書いておく。本人かどうかは、ヒナちゃんには悪いのだけど、生徒全員の顔を覚えているのはヒナちゃんぐらいしかいないから、確認してもらおうことになる。これなら、距離は先に計算し

ておくこともできるしクラス対抗のマラソンにすることもできるはずだよ。」

ソラの言葉に、何故そのようなことをしたかは分からないが、神楽達はソラが先にあげた提案は生徒会役員を試すために言ったことで、宮下か誰かがソラに意見を聞くことを前提に考えていることが分かった。その後は、理沙たちが穴埋めをするために話し始めた。ソラの方を見てみると、こちらを見ていた。そして人差し指を口に持つていき、気付いたのなら黙っていてくれるとありがたい。とでも言っているようにしていたため、何も聞かないことにした。

「それじゃあ、今日はもう寝ましょう。種目にルールはだいたい決まったから、明日からは普通に授業に出るように。それと、ソラ君、ハヤテ君、宮下さん、神楽さん、霧崎さん、野々原さん今日は有難うございます。おかげで今日中に終わることができました。」

ヒナギクは、生徒会を代表してお礼を言った。ちなみにこの時の時間は、十一時を回っていたため、全員が生徒会にある宿直室で寝た。ソラとアテネ、ミダスはルカが心配するという事で理事長室の私室に戻っていった。

30話(後書き)

ご都合主義全開です。キャラをこんなに増やしてしまいましたが、これ以上は増えることはないと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6998w/>

ソラのごとく

2011年11月8日14時00分発行